
カマクラ

takao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カマクラ

【Nコード】

N9353C

【作者名】

takao

【あらすじ】

御恩と奉公でクニを支配——東の主「カマクラ」を巡っての戦いの物語…と思いきや、現代要素入り混じりまくりのなんちゃって和風ファンタジーに。オッサン化した美人女性とツッコミ役の青年男子の掛け合いを中心に、序盤コメディから後半はシリアスラブラブに？これもひとつの逆年齢差恋愛の形、ということ。

その1 のつけから辞任表明（前編）（前書き）

別の小説「ネムリヒメ。」はこの小説を書いた後に、この小説の現代パラレルバージョンとして書いたものです。よってキャラクターがほとんど被っている上に、恋愛部分の描写も若干重複しております。どうかご了承のうえ、お読み願います。

（ちなみにこちらは完全ギャグファンタジーですので、ストーリーはまったく異なります。）

特に基本的な文法を知らない時に書いたものです。修正はしたものの、視点の乱れなどは修正しきれておりませんので、大変申し訳ございませんがそのあたりの読みにくさはご承知のうえ、閲覧願います。

前半はギャグ中心ですが、後半はシリアス展開になっていきます。

長編ですので、個人サイト内にキャラ紹介のコーナーを設置しました。必要な方はご利用ください。

その1 のつけから辞任表明（前編）

いざ、カマクラ。いざカマクラ。
御恩と奉公、貴方の為に――。

世はいずれの御時か。カマクラ、と呼ばれる東の地。その地にバクフと呼ばれる聖域があった。

闇の中、闇の中の森の中、大きな屋敷が広がっている。
更にその奥の奥の奥の間に――其の存在は在った。

そして、

「あゝもう少し右……開いて……っあゝそこっ！」
悩ましげな声を上げていた。

――うるせえよ、このババア……！

と、耐え難いその声を聞きながら、端に控えている一人の黒い袴姿の青年は、持っている鞘入りの刀を穴が開くほど床に強く立てていた。

その青年の声にならない怒りの向きはこのバクフの主である、闇の支配者“カマクラ”に向けられていたが、そいつは到底そうとは思えないほどの恍惚の笑みで、

「極楽じゃ」

と北国の農村の民からマッサージを受けていた。

「オラ田んぼで鍛えてっから、指の力には自信あつど」

「あゝご苦労」

そのカマクラはこり返しがくるから、とヨダレの流れてた口元を拭いながら、ゆったりとした白い着物の襟を正しつつ起き上がった。
そしてどっかと胡座をかくと、扇子を片手にその農民に向けた。

「で、何だつて？」

「オラのかあちゃんが、病氣しちまって、このまんまじゃ子供産めねえつで……かあちゃんはおラと別れるつてきかねえし、カマクラ様こんな“奉公”でよかんべばなんとか“御恩”を賜つてける」

農民はその御前に平伏すとおいおいと泣き出した。

——つて、人生相談かよ……！

青年は心の中でそう思い、その主と言えば、

「あーそう。そりや大変だ」

これまたどうでもよさそうに答えた。

——しかしカマクラはじいつとその農民を見つめると、ふつとその豆だらけの手をとった。

黒く長い髪が背中からはらりと落ちた。

「カ、カマクラ様……！？」

一国の主に相応しい綺麗な顔にじいつと見つめられ、農民は焦ったが——ふつと身体が軽くなるのを感じた。

「んだ？　オラ、どうしただ——」

「お前さんまで、一緒に病氣になつてどうする。まずはテメエが元氣になつて、女房を支えてやれ。それでも別れたいつっーんならよつぽどお前さんに魅力がねえんだろ」

農民は不思議そうに自分の手を見て、“カマクラ様”と呼んだ相手を見上げた。

「——あ、そーそー。お前さんところの隣村に、明後日子供が生まれるぞ。でもな、その子供私生児なうえに、その母親もその日に死ぬ。身よりもないみたいだが……そのガキ、それからどうなるんだろつな……」

「へ……？」

「とりあえず、早く女房に顔見せてやれ」

「あ、ありがとーござーやす！　カマクラ様……！」

体内の病巣を一掃されたうえにカマクラからの“助言”を得た農

民は、来た時とは比べ物にならないほどの脚力で、バクフをスキップして出て行った……。

「ココはよろず請負い処じゃねーっつーの。一体どーゆー基準で此処に辿り着いてくるんだろーな」

農民が退出した後、早速寝そべりエロ週刊誌をペラペラとめくりながら、面倒臭そうにカマクラは言った。

「まあ考え方によれば、あの者の出身の村はこのクニが対外貿易で扱っている絹の生産高が全国一なワケですから、あの村で子孫繁栄し農業人口を増やすということはこのクニへの“奉公”と同様なわけで、それで“御恩”を受けるべく辿り着けたのでは……って聞いてねーな、コイツ」

彼女の警護に控える青年は、自分の話を全く無視して、携帯の出会い系サイトにアクセスし始めた自分の主——当代の「カマクラ」を睨みつけた。

御恩と奉公——。

一体、もう何百年の間、この制度が続いているのか。

東のカマクラの地には、“カマクラ殿”と呼ばれるこのクニを支配する者が居た。

その者に「奉公」……軍役でも金でも、何でもいいので国益の為にそれをすれば、「御恩」……領土の保障、名誉、金銭など、同じく国益に適う範囲で望むものを与えられる。

何百年も昔は軍役を「奉公」とし、それに対し一族の領土を保障することを「御恩」として与えてきた。

だがいつしか時は流れ歴史は動き、クニの戦乱は収まり、カマクラの存在は時代とともに闇へ闇へと葬られていった。

だが歴史の表舞台から姿を消した後もカマクラはそれでも闇に在り続け、今でも不安定なこのクニの「気」を変わず闇で統一しているのであった。

カマクラの位置するクニの中心的な機関をバクフというが、バクフ成立当時に、各地にあった“ブシダン”がカマクラの配下となつた。

現在でも全国の各地で幾つも組織づけられているブシダン——その主をそれぞれ“ソウリヨウ”と呼び、その一族郎等が土地ごとの「氣」を保っている。

ブシダンによってやり方は様々であるが、領土の「氣」を安定に保つことで、動乱を治め土地の平和を維持する「奉公」をしているブシ達。その主であるソウリヨウへカマクラは「御恩」として、バクフよりの軍資金と——カマクラ自身の「力」を此処よりソウリヨウに送る。それによって、ソウリヨウも「力」を得る。

それが現在の新たな「氣」による支配の形態であつた。

無論カマクラが直接的な武力を中央へ要請した場合も、ソウリヨウや下級のブシ達が「いざカマクラ！」と馳せ参じる訳だ。

しかしごく稀に、先ほどの農民のようにカマクラに対し「いざカマクラ！」と直接奉公に出てくる者がいる。

カマクラにはその歴史の中で自然と不思議な力を得、人の病気を治したり予知すらできる能力すら身につけた。したがって個人の望みによって様々な御恩を与えることもできた。

だが、闇に息づく聖域であるバクフの位置は、常人にはわからない。今のように直接奉公をしたいと思い御恩に報いることができる者が偶然の出来事かまたは運命か、バクフまで辿り着く事が出来るのであつた。

そしてバクフとはカマクラの存在を守り、ブシダンの情勢や、御恩と奉公に係る事務を取り計らう機関——此処でカマクラの存在は守られていた。

「といってもバクフの役人は仕事はしねえし五時になったらさっさ

と帰る、やる気のねえ年寄りの公務員ばかりだけだな」

おそらく間違いなくこのバクフの中で一番働いているであろうこのカマクラの身边警護にあたる青年は、今日も呑気に将棋を打ち、記念切手採集にいそしみ……という自分の情けない上司陣を思い独りごちる。

「なあなあ、^{イチガミ}一神」

そんな青年の苦労も無視して、今度は足の爪を切り始めたカマクラが、バクフの中で自分専属の警護にあたるその武士・一神玄次に呼びかけた。

「ああ？」

バクフの行く末を案じていた彼は不機嫌だった。

「肩揉まない？」

「さつき無駄に長い時間、早く家に帰りたがってた農民にさせてただろーが！ あいつらは、クニに年貢を納める為に働くことが“奉公”にあたるんだから、それ以上のことはテメーにしなくていいんだよ！」

「うるさいなあ」

——怒らせたのはどっちだ……。

「それよりもさあ」

「何だよ」

「——俺、カマクラ辞める」

「——」

呑気にパチンパチンと爪を切る音の中……、古典的にも玄次は床にひっくり返った。

「一体何なんだ！ 藪から棒につ」

「だってさあもういい歳だしー、このまんま此処にいて歳とってく

のも馬鹿らしいじゃん？ 俺だって自分の人生を生きていいはずだ！」

力説する主だが、今でも十分自由気ままに生きているじゃないかと玄次は思った。

「——つても今の状況じゃ気軽に外出なんざできねえし、折角出会い系で会えた女の子にも会えないし、競馬場の興奮も味わいたいし……」

——そんな理由でかい！！

いやそれ以前の問題で、アンタそんなナリでも女でしょ。しかも結構なお歳の……。

という玄次の心の声が聞こえたらしく、カマクラから無言の両足蹴りが飛んできた。

「とにかく！ 次のカマクラさえ見つければ、俺はカマクラお役御免になるんだ！ その後はフツの女の子に戻って、土方でもバイトでも何でもして自由に生きてやるのさ！」

へえへえ勝手にしてくれ、と玄次は思ったが、

「——というわけで、ひとつよろしく。次のカマクラ見つけてきてね」

ぽんつと彼の肩に手が置かれた。

「オレかい！」

「だって俺、此処出られねーし」

「オレがいねえ間、テメエの警護はどうするんだよ！」

「休業するからいいよ」

「さっきみてえに急を要するヤツらが奉公に来たらどーすんだ！」

「インターホンで対応するよ」

「いつの間に設置しやがった！！」

長年の腐れ縁から、二人の間では耐えることなく押し問答が繰り返されてきたが——、

「それに、さ……」

カマクラはふつと薄く笑った。

「——俺がカマクラでなくなったら、お前も自由になれるんだぞ？」
その台詞に絶句する青年を見上げて、カマクラは拳で軽くその広い胸を叩いた。

・・・・・・・・

“俺の予知では、この辺に次のカマクラが居る筈だ！”

と、手書きの地図にこれまた適当な“新しいカマクラのいそうな場所”とか書かれた紙を手に、渋々と玄次はカマクラを出発した。

時間外超過勤務手当出るんだろうなー、と彼はふと不安に思った
があの子のこと。「これで新しいカマクラが見つければお前自身が
自由になるんだし、それがお前への“御恩”なんだから、その分“
奉公”しろ」とか言うのだろう。

——ああ、本当にあの子には腹が立つが、自分は「例外」なのだ。

その1 のつけから辞任表明（後編）

本来ならば「奉公」を約束しての「御恩」であるが、自分は一生分の「御恩」を先に受けた代わりに飽くなき労働——「奉公」をしなくてはいけなくなつたのである。

だからあんな傍若無人な腹の立つ存在でも、当代カマクラは絶対であつた。絶対服従しなくてはいけないのであつた。

“何年俺と一緒にいると思つてるんだ。カマクラになれそうなヤツくらい、見て分かるだろう！”

そしてこれまた滅茶苦茶なことを言いやがる。仕方ない、あれくらい個性の強そうなのを見つけて本人に判別してもらふことにしよう。玄次はそう思い、ひとり頷いた。

カマクラは遠い昔は直系の世襲制だつたが直系が途絶えた後は遠い親戚から選ばれるようになり、それを繰り返している内にいつしか元の血筋は薄くなり、不思議な力を用いるようになってからは血縁など関係なくその素質を有する者がカマクラの座に就くこととなつている。

今のカマクラは、一度死んだ存在だつた。

その時に、彼女の元にバクフよりの使者がやってきたのだつた。

“あの時”のように、今度は自分が次のカマクラを見つけなくてはいけないのか——。

玄次がため息をつき、考え事をしながら歩いていると、

「お、悪い」

一人の女の子とぶつかつてしまい、その子は思った以上に派手に転んだ。

「大丈夫か」

元々子供は好きではない彼だが、あのわがままなカマクラの面倒

を見ているうちに慣れてきたというか……。玄次はそのセーラー服姿の少女を助け起こした。

「ごめんなさい。ありがとうございます」

目が大きくて、背の小さい少女はぺこりと頭を下げた。

大丈夫ならそれでいいと、玄次は立ち上がったが、そんな彼をじいーっと見ていたその少女は突如、

「カマクラの人!？」

と彼の着物の裾をはつしと掴んだのだった。

そのセリフにぎよつとした玄次だったが、更にマズいと思ったのは買い物帰りのオバちゃんたちが揃って自分を振り返るではないか。こんなところで伝説のカマクラの側近がウロウロしていると知れば警備の薄くなったバクフに襲撃が入る恐れがある、ただでさえ残してきたのは縁側老人しかないっつーのに！

正体がバレることを恐れた玄次は少女を抱えると、脱兎の如く駆け失せた。

「な、なんだよ、てめえ……」

人気のない公園まで来て少女を下ろすと、玄次はぜいぜい息をつきながら植え込みの煉瓦に腰を下ろした。

「コレ!」

と少女は取り出した新聞を玄次の前に広げた。

タイトルは「幻の“カマクラ殿”は本当に居た!? 好物はモ●バーガー!？」などと書いた記事で、フラフラと外に出てしまい、もぎゅもぎゅと呑気にジャンクフードなるものを食すカマクラをなんとかカメラの目から隠そうと玄次がカメラに顔を押し付け身を張っているものであった。

……ダセエ……。

自分の間抜け面に、玄次は肩を落とした。

「別人だ」

「えーそうですか!？」

「騒がれたくないから連れて来たただけだ……」

「そうなんだ……」

少女は玄次の嘘をすっかりと信じきったようで残念そうに肩を落とした。実際、それくらい写真の彼は別人の如く酷い顔をしていた……。

「なんだよオマエ、カマクラの何なんだよ」

あまりの落胆振りに玄次は思わず尋ねた。

「——カマクラ様って、私の憧れなんです!」

すると少女は急に目をキラキラさせ、両手を握り締めた。

——そうか……？ オッサン向けエロ雑誌は読むわ、ネットで株買い占めては失敗するわ最悪だぞ？

「ウチの父ちゃんはどうしようもないヒトでした。博打が大好きでお金も何もかも失くしちゃって、最後にカマクラ様にご奉公にあがつて御恩を受けようとしたんです!」

確かに、たまにそういったゴロツキも、それも運命か、丁度人手の足りない時に人足として真面目に奉公せよと引き寄せられる。

ただしそういう時なので、思いつきりカマクラとバクフにこき使われて、逆に娑婆のまっとうな職に就きたいと逃げ出していくのが……。

「でもご奉公の途中に、死んでしまいました」

——まさか過労死……と玄次は蒼くなったが、

「いえ、お酒の飲みすぎです……」

思わず胸を撫で下ろす。

「でも私は、それからずっとカマクラ様にお会いしたかったんです」

「親父の復讐か？」

「違います!あのだらしのない父ちゃんが、死ぬまでご奉公しようと思えた方が、どれほどの方なのか見てみたくて」

「やめた方がいいと思うぞ……」

玄次は心からそう思ってた。

「いいんです！ それでも、あのどうしようもない父ちゃんがそれだけご奉公したかったということは、きっとそれだけの素晴らしい御恩があったからでしょう？ その御恩があったから、私のイノチは助かったんだと思ってます」

大きな目の少女は、その大きな瞳を夢でキラキラさせていた。

玄次は別世界のようなものを見る目で彼女を見ていた。

「——残念だが……、オレは関係者じゃないから連れて行くことはできん。それにあそこは物見遊山で行けるトコロじゃねえ。奉公する気じゃねーと入れないらしいぞ」

玄次の言葉に少女はそうですか……と再びがっくり俯いた。

「あーあ……カマクラ様に会えればわかんと思ったのになあ」
落胆中の少女は思わず独りごちた。

「何がだよ」

玄次もつられて返してしまい、少女も更にそれにつられて口走った。

「次のカマクラ様に誰がなるのか……」

「——へ！？？」

「あ！ スミマセン！これ内緒っ！」

少女は慌てて口を覆った。

どくん、どくん、と玄次の胸と腰の刀が反応し、波打つ。

「お前、何者だ……」

新しいカマクラを探す者——？

カマクラの座にも能力にも興味も関わり合いもないが、もしもバクフ以外の者がカマクラを手に入れた場合——否、そんな勢力争いもどうだっていい。

しかし新しいカマクラがバクフではなくそれを利用しようとする

違うヤツらの手に渡ったり、ましてや消されたりなんかしたら——
あの女はどうなる！？永遠に“カマクラ”のまんまじゃねーか！

返答次第では——と、玄次が腰に手をやった瞬間、
「いちこ」

とその少女はにつこり笑って答えた。

「いちこといーます」

「へ！？」

玄次は再び、気の抜けた間抜け面になった。

「いや、そーゆーことを聞いているんじゃないって……」

「おにーさんは？」

「玄次……」

思わず答えてしまった。だけどさすがにバクフ側に呼ばれている
苗字は伏せた。

——すると……。

「じゃあ、げんちゃん？」

「はあ??」

「また会える気がするから、覚えとく」

その少女——いちこは、玄次の殺気には気付かずにつこりと笑っ
た。

「おい……!!」

背を向けた不思議な少女に、玄次が手を伸ばした瞬間、鋭い衝撃
が自分の掌に走り、彼が驚いている間にも少女は公園から走り去っ
てしまった。

「——院が……呼んでる？ 帰らなくっちゃ……」

走りながら空を見上げて、いちこは呟いた。

呆然と自分の掌を玄次は見詰めた。

新しいカマクラを探すという少女。

その少女を守った絶大な力。

「まさか……？」

——京……？

あれほどの力を持ち、カマクラに対抗する組織と言えば、ただ一つ。

「いちこ、か……」

偶然か、何なのか——この名前。

もう一つの巨大な勢力が、今、動き出そうとしていた……。

……ってゆーのに、この危機感のなさ！

玄次が報告にバクフへと急ぎ戻ると、今度は夏休みの宿題を手伝って欲しいという小学生に“御恩”を与える代わりに、「夏の友」（懐かしの宿題帳）を広げるカマクラは寝そべって、その子供に足の裏を踏ませていた。

………

西には西に「京」と呼ばれる闇の勢力を束ねる組織があった。

歴史は元々京の勢力の方が古く、カマクラは後世の成り上がりだった。

全国を治めていた京の勢力が弱まったのをいいことにカマクラが東にバクフを築くため進出したのだ。

だが京の組織は形骸化し、西の者すらカマクラの傘下に入っていたほどだったが……。

「院？ いるの？ ただいまー」

暗闇の何もない部屋に、少女の明るい声が響いた。

お帰り、と闇の中から男の声が響いてきたのでいちこは今日も安心する。

「……新しいカマクラ様は、今日も見つかりませんでした」

とりあえずいつものように少女は今日の報告をした。

院、と呼ばれた男は、闇の中からすうっと手を伸ばし少女の頭を撫でた。まるで憑き物を抜うかのよう。

——この、感じ……、接触したな。遂に動き出したか、カマクラも……。

「新しいカマクラは、絶対に誰にも渡さない。——誰よりも、先に我等が捕らえる」

低い低い声で、院と呼ばれた男は少女の耳に囁いた。

その2 再会のサケ展（前編）

奉公に対し、御恩を授けるカマクラ。東のカマクラと西の京が、今、新しいカマクラを巡ってぶつかり合う――。

「つかー！ 労働の後のビールはうめえなあ！」

とその緊迫感をよそに、アサ・スー・ードライ500ml缶を一気に飲み干したのは、その渦中の当代カマクラ。

「だーかーらー、オレの話、聞いてます！？」

同じく500ml缶ビールを一気飲みし空き缶をぐしゃっと粉々にまでして怒るのは、当代カマクラの側近として仕えるブシの一神玄次。

「京も次のカマクラを探してるんだっつーの！」

玄次が謎の少女・いちこと出会って数日。やれバクフのシッケンの誕生日会だ、バクフから違法アダルトサイトに不正アクセスがあったから警察が取り調べに入るだの（犯人はカマクラだったので、もみ消しに奔走したものだ）、まあ色々とあり今日は今日で、運動不足になってしまつとカマクラ自らがバクフの評定所の雨漏りを修繕。もちろん、彼女の警護に当たる玄次も行動を共にしたわけだ――。

危機感の全くない己の上司に、この一大事を話すだけでもこんなに時間が掛かったのである。

本っ当ーに手間の懸かる……！

「え??？」

と人の叫びも聞いていたのか、貧乏臭いこの闇の支配者は500mlのアルミ缶を傾けて、未だに落ちてくるビールの滴を舌に落としていた。

「……!!！」

もー知らんつ！と、怒った玄次が背を向けると背後から声が聞こえてきた。

「ホントにそれ、京なワケか？」

……聞いてたなら、最初からそー言えよ……。

玄次はくるとカマクラを振り返った。

「——ああ、多分な」

彼はようやく赤みの引いた己の掌を見つめる。

この自分があの一瞬、あの少女を守った力に退けられた。

遠方からそれだけの操作が出来る者が、今このクニにどれだけ居る？——ましてや新しいカマクラを探すということは、この今のカマクラに敵意を持つ可能性があるということ。何処を真つ先に疑う？確かに密かにカマクラの座を狙う、地方の有力なソウリヨウが犯人とも考えられないこともないが、カマクラから「氣」を御恩として受け取っている以上、そんな事を企んでいることが幕臣である玄次に知られば一刻の猶予も待つことはしない。もうバクフに攻め込んで、一気に下克上を起こすしか生き残る道はないからだ。

地道な捜査をのんびり行っていたり、明るみに出て御恩を打ち切り、どこか一族を滅ぼされるような捨て身をするとは考えられない——だからこの出方なら地方のソウリヨウが黒幕とは考えづらい。そのため、御恩と奉公の支配・封建制度なのだから。

「強大な力を持ち、こつちと冷戦状態になっても構わない、だがこつちから支配権を奪回したいと思うのは——、京しかねーだろ」
「成程」

カマクラは扇子を口元に当てていつもの自分の座に落ち着き、玄次もその右にどっかと座った。

「タイミングいいねー。そろそろ俺がそう言い出すと思ってたのかなー」

前回の辞任表明のことである。カマクラは呑気にはっはっはと笑

った。

「――で？」

玄次はむすつとした顔のままで問い掛けた。

「どうするんですか？ カマクラ殿」

こんなんでも、上司だ。当代の統治者だ。バクフの長だ。玄次はとりあえず、打診した。

んー、と少し考えていたカマクラは、その扇子を玄次の胸にちょんと当てた。

「一神はどうするべきだと思う？」

「だからカマクラ殿の判断を――」

「もう既に手は打ってあるんだろ？」

「……」

玄次は言葉に詰まった。

――読まれてる、と思った。

何年付き合ってるんだ、という笑いを含んだ目でカマクラは玄次を見た。

「……動いてるのが一人とは限りませんから、各ブシダンのソウリヨウ、そしてその上にいる各地の守護職に、それらしい動きには警戒するようバクフより通達済みです。それから、京にも間者を増やして潜り込ませています……それだけです」

囲碁やゲートボールに日々いそしむバクフの官僚に、この僅かな情報を元にそこまで俊敏に動ける者など殆どいない。言わずとも長年カマクラの側近のようなこともしてきたこの青年がバクフの官僚を怒鳴りつけて脅し上げて、そういう手を打ったことは手に取るように分かる。

ましてや、コトが発覚してからもう数日は過ぎているのだから――。
「いーんじゃねー？ 下手に京を突付いていくさになったところで、それじゃ何百年前と変わりやしねー。何で俺達は闇に隠れた、何の

為に各地の“氣”を治め続けている？全ては、もう二度とそんな争いをしない為だろ。コトは穩便に収めたい。だから今はそんな感じでないんじゃない？」

平和主義者の主はにへらつと笑った。

「京だつて中央バクフはこんなでも地方のブシダン全てを敵にして勝てるほどの武力は、ない。しばらくは水面下でどっちが先にお宝見つけるか、攻防戦しよーぜ」

まあ同感であつたので、玄次は黙って頷いた。

「そんじゃ、一神は頑張つて京よりも早く次のカマクラ探してね」、
と言いながらカマクラ当人は呑気にテレビをつける。

——全く何を考えているのか分からないし分かりたくもない上司である……。

と、テレビの放映を見ていたカマクラはテレビのリモコンをぽろつと取り落とした。

その様子がおかしかったので、玄次も一緒にテレビを覗き込んだ。
“というわけでこちらオワリのカルガモデパートでは、世界のサケ展を開催しております……”

「……」

玄次が嫌な予感がして隣の上司を見ると——、恐ろしい位彼女の目は、らんらんきらきらと輝いていた。

「オイ、何生き生きしてるんだよ！」

しかし我に返ったカマクラはこうしちゃおれんと、いそいそとオワリに行く支度を始める。

「ってオメー正気か、サケだぞ！？ あの海で育って産卵期に川を上る魚だぞ！」

「サケ展だぜ！？ 日本人なら行かなきゃだよ！」

「ワケわかんねーよ！ 目え覚ませーっ！」

.....

というわけで、散々にオワリに行きたいと騒ぐバクフの当主を宥めて漉かして、どうにかこうにか外出阻止した玄次は——今、オワリのカルガモデパートに居た……。

“わーったから！ オレが代わりに行くから！ そんで、オワリで何か情報も掴んでくれば、一石二鳥！ それでいーだろ？ な！？”
オワリは東と西の中継点、情報も行き交っており何かしらの有力な情報が手に入るかもしれない。

とは言っても、デジカメを片手に更にはサケグッズも買って帰らねばならない玄次は泣きたい気持ちだった。

とつと用を済まそうと、意外にごったがえしている世界のサケ展会場に思い切って足を踏み入れた矢先、

「げんちゃん！」

——なんと……！

もう二度と聞きたくなかった、だが情報源としてはこれほど確かなものはない者の声がした。

いや、声など覚えるつもりはなかったがその自分の呼び方が耳についたというか……。

「げんちゃんもサケ展に来たの？」

おそらくは京の手先と思われる少女・いちこは、今日もセーラー服姿でにこにこ玄次を見上げる。

「オレじゃねーよ……頼まれてな」

そーなの？といちこは首を傾げた。

いちこはパンフレットをしっかりと胸に抱え、非常に嬉しそうだつた。

「——名前が一緒だと、趣味まで似るもんかね……」

「え？」

「何でも、ない。それよりもさ……」

人込みの中、玄次はいちこの長い髪の耳元に口を寄せた。

——情けなくも、敵に頼み事をするとはな……。いやでもこうすることによって、早く用事が済み情報収集にも行けるってものだ、うん……。

結局いちこに効率よくサケ展の見所を写真に撮ってもらったり、代わりにオススメグッズを買ってもらったり、とすっかり世話になっってしまった玄次。

コイツとの貸し借りは今回だけにしたいと思った彼は、昼食を奢ることにした。

……ちなみに豪華サケ茶漬け＋チヨコパフェセットです。

「悪かったな」

「んーん」

ふーふーと熱いお茶漬けを美味しそうに啜るいちこは、笑って首を軽く振った。

「でも、さっきの話」

「あ？」

「私と名前、おんなじって……」

「——ああ……」

あのざわめきの中で、呟いた独り言が聞こえていたか。流石は京の幹部に遣われているだけはあるのか……。

既にいちこの三倍の量はあった食事を済ませた玄次は、椅子に凭れて腕組みをしたまま宙を見上げてぼそりと答えた。

「別に。オレより十も二十も上の、変な嗜好を持つ女の話だよ。今日はソイツの代わりに来ただけだ」

「ふっん」

……。一体、いつの頃から“その名”を呼ばなくなっただろうか――

だから、

「じゃあさ、オメーも、」

「いちこ」

「……いちこ……も、オレの質問に一つ答えろ」

“その名”を呼ぶと、青年は物凄く懐かしい気分を駆られるのだ。彼がこの、いちこ――よりも、もっともつと幼かった頃の記憶――泣いて泣いて、誰かをどこまでも追いかけていたあの頃の。

「うん。なあに？」

名前を呼んでもらえてご機嫌のいちこは、気前よく頷いた。

「お前は一人で次のカマクラを探しているのか？」

「覚えてたのー？」

前回会った時に口を滑らせてしまったいちこは、顔を赤くして焦った。

この少女が京の者と仮定した時、心配なのはその規模だ。全国のソウリヨウに伝令を飛ばしたと言っても、バクフ側で動いているのは自分中心だ。

相手側のネットワークの方が上なら情報戦で勝てる可能性も低くなる――。

こんな子供に聞いても正確さは三割以下かもしれないが、とりあえず尋ねてみた。

「んーとね……。一人っていうか……一人になるのかな？　んん？」

「はつきりしねーな」

「探しているのは私だけなんだけど、見つけたいのは私じゃなくて、別の人だから……」

――成程。

「ふーん。じゃあソイツが探せって言うから、お前は探すのか？」

「うん！　だつて私は、その方のお役に立ちたいもん！」

腹が立つくらい純粹そうな笑顔でいちは頷いた。

——そうか、コイツも“立場的”にはきつと自分と同じ——。
玄次がそう思った時、

「きつとげんちゃんが、サケ展来るのがどんなに嫌でも、それでもその人の代わりに来てあげたいって思った気持ちとおんなじだよ」

その2 再会のサケ展（後編）

「――」

玄次はいちこを一瞥した。

――あの変な力さえ守っていなければ、とつくに斬っておくべき、ヤツだな……。

彼は心底、そう思った。

玄次は残ったお茶をぐいっと飲み干すと、

「――世話になった」

と伝票を持ち、席を立った。

もう二度と会いたくないと思った。情報源としては惜しいが、それ以上にこちらの事も――この子供には特有の直感で悟られてしまうような気が彼にはしたのだ。

彼女の直属の上司が誰かは知らないが、自分がカマクラの第一の側近である事を知られるわけにはいかない。

「変な玄ちゃん」

相変わらず、何も気付いていないいちこは首を傾げてチョコパフエの生クリームを口の周りにつけながら、でもきつとまた会える気がするからいつか、などと玄次とは逆のことを思っていた。

カルガモデパートを出た玄次が、さてこれからこの荷物を何処かに預けて情報収集でもするか、と思った時、自分の携帯電話の着信音が鳴った。

――カマクラからである。

「何だよ。サケ展ならとつくに――」

『当たり前だ。――じゃなくて、今、易の結果が出たが、新しいカマクラの手がかりが、オワリにあるらしいぞ！』

「……了解」

玄次はパチンと、携帯電話を閉じた。

程なくこの辺に手がかり有りそうというメールがカマクラから届き、その場所の大まかな地図も添付されてきた。

同刻、

「せっかくオワリまで来たんだし、次のカマクラ様の情報でも集めてこよう」

といちこもまた「げんちゃんごちそうさま」と手を合わせ、カルガモデパートを後にした……。

・・・・・・・・

玄次がカマクラから送られてきた簡単な地図を手がかりにやってきたのは、カルガモデパートから少し離れた、ナギという田園風景の広がる集落だった。

こんなところに手がかりが？と一瞬玄次は思ったが、村に一歩足を踏み入れると懐かしさが胸に広がった。

郷愁というのだろうか。遠い昔まだ自分が幼かった頃、こんな風景によく似た小さな小さな村で暮らしていた頃の。

そして今の“カマクラ”も、こんな小さな村に居た――。

そう思えば、この村にも何か手がかりがあるかも知れない。ナギを含むここら一帯を守るブシダンのソウリヨウは、川清カワシヨウと云うらしい。先ほどのカマクラからのメールに書かれていた。

農業に勤しむ者、遊ぶ子供たち、本を読みながら歩く学者など、普通に人々は生活している。

此処にカマクラになるべき者がいるのか、それとも何か手がかりが……。

玄次は村人の生活を訪ねるふりをしながら目を配らせ会話を聞く

が、それらしい情報はない。

確かに今のカマクラとて、最初は普通の人間として暮らしていた。誰も次のカマクラだと、あやしいなどと思っていなかった。

これを探すのは至難の業だと思うが、玄次はふと後ろ髪を引かれる様な気配を感じた。

——遠くに森が見えた。

その視線に気付いた村人が、教えてくれた。

「あそこはナギの鎮守様だよ」

噂では其処には姫神が暮らしていて、ナギの暮らしを守っているという。

ソウリヨウでもないのに、その土地を守る神の存在。

まあ、一見する価値はあるかと玄次は鎮守の森を目指した。

同刻、

「ここがオワリで密かに有名な、ナギの神社かー」

……カマクラ様が見つかりますようにって、おまいりしていこう、と暗い森の小さな神社の前で“裏”観光マップを片手に持ったセーラー服姿の少女が呑気に呟いた。

.....

そして玄次は鎮守の森に辿り付く。小さな古びた神社が其処にはあった。

先ほど感じた何か強い力の気配は、此処に来て更に強くなる。

「何か」が必ず此処に居る——。

そう思った瞬間、ざっと高い杉の枝の上から高速で何かが舞い降りてきた。

大きな金属音を立てて、玄次は自分の刀でそれを弾き返した。

「それ」もそれ程の力で弾き返されるとは思わなかったらしく、木に再び戻らずに地面に降り立った。

その者は山伏の装束に赤く高い鼻の面をつけた——まさに天狗の姿だった。

「えらい歓迎ぶりだな……」

玄次はため息混じりに独りごちた。しかし天狗は再び自分に向かってくる。

——速い、と思ったが敵わないスピードと力ではない。

そのスピードを受け止めてその抗力を加えた上で、玄次は己の刀を天狗の面に思い切り擦り付けた。

「——弁慶、やめなさい！」

そこへ駆けつけた女の声が凜と響くのと、

天狗の面が割れその衝撃で相手が後ろへ下がるのと、

「カマクラの者だ！ 此処の主に目通り願いたい！」

玄次が天狗に怒鳴りつけたのは、同時だった。

.....

「消えた……」

暗い暗い部屋の中で、男が呟いた。

——何か、大きな力の歪みに巻き込まれたな……。

消えた少女を連れ戻すべく、闇の中、男は立ち上がった。

.....

「カマクラ様の使者殿とは知らず……。ご無礼をお許しください……

……」

「いやこつちこそ、急に訪ねて来たんだからそんな気にしなさんな」
社に住むナギの守り姫・和歌は、玄次に深々と頭を下げた。

弁慶と呼ばれた天狗姿の少年は機嫌悪そうにその場に控えていた。
面の下顔はまだ幼く、そして和歌自身も成熟しきった感じはな
く、まだ少女と言ふ年頃の女だった。

「成程、ねえ……」

このナギの地方は、ソウリヨウの川清や彼の配下などブシダンの
者がではなく、この不思議な力を持つ少女・和歌が川清に命じられ
てこの土地の「氣」を治めていると言う。見返りとして彼女の身の
保障をしているらしい。

支配の形はソウリヨウによつて様々であるからそれについて問題
になるということはないのだが、御恩と奉公の形が此処へ来て更に
多様化してきていることの現れであつた。

「あんたも若いのに苦労してるんだな」

玄次は出された茶を啜った。

彼のことを刺す様な警戒の視線で睨みつけている弁慶は、さしず
め彼女に拾われたか何かで守護者を気取っているのだろう。

茶碗を茶托に置いた玄次は、ふと考えた。

——ということはこの和歌のように特殊な力を持ち、かつブシダ
ンに所属せず土地の治安にあたる者がこの他にも多くいるのだろう。
それはバクフが把握しているよりも、ずっと多いようだ。

つまり、新しいカマクラを探すなら、御恩と奉公で全国規模でブ
シダンに手がかりを探させる方法が最も速い。

だがそれをしないで正解だと思うのは、この機に乗じてカマクラ
の座を狙う輩が出てくることを防ぐためだ。

カマクラが交代しようとしていることなど、地方には伏せておく
に限る。

これだけ支配の形が多様化している中、和歌のように「力」だけ
ならある者など、いくらでもいる。その者やそれを利用する奴らが

カマクラの座を狙ってもおかしくない。

ただし、そういうことを企てる卑怯な奴があ座の重みに耐えられるかどうかは別だ。あの椅子の重みに耐え切れない者がその座に就いたところで、このクニが崩壊してしまうことは、明らかである。

玄次は権力争いなど興味はないが、破滅は求めていない。

だから今のところは京に不穏な動きがあるから注意せよとだけ各地のブシダンに伝えることで、十分だろう。

京も極秘に動いているなら、その牽制さえすればいい。

——ただそうなると、新しいカマクラが見つかるまでに時間は掛かりそうだが……、それはそれで、いいのかもしれない……。

傍若無人でマイペースな主だが、「あの座」に就くだけの器があった——ともお世辞にも言えないから、このクニの支配形態が多様化してしまったのだろうか、それでも。

カマクラという「あの椅子」に耐えられないどころか胡座をかいて座り、更にはくつろぎさえしている自分の主の姿をふと思い出して、玄次は微かに苦笑を浮かべた。

「……で、何しに来たんだよ」

「弁慶、」と和歌は自分の弟のような少年僧兵を再びたしなめた。

「ああ——」

本来の目的を話す訳にはいかないと判断した玄次は、顔を上げるとあつさりと答えた。

「最近京の動きが不穏なんでな、その調査と——あとは“探し物”をしていてな」

「探し物？」

少年と少女は二人揃って不思議そうに玄次を見た。

「京と言えば、そう言えば……、」

その言葉に和歌が思い出したように何か言いかけた瞬間、

「きああああ!!」

何処かで、というかつい先ほど聞いた少女の声が社中に響いた――

.....

この一帯を守っているのは、年若い子供ばかりであるにも係らず、流石はソウリヨウから守護を命じられるだけの能力はあると云うものか、声のした社の入口に三人が駆けつけると、いちこが一人の大柄な少年に羽交い絞めにされていた。

自分でも触れられなかったいちこを、（体格はよいが）こんな少年が簡単に捕らえていることに玄次は一瞬呆気にとられたが、すぐさま、それはそれだけこの社の結界が嚴重であるからだということを悟った。

この結果の中では、あらゆる幻術が無効化されるのだろう。遠方からのお守り程度に掛けた力程度なら、もう完全に掻き消されてしまうに違いない。

——ということなら、今ならあの変な力もいちこから消えている……。

玄次の刀が鳴った。

血を求めてではない。自分の心を、秘密を、これ以上知られない為に――。

だが、そう思ったのもまた一瞬だった。

いちこに掛けた微弱な術は、この結界内で無効化されても、かの京の力がこれくらいの力の娘に打ち破れる訳がない。

それを証拠にこのナギへと、暗黒の力の渦が物凄い勢いで迫り狂うのを、体表面がぞわつとするような空恐ろしい感覚で玄次は察知

し——、同じく、この結果を張っている力の主もそれを悟ったか、
「常盤っ！ その方から——」
「離れる——！」

和歌が悲痛な声でいちこを取り押さえていた身体の大きな少年に叫ぶのと、玄次がその少年に体当たりしていちこを解放させたのは同じタイミングだった。

更に同じ時、ナギに迫ったその暗黒の大きな力はいちこを攫い、その力の通り道に起こった竜巻のような風は常盤と呼ばれた少年の身体のすぐ脇を掠め空間を斬った。

まるでかまいたちのようにそれは常盤と、いちこ彼とを切り離れた玄次の着物をびつと切り裂いた。

弁慶とは対照的な突き飛ばされてもなお、きよんとしている大柄なぼんやりした少年は、何が起こったか駆け寄った弁慶に怒られるまで理解できなかったようだが——、玄次は見逃さなかった。

いちこを掠め取るように攫った影は、影であつたが間違いなくヒトの形をしていた。

その闇が、己を見た。
いちこを大事そうに抱え、彼女に害をなそうとした己を鋭く見据えた。

このカマクラの腹心でも飲み込まれそうな程の、威圧感——。
立っているのが精一杯だったが、即座に体制を立て直した玄次は刀に手を添え、それを強く睨み返した。
それがカマクラに害をなす者なれば、自分とて一步も退くつもりはなかった。

——カマクラの者、か……。
——京、の黒幕か……。

互いに互いが“敵対する者”だと、一目で分かった。
それが二人の初めての邂逅だった――。

その3 これもひとつのアレなのかもしれない。（前編）

玄次は今、オワリにいた。世界のサケ展を見に行きたいと言う自分の主の欲求を叶えるためと、新しいカマクラの手がかりを見つけるためだった。

それが……。

「大丈夫ですか……？」

オワリのナギ地方で、その一帯を不思議な力によって治めている少女・和歌は、玄次に駆け寄ると自分より随分背の高い彼を見上げた。

「ああ」

幸いに怪我もない。玄次は事も無げに答えた。

京の手先として新しいカマクラを探すいちこを奪取した、このナギの神社を襲った京の“影”は、いちこと共に既に跡形もなく消えていた。

その影の真の姿を見た者は玄次だけだった。一目で、お互いが何者か分かってしまった。

——バレちゃったな——。

玄次は頭をがしがしと掻いた。

こんな風に“奴”が姿を現すとは思っていなかった。だが敵意を剥き出しにされたからには、こちらもそれに応じる態度を見せずにはいられなかったのだ。そういうところが喧嘩っ早い所以であるだろうが……。

もしかした己らが動いていることも京は前から気付いていたかもしれないが、今後どう出るのか。

互いに牽制し合いながら水面下で動くのか、捜査体制を強化するのか、それとも一気に打ってくるのか——。

どのみち一旦カマクラに戻るのが先決だろう。

玄次はため息をつく、まだ心配そうに自分を見上げている和歌を見た。

「オレよかアイツの方がヤバいんじゃないの？」

玄次が親指を向けたのは、身体は大きいが動作は随分ゆつたりとしている「常盤」と呼ばれたいちこを捕獲した少年だった。

彼はいちこを捕獲したことでその京の影に襲われ玄次と和歌によつて異無きを得たが、どうもまだ事態を把握していないのかそれとも把握していても相手にそれが伝わっていないのか、依然ぼーとした表情でもう一人の和歌の部下である少年・弁慶にガミガミと小言を食らっていた。

「弁慶が居ますから、とりあえずは大丈夫です……。こちらこそ不手際で使者殿を危険に遭わせてしまい、大変申し訳ありませんでした……」

困ったように苦笑した後、和歌は今日何度目かになる玄次への謝罪をして、深々と頭を下げた。

「だから、気にしなさんなつて。アンタが悪い訳じゃないし。それよりもこれからが大変だな」

「……」

和歌は無言で頷いた。和歌の張っていた結界はいちこを奪回しようとした京の強い力により、粉々に崩壊されてしまっていた。

玄次が此処に來た時に感じた強い気は、今は殆ど残っていない。

「ま、災難だったな……」

「こちらの失敗です。直ちに結界を張りなおします」

「まあ、アイツらがいれば盾代わりくらいにはなるだろ」

それは二人の少年僧兵を指していた。玄次としては和歌ならその短い間に簡単に結界も張れるだろうと慰めと褒め言葉の意味でそう言っただけだが、いまいち伝わりにくい。和歌は思わずくすりと笑

った。

「——で、さつきおたくが言いかけたコトだけどさ」

和歌に結界を再び張らせ自分は戻り様にこの一帯が襲われないよう気を配りつつも、ここを去り早くカマクラに戻らねばならないのだが、必要な情報は少しでも集めたい。

先ほど和歌が言いかけた言葉を思い出し、玄次は問い出した。

「いえ……京と言えば、最近こちらに向けて西よりの気配を感じておりましたのでそれをお伝えしようとしたのですが、先ほどの事件が起こってしまい……」

——最近？京もこのオワリへ探りを入れるつもりだったのか？

そしてその言葉から和歌も先ほどの者が、京の一派であることを悟ったに違いない。

「大丈夫だ。オワリがカマクラに内緒で“何か”を隠していない限り、京がむやみに此処へ手を出してくることはねーと思うぞ」

玄次が言うつと神社の高い木々が秋の風に揺れ、落ち葉が舞った。

このオワリの地に本当に次のカマクラが居れば、京は何度でもここを狙うだろう。

逆に無関係なれば、形骸化した京の組織が京より遠く離れたこのオワリの地を制圧するとは思えない。

「はい……」

彼の言葉に少し安心したように和歌は微笑んだ。しかしこの時の玄次の読みは、後に『ある一人の男の妄念』によって狂わされることになるのであるが、この時は二人共に知る由もなかった。

「京は何を探しているのですか？」と、和歌は訊けなかった。

“探し物”とこの彼は言っていた。だけどそれは暖かいようで刃物のような鋭さも併せ持つこの青年の何か琴線に響くもののような気がして——。特有の直感で、それは聞いてはいけないような気がした。

自分には知らないことが、この“外”の世界にはたくさんある。自分は余計なことを詮索するよりもこのナギを守ることに集中しよう。それが何よりもナギを守ることにつながるだろう。

そう思った和歌は、それ以上何も言わなかった。

——結局、収穫はなしか……。

玄次はまた黙って考え込む。

向こうの“正体”が分かったくらいだ。ある意味、あの適当な力マクラの適当な占いは当たっていたと言えるのか？

影だけであればどの力を持つ者ならば、あれはまさしく京の闇の支配者その人——。

だが以前形だけであつたが政治上、新しいミカドが就任した時にカマクラが挨拶に上がったことがある。その時に見た京風鷹眉毛の語尾にいちいち「おじゃる」をつける、おちよば唇のあの“ミカド”と、今日見た影の人物とはイメージがまるで違う。

今日の影は、真の支配者としての強さと威圧感を備え持っていた。

——つつーことはアイツは……。

“院”と呼ばれるミカドよりも上の存在があることを、玄次は聞いたことがある、今まさにそれを思い出していた。

でもそれ程の者が、いちこ一人にたとえ影だけでもあのように姿を現したとなると……。

その二人の關係に興味はないが、いちこの言うとおりいちこが一人で京の院より命を受けて動いていることに間違いはないようだった。

相手の正体がおかげで分かったが、自分の正体もバレてしまった……これでは収穫ではなくプラスマイナスゼロである。

ため息をつきながら、最後に玄次は再び和歌を振り向いた。

「——なあ。おたくのその力は、生まれつきか？」

「はい。幼少の頃より忌まれておりましたが……」

「そつか。有難う」

アンタも苦勞してると思うが頑張れよ、と月並だが後ろ手に言い残して玄次はナギを後にした。

去り際に未だ騒いでいる少年二人に、テメーらがしっかりしねーとお姫様の身がどうなっても知らんぞ、とからかい気味に釘を刺しながら。

鎮守の森を抜ける頃、玄次は確信を抱いていた。

——この和歌という娘は中々の力を持っているが、次のカマクラではないな。

彼女の力に目をつけたソウリヨウの川清が次のカマクラへと担ぎ上げてくる可能性も無きにしも非ずだが、神経の細やかなあの少女にカマクラのあの座は到底荷が重過ぎるだろう。

それに生まれつき力を持っていたというあたりや、京が和歌には目もくれずに去っていったことも玄次にそう確信させる所以であった。

今のカマクラは、使者が来るその日まで自分がカマクラになるとは思っていなかった。そのような力が、それまで発現していなかったからだ。

新しいカマクラの発見には、二つの条件があると今のカマクラを迎えにきた人物が教えてくれたという。

“一に、カマクラの力の発現は、その者が生死の危機に曝された時である”

そして2つ目は、

“二に、カマクラの発現を見出すことが出来る者は、東の支配者と西の支配者のみである”

つまり今のこの世で、その者が次のカマクラになるべき者かどうか真に見定めることが出来る者は唯二人——東の支配者、カマクラ本人と……もう一人、西の支配者、カマクラに敵対する京を治める者、その人なのであった。

・・・・・・・・・・

ところかわつて、カマクラのバクフ内。

カマクラが在する奥の奥の屋敷の裏口でピンポンと、設置していたインターホンが鳴り、その前には一人の髪を金色に染めた男が立っていた。

インターホンから女の声が流れた。

『カマクラなら今、居留守使つてるよ』

「言やーわかつちまうじゃねーかよ。全く相変わらず……」

男が呆れてぶつぶつと言い終わらない内に、

「いやー久しいな、ロクハラよ」

裏口が開いてカマクラ本人が笑顔でその男を迎え入れた。

「あんたも相変わらず変わんねーな」

ロクハラと呼ばれた男も、社交辞令ではなく何年経っても昔のままの姿のカマクラの肩を笑顔でぽんつと叩いた。

「遠路はるばるご苦労だった。まあ入れや」

「そーさせて貰うよ」

警戒することなく、カマクラはその男を自室に引き入れる。

カマクラは大きな公用以外はこの奥の小さな邸宅に引きこもり、ひっそりと仕事を行っている。書類の決裁や、“御恩”として“力”を送る仕事などだ。さすがに部屋が幾つかあり用途ごとに分かれていたが、基本的に来客やバクフの者を迎え入れて話をする時や玄

次といつも過ごしているのが、この中央の広い板の間であった。

上座に畳を敷き少し高くなったところが、カマクラの定位置である。

“ロクハラ”とは、バクフの——カマクラの管理下にある職だ。

したがって昔からの付き合いがあり何故か気の合うこの二人であるが、カマクラはいつもの定位置に座し、ロクハラはその前にカマクラよりも低い目線で腰を下ろした。

「妻女は息災か？」

「……ヤマシナの女？ それともツチミカドの女？ それとも……」

「俺が悪かったよ」

相変わらずなロクハラの放蕩ぶりに、自分も同じように不良な大人なのだがカマクラはわざとらしくため息をついた。

しかしそれも旧知の仲ならではのやりとりなので、当人は全く気にしていない様子。彼はにやにやと笑っていたが、ふと気付いたように辺りを見回した。

「どーした？」

「いや、いつもならここですごく重くて凶悪な視線が飛んで来る筈なんだけども、と思って……」

「……そーだっけ？」

カマクラは自分とロクハラそれぞれの前に置いた自分の点てた茶を、茶碗を片手で持ち啜った。

ロクハラは顎に手をあてるとうつむと身体を捻って考える。

「よつぽどオレのファンなのかー、それともよつぽどアンタを——」

「一神なら、」

“そういう”冗談は好きではないので、ロクハラの言いたいことを読み、その言葉を遮るようにカマクラが言った。

「出張中だぜ」

「なあんだ」

これまたわざとらしく残念そうにロクハラは言つと、天井を振り仰ぐ。

「……てか、そもそも一神くんの留守を狙ってオレを呼んだんでしょーに」

玄次は色んな事情を抜きにしても、そもそもこの男のことはどうも生理的に気に食わないらしい。ロクハラの方は年下の彼を可愛がつているつもりなのだが。

だからと言ってそんな理由だけで玄次の居ない間に自分を呼んだわけでもないはずだ、とロクハラは踏んでいた。（第一、カマクラも彼と一緒に玄次を苛めることもあるのだし）

「例の京の不穏な動きがなんたらってゆー、一件で出張してんでしょ？」

ロクハラは頭の後ろに手をやって、目線をカマクラの方へ落とすた。

「まあねえ。俺が動くわけにもいかねーし」

「あつれー？ おかしいなー。一神くんはアンタの警護が第一だろ？ オレが来るつつーのに、ソレを放っておいてまで行くほどのことの用事？」

ロクハラも茶を口にし、「あ、旨い」などと呟く。口調は冗談染みているが、目線はカマクラから離さない。

対してカマクラはいつもどおりのほほんと宙を見つめていた。

「それに京にはロクハラオレたちがいるんだしさー」

ロクハラはやたら語尾を伸ばし、わざと核心を避けているような口ぶりだ。

“ロクハラ”——それは京に置かれたバクフの出張機関である。

そもそもカマクラは京の支配力が弱まったことが原因で立ち上がったものだが、元々の全国支配は京が行っていたのだ。当然、京がいつ成り上がりのカマクラを倒そうと考えるかわからない。その監視のために、元々置いた機関であった。

しかし実際、そこまでの反骨精神すら持たなくなってしまうた京

であるから昔ほどロクハラの仕事も鬼気迫るものはないのだが……。それでもバクフとしては、いざという時に——事実今は不穏な動きがあるのだし、力を発揮する者を置きたい。

それが、この男なのであった。

このロクハラの長官は平時はどうしようもないだらしない人間であり、友好関係を持つのはやたら上手いが、問題を起こすことも数限りない。

だが窮地の時の判断力と行動力と、そして豪胆さ、冷静さは彼を忌み嫌う玄次ですら認めざるを得ないものだった。

「それにバクフの方から、優秀な間者さんたちも増員してくれたんだしさあ。……アレも一神くんが指示したんだろーけど」

カマクラはロクハラの言葉を聞きながら、ロクハラが持ってきた栗羊羹を頬張ると言った。

「ロクハラの働きには感謝してるよ。今後も、京におかしな動きがないか、強化して見ていてほしいなあ」

ももごと栗の味覚を楽しみながら、カマクラは言葉を続けた。

「それに——、たまにはロクハラの顔も見たかったし」

「メールや電話だけじゃ人間わかりあえないし」

「そーそー」

「やっぱり、目を見て話さないとお互いの気持ちもわからないし」

「そーそー」

「で、オレのこと、疑ってるワケ？」

「……」

カマクラは今度は「そうそう」、とは言わなかった。

いつもどおりの飄々とした表情のまま、ごっくん、と羊羹を飲み込んだ。

ロクハラは、それまでの彼と同じ表情だったが——、目の奥に別の眼光を鈍く光らせてカマクラを見つめていた。カマクラも真っ直

ぐにそれを見つめ返した。

少しそうして見つめ合った後、

「あの……さ」

カマクラは少し微笑むと、上座から降りてロクハラへ膝を寄せた。

「誤解しないで欲しいんだが……、俺はどうしようもないトップだ
けど、部下は誰一人疑ったことはないよ」

その3 これもひとつのアレなのかもしれない。(後編)

微笑むカマクラに対し、ロクハラは黙って同じ眼光のままカマクラを見据え続けた。

「でも正直な話、さ、俺の易に最近出るんだよ……。京に——“何か”があるって」

次のカマクラを探すために何度占ってもそう出るのであった。何度やり直しても、京に“何か”があると出る——。

「……“何か”、て何すか……？」

「それは、俺にも分からない」

手がかりなのか、次のカマクラ本人が居るのか。

「だからロクハラが“何か”知っていることがあるのなら、隠さずに教えて欲しい。——頼む……」

相手に嫌な思いをさせたことへの謝罪も込めてか、カマクラは軽く頭を下げた。

だが次のカマクラを探している、ということはいくら古い付き合いのこの男にも言えなかった。

勿論いつか見つかった暁には、カマクラ交代の理解と承認を得るためきちんと説明を行うつもりでいるが、今は混乱を招きたくない。二十年も務めてきたカマクラの座が交代するのだ。簡単に言ったことだが、それは大ごとであるという自覚くらいある。

だから呑気に構えていても不確定な今は、玄次以外の人間にはバクフの誰にも一切それを言うつもりはなかった。玄次もきつと自分と同じ考えだろう。

それすら“疑い”と言われてしまえば、それまでであるが……。

「——わかったよ」

ロクハラはカマクラの細い肩に、手を置いた。

「アンタの気持ちは」

暖かく重みをもったその感触に、カマクラは再びロクハラと目線を合わせた。

——自分が新しいカマクラとなった彼女に仕える事になったのは、もう何年前のことだろう。この女が、まだ在位して間もない頃のことだ。そしてしばしの間彼女の元で仕え、ロクハラへと栄転させられた。

世界はとめどなく流れていくけど、出会った時から全く変わらないう美しい面影で、眼差で、彼女は自分を真っ直ぐに見つめていた。ロクハラが女の肩に置いた手から、黒く長い髪が滑り落ちた。

「残念ながら、オレは何も知らないし、何も隠していない。でもアంతの占いは確かだからさ……この京に、何かあったら必ず報告するよ。約束、する」

ロクハラはカマクラの肩に手を置いたまま、その手の力を少し強めた。

「有難な」

カマクラは、にっと笑った。

「……」

それが支配者であるにも係らず余りに無防備であつたから、さすがにロクハラも少しばかり邪心が湧いてしまった。

「でも……よく一神くんの居ない時に、オレみたいな怪しい奴呼んだよねえ」

依然、カマクラの肩に手は置かれたままだ。

「オレに限らず一国の主がこんな無防備なコトじゃ、一体どんな命の危険に遭うか分からないよ？」

しかしカマクラはにっこりと笑うと、ロクハラの手をぱしっと払いのけてゆつくりと言った。

「無論、承知の上だ……。如何なる事態にも備えて、至るところにトラップは仕掛けてあるぞ……」

その瞬間、自分の頭上に空恐ろしい危険が迫っているような気がして―ロクハラは思わずカマクラのその綺麗な笑顔に、ぞくりとしたものであった……。

「それに、ある程度体張らないと、大事なものは手に入らないからさ」

カマクラはそう言うと、肩を竦めて苦笑した。

それはこの世を治める者の言葉としては相応しくないものかもしれないが、逆にその“らしくなさ”が賛否両論あれども彼女の魅力だと言う奴もいる―少なくとも、今此処に居ない彼女の一の腹心はそう思っているだろうとロクハラは思うので、これ以上何も言うことはなかった。

謁見はそれで終わった。ロクハラはこれからバクフの悪友たちに会ってくる、と退出していった。

最後に彼は自分にはたくさんの愛人もいるから、下克上するよりも安泰なバクフで出世して安定した収入を得る生活の方が性に合うと冗談のように笑った。

誰も疑いたくはないと言いつつ、それはクニのトップにいる自分にとって綺麗事であるということはカマクラも重々分かっている。多分ロクハラもそれを察して、分かったと言ってくれたのだろう。いい部下を持った、とカマクラは心から思った。

――それにしても。

「収穫は、なしか……」

誰も居なくなつた部屋の中、カマクラはごろんと畳の上に転がった。

だが何度占つても京に新しいカマクラの手がかりがうつすらと見えるような気がする。

しかしそれは京のロクハラ―つまり、バクフの組織内部にあるわ

けではないようだし、決してロクハラが隠しているわけでもないようだった。

一体、何処に、謎はあるのか――。

カマクラは寝そべって伸びをしながら、天井を見た。

……それにしても、玄次が帰ってくる前にコトが済んで良かった、と思った。でなければ、何の意味も……。

危険で軽率な行動だとわかっていてもこんな荒仕事をしたのは、彼が留守の間に自分にしか出来ない方法で自分でも何か新しいカマクラの手がかりを見つけたかったのだ。

そのようなこと、このクニのトップらしからぬわがままだと分かっていた。分かっていたても、そうしたかったのだ。

――それはいつだって“彼”に対して何もしてやれなかった、自分の小さな負い目からかもしれないかった。

そしてこんな自分は、ただの平凡な人間でわがままな女で、到底この座には足りない器であるのに。なのにどうして。もう二十年近くも前になるあの日、

“お前が、次のこのクニを担う者が……”

先代のカマクラは、自分なんかの元へやって来たのか……。

そんな風に考え事をしていたら……何時の間にか、カマクラは寝息を立て始めていた。

.....

こんな、権力の場所なんかにも何も興味はなかった。たった一人さえも守れない、全てから背を向けた粗末な人間に、こんなことが出来るなどと思ひもなかった。

何もかもどうでもよくて、こんな座も誰がなろうともどうでもよ

く――。

「だけどそんな自分が次の『カマクラ』になれと言われ、それを受け入れてしまったのは、……ただこの世にもう一度生を受けたかったからだ。」

病院のベッドで寝ていた自分に、カマクラよりの使者――先代のカマクラその人、は告げた。

「カマクラとなるお前はもう、今までのお前ではない。お前は一度死の淵に立ったことで新しい『力』を得て、新しいお前に生まれ変わる。」

逆に言えば、カマクラになることを拒むと言うことは、怪我でボロボロになっていた自分の死、を意味していた。

御恩と奉公――この『力』が常時発動すれば、誰かが何かしてくれたことに対して、何かを返せるというのか？

そして俺は……もう一度、生きられるのか？

自分が権力の座に興味無くても生き延びたいと、その為にこのクニのトップになろうと思ったのは、自分の運命に逆らっても長らう命を手に入れたかったのは、ただひとつ、言いそびれた言葉があったから。

このまま死にたくなかった。たった一言、『あの子』に伝えたかった。

それだけが、願いだった。

――伝えたい、もう一度、会って話をしたい。声が聞きたい。笑顔が見たい！

もう二度と、その手を離さないように。

ただたった一言を、伝えたくて。

もう何もいらなから、たった、たった一言。

そして、今度こそ――。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「――起きたか」

……懐かしい、夢を見ていた。

カマクラがまどろみから目を覚ますと、夢の中で今し方想い描いていた残像と、自分を今見ている青年のその姿が、少しだけ重なるうとし……、けどはつきりとしていく意識の中で、その残像は完全に掻き消されてしまった。

其処には読みかけの新聞を手にした玄次が胡座をかいて座っており、自分を見下ろしていた。

「あー。おかえりー」

「ただいま……」

玄次は再び新聞をがさつと捲った。

カマクラはようやく自分がうたた寝をしていたことを理解し、けだるそうに起き上がった。

「あーねみー」

「昼寝する時は、腹の上に何か掛けろっていつも言ってるだろ」
新聞に目を向けたまま玄次がぶっきらぼうに言った。

「へーへー」

いつのまにか自分の身体の上に着物が掛けられていた。道理で気持ちよかったわけだ。

……あ、お礼……。

とカマクラは思ったが、ガサツと新聞がまた捲られる音がした。

――しまった……。言うタイミングを逃してしまった……。

いつだって、そうなのだ。一番大切なことがいつも上手く言えない。

まだ目覚めきっていない脳が、先ほどの夢で感じた気持ちとつながり、やたら切ない気分になった。

一番哀しくてやるせなかったあの日の夢を見た――自分は泣いていなかっただろうか。カマクラは思わず頬に手を当てて確かめる。

そんなことを考えていたら、逆に段々夢から覚めて現実に戻ってきた。それに伴い夢で感じた昔の苦しい気持ちも徐々に薄れていった。

コーヒーでも飲もう、とカマクラが起きるべく掛けられていた着物を畳むと、彼女の横にどん、と大きな紙袋が一つ乱暴に置かれた。カマクラは一瞬、きょとんとしていたが、紙袋には“世界のサケ展”の文字……。

――お、そーいえば……。

「有難う、一神！」

今度は、言えた。

カマクラは満面の笑みで、素直に玄次に礼を言った。

こんなオバサンに（と言っても見かけ二十代の美人だけど）笑顔で礼を言われても嬉しくもない、と思ったが一瞬自分は“奉公”の為にそうしたのか、いちこの指摘したとおり、ただ単にこの人間に弱いだけなのか、と不覚にも心が揺らいでしまった。

しかし……、

「魚拓は政所に飾ってー、サケを捕る熊の図の木彫は……会議室の目玉にしてー」

「だからバクフをてめえの悪趣味に染めるのは、やめろっつーの！」それは一瞬のことで、やはり、馬鹿な発言しかない自分の情けない上司に呆れ玄次は帰ってそうそう怒鳴りながら、やはり自分は仕方なく、“奉公”で仕えているだけなんだ、ああそうに違いない、

と自分の心に言い聞かせ、彼の「それ」はあっさりと錯覚に終わったのだった。

……が。

そんな会話をしていた二人だったが、ふと、玄次は自分の手元に落ちていた金色の髪の毛に気がついた。

——これは……。

「……今日、誰か来たのか」

髪の毛に視線を注いだまま、彼は低く呟いた。

「うん、まーね……」

カマクラはサケ展の写真集を見ながら、曖昧な返事をした。

……誰が来たのか、何の為に来たのかなんて、この自分がわからない訳なかった。

そして、何で主がこんなことをしたのかも――。

別にそんなの上司なのだから、そうしたければ自分なんかの許可などなくすればいい。

軽率な行為ではあるが、それによってロクハラと信頼関係を深めたのならそれで構わない。

それでも、胸がムカムカするのは……。

自分の居ない間にどういう気持ちでこの主が何をしたのか、それを自分が察しているということ――そのことにもこの女はとうに気付いているから、だから自分にはいつだって何も語りはしないのだ。

確かに自分は分かっているのだから、それは何もカマクラの傲慢などではなくそれでいいと思うのだが。

——でもよりによって、何であのロクハラなんだよ……！

それは確かに不穏な動きを見せる京を見張っている機関の長官なのだし、あえて自分の居ない時にそれをしたカマクラの気持ちも察

せられないわけではないから当然なのだが。

―それでも、何も自分のいない時に、あのいけ好かない野郎をしかも、何の説明もなく……！

そんな風に下らないと重々承知しているのに馬鹿みたいに無意味なことを思ってしまうのは、よほどあの男が気に入らないのか、それとも……。

突如として複雑な気持ちに陥ってしまった自分を玄次は悟られなくなく、今はこの場にも居たなくなく、

「テメーも少しは仕事しろよ」

と毒づきながら、京への対策は後回しにバクフで何か仕事でもしようとな彼はカマクラの部屋を後にした。

「はあ？」

カマクラは、ワケがわからないという顔でそれを見送ったが、彼のことだ、聞いてもきつと答えてくれないだろう、と諦めてサケ展の写真集の続きを見ていた。

本当に言うべきことがいつも伝えられずに後から後悔してしまうのは、人の弱さなのだろうか。

ロクハラにはあの二人が長い時間一緒に居るけれど、一番大事なことを未だに伝えていないように見えた。

その4 たたかう！お兄さん1（前編）

御恩と奉公、いざカマクラ――。

権力を巡る内乱がもとで政治力が弱まってしまった自分たち――京を見限るように、カマクラは立ち上がった。

以来、自分たちにはない力強さと自由奔放さでこのクニをひとつにまとめていた。

今のカマクラも変わり者だが、それなりによくやっていると思う。誰が治めていたって構わない、それでこのクニが平和ならそれでいいと自分は思っていた。

だが、新しいカマクラがこの世に生を受けていることに気付いた彼女もまた、思い立った。

――カマクラの座を交代しよう、と。

いつかは、その時が来ると自分も思っていた。決して彼女が悪いわけではない。

組織の世代交代がちゃんとされないことで争いが生まれそれがクニの支配にまで影響してしまうことは、この自分が一番身を持って知っているのだから。

――それでも、それを阻止しようと思ったのは、自分の個人的な感情のほかならなかった。

たとえそれでカマクラが減び、クニが乱れることがあっても、それでも――。

騒ぎになることを恐れて、カマクラが忠実な部下一名だけを使って次のカマクラを探索していることも幸いだった。自分もこの個人的な妄執を誰にも知られることなく、あの子とたった二人で密やかに動ける。

京の組織――「朝廷」を動かしてまで探そうなど思ったことは無

かった。

自分が少女一人にこの探索を任せて居る、その一番の理由は……。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「院……？」

いちこは目を覚ました。暗闇の中どこから入ってくる薄明かりの中、いつもの彼女の主の部屋。

己を抱いているのは真っ黒な着物に真っ黒な薄布を羽織る、真っ黒な髪の深い紺碧の眼の男。

己の主――。

「大丈夫か？」

低い声で囁きながら、院と呼ばれた男はその大きな手でいちこの頭を撫でた。

「はい……」

いちこは少し笑って頷いた。幼い子どもの頃から、一人ぼっちになったその日から、ずっとこの男にこうして慈しんでもらってきた。ただどさすがにもう中学生なのだし、膝の上にあがることもなくなったが……。

そう思うと、少女は何だか変な感じがした。

いちこの頭が冴えてきたので、慌てたように胸にもたれていた頭を上げて身を起こす。

「あ、す、すみませんでした！」

膝からも降りようと思ったが、余程心配だったのか院はいちこを離さなかった。

「院に助けてもらうなんて最低です……。ごめんなさい……」

これで許されるとは思わないが、いちこは深く頭を下げた謝罪する。

オワリで何か次のカマクラの情報を掴もうと、その前に有名な神社に祈願してみようと思ったのだが、ふと“何か”を感じて奥へと入っていったら―その神社の者に捕まり、困っていたら院が近づいてくる気配がして――。

あとは何も覚えていない。眼が覚めたらこの状態だったのだ。

「仕方ない。あのナギに居た者の結界は中々のものだったのだから」
しかし、返ってきた言葉はいちこを責めるものではなかった。いつだってそうなのだ。

いつだって、この人は誰にでも優しい。

自分で闇に住むことを望み、自分は京の政権から身をひいたこの人だから――。

だから、いちこは院が好きなのだ。

「ということは……私もあのナギには何かを感じたのですが、やっぱり何かあったんですか!？」

日本語になっているようなっていないような質問だが、院にはその言いたいことがわかったらしく、少し口の端を上げて笑った。

「――いや」

残念ながら、ハズレだ、と院は言い、いちこは迷惑を掛けたのに……と益々落ち込みがっくりとうな垂れる。

「あれほどの霊力ならば、今後あの者が何かカマクラの手がかりを掴むことはあるかも知れないが――、直接新しいカマクラにかかわりのある者ではないな」

「そうですか……」

いちこは暗い声で呟いた。

が、不意にその頭に院の手が置かれた。

「でも、収穫もあったぞ」

「ホントですか？」

いちこはその言葉にぱつと明るい笑顔を向けた。

「ああ」

——あの、男——。

カマクラが忠実な部下一名に、新しいカマクラの件を探らせて居ることを院は知っていた。ロクハラの監視も強化はされているがそれは自分たちの動きを見張るためで、決して次のカマクラを探すための人員ではない。

あの男の顔と気配を、院は確かに覚えた。今後牽制をするための情報としては、十分だ。

噂には聞いていた。彼もまた警護として、いやそれ以上に側近に近い形で、子どもの頃からずっとずっと、カマクラに仕えてきたのだと。そしてあの男はただのバクフの役人ではなく、個人的な因果がカマクラとの間にあるのだと。

——あれがその、一神玄次か……。

いちこと接触した疑いのあった男。いちこに今後また危害を加えることもありうる男。

身に纏うその気配——、確かに己の記憶に植え付けた。

ただ……、と。

西の主を見据えてきた、真っ直ぐな眼差を思い出す。

ここ近年には出会わなかったようなあの眼、発された強い気。

——いい“眼”を、していたな……。

そうは言っても自分の顔も見られてしまったのだが、そうされたことも含めてあの男の力量が測れたわけで——。

どんな収穫があつたのだろう。いちこは何かを考えている院を見上げていた。

彼が何も言わないなら、それはきつといちこは知らなくていいことなのだろう。

それが“子ども扱い”なのだとしたら、少し寂しいけれど……で

もいつそ子どもならば、もう少しこのまま甘えていよう、といちは思い再び院の広い胸にもたれた。

・・・・・・・・・・

「最近、女子中学生と仲いいらしいじゃん」

兵法の情報誌、月刊「HEY！兵法」とか云う雑誌を読んでいた玄次の目の前に、突如として雑誌の上部からぬつとカマクラの顔が出てきたので、彼はそのセリフの内容も含めて眉を顰めずにはいられなかった。

「はあ！??」

いつもの、カマクラが在するバクフの奥の屋敷で。

俺だつて外出したいのに、俺なんか外に出られないのに、一神は仕事の合間によろしくやってんだ、いーな、いーな、と当代のこのクニの主は部屋の隅で背を丸めて「の」の字を指で書いている。

中学生……いちこのことだろうと思うが、それにしても酷く浮いた解釈ではないか。

「バツカじゃねーの、お前」

玄次は心底呆れたように、その背中に向かって言った。

「だつて各地の間者さんたちがそー言うんだもん」

カマクラは恨みがましい眼で、背を丸めたままちらりと玄次の方を向いた。

……いや、数回しか会っていないのだが……。しかも偶然に。

それを見ていたワケか、間者達が。優秀すぎるのもある意味困り者だ——てか優秀だつっ—んなら、アイツが京のヤツだつて早く気付けよ！などと、やっぱりバクフには口クナ人材はいないのか、と玄次は腹立たしいような泣きたいような気持ちになっていた。

「どいつもこいつもバカばっかだな……」

これ以上の議論は無駄だと言わんばかりに、玄次が再び兵法の書に目を落とすと、

「ひとりぐらい、紹介してくれたっていいーじゃん……」

「そこかい！」

やっぱり一番のお馬鹿さんはコイツだろう。

一応こんな奴でも生物学上は女だったと思うのだが、どうも若い女の子が好きなようでそれについては人それぞれだと思うので何も言わないが、その斡旋を自分に頼まれても協力する気には到底なれない。

玄次は大きなため息をついて、本から再び顔を上げると怒鳴った。

「あのなあ！ アイツは京の手先なの！ しかも接触したくてしたワケでもねーの！」

「やっぱり会ってんじゃん」

「……」

玄次は言葉に詰まった。それで結局、京の黒幕——院と顔を合わせてしまったのだ。向こうもカマクラの一の腹心である自分が動いていると気付いたはずだ。

だが、特に現状は何も変わらない。お互いに誰が動いているか認知したというのに、何も大きな行動を起こさず互いにひたすら新しいカマクラを探す日々だ。

「なあ、京の目的は何なんだろうな……」

カマクラがぽつりと言った。

灯心が揺れた。

玄次は本を閉じ膝を立てると、そこに頼杖をついてふうつとため息をつくと呟いた。

問題は、そこなのだ。

「おそらく、次のカマクラを探しているのはウチみてえな“京”の組織——“朝廷”そのものじゃないんじゃないのか？」

京の朝廷が形骸化した理由。それは、クニを統べるミカドが交代する際に、前のミカドが「院」として次のミカドと同様の政権を握ろうとした時代があったからだ。

必ず直系がミカドの座を継いでいればそういった争いも起こらなかったかもしれないが、皇位継承権は複数の者にある。当然、派閥も出来る。

京はミカド派と院派に分かれ、内乱を続けた。内乱はそれぞれの一派の財産である領地を巻き込み、その領地を守るブシダンまでも巻き込んだ。

その中のあるブシが、派閥争いにより力を二分させてしまった京の政権を我が物にしようとしたが、更に別のブシがそのブシの一族を滅ぼし新しく東に“バクフ”を作った——それが何百年前に起きた“カマクラ”の始まりなのである。

その4 たたかう！お兄さん1（後編）

「カマクラ成立以来、すっかり力を無くしちまった京だったが、これ以上の内乱を防ぐ為、ある時一人のミカドが若くして院となりそのまま政權から身を引いて、“院”制度そのものを闇に葬ったと云う。それ以来、“院”は永久にその男の身に封印され京から院が立つこともなくなり、京の政治は廃れはしたものの益暗キゾクたちで今も細々と続けて居る——というワケだ。でも今カマクラを探しているのは、おそらくその京のキゾク達じゃねえ。ましてや、あんなトロクせーミカドでもねえ」

カマクラも玄次と同じく胡座に頬杖をついて、その低い声の響きを大人しく聴いていた——が、そこでぽつりと言葉を零した。

「……それが、その闇に生き闇で京の支配——いや朝廷の邪魔にならない距離で京の平和を守り、西の闇の“氣”を治め続けて居る、一神が会った“院”ってワケか」

「……すみませんでしたね」

「咎めているワケじゃねーよ」

カマクラは肩を竦めて少し笑った。

そう、あの男は京の政治から身を引いた男。ただもう二度と京が内乱を起こさないよう、クニが乱れないよう見守り、影でその平和を守る男。

その男が何故、今になって次のカマクラを探して動き出したのか。しかも探索のための部下はあの少女1人かもしれない。いやそうでないかもしれないが、少女一人のために本人が姿を現したということは、あの少女が京、即ち院にとって何か弱点のようなものなのかもしれない。

「あーワケわかんねーなあ」

玄次は頭を掻いた。

「さつさと世代交代させてくれりゃあいいのにな」

カマクラも同調し、まったくだ、というように足を伸ばして背を反らした。

「でもそれならやっぱり、そのお嬢ちゃんが何か握ってんじゃないのか？」

カマクラの言葉に、玄次は嫌そうに彼女を見た。カマクラもその視線に合わせて玄次を見た。

「接触、しると……」

「嫌か？」

「……」

「もののすごく！」と「仰せとあらば」の二つの言葉が交錯して、玄次は押し黙ってしまった。

それだけで十分、カマクラには彼の言いたいことが分かり、ふつと笑った。ただ何故彼が彼女が苦手なのか、に関しては少し思い違いをしていたのだが。

「――斬らなかつたんだな」

そのことの結論は出させずに、カマクラはふと、玄次がいつも持っている太い刀に視線を移した。その京の少女のことを指しているのだと、玄次にもすぐにわかった。

「斬る機会を逃した」

玄次は苦々しそうに言った。

しかし「斬れ」とも「斬るな」とも言わずにカマクラは玄次の刀に手を伸ばすと、それを手に取った。

普通の刀以上に重いそれを、ずっしりと腕の中に収めた。よくこんなものを振り回していると思う。

「まあ、単なる“刃物”とこいつあワケが違うからなあ。斬る時を間違えたら取り返しがつかんことになるし、迷いひとつあってもいけない。判っているとは思うが――これは一度失敗すれば、その時

はお前が傷つく。そういう刀だ。……焦ってむやみに斬る事の無い様にしろ」

斬る斬らないは、この刀の使い手の判断だ。自分がどうこう言うことではない。ただこの刀は決して血を浴びない、その代わりに使い手を血に染めることだってある刀なのだ。

相手が院であると分かった以上、無茶をすれば命を落とす可能性も無いわけではない。

——傷ついてくれるな。できることなら。

カアクラは玄次の大きな掌の中に、その重みのある「何も斬らない」刀を戻した。

「判っている」

その白く細い指から刀を受け取りながら、玄次は呟いた。

「ところで……」

カマクラは、思い出したようにくっくつと笑った。

「そーは言っても、京の目的なんて、案外くだらねーモンだったりすんじゃないの」

秋の夜長——、京で寝巻き姿になっているいちこは、へくち、とくしゃみをして、最近冷え込むし風邪でもひいたかしらん、と首を傾げていた。

.....

いちこは今日も学校へ出かけた。その帰りに、またうろつろとカマクラ探しに行くのだろう。

自分が少し“力”を添えれば、彼女は彼女自身の力を引き出し、空間を越えて移動することが出来る。部下として、これほど便利なお手前は無い。

彼女が居ない間は、自分は自分で京の治安を守る。カマクラ同様、

“氣”という目に見えないものを守る。

それは体力も気力も要するものであるが、京の内乱を収めるため、“院”を――権力に群がるヒトの“欲望”を――全て体内に吸収した自分は、もう普通の人間ではない。寿命も、体力も。

なので疲労はそれほど溜まらない。だがそれでも一人で支配を続けるよりは、部下を持って仕事をした方が効率はよい。

「――院」

闇の中から若い男の声がした。細身の身体に一振りの細い鋭利な刀を持ち、狐の面をつけた青年だった。

「無謀にも京を制圧し、カマクラに肩を並べる勢力になろうと企んでいたビゼンのソウリヨウ、ヤマジの一族を一掃して参りました」

「ご苦労だった、」

「ホクメン 淡々と言うこの男。」

「北面――」

「北面」とは元々、院の警護にあたる役職の者だ。だがその冷静さと才覚、ずば抜けた剣の腕で、それ以外の仕事も次々とこなしてきた。今や長年この院を慕い付き従っているこの男は、京の闇でも院の右腕となっていた。

「院――恐れながら申し上げますが、カマクラは最早、腑抜けの集団。我を筆頭に攻め入れればその政権など簡単に奪取できます。またその為に新たなカマクラの力が必要とあらば、それも我等が――」

「北面」

淡々とした口調では有るが、畳み掛けるように言うその男の言葉を院は背を向けながら遮った。

「俺は力で政権を奪回したい訳じゃない。今はただ京が、このクニが、二度と乱れぬよう守っていてくれ。それだけを願っている。今日は、ご苦労だった」

柔らかく、だが北面の言葉を“拒絶”すると、院は部屋の奥へと

消えていった。

北面は面の下の唇を嚙んだ。

違う――。

違う――！

自分だって権力が欲しい訳じゃないんだ。

欲しいものは、ただひとつ。ただひとり。

喜んで欲しい。誰よりも、自分を認めて欲しい。

――なのに――。

あの少女が来てからだ。かの君が変わられたのは。

新しいカマクラを探しているのだろうか？それがアナタの望みなのだろうか？

なのに何故ソレを、あの小さな少女にしか分かち合わない。何故、彼女だけを信頼している。

何故、自分にその一番大事な仕事を命じない――。

自分の気持ちに、主はとうに気付いている。

だからこそ、そんな自分に平穏な気を保つことは何より大切な仕事だ、だからお前ほどの男に頼むのだ、といつも笑ってくれる。

だけどいくら温かい言葉を貰っても、事実誰にも命じていない仕事をあの少女に命じているではないか。

――何故だ。

それが子供みたいな嫉妬であると判っている。

だけど、許せないものが、そこに、ある。

その5 たたかう！お兄さん2（前編）

いしやくきいも

遠くで季節の風物詩の音がする。

「たたりーなー、と思いながら、今日もカマクラ探索中の玄次はそうは言っても腹が減って仕方ない、とその季節の風物詩をつい衝動買いして、公園の中を過ぎ行く人々を見ながら植え込みのレンガの上でのんびり食べていた。

ツケはもちろん、バクフ行きである。

京の目的は依然わからないままであるがロクハラ達が京の動向を探っている以上、玄次達としては京と同じものを探す中でその足取りを掴み、その目的を探る——という方法をとることにした。

もっとも京に先を越されてもいけないから、カマクラ探しはそのまま続けなくてはいけないのであるが。

そうだった理由で、玄次は今日も次のカマクラの居そうな土地、とカマクラが占った適当な場所へとやって来ていた

——しかしどいつがカマクラだというのだろうか。手がかりはどこにあるのだろうか。

公園では子供たちが遊んでいるだけだ。

手探りしても、全く何も見えない。

なにやらイライラしてきた玄次は、二つめのイモに乱暴にかじりついた。その時、

「げんちゃんっ！！」

嬉しそうな女の子の声が耳に聞こえ、玄次は古典的にげぼごと咽た。

——もー会いたくないっつーのに!!

心底嫌そうな顔でその声の主……いちこを振り向くと、

「あーおそろいだねえ」

彼女もまた胸に焼きイモを抱え、嬉しそうに立っていた。

きつとこういう光景を各地の間者共は見ているらん詮索をして、いらん報告をあの女にしているんだろっな……。

玄次の隣にセーラー服姿の少女はちょこんと腰を下ろすと、彼と同様焼きイモを食べ始めた。

——接触するもしねえも……、コイツからオレになんだか近づいてくるんだっつーの！

一体、どういう腐れ縁か……。

新しいカマクラを探す京。

その京に第一線で、探索を命じられている少女。

一体、コイツらは何を企んでいるのだろうか……。

「おいしいね」

「あ？」

「おいも」

「——ああ」

玄次は食べるのが早い。とつくの昔に全ては胃の中だ。ブラックの缶コーヒーを更に一気に流し込んだ。

「てか、お前なんでココにいんだよ」

「へー？^え」

「京のヤツが、なんでこんな東に……」

どう見ても学校帰りの格好の、以前から神出鬼没なこの少女に玄次は問い掛けた。

「なんで、京の子って知ってるの？」

はふはふとイモを口の中に入れながら、いちこは首を傾げた。

「この前、オワリで……、」

玄次はそこまで言って口を嚙むと、少女を見た。

——もしかしたらコイツは、院からまだオレの正体を聞いてないのか？

ただ本当に何も知らされず、目的も知らず、次のカマクラを探しているだけなのか？

玄次は少し驚いたように少女を見た。

しかしいちこはそんな内心の驚きには気付かず、玄次の言葉を先読みしたようだった。

「あ、私が捕まっちゃった時、そういえば、玄ちゃん、いたよねえ」
「……オレくらいになると、影だけで何者かわかるんだよ」

玄次は曖昧な答え方をした。

「そーなんだー」

だがさすがに子供だ。いちこはあっさりと納得した。そして、だったら、というように素直に話し始めた。

「自分でもよくわかんないんだけど、私と私の仕えてる方の力を合わせると、何処へでも行けるの」

だから学校帰りに色んなところに行ってカマクラを探せるのだと、いちこは言う。

「そうか」

東のカマクラ、西の京。京の最高権力者ともなると使える力がカマクラと同様、半端ではない。それをこの力の足りない小さな子供に与えているのだろう。

でもそれならば尚更、何故院は何の目的も話さないような子供にこんな探索をさせているのだ——？

一瞬、口●コンか……？などと、京の支配者を疑ってしまう玄次であつた……。

やだなー、オレそんなのと争いたくねーよ、いやでも、そーなるとウチのアレといい勝負だな……などと悶々と考え、頭を抱えてし

まいった玄次に、

「どつたの？ 玄ちゃん??」

何も知らないいちこは身体の具合でも悪いのかとイモを口に咥えながら、玄次の広い背中を軽く撫でる。

そう思うと益々この二人の関係は詮索したくも無くなる玄次だが、こんな少女がちよろちよろ動いている原因はカマクラの言うとおり京がカマクラを探す目的に直結しているからか、それとも京の趣味（ロ・コン説）か……。どちらかであろうと玄次は予測した。

勿論、どっちも当たって欲しくは無いが……。

それはともかく、この少女自身も何らかの“力”を持っているのは確かなようだった。

だからこそ、斬っておくべきだと玄次はあの時直感的に思ったのだ。

ただ彼女自身も自覚しているとおり、京の黒幕の強大な力が彼女を守っている。それすらも一刀両断にするのは、この「何も斬れない」刀では余程の精神力が必要だ。

少女を斬ってわざと京に行動を起こさせ、その目的をはっきりさせるか、はたまた平和に事が進むよう、このままのんびり泳がせておくか。

カマクラの手がかりも掴めていないのに前者を選ぶのは愚かなことではあるが、それによって見えない京の目的が浮き彫りになるかもしれない。

——カマクラから、刀をこの手に再び預かった。彼女ははいつつて、斬れとも斬るなとも言わない。陳腐な言葉で言えば、自分の判断を信じているからだ。

だからたとえあんな腑抜けの集まりでも、自分の行動がバクフを揺るがす軽率なものであつてはならなかった。

何故なら自分はバクフを——カマクラを、たとえどんなに厭々で

も守らなくてはいけないのだ。それが自分に課せられた“奉公”なのだから。

だが……万が一たとえそんな行動を自分がしてしまったとしても、きつとあの女は咎めないだろう。

だからと言って、手を抜こうとも思わないが。

自分が守るもの。

そして、京が守ろうとしているもの。

考えあぐねて玄次は刀のつばを遊ぶように鳴らした。

いちこは隣の男が何を考えているかなど想像もしないで——そのような殺気も感じられず、呑気に焼きイモを食べ続けていた。

すると……ふっと、冷たい空気が降りてきた。それは秋の冷気などではなかった。

玄次は身構えた。

いちこも何かを悟り、こくんとイモを飲み込んだ。

二人の前に現れたのは、狐の面をつけた髪の高い若い青年の姿だった。

.....

最近面が流行っているのかと、この前の天狗坊主のことを思い出しながら、玄次は頭の隅で呑気に考えていた。

「ホクメン……」

いちこが喉の奥を鳴らして、ひくつくように呟いた。きゅっと、玄次の黒い着物の裾を軽く掴んだ。

——怯えているのか？

二人の関係はまるで判らないが、いちこの態度からそれくらいは見取れる。

北面と呼ばれた男は腕組みをして自分達を見ているだけだったのだ、玄次はすぐに居合をとるつもりではいたが、何も言わずにその男の動きを観察していた。

「何をしている」

冷たい、くぐもった声がし、いちこが身を竦めたように見えた。

「その男がカマクラと知っての行動か。お前のしていることは、裏切りに他ならないぞ」

「へ！??」

怯えていたわりにはひどく変な顔と素っ頓狂な声を、いちこは北面に向け、——その後、余分なこと言いやがって……と額に手をやっている隣の玄次を見た。

「玄ちゃん、やっぱ、カマクラの人なのぉ！??」

京が自分の正体をいちこに言わなかったのは、逆に自分が安心していちこに接触すると思ったからか。それとも始めからこうして自分を消すつもりだったからか——。

玄次はその瞬間地面に立つと、素早く刀に手を掛け身構えた。

すらり、と北面も細身の刀を構えた。

いちこはきょんととして二人をきょろきょろおろおろと見比べる。すぐに怒るけど、兄と云う者が居たらこんな感じであっただろうか、という青年——温かい人だと思っていた。ずっとずっと、思っていた。

それが一体どうして、こんなことになってしまうのだろう。

狐面の下視線は見えない。成程この為か、と玄次は思った。

どう出るか。

どうするか。

相手の視線は見えない。

しかし秋の夕日に、よく磨かれた刀が一瞬、反射した。

それは、刃の向く方向。それが瞬時のものでも、それで相手の動

きを読む。

次の瞬間、金属と金属のぶつかり合う鋭い音がした。

その5 たたかう！お兄さん2（後編）

「……何故……、助ける……」

北面の驚いたような声が、面の下から響いた。

「テメーこそ、何やってんだよ……」

力と力の応酬――。

玄次が一步も引かずに、北面と刀を合わせているのは、いちこの眼前であつた。

いちこの眼には玄次の黒い背中だけが見えていた。

何が何だかよくわからない。――玄ちゃんはカマクラのひとだ。

だが、今北面が殺そうとしたのは自分で、それを助けようとしたのは、玄次だ！

一体何が何だか何を信じたらよいのか、まるで判らない。

いちこは硬直していた。

「やはり――、貴様ら二人は裏切り者同士、内通しているのか」

「はあ！??」

一瞬見当外れな言いがかりに、玄次は脱力しそうになったが、その僅かな力のぶれで相手が少しバランスを崩したのを見逃さず、一気に刀を弾き返した。

「つつーかテメー京のヤツだろ！？　なんで、オレよりコイツ狙うんだよ！」

裏切り者だと云うなら、後で始末すればいいのに――。

北面は玄次にまさか「敵であるいちこを助ける」という予想外の行動をとられるとは思わなかったらしく、その答えを用意していなかったのか何も答えなかった。

面の下表情は相変わらず読めない。

しかしその下の殺気は、確かに玄次といちこに向けて感じられた。

この京の二人の関係はまるで判らないが、この男がこの場に乗りていちこを殺そうとした——そんな仮定が頭に浮かんだ。

玄次はそのままいちこを背に、北面に対峙した。
構えた「何も斬らない」刀が唸った。

——ああ、そうか。

カマクラの言葉が蘇る。

『斬る時を間違えたら取り返しがつかんことになるし、迷いひとつあってもいけない』

今なら、判る。迷いは、無い。

刀が、求める。倒したいと、一筋に思う。

“斬りたい”モノは——、この男。

玄次はその重い刀を勢いよく振り上げた。

重みで動きが遅くなる分、間合いが必要だ。そして絶対に一発を外してはならない。

確実に一撃一撃が、相手を退けるものでないといけない。

呆然としているいちこの前で、玄次と北面の刀が斬り結ぶ。

「——!？」

その戦いの中で、北面はこれまでにない違和感を覚えた。

刀が刀に当たる度に、自分の身体に重い感覚がズンツと走る。今までに、こんな剣を受けたことがなかった。

——何だ？この、刀は……？

.....

ところ変わって、オワリのナギ地方。

ざわざわと杉が鳴る。縁側から和歌は遠くの東の空をふと見上げ

た。

目の前の小さな庭では、僧兵の弁慶が自分より図体は大きいが如何せん機敏ではない常盤と剣術の稽古を行いオメーじゃ相手にならねーんだよ、とぼーっとしている常盤にギャーギャー文句を言っている。

ぶつぶつと怒りながら縁側に休憩にきた弁慶は、割れてしまったもはや被れなくなった自分の天狗の面を手にとった。

面はまた用意すればいい。だがこれをいつまでも持っているのは、戒めの為だ。

——あのカマクラの男……。

態度も性格も剣の腕も——和歌が何となく慕ってしまったところまで含めて、何もかも気に入らない男だった。

ただどいつかもう一度手合わせをして、今度こそ倒したいと思った男だった。

それにしても……、

「おつかしーなー」

割れた面を見ながら繰り返しぶつぶつ言う弁慶に、

「何がですか？」

それが幾度も続くものだから、思わず和歌も問い掛けた。

「んーアイツの刀……」

今度こそブツ倒してやりたいんだけどさあ、と苦々しく言った後に弁慶は不思議そうに呟く。

「あん時オレ、アイツが面を“斬った”と思ったんだ。だけど、この割れ目……これは、斬った跡じゃねえ」

刃物で、ではなくまるで力だけで真つ二つに割ったような、そんな割れ目だった。

「あの角度なら確かに、刀の刃が面に……てかオレの頭まで刺さるはずなんだけどな……」

——何なんだ、あの刀は？

.....

——まさか！？

北面がそう思ったその隙をついたかのように刃がないのかと思うほど、光を放たなかった重いその刀が、一瞬目映くきらりと閃いた。

——迷いは無い。

玄次は振り上げたその刀を、まっすぐに北面に振り下ろす。

——この刀、もしや……“不斬刀”！？

その時玄次の刀は、北面の刀目掛けて、まっすぐ振り下ろされた。

が……、北面の刀に当たることは、なかった。

北面が玄次の刀を受けずに、素早く身を引いたからだった。

玄次はその勢いでそのまま地面を少し叩き割ったが、体制を立て直さねばならないとその重い刀をすぐにまた持ち上げて、その先を北面に向けた。

「不斬刀か……」

北面が僅かに狼狽したように呟いた。

「へえ……、知ってんのか」

玄次は片方だけ口の端を釣り上げて笑った。

不斬刀“無血”。文字通り、「何も斬らない」刀だ。

それは無血の通り名の如く、ただの刀の形をした「鉄」のカタマリであり、刃物としての役目は果たさない、肉を「斬らない」刀なのだ。

だが使い手の腕力と精神力次第では、その「モノ」の芯を——心

を、生命線を——使い手の心のままに斬ることが出来る。それは目に見えない霊力や人間の気持ちでも、はたまた逆にどんなに硬い鉄でも。

使い手の心次第でどんなものでも斬ることの出来る刀になるのだった。それは一部の者だけが手にするある意味最強の刀だった。

それを察した北面は、この男の殺気に今は自分の刀すら真つ二つにしかねない強い精神力を感じたのでつい身を引いてしまったのであった。

刀だけならまだしも、この刀は人の記憶や闘争心だって斬ることの出来るものだ。少しでも傷つけられたら、そこで自分の心が折られることになる。

今の自分が自分でなくなること——それは再生可能な肉を斬られることよりも、ずっと恐ろしいことだった。

今ここでこの男とむやみに斬り合うのは、得策ではない。

——第一……と、北面は、その後ろのいちこを一瞥した。

あの時仕留められなかった時点で、もう失敗だった。

カマクラの男と彼女が一緒にいる時であればカマクラとの戦闘中の「事故」であるともいえるが、こう距離を置いてしまえば明らかに自分が「故意に」いちこを傷つけたことになる。

院はいつだって、この少女を見ているのだから。

「——また、会おう」

今日の目的はもう果たせないと思った北面は、やたら戦うことは避け常套句を残してその姿をどこへともなく消した。

「逃げたか」

ちつと舌打ちをして、玄次は刀を鞘に収めた。

折角ノツてきたのになー、と最近何も「斬っていない」不斬刀を持て余すように振る。

迷い、躊躇いが少しでもあれば、刃物とは違い狙ったものを斬る

ことが出来ない。ただ鉄を「当てる」だけだ。（それでも十分武器になるが）

だがその勝負をつける一瞬を逃せば、自分が相手の「刃物」に斬られることだつてあるのだ。それが、血を浴びない代わりに使い手そのものを「斬る」と言われるこの刀の所以、カマクラが、最も案じていたことだった。

だから、自分はこの少女を斬らなかったのだ。若干の迷いがあったから。

次のカマクラをこれ以上追わないように、少女のその真っ直ぐな心を斬ろうと思った。

自分の心の奥底をひっかいた、その察しの良い視線を斬ろうと思っていた。

だがそれ以上に、それを卑怯に奪い去ろうとした奴を、自分は「斬りたい」と思ったのだった。

そんな自分にはこの少女はいつまでたっても斬れないだろう、と玄次は不本意ながら確信する。

……名前が一緒だところも甘くなってしまうのだろうか……。

妙な感傷に浸りそうになりながら玄次は未だ茫然としているいちこの前で、おーい、と手を振った。

「あ……」

はっと気がつきたいちこは、

「あ、ありがと……、げんちゃん……」

とりあえず礼を言うが、身体はかたかたと震えていた。

無理も無い。

信用していた男はカマクラの者であり、更には味方にまで斬りつけられたのであるから。

私、帰るね……とふらふらした危うい足取りでいちこは玄次と目を合わさずに、その前から立ち去っていった。

「……」

玄次は何とも言えない気持ちで、頭を掻いた。

その頃、カマクラと言えば。

この緊迫した時にまたもや、直接奉公に上がったというしがな
い大学浪人生にマッサージをさせては極楽だ……などと、呑気によだ
れをたらしていた…。

………

早く、院に会いたかった。

その腕の中で大丈夫だ、と頭を撫でて欲しかった。

北面が自分を憎んでいるのは知っていた。だけど、院が絶対に守
ってくれると信じている。

そして誰かにそれぐらい強く憎まれても、恨まれても——自分だ
って、院の傍を離れるつもりはなかった。

だけど、実際に北面の手が喉元に掛かった時のあの恐怖。

そして、あの懐いていた人が自分と争う位置にあった、という戸
惑い。

そして、院は全てを知っていたはずだ。

何故——？彼はどんな気持ちで、そんな自分を見ていたのだろう
か。

恐怖、不安。それだけ。何を、誰を、信じればよいのだろう。

早く、早く、会いたかった。

会って、自分が彼の傍に居ていいことを、確かめたかった。

会って確かめることができたら――、そうしたらいい、いい、はい、泣こう。

それまでは、泣くもんか。

きっとあの人は、私の帰りを待っていてくれる筈だから……。

その6 それぞれの想い（前編）

暗い家にゆらりと黒い影が入ってきた。それはいつもの静かな気配だった。

「おかえりい」

女はその黙したままの男を迎え入れた。いつものことだが、返事はない。

「ごはん、台の上だよ」

もちろん、返事はない。食べなきゃいつもどおり明日の自分の朝飯になるだけだ。いつもどおり、このどうしようもない男を放っておこう。女はそう思った。

だが今夜は、いつもと少し違っていた。

暗いのはいつものことだが、なんだか様子がおかしい。それはいつも彼を見ている彼女だからわかる微かな違いだった。

「どうした、イホク」

暗闇の中、部屋の壁にもたれて座り込んだ、その手の掛かる大人の男の肩を女はぼんぼんと叩いた。言葉は交わさないがこの女になれば己に触れることを許す男だったが、それでも女の方は見ようとしなかった。

—— ははあ、これは院と喧嘩したな。

女はすぐに察知した。

この男は“院”と呼ばれる闇の支配者に拾われ、その人を敬愛することで初めて生きる望みを見出した男だ。その人が自分を認めてくれ“北面”という地位につけてくれたことで、益々その人なしでは居られなくなったのだ。

つまりこのイホク——こと“北面”は、“院”がいなければ存在価値がないと言っても過言ではないほどのどうしようもない男なのだ。

そんな男の面倒を長年、毎日みてきた自分もまあお互い身寄りのない従姉弟同士とはいえ、子供の頃から支え合って生きてきた関係とはいえ——相当気の長い方だと女は思う。

彼女はぽんぽん、と今度は男の頭を軽く叩くと、それが何の意味もなさないことも知っていたが、

「まあ、餓死はするなよ。あと、風呂も入れよ」

と最低限のことだけ言い含めて、彼女自身は明日の仕事に備えて寝るべく部屋に入った。

.....

北面がいちこを快く思っていないことを、院は承知していた。

彼の方が先に自分の部下として、自分を慕ってよく働いてくれていたのだ。それを自分が——。

何年か前のあの日出会った、小さな小さな少女。

部下は居たけれど家族はいなかった孤独な自分が、初めて手の中に入れて慈しんだイノチ。それは、部下に対する気持ちとは全く違うものだった。

だからといって北面の自分を崇拝する気持ちを無碍むがひにするわけにも——しかしいちこを犠牲にしてまで、受け入れるわけにも——いかなかった。

だからといって、いちこを傷つけようとしたことは許しがたいことだった。

自分がいちこに掛けている術が彼女の身の危険を察して発動する前に、何故かカマクラの男が彼女を助けたから結果的に『何も起こらなかった』ことにはなったが。

いちこは自分が何処まで知っているのか知らないはずだ。ただ自分が何を意図していちこにこの『仕事』をさせるのか、それを少なからず不安には思っているだろう。しかし、まだ子供の彼女に全てを言おうとは思わない。

だけど、今夜帰ってきた彼女は、何も言わなかった。何があつたのか、何も言わず誰も責めず、ただ涙を落としていた。

だから自分も泣き止むまで、ずっとその細い身体を抱き締めていた。

——自分は、ひとつの罪を犯している。

既に引き返せない状況にあり、それはもう許されないことなのだ。だからもうそれは誰にも言わず、自分の胸のうちにのみ留めている。

——これから俺はどうすればいいのか。どうすればよかったのか。

ただ、今自分にできることはこの少女に危険がないよう守ることだけだ。

もう少し、もう少しだけ——。

そのだんだんと大きくなり、女らしくなってきた少女の身体を抱き、思っていた。

もう少し、彼女が大人になってこの現実を受け入れて自らで解決できるようになるまで、時間が待ってくれるよう。

この西では最強の力を誇る自分が、ただただ、そんなことを悩み祈ることしかできなかった。

——なんて自分は無力なのだろうか。

夜明け前。

眠っているいちこの部屋から出てきた院は、暗く広い屋敷の中、

薄汚い土間の方へとやってきた。主が此処へ訪れるなどまずないことだ。

下働きの者たちは、夜明けとともに朝食の支度や武器のチェック等の朝の仕事を始める。だがその者たちすらまだ誰も来ていないこの時間帯に一番早く来ていて、真つ黒になり大量の白い米を釜で炊くのが毎日の仕事である女の存在を、院は知っていた。まだ子供だった“彼女”と“彼”を、一緒に引き取ってこの院^{インノチヨウ}庁で雇ったのだから。

まだ誰も来ていないその土間は、薄暗いが夜の帳は上がり始めてきたので、人の姿は確認できる。

ふーふーと一昔前のように竹筒で火に空気を送り込んでいる、瘦せた女の後ろに院は立った。

——さすがあの一族というべきか、この女らしい動物的な勘か、気配を消して近づいたにも関わらず女は院の気配に気付き、すぐに後ろを振り向いた。

「ああ、おはようございます」

こんなところに主がいるなど、異常事態なのであるが、女は特に怯えるようもなく淡々と挨拶をした。

そしてすぐに火に向かった。だけどそれでも一応、心の中ではひつじように珍しいな——といたく驚いているわけだったが、如何せん表情に出づらい人間だったのだ。

「——こゆる」

「はい」

更に珍しく何年ぶりにこの院に名前を呼ばれたので、女はさすがに少し驚いて主を振り向かずにはいられなかった。

院はまっすぐに女を見ていた。その刺すような視線に多少の畏怖を抱きながらも、それでも何か意図があつて此処に来たのだらうと、女はそれを受け止めて己の主を見上げた。

「お前だけは、何があっても……北面の傍に、居てやってくれ」

「？……はい」

きつと言われなくても今までもそしてこれからもずっとそうするだろうが、これは「上司命令」だ。院の命令は絶対だ。女——こゆるは、素直に頷いた。

一瞬、刺すような眼差しがふつと優しく緩んだような気がした。しかしそれを確かめる術もなく、院はまた黒い着物を翻して去っていく。

なんでわざわざこんなところまで来て、そんな一部下を守れと命令するのだろうか。

昨日のイホクの様子がおかしかったのと、きつと何か関係があるんだろうなあ。

自分の従兄弟のイホク——“北面”の一番は、院だ。自分ではない。

だけど、「傍にいてやれ」——これは“院の勅命”なのだ。

「約束、したもんな。命令、だもんなあ」

あとは彼にどう思われようと、どれほど嫌がられようと、『院』の命令なのだ、仕方ない。それを守って一生傍に居ればいいだけの話だ。

ダイスキな『院』の命令だもんな。いくら『北面』だって抗えないよな。

こゆるは思わずにんまり笑って頷いた。

この先何が起こるのかこゆるには全く分からなかったが、自分を拾ってくれたこの主のことは信じていた。だからこの先何があるとも、その言葉のとおりだけにだけしていればいいんだろうと思っていた。

だから今は、眼の前のこの朝飯作りに専念することにした。

だけど今の主の言葉から、こゆるは漠然と察していた。

——院は、こっから居なくなるのかな……。

しかし、おそらく全てがわかるのは全てが発覚して何もかもが失われた後なのだろう。

今のはあの強い院が漏らしたたつたひとつの弱音——であり、これから起こることへのたつたひとつのヒントだったのだろう。

だけど、それはこの先誰も知ることはないのだろう。院は自分が何も求めず、イホクだけ無事であればそれでいい人間だと知っているから、だから自分に悟られるのをわかっていても北面のことを命じることができたのだろう。

——でも、それって……、それだけ『北面』が大事ってことじゃないのかなあ……。

何も知らずにいじけている自分の従弟に、いつかこれを教えてやるう、とこゆるは思った。

……

「あー、たまには働くかー」

西の主がこうして心を痛めている頃、心から面倒臭そうに東の主は頭を掻いて立ち上がった。

このやる気の無い当主だって、たまには仕事をする。

——御恩と奉公——。

カマクラに忠誠を誓い、この平穩の世の気を安定に保つためにも、各地のソウリヨウ共にブシダンを統括し、その地を治めるだけのエネルギーを送らねばならない。

直接謁見に訪れた者に与える場合もあるが、定期的に術式により各地に自分の力を分け与える。そうすることによって、自分の目が

各地を見張っているということを見せ付けることにもなるのだ。

どんなに面倒臭くても、のんびり生きていきたいのが第一だから乱世は望まない。だから統括するための仕事はしなくてはいけない。それが、このカマクラの考えだった。

それは、彼女にこれまた不本意ながらも仕えるこの青年も同じだった。

ようやく動くかこのぐーたら野郎……と、青年も刀を持って立ち上がった。

カマクラはふらふらと自分が控えている屋敷の中の、小さな儀式のための間に入る。そうして彼女は面倒臭そうに火を焚き水を張り札を用意し、先代から受け継いだ形式的なものを揃える。いわば、電話を掛けるのに配線やアドレス帳が必要のようなものだ。

玄次はその小部屋の前に、刀を構えてどっかりと座った。

彼の仕事は、彼女の警護だ。だからこの術を邪魔して各地の気を乱す恐れのある者を排除しなくてはいけない。

間もなく術が始まった。流れてくる香の匂いと、目に見えない大きな氣の流れで分かる。

玄次はちらりと後ろを振り向いた。中で何かあったらすぐに駆け込めるよう、いつも扉は閉じずに薄く開けてこの式を行う。だからこうすれば中の様子は、少しだけ覗けるのだった。

光の中で珍しく真面目な顔をした女の黒い髪がふわりと浮かぶ、幻想的なその姿が見えた――。

「……」

絶対にこんなこと誰にも言わなかったが、玄次はこの瞬間が、率直に言って、好きだった。

その6 それぞれの想い（後編）

玄次が初めて「それ」を見たのは十年ほど前。この女の警護を命ぜられて間もない頃のこと。

想像していた以上にどうしようもなく適当で滅茶苦茶なこの年上の女に辟易していた、まだ十代の少年だった頃――。

だからどうせ、大したことなんかできないだろうと思っていた。こんなやる気のない女の下にクニの半分以上が傘下にあるとは思えなかった。

半信半疑でこんな儀式もハツタリで、どうせロクなことなどしてないだろうと、扉が少し開いているのをいいことに警護のふりをして覗いてやった。

情けない姿が見えたら、密かに笑ってやろうとさえ思っていた。

――しかし其処に居たのは、神など信じたことなどない玄次の目にすら、『神掛かり』とはまさにこのことなのかと思わせる様な、神々しく美しい、女の姿だったのだ。

もちろん、その部屋から出てきた彼女は、さっきまでの姿が幻だったかのごとく、即刻自分に肩を揉めだの腰を揉めだの命じてきたのだ。

だけどそれから、彼はこの術式の時間がこつそりと好きになったのだった。それはこのどうしようもない奴が唯一まともに……どこるか凄いとまで思えるからだだろうか、はたまた、綺麗だ、と心のどこかで思ってしまったからなのだろうか。

そして、現在。

これだけ、綺麗なもののなのだ。さぞかし妖魔あやかしにとっても美味そうに見えるのだろう。

儀式を邪魔しようとする者は、決してカマクラの統治を乱そうとする「人間」だけでない。それに使役されたり、闇の世界に蠢いている、鬼魔物の類まで――。

女のこの眩しい力に惹かれて、火の元に入る虫の様にわらわらとやってくるのだった。

――ほら、来た。邪魔者が。

玄次は背後から迫る黒い影の気配に、眉を寄せて振り向いた。舌打ちをして、いつもの重く太い刀を取り出す。それは折角の楽しみを邪魔しやがって、というような舌打ちにも聞こえた。

『不斬刀』。

それは、何も斬らない、刃物としての役割は持たないものだったが、彼自身の魂が斬ると決めたモノは、目に見えないものであるかと斬ることが出来るものである。

雑魚であったが、邪魔だったので玄次は刀を振るった。ただ腹を減らして寄って来ただけの弱く小さなあやかしは、少し触るだけで簡単にぱしっぱしつと砕け散った。

――背後を誰かに任せられると言うのは、心から安心できるものだ。

外にいる男が自分をどう思っているかは知る由もなかったが、カマクラもカマクラでこうしてこっそりと彼を頼りに思っているのであった。

そしてまた外の男も自分がどう思われているかなど知る由もなく、本日のカマクラの仕事も、滞りなくいつもどおり無事に終わったのであった。そして、

「一神いゝ、肩揉んでくれよう、肩」

と彼がまた非情な現実を引き戻されてしまうのも、いつものことであつた……。

.....

玄次はバクフの広い廊下を歩いていた。

お、珍しい、と幾人かの役人が声を掛けてくるので、玄次は無愛想に頭を下げて廊下を進む。

彼はバクフが好きではなかった。無能な脳味噌万年小春日和の、お気楽役人ばかりが勤めているからだ。バクフに余り顔を出さないのはカマクラの警護があるのが第一だったが、カマクラにも腹が立つがバクフに居ても腹が立つからだった。

だがそんな彼だが、唯一居心地の良いと思える場所があった。

「第五政所」と書かれた、まるで小学校の特別教室のような札が横に取り付けられている横開きのドアを、玄次はガラガラと古びた音を立てて開けた。

——まったく……。何で政所……政治を司つてる筈の場所が五箇所もあるんだよ！

しかもこの第五にもなると、バクフの薄暗い北の端になってしまふ。機密文書があるからとか言われているが、こんな敵に攻められたら行き止まりになるような場所に隠すこと自体がおかしい。やはり適当な考えで設置しているに違いない。本当に仕方のないバクフ組織だ……。

しかしそんな場所であるにも関わらず、玄次は此処へ来ることは嫌ではなかった。

「お、久しぶりだな」

中に居た老人——と言つていいほどの年齢の男が、にかつと笑つて玄次を迎えた。

政所と言っても、此処は最早仕事部屋ではない。その男も己の刀から、他のブシ達の刀まで手入れをしている最中だった。

「相変わらず盛況だな―シッケン殿がいらつしやる政所とは思えねえ」

玄次はその横に座った。

「でも仕事よりいや」

この老人は高名な刀鍛冶の子孫だからか、刀の整備の腕と知識に關してはバクフーであつた。またいい刀が彼を選んで集まつてくる、という噂すらある。

「見せてみる」

このバクフ嫌いな玄次が彼のところを訪れるのは、刀の件だと決まつている。老人は歳の割には頑丈で肉厚の手を伸ばすと玄次の手から不斬刀を受け取つた。

この彼が軽々しく、己の愛刀を触らせるわけなどなかつた。そうできるのはこの刀を玄次に授けたのがこの老人であつたからだつた。「最近何も大物、斬つてねえんだよ。このままじゃサビちまうんじやねーのか？」

「阿呆。血もついてねえのに何でサビんだ！おめえの管理が悪けりや知らねえがな」

不斬刀を光に透かしたり研いだりしながら、だけど眼は真剣に大切そうに、そのバクフーの名刀を眺めていた。

「――異常なし。いつでも斬れらあ」

そしてしばらく検証したのち、老人は玄次の方へと刀を放つた。

名刀の割には刃物でないからといって、酷い扱いだ。玄次は少し慌ててそれに手を伸ばした。

「なんだ、つてえことは斬りてえものでもあつたのか？」

老人は別のナマクラ刀を手に取りながら、己の刀を鞘に仕舞う玄次の方をちらりと見て尋ねた。

「ああ」

玄次は素直に頷いた。

「ふうん」

この刀は刃物でない代わりに何でも斬れる刀だったが、それには尋常でない精神力を必要とする。なのでこの刀で斬りたいと思う時はただ他人の血を見たい時などではなく、余程のことがある時になるのだ。

だが老人の口調はその割には軽く、まるで紙でも切りたいのかと言うような口ぶりだった。

「――ま、“その時”が来れば、嫌でも斬らにやいかんくなるだろう。軽いながらも重みをもつて、濃い緑茶をずっと啜りながら老人は言った。

「――!？」

その言葉に、玄次はこの老人は「何か」を悟っているのかと、警戒した視線を走らせた。

彼は玄次の方を見るわけでもなく茶を啜っていた。

バクフには、五人のシッケンがいる。何百年も昔は一人だったその最高権力の役職も、「五人もいれば、誰かがやってくれるだろう」と平和ボケしたバクフの役人により五人に増えた――というよりは、仕事が五等分されたのだった。（よって政所も第一から第五まである。）

そうなると、その五人が勢力争いでもすれば、たちまちのうちにバクフは崩壊する。カマクラに次ぐ政務執行者のその五人の中で争いが起こらないように、常にカマクラは目を配り五人の恩賞には何があっても差異をつくってはならなかった。

結果、益々仕事をしないという悪循環に陥ったが、あまりに目に余れば降格することもあるので全く仕事をしないわけでもない。こうしてバクフは、今日も平和だった。それはそれで均衡がとれているのだろう。

シッケンの五名は、新しいカマクラ就任と同時に新しく任命される。途中の交代もありうるが、カマクラが変わる時は必ず新しいシ

ツケンに任命した。

ただし、一つ例外があった。それは当代のカマクラに仕える五名のシッケンの内一名を、必ず次期カマクラの五人のシッケンの中に加え残留させる事だった。

そうすることでどうしようもないバクフの最高権力集団でも、さすがに二期もやれば頼りになるだろうという考えだった。即ち一人のシッケンだけは二期連続で、そのシッケン職に就くことになるのである。

そして先代から続くシッケンが、この老人・ホウジヨウ氏なのであった。

先代の頃から、今のカマクラが今の玄次くらいの歳の時から、ずっとずっと此処に居た男。

先代のカマクラが変わる時も、この男が暗躍し世が——このクニの気が乱れることないよう収めたに違いない男。まだ少年だった自分が此処に来てから、いろんなことを教えてくれ鍛え上げてくれた男——。

今では歳のため第一線から身を引きこのような場末の部署に引きこもっているが、間違いなくこの男ならば今のこのクニの情勢を見極めているはずだった。

だからこそ彼は自分たちの密かな動き——カマクラの戯れと、京の何を目的として居るかわからない、言い換えれば同じく戯れのよきな動き——に、それでもそれがこのバクフやクニを揺るがすものには変わらないものとして察しよく気付いているような気がした。

「なあ、玄坊」

シッケンの男は、そこでふと真面目な声になりそれこそまるで不斬刀のような、骨を絶つ鋭さを内に隠した目で玄次を見据えた。

「もしいつか、今のカマクラ殿が引退なされて、次のカマクラ殿に引き継がれることになったら……オメーはその後、どうするんだ？」

「……」

それは、いつかは必ずある話。ただの仮定だ。

だけど今、それはカマクラの思いつきだけでなく京の陰謀も絡んで現実に進んでいる話でもあり――やはりこの老人は何かを感じているのだろぅ、と思った玄次はその目を見返した。

だが見返した先のその目は、存外優しい光だった。

「……そんなコト、考えたコトもねーよ」

なので玄次は目を逸らしながら、正直に答えた。彼の問いの目的は、どうやら自分たちの動きを探り出すことではないようだ。

警戒する必要もなくなった玄次は、思わず真剣にその質問について考えてみた。

――確かに。自分は今のカマクラの護衛として雇われた身だ。

いやそれ以前に、今のカマクラに対し、一生分の“御恩”を先に受けてしまったからこそ無条件で“奉公”している身分なのだ。

だから今のカマクラが此処に居なければ、自分がこのバクフに存在する理由など、何一つないのだ。

――ってーとオレ、無職になるワケか。

それがシュミレーションでできなかったわけではない。無職になることがわかっていて、それでもカマクラの望みに応じたのだ。それは“奉公”だからなのか――それよりも逆に、この“奉公”から解放されたいから、が正しいだろうか。

そしてそれは権力を手放す彼女だって同じことだった。

そして“そこ”から解放されることを望むこの二人は、その先のことなど生きていければそれでよく特に何も考えてはいなかった。就職情報誌をたまにペラペラと捲るくらいだった。

そんな玄次に彼は言った。

「なあ、お前……」

「ん？」

「——シツケン、には興味ねーか？」

「あ？」

自分を見た老人は笑っていたが、その眼差は真剣だった。

——この身分の低い、誰から生まれたかもわからない、オレが??

この老人はこれでシツケンを終える。信用できる男に、次のバクフを任せたいと思ったのだらう。それが、自分だと——？

自分が誰かに信用されること、必要とされること。それを自分が信用し、尊敬している人間にそう言われたのだ。それが嬉しくなかったといえば、嘘になる。

玄次はそんな気持ちを噛み締めて、ふっと笑った。

「気持ちはあるけど……オレは元々、バクフにもクニにも興味なかった、ただあのヤローに先に“御恩”を受けちまったから、“奉公”するために此処に來ただけだ」

奉公に対する御恩、それに対する奉公——それはこのクニを支える目に見えない力の元であるから、誰であれ抗えるものではなかった。だから、自分は此処に來た。

アイツが居たから、此処に居る——。

「だからアイツが居なくなるなら、オレが此処に居る理由もなくなるんだ」

玄次は迷いなく言い切った。

それはこの男が、最初に此処へ來た時からはっきりと決められていた意志だった。

権力にも地位にも治世にも興味がなく、たったひとつの御恩と奉公のためだけに存在している。だからそれは、誰かそれを望む者に譲ればいいと思っていた。

その頑固な瞳を見たシツケン・ハウジヨウ氏は、そうか、と少し残念そうに、だが少し笑ってため息をついた。そしてややあって、

今度はまるで断られた仕返しのように、にやりと冗談めいた笑いを浮かべて言った。

「それじゃ、カマクラ殿のことはどうするんだ？」

「はあ？」

「ココ、辞めた後」

「……」

玄次は突然の質問に、目を点にしてその言葉の意味を考えてしまった。

——此処を辞めて、自由な生活をしたいと言っていたあの女。

御恩と奉公の約束があったから、今まで一緒に居たあの女。いや、そのような約束よりもずっと前から、一緒に居たことのある2人だった。

此処を辞めたら、確かにその腐れ縁も終わるだろう。

そう、終わる……筈なのに、それこそその先のことなど、一度も考えたことがなかったのだった。

「知らねーよ。それこそ……アイツのことだ、適当に生きていくだろう」

ふうんと腑に落ちないような表情で老人が自分を見るので、この話はこれで終わりだとばかりに玄次は立ち上がった。

「まあどうなるうとも、後悔だけはするなよ」

ホウジヨウ氏がその背中に向けて言った。

ああ、と玄次は頷いて、刀の礼を言々と部屋を出て行った。

——もう二度と後悔など、したくない。

あんな後悔は、あんな辛い気持ちは、「あの時」だけで、十分だ。

カマクラの時代が、動く。

何かに気付いているシッケンに、唯一信じている男に突然初めて尋ねられた、考えたこともなかったその後のことの問い。

その答えが出ないまま、その質問が引つ掛かったまま、だけどいつか訪れるその答えを出す日までに、それより前に訪れるこの刀を振るう日までに、己の迷いが、断ち切れているように――。

その7 幸せの定義（前編）

「ああ、平和だ……」

季節はいつの間にか冬になったけれど、小春日和のぽかぽかと暖かい日。室内に至っては日向などは春のように暖かく気持ちがいいものであった。

東の主、カマクラはまるでシャクトリ虫のごとくずるずると日向の方向へ這って行く。

このカマクラの住まう邸宅は他からの一切の侵入を許さぬよう、四方を厚い壁で被っている造りであったが、何年か前に今のカマクラがこうも寒くては敵わないと南側の壁を半分ぶち抜き大きな強化ガラスによる窓を強引に設置させた。

その甲斐あって、今日のような晴れた日はその雨戸を開いておけば暖房費も節約できるほど部屋の中が暖かくなったのであった。

まるで走光性の昆虫の如く日向を求めて這いずった東の主は、その明るい光の中へたどり着くと、べたーっと両手足を伸ばしてその陽光を享受する。

「あつたかゝい。しゃゝわせ」

まるで涎でも垂らしそうなほどだらしない顔をして、太陽エネルギーのありがたさを目いっぱい感じているカマクラその人であったが――。

「何が平和だ。ホントに呑気だな、テメーはっ」

その床を荒々しく踏み鳴らして、彼女の護衛であり側近である青年が平和な空間に乱入してきた。

「はあゝ？」

しかしカマクラは今にも蕩けて眠ってしまいそうな具合であったがため、部下の厭味もなんのその、ろくに言語も解さない状態であ

った。

「ビゼン、オウミ——その前にはアキ」

どかつと乱暴に——とは言いつつも彼もまた外の冬の寒さに、陽だまりを求めるのであろう、玄次はカマクラの横に胡座をかくとぼそりと呟いた。

「なにが？」

カマクラはまだ半分夢の世界の住人だ。

「急激に“力”を落とした地方だよ」

どこまでも呑気なこの主に冷水でもかけてやりたいような気分になりながら、それでも玄次は用件だけは伝える。

「しかもどこも、一見力が落ちたように見せている京を狙っていたという噂がある」

「そのブシダンのはろびたの？」

ごろんと寝返りをうち、長い己の髪に巻きつかれながらカマクラは尋ねた。

「いや、壊滅というわけではない。どこも屈指の狸ジジイがいた地方なんだが、ヤられたのはそのソウリョウだけだ。でもトップである野心家がいなければ、勢力を削がれることは確かだろう。それまではその地方では有力なブシダンだったんだけどな」

「にやるほど。京を、ねえ……」

カマクラは天井をじいつと見つめた。古い染みが人の顔のようだった。

「カマクラを狙ってるブシダンはいねえの？」

カマクラは上目遣いで、反対向きから玄次を見上げた。

——あ？もしかして、俺らに恐れをなして誰も手を出さないとか？などと、カマクラがにししと笑いかけた時、

「それを防ぐのはオレらの仕事だろ」

カマクラの愚問と妄想に呆れ、しかし自分の言葉どおりに防げるわけもないあの呑気なバクフを思い出しながら玄次は二重にため息を

ついた。

「なるほど」

それを聞いたカマクラはぱっちりと眼を開くと玄次の膝に手をつき重い身体を起こしかけながら、途中の姿勢でそのまま彼の膝に頬杖をつく、今度こそその顔を見て核心に触れた。

「そんじゃ、それは京の仕業ってワケか」

ようやく話に乗ってきたかと、それまでの長い時間を思い玄次は言葉もなく、むすつと頷いた。

「まあ元々このクニが平穩になることを願って、奴さん——院は闇に隠れたんだろ？でも俺たちに独裁はさせない、京が危なくなれば打って出る。それだけはするつもりだろうが」

言いながらカマクラは起き上がると、陽だまりの中でうつろと背伸びをした。実に暖かい日差しだった。

「だから今回のことも当然と言えば当然だけどさ、」

ああ、お茶が飲みたいなあ、一神入れてくれないかなあと思いつながら、カマクラは言葉を続けた。

「ちよいと急と言えば急だな」

玄次は再び、仏頂面で無言のまま頷いた。

「人殺しはしないで、ソウリョウの毒気を抜くようなやり方はこちらの十八番でもあるけど、」

カマクラはそこで玄次の腕にある不斬刀をちらりと見た。人を殺さずとも、その野心だけを打ち砕くことのできる最強の剣。

「でもこんな短期間に大量に消してしまうなんて焦ったことしなかったってな」

言いかけてカマクラはふと思いだった。

「——ああ……、それで、繋がった」

カマクラの言葉に玄次は三度頷くことで答えた。

それは事が起こって少ししてから玄次より報告されたことだった——京の奇妙な動きのことを。京の内部での、妙な争いを——。

つまり全ては、その、北面の者の仕業か……。

「どうやら功を焦つてのものだろ」

そこで玄次は、言葉とともにふうと息を抜くと後ろの壁に頭をこつと当て、身体のを抜いて凭れかかった。

「あの連中、もー何がしてえんだか、ワケわかんねーな」

乱世は望まない。だがカマクラにしてやられる気もない。次のカマクラを探している。幼い少女ひとりに探させている。それを快く思わない腹心がいる——。

一体それぞれに、何が目的なのか。

——まあ、とりあえず全てはあの男が元凶だろうけどな。

と、一度だけ邂逅した西の主の鋭い目線と重々しい雰囲気思い出して、玄次は結論付けた。

そもそも首謀者であるあの男の目的がよくわからない。どう出ればいいのかもわからない。

だけどころはカマクラ世代交代のため、新しいカマクラを探して動いている。京にカマクラを奪われ、こちらの支配力をそがれるわけにもいかない。

天に二日なしと云えども、独裁もまた不協和音を生み出すことは明白だからだ。

こんな陽だまりの中、いつまでものんびり平和に暮らしたい。それが二人の願いだった。だが運命に逆らって望んでしまったあの日——今の願いが叶わないことが、その時の望みの末路といえばそれまでであるのだが……。

「どーした？」

自分が考え込むのはいつものことだが、珍しくいつまでも黙って、

何かを考えているようなカマクラを玄次はふと見下ろした。

「いや、べつに……」

口に手を当てたカマクラをしばらく見ていた玄次だったが、まあいいかというようにこのうらかな光に自分も大きな欠伸をした。

.....

その男が帰ってくるたびに、血生臭い臭いがする。それは錯覚の時もあったが、誰かの血を浴びている日もあったかもしれない。

いくさは、もう起こってほしくない。燃える炎の中で、傷ついた彼を胸に抱いてどうすることもできなかったあの日をもう繰り返したくない。

いくさで屋敷を焼かれ一族を滅ぼされ親を亡くしたあの日、院が拾ってくれた。だから生き延びられた。だからこそ、二人ですっと院に尽くしてきた。

血の臭いをわしは知っている。あの男は幼い時から刃物のような男だった。大人になって力を得た今、その刃物が肉を切り裂きだした。

ずつとずつと見てきたけれど、わしはそれをどうすることもできない。

ただ元気に暮らして欲しいから、餓死しないようにメシだけは作ってやれるけれど、この刃物はわしには決して向けられることはないが、わしにその刃物を折ることはできない。

奴を止められるのは院しかない。

だけど院は、おそらくあいつを見ていない。何か違うものを、一番大切に思っている。

それにあいつが耐えられなくなった時、あいつの体の血の臭いは一層濃くなった。

いつかそれは奴自身の血になるだろう。わしはそう察した。

——だから。

もう何日口もきいていないか。それは珍しいことではなく、用意した食事を摂取するかしないかが会話の代わりであったのだが。

手をつけられていない食事。暗い部屋の中、彼が閉じこもっている部屋の扉にこゆるはそつと掌を当て額をつけた。中の男に届くように、そつと呼びかけた。

「——イホク。わし、ちよつと出かけてくるから」

——わしがコイツにしてやれることは、ただひとつ。

部屋の中からは何の返事もなかった。それも当然のこととして、こゆるは暗い部屋を後にした。

……しばらくしてからボタン、とその部屋の扉が開き、髪の高い男が姿を現した。

「こゆる……？」

低く搾り出すように、久方ぶりにその名を呼んだ。

なのに、返答はどこからもなかった。

いつも必ずその気配がどこかにあるのに、今はどこからも感じられなかった。

机の上には、握り飯が置いてあった。冷凍庫に数日分のおかずが作り置かれていることと、簡単なおかずの作り方のメモが置いてあった。

重い拳が机の上に置かれ、鈍い音が闇にくぐもった。

.....

それはほんの思い付きだった。

肉まんが食べたくて、外は冬の割には比較的暖かくて、無能無能と言われているけれど京にも不穏な動きがあることだし、たまには新しいカマクラの手がかりなどを自分で探してみれば、一神も少しは喜ぶかもしれないし。

そんな、ふとしたカマクラの戯れであった。

東の主が勝手に独りで外に出て、後で彼からの大目玉は免れられないけれど――若い内はそれがまた楽しくて、わざと外に出た事もよくあったものだが――何はともあれ、今日はそういった理由でカマクラは久しぶりに娑婆の空気を吸いに出たのだった。

このあたりにカマクラがいそうだ、と思われる地域のコンビニで肉まんを買い、もふもふと食べながら公園を歩いていると、枯葉舞う冬の午後の晴れた公園に少女が独り佇んでいた。

「――」

カマクラが立ち止まると、少女もこちらを振り向いた。
目が合う。

――邂逅――。

セーラー服の少女。中学生女子。
身を守るその見えない力。
玄次から聞いていた情報。

――コイツは……！

カマクラが彼女の正体に気付き、あえて、

「学校はいいのか、不良中学生」

と、とおりすがりの近所のオバサン風に言った瞬間――、

「カマクラ様！??」

少女は嬉しそうに笑って叫んだのだった。

——やっぱり。

愕然としたカマクラは顔に手を当てて俯き、その場から逃げ出そうかと思った。しかし少女は嬉しそうにカマクラに駆け寄ってきたのだった。

「私、カマクラ様のファンなんです！お会いできて光栄ですっ！」

ちなみに学校は三者面談期間中です！とにこにこして、カマクラの前で両手を組み合わせる少女をカマクラは迷惑そうに見やった。

「カマクラあ？　なんでそー思うんだよ」

必要以上に取り繕うのは好きではないので特に隠し立てはしないが、不用意に正体をバラす気もない。

「え、だって新聞にお顔載ってたし……」

昔お忍びで町を歩き、玄次に怒られたことをカマクラは思い出す。
「それに……」

「『院から不思議な力を授けられているからわかる』——んだろ」
少女——いちこはその言葉にはっと顔を上げた。

さすがだ、と思う反面、やばい、と少女は思った。

ここで自分がカマクラに捕まってしまったら、院に迷惑が掛かってしまう。いちこは警戒するように一歩後ろに下がった。

しかし彼女をじいっと見つめるカマクラは、やがてふっと笑った。その敵意のない笑い方に、いちこは驚きながらも僅かに安堵した。

「でもつでもっ！　カマクラ様に会いたかったのはお仕事が理由だけじゃなかったんです！」

この人ならばわかってくれるとでも言うように、必死で訴えかけ始めるいちこをカマクラは黙って見た。

「ウチの父ちゃんはどうしようもないひとで、賭け事大好きで、母ちゃんが死んじゃった後は本当にお金もなにもなくなっちゃって、それで困っちゃって最後にカマクラ様に奉公に上がったんです」

いちこの言葉に、そんな理由でバクフにたどり着くのか？と、御恩と奉公のシステムはこのクニを守ること意外の理由では中々成立しないことから（時にくだらない理由がそれになるのだが）、カマクラはそんな男来たっけなーと記憶の糸を手繰るのだった。

「どこで父ちゃんがカマクラ様のことを知ったのかはわかりませんが、それでもあそこに行つて奉公すればきっと私は幸せになれるつてすごい嬉しそうに出かけていつて、それであのだらしのない父ちゃんが約束どおりカマクラまでたどり着いて、ちゃんと働いてたみたいでお手紙が一度届いて――、でもその少し後に、お酒の飲みすぎが祟つて父ちゃんは死んじゃったんだけど……。でもあの父ちゃんが死ぬまで仕えたかった、そんなカマクラ様がどんな方が一度お会いしてみたくて。それに、私が生きてるのはそこで父ちゃんが私が幸せになるように御恩を受けたからだつてそう思つてるから、だからありがとう、つて一言お伝えしたくて……」

いちこは興奮のあまりまくし立てた。

じつと黙つて聞いていたカマクラだったが、そこで静かに問い掛けた。

「――お前の、名は……」

「いちこ……です」

――ああ、成程……。

その言葉を聞いた瞬間、カマクラは完全に記憶を掘り出した。

――あの男か。娘の名と同じ名だと、だつたら同じ名前のアンタのためにしっかりと働きたいと殊勝なことを言つていた男。

どうしてそれがクニの為になるのか、その時はわからなかったけれど――それでもその男に御恩を与えた。来た時からその男の死期は、カマクラには解つていた。だからこそその分までも、その娘が無事に生きていけるようにと『力』を与えた。

「カマクラ様、父がお世話になりそして私を助けてくださって本当にありがとうございます」

いちこはそこで頭を下げたのだが――、

「――やめろっ！」

自分でもびっくりするほどの荒い声があがり、いちこもカマクラ自身も驚いて一瞬黙ってしまった。

「俺は、そんなにいい人間じゃないよ……」

だがすぐにカマクラは、お礼に対してそんな態度をとってしまったことを取り繕うかのようにぎこちなく笑った。

――消えていいイノチはないだろう？だから「生き延びたことが幸せだったかどうかなんてわからないじゃないか」なんてことは、絶対に言うてはならなかった。

この自分がこの少女を生かした。実際に自分が何かをしたのではなく、彼女が死なないようにとだけ“力”で術をかけたただだった。それが、“裏目”に出たというのか？

「お前……、『私が生きてるのは』って……死にかけたことあるのか？」

抑えたようなカマクラの声に、いちこは素直に答えた。

「はい、父ちゃんが死んですぐに……寒い冬の時に病気になって、お医者に行こうとしたら雪の中に倒れちゃって――。そしたら、それを……院が助けてくれたんです」

京の話になってしまったので、いちこは言いくそうに呟いた。

「だから本当は、私はカマクラ様に奉公しなくてはいけないのかもしれないけれど……、でも父ちゃんがいなくなっちゃって、ひとりで死んじゃうかもしれないってすごい淋しかった時に院が助けてくれたから――だから私は折角ご恩をくださり命を助けてくださったカマクラ様には申し訳ないんですが、……っ」

そこでカマクラの手がすつと差し出されたので、いちこはびくと身を竦めた。

だがその白い手はぽん、といちこの頭の上に置かれた。

「——そう思っただったら、お前の好きにすればいい。実際にお前を救ったのは、京の院なんだろう？」

その笑顔が何故だかとても切なそうだったので、いちこはどきりとした。

そしてカマクラは不意に踵を返した。

「私のこと、捕らえないんですか??」

いちこは思わずその背中に向けて叫んだ。

「嫌でもそのうちまた会うことになるだろ」

後ろ手を振りながら、カマクラは告げた。

懂れていた東の主の掴み所のない姿に、いちこは茫然と佇んでいた。

その7 幸せの定義（後編）

——あの男がカマクラに來た時から、もう全ては始まっていたのか……。

あの男といちこ。いちこと院。そして——。

ただ、誰かが誰かを想っているだけ。ただそれだけなのに。

京の間で何が起こっているのか、そして「京の真の目的」すらも思い知らされてしまったな……。

その突然与えられてしまった情報量の膨大さに瞬時の判断がつかなくなり、カマクラは彼女を捕らえることができなかったのだった。

冬は日暮れが早い。夕方でももう暗闇に包まれる。

玄次がバクフの奥にある屋敷に戻ってくるといつもなら灯火が揺れているというのに、今宵の屋敷は何故か不気味に静かで真っ暗だった。

——まさか！

主の身に何か——と、玄次が慌てて室内に入ると、その主は真っ暗な部屋の中に茫然と座り込んでいた。

「わっ！ 居たのかよ。何やってんだ、灯りもつけないで」

玄次が部屋の四隅に火を灯すと、ぼうつとカマクラの姿が浮かび上がった。

「おかえり……」

呟いた彼女は、虚ろな目でほろほろと涙を零していた。

「おい！？ どーしたんだよ！」

さすがの玄次も焦ってその細い肩を掴んで自分の方へと向ける。玄次のあまりの焦りように、逆にカマクラの方が驚いた。

「どうしたって、どうしたんだよ？」

「フツ―真っ暗な部屋の中で泣いてりゃ、誰だって心配すんだろーがっ！」

そう言われてカマクラが頬に手をやると、確かに水滴が掌に感じられた。

「俺、泣いてたのか……」

涙など随分流した事がなかったので、逆に感心したように呟いた。なおも玄次が問い詰めようとした時、カマクラは玄次の着物の裾を掴むとぽつりと呟いた。

「……一神……」

その声はいつもの自信たっぷりの声とまるで違った、今にも消え入りそうな細い声だった。

「もう少ししたら、言うからさ。その時はきちんと話すから、——だから……、」

今はただ、混乱するばかりでどうしたらいいのかわからない……。

カマクラは玄次の着物を両手でぎゅっと握ると、彼の肩のあたりに押し付けるように額をぶつけた。

「——」

何も話そうとしない上司に、わかるわけないだろうと思いつつも、それでも珍しく吐き出された弱音に彼女を守ることが自分の仕事だから、と玄次は冷え切ったその細い身体にそっと腕を回すと、ため息をつきながらも反対の手でその頭をぽんぽんと軽く、優しく叩いた。

……

その次の日のことであつた。

玄次が庭でざかざかと掃き掃除をしていると、枯葉の中に大きな

物体——いや、死体！？が混ざっていることに気がついた。それは行き倒れた若い女のようにであった。

「おいっ！　しっかりしろーっ！！」

……食べ物をつみ砕く音、皿が次々に机に置かれていく音が、無言の部屋に響く。

執念で此処まで辿り着き倒れたのはついさっきのことらしく、温かい風呂と食べ物を与えたところその女はすぐに元気を取り戻した。「ありがとうございました！　……って、既にこれで“御恩”終わっちゃいましたか……？」

「——やっぱり御恩と奉公の関係か」

弱音を吐いたのは昨日だけで、すっかりと元の調子を取り戻したカマクラは胡座をかいた姿勢で前に傳くその女に扇子を向けた。

「はい、そーです」

突然現れたこの行き倒れの女。身分もそれほど高そうでなく、ぼーとした昼行灯のような雰囲気ではあったが、なにやら胡散臭いと玄次はその女を背後から睨みつけていた。

それでも、何かこのクニの為になるからこの女は此処へ辿り着いたのだらう。自分たちにすら感じられないほどの、何か特殊な術を使って忍び込んできたのなら話は別だが――。

玄次の鋭い視線に気付きもしないのか、女は「それで、何してほしーの？」と言うカマクラの問いに淡々と答えた。

「はい。実は、ある男を救ってほしいんです」

「病気か？」

「違います。心以外は健康です」

その言い回しに思わずカマクラは吹いてしまったが、女は大真面目だった。

「横恋慕をしているのです。だけどそれはもう叶わない」

そう、院はいつかきつとそう遠くないうちに、自分たちを置いて

消えてしまつたらう」。

「奴が心持を変えない限り、奴はこのままでは幸せになれない。だけれど誰も奴を変えることができない。このままでは苦しみぬいた後、ヤツはきつと誰かを手にかけ、そして殺されるか自害するだろう……。わしはヤツにそんな風に苦しんでほしくない。たとい、それが因果であつたとしても」

最後は俯いてぼつりと言つた。わしがそれを食い止められるならばどんなにいいか、という言葉は飲み込んだ。言つても仕方ないからだ。

「生きて幸せになつてほしい、か……」

カマクラは昨日のことを思い出し、頭をぼりぼりと掻いた。いちこの親父も同じことを言つていた。

「そうは言つても、ソイツにとつて何が幸せかなんて、そんなの誰にもわかんねーだろ」

カマクラはまるで自分に言い聞かせるかのように、一言一言をゆつくりと言つた。

「……」

女——こゆるは唇を噛んだ。確かにそうなのだ。こんなことをしたつて、ヤツは喜びはしない。

だけどそれでも、いつかもう一度、笑つてほしいから——。

「まあそれでも俺自身が死とゆうものにロマンを感じてねーし、それが至上だとは思つてないから死しか残されないような状況を避けることに、同感はあるけどさ」

こゆるはカマクラの言葉にくくと頷くと、再び口を開いた。

「でも確かに、生きている方が苦しいかもしれない。それでもヤツが『あの方』に出会えたように、生きていればこれから先また何か変わるかもしれない。何が幸せかはわからないけれど、やっぱり誰かを殺しても死んでもほしくない。そう思つのはわしのエゴだろうか、それでも」

自分と一緒に居てくれなくてもいい。それでも――。それとも、愛しい人が生きることを望むこと自体、エゴイストなのだろうか？

カマクラもぼんやりと昨日の一件を思い出していた。

そう、現にいちこを生かした事によって彼女がこの先、それを後悔してしまう時がくるのだろうか。そしてそれは本当にあの男の望んでいた幸せだったのだろうか？

「……それでも、イノチは大切にしなければねーよ」

結局最後に辿り付いたカマクラの言葉に、こゆるは大きく頷いた。「で、その分何を奉公してくれるワケ？」

結論が出たところで、話を変えてにつこりと嬉しそうに笑うカマクラの問い掛けに、こゆるは自信満々に答えた。

「はいっ！ わしは飯炊き女なので、料理が得意です」

「ほー仕事でか？」

「はいっ！ 京の院庁で給仕インノチヨウをして、早や十七年になりますっ！！」

その瞬間、玄次は刀を構え、単純な誘導に引っ掛かってしまったこゆるはしまったと口を塞いだ。

そしてカマクラと言えば、

「――やっぱりな」

とにたりと笑った。

瞬間、立ち上がろうとした玄次に対し、

「止める、一神！」

それを即座に予測して、彼が立ち上がるのと同時にカマクラは制した。

玄次はじろりと主をにらみつけたが、彼女もまた負けじと玄次に笑顔を送ったため、青年は渋々と再びその座に着いた。

カマクラがそう思ったのは、この女からは昨日のいちこと同じ“匂い”がしたからだった。いちこを守っていた力とは比べ物になら

ないほど微かなものであったが、確かにそれとよく似た残滓を感じた。

また此処へ奉公するということはこのクニを治めることに関係のある可能性が極めて高く――、そうすれば最近のことから、この者は少なからず京に関係しているのではないかとうすうす感じていたのだった。

カマクラは静かに問い掛けた。

「救いたいのは誰だ？ 主か」

「違います」

こゆるは己の愚かさに打ち震えたが、即座に覚悟を決めた。

皮肉にもあの男は主の一番ではない。だから己の望みは、このクニの政権争いには全く関係のないことなのだ。

「――わしの、従弟です」

先ほどの「横恋慕」という言葉に、玄次はピンと来た。

そうか、コイツ北面の――。

しかしこゆるはそれ以上何も答えなかった。ここで殺されようとも、大事な者たちを守る為に一言も京のことは話すものかと思ったのだった。

「そうか」

しかし、カマクラはそこでそつとこゆるの手をとった。

「そんなじゃメシは毒盛られたらかなわんから、別の奉公をしてもらうとして――」

「――！」

顔を上げたこゆるの見た、その穏やかな笑顔に彼女だけでなく玄次までもが驚いた。しかし何か考えあつての上司の判断に玄次も口は出せず、成り行きを見守っていた。

こゆるの瘦せた手を少しの間無言で握っていたカマクラ。何かの力が注がれていくのを、こゆるは感じた。

「お前は、そいつのためなら命も懸けられるか？」

こゆるは一瞬の迷いもなくこくりと頷いた。

「ならば、こうしよう」

カマクラは薄く笑うとこゆるの手を離し、ずいっと一歩前に膝を乗り出した。

「—— たった今、お前の命とそいつの命をひとつにした。そいつが死ねば、お前も死ぬ、という按配だ。逆にお前が死んでもソイツは死ぬ」

「え……？」

何……？と、玄次も思わず眼を見開いた。

「それを、そいつに伝える。そーすりや、向こうも犬死はしねえだろーし、互いに苦しむ姿を見なくてすむだろ」

「……はい……」

こゆるが己の願いの代償に、震えながらも大人しく頷いているというのに、愕然としてしまったのは玄次の方だった。そんなことをするカマクラも、それを承諾した女も信じられない思いで見比べていた。

ありがとうございました、では何をご奉公——と言ったこゆるを、カマクラは手招きした。

「今から言うことを、院に伝えてくれれば、それでいい」

カマクラはにんまりと笑うと、こゆるの耳元に何事か耳打ちした。

「何なんだよ、今のはっ！」

御恩も奉公の内容も—— 最も後者は玄次の耳に入らなかったことも苛立たしく、上司のやり方に納得のいかない玄次は舌打ちした。

「京の奴だつてのに見逃すは、心中勧めるは！」

しかも院の一の部下、北面の身内だというのに、だ。また場合によつては北面自身の身の安全も——つまり彼女の生命も同時に保障できないというのに。

「だから大丈夫だって」

「何がだよ！」

「だって俺、何もしてねーもん」

「……は……？」

「だから、何も術なんかかけてねーってこと」

玄次は飄々と言うカマクラを、きょとんと見つめてしまった。

「自分が死ぬか、誰かを殺すか、もーどうしよもねえ状況なんだろう？ ソイツは。だったらもう、こうすることぐらいしかできねえじゃないか。てか、どうしたところで同じだろう？ 実際どっちかが死ぬ以外では確かめられねえことだし、若干でも肉親の情が残ってりや、野郎も下手な無茶はしないだろ」

親を失ったその日からずっと二人で生きてきたのだから。

でももしかしたら本当は、それだけでもうそいつは救われているのではないだろうか？

「まー、御恩を約束した以上はこっちもソイツに手出ししにくい部分はあるが、このクニが戦にならん限りは殺す予定もねーし……まあ、それでもヤツに何か事故でもあつたら仕方ねーけどさ。そんな後は後追い自殺すんのか、逆に言葉どおり暗示にかかって死んじまうのか、強く生き延びるか——あの女が決めればいいことだろ」

「……てめえって奴はよ……」

玄次は呻くような声で呟いた。こんなことを淡々と言っているこの女は、十何年前とまるで変わっていない小憎らしいもので、昨日の殊勝な泣き顔がまるで嘘のようだった。

「まあ、これでどのみち——そろそろ何かが動き出すだろ」

覚悟しておけよ、とカマクラは不敵に笑うと玄次の肩をぽんと叩いた。

.....

主の部屋に行くのは、自分などは容易ではなかった。しかし部下一人一人を把握している院は、こゆるは幼い頃に自分が拾ってきた縁もあり願いを聞き快く部屋に迎え入れたのであった。

しかしこゆるの言葉を聞いた瞬間、院の表情は強張ったのだった。

「——カマクラ殿よりの伝言です」

「なに……？」

「『いちこに遭った』、と伝えるように、と——」

院が息を飲んだことがこゆるにも聞こえてきた。

それがどういふことなのか、こゆるにはわからない。しかし覚悟はしていた。院という主がありながら、また北面を守ることは主の命でもあったものの、それでも一時でも別の人間に奉公を誓ったのだ。

「わし……いえ、ワタクシは己の望みためにカマクラへと出向き、御恩を受けてしまいました。かくなるうえは如何なる処罰もお受けいたします。ただ、こちらのことについては何一つ申しておりません。イホク——北面への処罰だけは、どうか、どうかご容赦願います！」

こゆるは床に穴が開くかというほど、激しく土下座した。

己一人の力では、北面を守ることはもうどうにもできなかった。御恩を受けに行ったことも北面の立場を悪くしないために、卑怯にも黙っていようと思っていた。しかしカマクラと約束した“奉公”を果たすと言うことは、全てをこの主に話さなくてはいけなかったのだ。

だがしかし院はこゆるを叱ることなどなく、静かに告げた。

「もついい、下がれ……」

「お咎めは……」

「お前がカマクラに御恩を受けたのは、『イホク』のことだろう？
京は関係ないことならば、処罰の対象ではない。お前が此処に顔向けできたということは、京に対し裏切りをしたわけではないからということも解っている——だから、」

——もう、下がれ……！

こゆるは主にあんな顔をさせるならば、自分の行動はやはり間違っていたのだろうかと悩みながら、その場を後にした。

院にとっては、正直北面とこゆるの問題などこの事に比べればどうでもよいことだった。

——それよりも、あの二人が遂に出会ってしまった事。

カマクラは、どうする気だ——？

「どっちにしろ、何かが動き出す……」

祈るように、嘆くように、院は背もたれに深く凭れて暗い天井を虚ろな目で仰いだ。

その8 回天！1（前編）

きっかけはきつと、あの雪の日——、西に住むひとりの男と少女の出会いにあったのだろうか。

いやそれとも、それよりも前。少女の親が東に住むひとりの女に会いに行ったことによるのだろうか。

もういつからがはじまりだったのかもわからない。それは運命だったのか。こうすべくしてなったことだったのか。

どちらにしろ「その日」から、次の東の主を巡っての運命は動き始めていたのだった。

そして——男の、少女の、支配者の、部下の、東の、西の、それぞれの想いを乗せて、少しずつ動いていた歯車が、今大きく回転する——。

.....

今から五、六年ほど前の、今日のような寒い冬の夜のことだった。雪が降っていた。

白い雪の中に、白い魂が、ほの温かい今にも消えそうな哀しい色の魂が見えた。見逃しそうなそれを、彼は見つけた。

彼はその光を探していた。否、見つけたら消してしまうべき立場であった。だからこそその消えそうな光の気配を頼りに、彼は此処へやってきたのであった。

なのにその光は、彼が今まで描いてきた予想とは随分違っていた。それは自分が消されてしまいそうな眩いほどの光に違いない、だから消される前に消してしまおうと思っていたが——今、現実眼の前にあるそれは、誰かが守ってやらなければ消えてしまいそうな

ほど、儂く美しい光であつた。

——嗚呼、それはきつとほんの気まぐれで。

彼はそつとそれを、拾い上げる。

弱弱しい小さな力が己に触れた。己の服を小さな掌がぎゅつと握り締めた。

それは意識が朦朧とした上の行動で、自分を求めたからではなかった。

それなのに、自分を求められたように何故か錯覚して、

——自分がいなければこの子は死んでしまう。自分が今、この子を守らなければ——。

とうに死の覚悟を決め、幼いながらも静かにその時を待っていたはずのその子供が、最期の時に自分に縋りついた。

この孤独な自分に手を伸ばした。

「その色」の魂だから連れて帰るのだ、自分の手元に置いておくのだ。他には何の理由もないと、軽い身体を抱き上げ道の雪を踏み鳴らしながら、彼は思っていた。

だが救いなど、それを手放さないよう何よりも守りたいと思うことに、理由も理屈も存在しないのだ。

それだけで生きていける、それがどんな結末を招こうとも、今のこの想いだけで一生生きていけると、そんな出会いなどある日突然訪れる。

そしてその一瞬の出会いに、自分にしては思いもかけず、間違つた浅はかな選択をしたのだつた。

——後悔してないといえは嘘になる。

だが、あの時手放していれば彼女は死んでいた。

それなのに生かしていたことを後悔してしまう日があるのならば、

死ぬほど深い苦しみに陥るのもまたその代償なのだろうか。

.....

空間を繋ぐぽっかりとした闇の穴と玉座しかない広く暗い自分の居座で、黒く長い衣服を身に纏った男——院は目を開けた。

季節はあの時と同じ寒い冬だった。外ではあの日のように雪が舞っているのだろう。

五年間見てきた長い夢から今、覚めようとしていた。いつかは現実と向かい合わなければいけなかった。

その現実——小さな気配、あの日よりも随分と成長した少女が躊躇いがちに姿を現した。

拾われたその日から、いつだって笑顔で彼に飛びついてきた。

いつの頃から大人に近づくにつれそうしづらくなり、そして更にいつの頃からか時折様子の違う彼に声を掛けづらくなっていた。

「院……あの……」

「いちこ」

「は、はい……！」

いちこは自分の言おうとしていたこと——カマクラとの邂逅の件——が知れてしまったのかと想い、びくりと身を震わせた。

しかし院の口から出た言葉は思いもかけない言葉、いやカマクラといちこが会ってしまったからこそ、この結論に達したのかもしれない言葉であった。

「お前に命じた、次期のカマクラを探索する任務だが——、止めだ」

.....

ある日を境にいちごが必要以上に、クニのあちこちをつろつろしなくなった。学校と院庁の往復だけとなった。

その事実には北面である彼にとって、どういふことであるのかはすぐに察知できた。

——次のカマクラを探すことを止めたのか。
何故……。何故、院——。

その大事な仕事を自分に命じず、一人の子供に内密に探らせていたこと。その任務を突然打ち切り、その意図すら見えないということ。

幼い頃に拾われて以来、彼のためだけに生きてきた自分。後から拾われてきた子供のいちごに、ただ子供のように独占欲を燃やし、嫉妬をしている。

だが、ただそれだけと言われてしまうこともこの憤りには到底足りないような気がしていた。そしてそんな結論では、今の自分の気持ちには到底足りない。

——アナタが欲しいんだ——。

その笑顔が、己を一番必要だと思ってくれる気持ちが。
その強い気持ちが一人の男を狂気に突き動かしていた。

.....

平穏と思われていた豊かな平野が広がるこのナギの地に、まさかこれほどの力を持つ侵略者が立ち入るとは思わなかった。

均衡のとれていた世界。“氣”を乱すことが乱世の始まりであるから、その世界に生きる者たちは西と東に別れ、その氣運をそれぞれの主の元で守っていた。

だからこそ氣を乱す“魔”は人でも魔物でも入ってこないよう厳

重な警備をしていたが、このようなクニの中枢を担うほどの強い力を持つものが急襲してくるとは思わなかったのだ。

——信じられない光景が、自分の眼の前に広がっていた。

誰よりも守りたいと幼い頃から心に誓っていた姫が、その侵入者に髪を掴まれ顔を無理やり仰がされている。

それを見ているだけの非力な自分。

床に這いつくばった少年・弁慶は血まみれの拳を握りしめ唇を噛んで、その痛みで無くなりかけていた意識を取り戻す。

喧嘩では誰にも負けたことなどなかった。以前力マクラからやってきた使者を除いては——それと同等の力と見られるこの狐の面をつけた男。

この男もまた、彼と同じクニの中枢にいる者なのだろう。経験の浅い自分でもその侵入者の身に纏う空気から、圧倒されそうな強大な力の残滓を感じてそれを察した。

このような大きな力までもが動き出す。このように殺戮や強奪を行いだす。これが、いくさと云うものか——戦乱の幕開けなのか？ 弁慶がそのようなことを思ったのは、侵略者を倒そうと戦ったもののその太刀を浴び手足を切り裂かれ、崩れ落ちる瞬間のことだった。

気がつけばこの無残な光景を眼にしていた。そして自分自身の今の状況と言え、情けなくも這い蹲りこの光景を見上げているだけだったのだ。

その侵略者は今、大切な姫に刃を向けようとしていた。弁慶はすぐさま立ち上がろうとした。

しかし、身体が動かなかった。両手両足の自由をこの侵略者に疾うに奪われていたからだ。熱いほどの痛みが脳髓まで支配している。思うように立ち上がることもすらできない。

焦る弁慶の耳に、抑揚のない冷たい男の声が届く。

「――殺す気は、ない」

……流石にこの姫を殺せば、いくさは避けられない。それはあの方の望みではない。

だから今までと同じ、京に仇なす者に対してやってきたことと同じやり方で――。

「アンタの不思議な“力”のみを――奪う」

事実上、この土地を治めるソウリヨウよりも“力”を持った姫。その“力”さえ奪ってしまえば、この土地は終わりのも同然だ。

それがこの、オワリであることに深い意味がある。

――オワリの最大の勢力地であるナギを、幼い頃から守るように言われてきた。

平和な世が訪れてどれくらいになるだろう。平和といえども気を乱そうとする魔の存在はなくなり、己の力で浄化したり弁慶以下部下たちの手で薙ぎ払ってきた。

だがそれも自分の力を己がものにしようとする者こそあれ、自分の力を奪い、そぎ落とすことを目的とする者など現われなかった。

――この男の目的はなんなのだろう？

侵入者に髪を掴まれたナギの姫・和歌は、平手で顔を殴られ頭がぼうつとし、抵抗する力も出ない――したところで無駄に命を落とすことになるかと予測したので――和歌は身じろぎもせず、狐の面をつけた男をじつと見つめていた。

秋の頃、突如としてカマクラの使者が訪ねてきた。そのことこの男は、何か関係があるのだろうか？

「探し物」をしているとカマクラの使者は言っていた。しかし、それはナギにはなかったとも言っていた。

ではこの侵入者はそれを勘違いして――？

いや、違う。

この面の奥から感じる視線は権力を求める血走ったものではない。もっと孤独で、もっと――……。

しかし、この男が権力を求めてオワリを襲ったのであったとしてもなかったとしても、自分が彼によって「何か」に利用されようとしていることは確かであろうと和歌は思った。

そのように動けないながらも、いくつか物事を考えているうちに少女はこの地を守る者として、冷静に今しなくてはならないこと、今できることを悟った。

この男の戦い方を見るだに確かにかなりの手練ではあるが、“力を操ることに關しては幼い頃から此処を守ってきた自分の方が長けているという自信はあった。いや、なくともこの地を守る者として命がけで“それ”を成功させなくてはいけない――。

長い髪を結んでいた紐の先にある白い玉に、相手に気付かれないように和歌はそつと己に残された力を送りこんた。

――早く。そしてどうか、気づかないで……。

狐面をつけた男の視線がどこにあるかはわからない。だがその刃が少女の肩口に当てられた。

――この侵略者が西の者であるかどうかなど、弁慶にはまるでわからなかった。この男の目的など尚更わからない。だが、その姫だけは殺させない――！

とうに機能を奪われたはずの這いつくばっていた両の手足を、全身の細胞をもつて弁慶は自分でもわからない力で己の体を動かした。
「和歌……を、」

離せ……！！

あとは奇声ともつかない声を振り絞り、刀ごとその男にぶつかっていった。

二つの刃が同時にそれぞれの身体を貫いた。

・・・・・・・・・・

暗い家に、人が入ってきた。

……アイツだろう。

こゆるは久しぶりに会う同居人の無事にほっとため息をつく――が、すぐさまその顔が青ざめる。

――血の匂い！

互いの両親を奪われた時にたらふく味わったその匂いには、こゆるは敏感だった。

部屋の扉を開けると、そこには髪の毛の長い男が少し荒い息をして蹲っていた。

「イホク……！」

思わずこゆるは大声を出し、その男に駆け寄った。

――窮鼠猫を噛むとはまさにこのことだ。

手足の自由を奪っておいた少年が、まさか渾身の力をふりしぼって己の足元を斬りつけてくるとは北面も思わなかった。

これは己の単独での行動であつたからこそ、オワリのブシダンがこの急襲に気付き駆けつける前に力を持った姫を傷つけ、その力の発動などできないようにしてしまおうと思つたが――あの少年のおかげでこちらまで傷を負ってしまった。

そのままブシダンが急行してきたため、あの姫の力を完全に奪う前に手負いの自分は逃げ出すことしかもうできなかったが――。

しかしオワリに与えた傷は大きいだろう。オワリは東の支配下であり、西と東の境の地だ。俺がそこに深手を負わせた。その領域を

静かに犯してやった。

——主の欲しいものは、何だ？

いちこに探させている、次のカマクラ、が欲しいのだろう？それを欲するということは、いくさを起こさない方法でこの世を統べることを主は望んでいるのではないのか？

だとすれば、自分は……自分は——！

「——っ！」

脚に起こった激痛。まとまらない考えを更に狂った方向に向かわせそうになっていた北面は、その現実の痛みに冷静な思考を取り戻した。

「な……何をやってるんだ！ おまえはっ！！！」

震える手で北面の脚を消毒しきつく縛りながら、震える声でこゆるが叫んでいた。

その8 回天！1（後編）

——ああ、きつと、この声もかれには届きはしないのだろう。そう思うとこゆるは哀しくて仕方なかった。

彼が何をしてきたのか、彼女には聞かなくてもわかった。

マツリゴトのことはわからないが、彼はもう止まらないところまで来てしまっていること、これだけの深手を負うには相当の危険を犯したことも察していた。

——どうしてだ！？

どうして、そこまでせねばならないんだ！？

自分が院の代わりになりたいなど思ったことはない。

だが彼がこれ以上傷付くところなど、たとえそれがエゴイズムでも自分はもう見たくはなかったのだ。

——そんなことしたって、どんなことしたって、おまえの望むものなんて手に入るわけではない！

わかれよ！バカっ！！

答えが見つからず混乱し、考えの収束がつかないのはこゆるもまた同じであった。

だからこそ、思い悩んだ自分はカマクラまで辿り着いてしまったのだ。その感情を彼と違ってコントロールできるだけで、彼女とて彼と同じくらいどうにもできないほど苦しかったのだ。

こゆるは両の手で思い切り北面の肩を押すと、冷たい床にその身を押し付けた。

男の背中が床に当たる、どすんという鈍い音が響いた。

北面は痛みに顔を歪めた。だが相手は一応家族であるため、危険はないことから渾身の力を振り絞ってまでその手を払いのけようとはせず、痛みに動かない体をそのまま横たわらせていた。しかし視線だけは至極冷たく、怒りを含んだまなざしでこゆるを睨み上げた。

だが今日のこゆるは違っていた。彼女もまた、鬼気迫る目でたったひとりの家族の目を睨みつけていた。

「——いいか！ もう、わしはおまえなんか知らないんだ！ おまえが何をしたいのかも何をするつもりなのかも、わかってるしわからないし、わかられたくもないだろう！」

意味のある言葉など何も出てこなかった。それは「おまえの望むものなど手に入らない！」という絶望の言葉を、こゆるは北面に対し投げつけなくなかったからだだった。だからこそまとまりのない言葉しか出てこない。

「だがな、おまえがあの方でないとだめなように、おまえがあの方をそんなふうになるまで慕うように——私は、おまえを傷つけたくないんだ！ おまえにこの世から消えてほしくないんだ！」

どんなに叫んでも、己を見ない眼。昔から好かれているなど想ったことはなかった。

それでも幼い頃は、まだ自分を頼りにしてくれていた。自分の方が少しばかり歳が上だったから、いくさで焼け出された時も絶対に自分は泣かなかった。泣きじゃくるかれの手をしっかりと握り締めていた。かれもまた、その自分の手をしっかりと握っていた。

なのにいつからこんなに離れてしまったのだろう。

——自分の言葉など彼には何も届かない。届かないんだ——。

こゆるの眼から涙が溢れた。その熱いものは北面の頬を濡らし、その温かさだけは北面の心にも彼女との血の通い合いを思い出させた。

言葉が、想いが届かない。その苛立ちと哀しみから、そしてそれでもこの想いを彼が院にわかってほしがるように、自分も知らせてやりたいから、そうでないと苦しいから——こゆるは思わず振り絞るように叫んでしまった。

「——だから……っ、おまえのイノチと、私のイノチを、ひとつに

……してやった……んだ……！」

言い終わった後、その冷たい眼を泣きながら睨みつけ——ややあって、彼の冷たい眼が珍しくも驚いたものに変わったのをこゆるは確認した瞬間、

——言ってしまった——。

と体の力が一気に抜けていくのを感じた。

だがその次の瞬間、彼女は千切れるのではないかと想うほど強く、その細い肩を掴まれることになるのであった。

「どういう、ことだ……」

痛みも忘れて起き上がった北面が、こゆるの肩を握ってそれを否定したいかのように瞳を揺らしていた。

——なんで、オレなんだ、と強く自分を責める眼差しを想像できなかったわけじゃない。

だが実際に眼の辺りにすると、ほんの少し胸が痛んだ。だがそれでも自分は自分の意志をとおさなくては、彼が院に対しああまでしないと辛くていられなかったように、自分も彼を失うかもしれないことが恐くていられなかったのだった。

もう、誰も失いたくないなどない。もうひとりになる気などない。

一生傍にいらなくてもいい。だが、死に急いでくれるな。

ひとりで、死ぬな。

残して、いくな——。

どの選択肢が正しいのか、間違っているのか。答えは何処にも存在しない。誰にもわからない。

ただこゆるの真っ直ぐな昔と変わらな嘘のない視線に、北面はその言葉と覚悟が嫌というくらい、嫌悪すらもよおすくらい、真剣であり真実であると思い知らされるのであった。

「何て、事……」

それはこゆるの賭けだった。北面のもつたひとり肉親への情、それに賭けた。

彼がこんな風に狼狽した感情を顕にすることなど滅多になかった。だが本当は繊細で、子供のような奴だと知っていたのだ。だからこう言えばそのように驚き、混乱することは承知であった。だが自分が足枷になりたいわけでもなかった。

こゆるはただ黙って、北面がどのようにその感情を変化させていくのかを見守っていた。

「馬鹿な、そんなことが出来る者など、我が主しか——」

しかしそこまで言った後、あることに気付いた北面はすぐさまた元のように——いや、それ以上に激しく厳しい視線となると、こゆるを憎しみの視線で突き刺しそのまま壁の方へ彼女の身体を打ちつけた。

身体への突然の衝撃に、こゆるは小さな咳をした。

「——お前、まさか……！」

同時にこの罪に気付かれることも、予想できないことではなかった。こゆるも先ほど以上に真つ直ぐな眼で北面を見返した。

それは恩人である院への裏切りなどどこにもないということを知って欲しかったがためだった。

「カマクラから、“御恩”を受けやがったな……！」

こゆるは何も言わずに怒る北面を見つめ返していた。ただひとつの一貫した主張——死んで欲しくなかったんだ、という訴えかけるような眼差だけで見つめていた。

そのようなことができるほどの“力”を持つ者は、この世をくまなく探せば他にもいるのかもしれないが、今、考えられる人物とこのタイミングで聞かされることから考えると、まず己の主が思い浮かんだ。

しかしあの院がそのようなことをするはずがない。逆に先ほどの

こゆるの必死な叫びからそれほどの力を持った者で、京の力を牽制するために北面に対して不利益となることが有益となり、更にはこれほど強く何かを願う者が辿り着ける場所は——このクニでたったひとつ、しかないではないか。

「何をしてるんだ……！ お前は！ わかっているのか！？ それは裏切りだ——！」

それを知られてしまった時の彼の反応がわからなかったわけではない。

彼は自分を許しはしないだろう。そんなのもわかっている。

ただ、死なせたくない。

その気持ちを押し付けてしまっただけ——。

殴りつけてしまいたいような気持ちで、北面はこゆるの身体をもう一度壁に叩きつけた。

そのまま壁に強く押し付ける。

黙っていたこゆるだったが、痛みを堪えた声で相手の手の動きが止まった瞬間を見計らって北面に告げた。その台詞はこのことを正当化し、自分の決意を北面にどう思われようと揺るがないものにさせる唯一の呪文だった。

「——院は、わしが御恩を受けたことを、知っている」

「何……」

「わしも院に命めいを受けてたことがある」

——北面の、イホクの傍に居てやれと——。

「これは、その命を遂行することにもなる。だから、わしにも無論おまえにも、咎はない」

「何の、命だ……」

一体、いつの間に、この女は何を知っていると云うのだろう。一体何を考えているのだろう。

北面は思わずこゆるの肩から手を離れた。

急に血が通い、熱くなる肩をこゆるは抑えながら言葉を続けた。

「カマクラに行ったのは、京には関係なくわしの私用でもある。カマクラを信じるとは云わん。だが——」

自分のことは信じてもらえなくとも、嘘はない証拠を見せたかったのでこゆるは顔を上げた。

日頃見せない北面の困惑した表情が二度も見れて、それでも満足と心の奥底で想う自分を浅ましいと思いつながら——。

「奉公」の内容は、カマクラから院への伝言を頼まれたただけだ。北面は今はまだ、呆然としながらも耳だけは集中してこゆるの言葉を聴いていた。

「——で、カマクラは何と……？」

こゆるは自分の話を食い入るように北面が聴いてくれていること、ただそれが嬉しかった。

マツリゴトもクニもこゆるにはよくわからなかった。

だがもう二度といくさは起きて欲しくなかった。

そして北面を誰よりも大切に想う気持ちも変わらなかった。

ただ自分が院を裏切れることは、自分にとっても命の恩人であるわけなのだし、重ねて北面をも傷つけてしまうことなので、こゆるはただそれだけは避けたくて正直に真実を伝えた。

「カマクラが『いちこに会った』と、院に伝えよと——」

「——！？」

北面は息を飲んだ。

頭の中で繰り返される、その謎の言葉。

“奉公”ということは、それがカマクラにとって利益があるということ。

いちこはカマクラに会っていたのか。それを院に告げることが、カマクラにとって有益ということなのか——？

何故だ。あの邪魔なガキ——微弱ながら、変な力をもってやがるが——まさか、カマクラと内通していたのか……？

いや、奴は院と寝食を共にしている。暗殺ならば疾うに何か実行しただろうし、内偵というのも……第一、内偵ならばカマクラが「わざわざ」明かすことが何故奉公に繋がるかがわからない。

では、何故——。

次のカマクラを、いちこに探らせていた院。

——……！？

ふと「ある仮定」に唐突にぶつかり、北面の動悸が早くなる。特殊な力を持つ少女。

——そもそも、何故院は「いちこ」だけに「次のカマクラ」の探索をさせていた？

その「いちこ」を大切にしていた院。

もしかしたら、それは、院自身が「次のカマクラ」を「いちこ以外」に知られたくなかったからではないか——！？

——まさか……、まさか……！！？

「以前……」

「え？」

だらりと両手を下ろして呆然とし始めた北面に、こゆるは驚いて聞き返した。

この伝言が何だというのだろうか。

思わぬ反応にこゆるの鼓動も少し早くなる。

「オレは調べたことがある。あのガキが憎くて、次のカマクラを探そうとして——」

闇の世界に生きる呪術者にとりいつて占わせたので、真実とは遠いだろうと想っていた。ただの気休めで尋ねたのだった。

「占わせた結果、『次のカマクラは、それと同じだけの力を持った者しか分からね』と――」

「同じだけの、力……？」

「その時は信じていなかったが、次のカマクラと同じだけの力を持ったヤツなど、オレはこの世に二人しか知らない……」

「……」

こゆるはそこまで聞き、北面と同じように徐々に胸を高鳴らせ始めた。

「同じ力……とゆえば――」

我が院と、カマクラ自身――。

その二人ならば、次のカマクラの存在が、隠しても、隠しても、

「出会うだけ」でわかる――。

「なあ……なんで、カマクラがいちこと会ったことを、院にわざわざ教える必要があったんだ？」

冬の嵐が外で吹き荒れる。

暗い部屋の戸を鳴らす。

感情のない男の目が闇を見つめる。

仮定されることは、最悪の事態、たったひとつだった。

……

そのまま風のように立ち去った男を引き止めることもできず、座り込んだこゆるは、己のしかした事の大きさに、ただ震えていた。ただ、何があるうともかれと生死を共にすること、そのわがまま

だけはカマクラによって聞き届けられることになったものの、それ以上に大きなクニの運命の波に、大嫌いないくさを引き起こすことになるかもしれないほどの出来事に、己もまた巻き込まれていたことにこゆるはただ恐怖を感じていた。

その9 回天！2（前編）

「ただ世代交代してえだけだったのに……なーんか、いつのまにかえつらいことになっちまったなあ……」

真冬の夜はコタツにみかんに限る、とばかりにゴールデンタイムの三流お笑い番組を見ながらもぐもぐとビタミンを屠る、そんなカマクラのものの言い方はまるでテレビ番組に向けられたかのような気の抜けた言い方ではあったが、

「他人事のようにゆーな」

反してカマクラに貰った温州みかんを握りつぶしてしまいそうなほど、反対の腕には刀を抱えてイライラしているのは例にも漏れずその片腕の青年であった。

「まあ今回たまたまこっちの動きと重なっただけで、ただの向こうの内紛でもあるんだから、いつかは起こったことだと思いがな…。あの狐ヤロー、なんかしてくるとは思ってたが……」

苦々しそくに玄次が言い、その現実とはそぐわない瑞々しいみかんを睨み付ける。

オワリ急襲の件は、すぐにバクフにも知らせが入った。

ナギはオワリの中樞であった。そしてオワリは東と西の境の地だ。そのソウリヨウは特殊な力のある少女に“気”の静定をさせ、その地を治めていた。

——その少女が襲われた。

少女は深手を負いその能力も微々たるものとなってしまう、残されたソウリヨウにはなすすべもないと云う。そのことだけでもその地の混乱は避けられないと云うのに――。

「姫さんには見舞いの品でも送ったか」

今日十八個目となるみかんを剥きながらカマクラは玄次に問いかけた。

「一応。——でも『カマクラ殿』のとられた即断の方が、先方にはいいお見舞いだったんじゃないですか？」

その後始末に昨晩から追われていたバクフであったが、ようやく休憩だけはとれるほどの小康状態になったため、玄次も手の中のみかんに指を掛けた。

玄次の敬語は厭味のようにもあつたが、あながちそうでもなかった。

「ひやひや、あんの姫はん、中々やるよ。おきやげでオワリの壊滅は防げたもふ」

たとえその称えた当人がみかんを食べながら、聞き取りづらい日本語を話していても、だ。

「——最後にどっかに力を残したんだろうな。それがあつたから、オワリ自体の気も人心も不安定で予断は許さない状態だが、ナギの住民が気の乱れによりいきなし住めなくなったりするようなことはないらしい。怪我の中、がんばってるらしいぜ、姫さん」

みかんを飲み干したカマクラの言葉に、玄次は頷いた。一度会ったことのある、幼いがしつかりした少女の顔が青年にも思い出される。

——玄次たちは詳しく知らない話であるが、あの時、己の体が力もろとも傷つけられる直前、和歌はお守りの玉の髪飾りの中にその力を若干でも移した。その時に弁慶が決死の思いで北面に飛び掛り、和歌のその最後の術は無事に掛けられたのであった。

ただし彼女自身の力は、その際の深い切り傷でほとんど失われてしまった。現在は怪我の痛みを堪えながらその玉の力を使い、ナギの中だけでもか細い力ながら守り続けようとしているのであった。それが先ほどの玄次の言葉にもつながるのだが、オワリ急襲を聞いたカマクラはすぐさま臨時に「見舞い」と自称した力を発信し——だがそれは靈力ゼロの地への力の転送であつたため、カマクラ自

身のエネルギーの消費も多大であつたが、その瞬時の対応もあつてナギ地方は壊滅という顛末にはならなかつたのであつた。

その結果京のロクハラに増員していた人員を急遽、騒乱が起きないようオワリに配置したり、かといつてロクハラも京がこのような動きを見せた以上手薄には出来ないので緊急かつ仕事のできる者を探して配備していた——という慌しい指示を、バクフのどうしようもない役人を蹴り上げて玄次がやらせていたのだった。

……確か己が最初に仰せつかつた仕事はカマクラの警備だけであつたはずなのに……とふと疑問にすら思う彼であつた。

そんな怒涛の二十四時間が過ぎ、ようやく二人とも休息がとれる状態になつたのだった。

時間枠的にバラエティーから愛憎ドラマとなつた放送を見るともなしに見ながら、本日二十二個めのみかんを食べるこの主の姿からは、到底このような緊急事態中であるなど想像もつかないが。

「——でも、まだまだこれからが頭痛えよなあ」

オワリはそれなりに力を持ち、承知しているようにクニの中央の位置にある領土だ。それを犯されたとあつては、その犯人がカマクラ領内の反逆者であれ京の者であれ、黙っていない者が出てくるであらう。

カマクラはリモコンでテレビを消しながら（ドラマの内容が趣味でなかつただけだ）そう言つと、この事態の対応策について目線を天井に向けて考えていた。

「とりあえずオワリは今不安定だから、そこから崩されないような周辺警備の強化はしているし、逆に地方が連続して襲われないよう兵の配備もしている」

玄次も固い声で現在の対策状況を告げた。

「なあ」

カマクラは手もコタツの中に入っていたので、顎をコタツの台の上に乗せたまま首だけを玄次に向けた。

「今回の犯人は――」

「決まってるだろ」

――アイツだな。

二人は揃って大きなため息をついた。

京の院が何のために権力争いを治めるために、「全ての争いの種」をその身に飲み込んだか。それを思えば彼がいくさを望んでいるとは思えない。

先だってから京の政権を握ろうと狙っていた地方がたった一人の侵入者によって、ソウリヨウを直接襲われその“力”を今回と同じように奪われ、急激に力を失わせていた。おそらくその仕業も今回のことも、玄次が遭遇したという院の側近であり内乱の引き金になりかねない暴走気味のその男が主犯であろう。

「――どうする？」

玄次はカマクラを見返しその視線を結んだ。

「……」

カマクラは自分と彼の考えが同じであることを悟っていた。口を開いてのんびりと言った。

「俺さあ、あの院のオッサン……やり易くて楽なんだよなあ。考えてることが一致するところがあるからさ」

全く異なるタイプで会話もしたことがない西の主と東の主であったが、何故かたったひとつ、いくさを避けたいという願いだけは一致していた。

「だったらさあ、これ以上そのナントカってヤツの暴走は食い止めねえといけねーよ」

カマクラはゆっくりを身体を起こして伸びをした。長い髪がはら

りと床に落ちる。

「もう、『何か』は動き始めているんだ。こつちも本腰いれねーとなあ」

少し笑うカマクラの真意が——その大層大きいであろう「何か」が彼にはまだ知らされていなかったたので、玄次にはわからなかった。それでも北面の無茶を止めることが、クニの混乱を避けるために今一番しなくてはならないことだということとはわかっていた。

「今回の件、『京』の仕業に絶対するな。ソイツのただの私利私怨による『単独犯』ってことにするぞ。……てか実際そうだしな」

玄次はカマクラの言葉に、ああ、と頷いた。

「京」がカマクラを狙ってそのようなことをしたということが知れ渡れば、それに対して息巻く輩や己の主こそが正義と主張する輩が出てくる。そうすればちよつとした衝突から避けられないいくさへと発展しかねない。

その男を犠牲にしたいわけではない。だがクニ中を巻き込むわけには決していかないと、のんびりしたカマクラであるがそれだけは主君として守らねばならないものであった。

「そーと決まれば話は早い。これ以上寄り道されてまたどつかツブされる前に……ソイツ、カマクラにさっさと呼び出すか」

「は？」

あつさりと友達を誘うかのような言い方に、玄次はぽかんと口を開けてしまった。

「何言つてんだ、オメー……？ わざわざ殺されにくるわきゃねーだろーが」

カマクラはそこでにやりと笑うと、ずいっと玄次に近寄った。

「いーか、九割九分ソイツの暴走だと俺は想う。だがな、一パーセントの可能性で間違いだったり、このことが表沙汰になって、これに便乗し騒ぎを起こそうなんつー輩が居ないとも言い難い。——よ

って、バクフを上げてソイツを指名手配するなんて真似はしねえ。犯人がわかってる以上、あくまで一部の者で動きたい。よってバクフの屋敷の中に、しかもこの中央に、ヤツをおびき寄せる。更にバクフの役人に無駄な死人も出したくない。だからソイツには直接ココに来てもらう」

カマクラは自分たちの今居る屋敷の床を指差した。

——ということは、だ。

玄次に近づいたカマクラは、そのまま下から彼を見上げた。

「……一神、お前、ソイツとやりあつて勝てるか？」

「——」

そうなれば、その戦いに応じれる者などおのずと一人しか残らないではないか。

玄次その視線を捕らえながら、急に接近されて後退したい気分でもあったが、その一騎打ちを恐がつているとも想われたくなくて逆にその顔を近づけて凄みを利かせて言い返してやった。

「その答えに複数の選択肢は、あんのか？」

「——無い」

カマクラはきっぱりと言い切った。

「なら言つな」

玄次は呆れたようにため息をついていうと、腕組みをしてカマクラから身体を離してコタツの背後にある壁に凭れた。

「ブシにとつて、勝てねーってことは死ぬってコトだろ。いくら平和ボケしても、それくれーは忘れてねーよ」

当たり前のような言い方をしたが、彼の中で覚悟は決まったようであった。

その頼もしい様子に安心したからかどうかは定かではないが、カマクラが少し笑みを零していると――、

「……って、だからどーやって奴を呼び出すんだって！」

玄次は肝心なところが抜けているとばかりに、刀をどんつと床に叩き付けた。といってもコタツ布団の上なので、どうにも音に間が抜けている。

その言葉にカマクラの笑顔が、なんと表情の読み取れない笑いに変わった。

「——もう、方法は決まっている」

自信ありげな口調ではあったが、随分と哀しげな笑い方にも見えて玄次は少々面食らってしまった。

「どういう方法、だよ……」

「まーとにかく、穩便にコトを収めるために、余分なところは通らせねえ。一気にこのバクフの中央まで来てもらって方法だよ」

「だーからどーやって!」

しかしそれは一瞬のことで、またいつものようなイタズラめいた笑顔に戻ったので玄次もそのままイライラしたように問い詰める。

——だが、

「京の『いちこ』を、此処に呼び寄せる」

「は……??」

その答えは極めて予想外のものだった。

「なんで……だよ?」

——アイツを北面は憎んでいるらしく、またアイツは院にとって特別な存在であるらしい。そんな子供をどうして呼ぶ必要がある、どうやって呼び寄せられると思う?

啞然としている玄次に対しカマクラはくっくつと笑った。

楽しそうにも見えるが、それは玄次には何故だか作り笑いのように見えた。

「安心しな。西の支配者は、あの子供には手も口も出せねえよ。——あの子が自分の意志で此処にくりゃあ、あの男とて何もできん。それにいちこをこちらに監禁したものを、その京の側近がひとりで

取り戻しにくるならば、今回のことがアイツの単独犯だという証拠にもなるしな」

「だーから、どーやっていちこを此処へ自分の意思で来させるんだよ。アイツ、院院ってすげえうつせーぞ？ 京の命もねーのに来ると思うか！？」——ってか、だからなんでいちこなんだよ！ なんてヤツをあの男がいちこを取り戻しに来んだよ！？」

カマクラの意図が読めず、早く言えといわんばかりに玄次はイライラと頭を掻いた。

「だーい丈夫だつて」

——あ、まただ……。

玄次は頭を掻く手を止めて、カマクラの顔を上目遣いで睨むように見ていた。

——また、あのなんか、

「いちこは、必ず自分の意志で此処に来る。そしてあの子を憎む京の北面は、必ずあの子を取り戻しに来る」

変な、イラつく寂しい笑顔——。

「……なあ、」

——ああ、思い出した……。こんなような、困った笑顔は前にも見たことがあるぞ。

玄次は無意識のうちに、カマクラの肩に手を掛けていた。

「そろそろ話せよ」

それを聞きたいのは戦いを前にして理由が知りたいからだけでは無い。この表情を見たくないからだつた。

——コイツは不器用な奴なんだ。そんなの、十何年も前から知っ

ている。

己を慕う者、弱い者、幼子——そういった者に対して、どうその愛情を向ければよいのか、わかんねー奴なんだ、コイツは。

自分がそれを一番知っていたことを、久しぶりにその表情を見ているうちに、玄次はなんとなく思い出していた。

その9 回天！2（後編）

殺氣——に近いほどの気配を感じたが、それはよく知っている腹心のものからであつたため、院はその主を招きいれた。

冬の嵐の音が聞こえたが、部屋の扉が閉まる音と共に聞こえなくなつた。

静まり返つた部屋で入つてきた男は玉座に座る院の前に崩れるように跪く。

——予想はしていた。

この男はカマクラに迷い込んでしまつたこの屋敷の飯炊き女——と言つても北面と同じ一族の者であり、子供の頃から知つているので信頼には足る女だと思つてゐるのだが——こゆるとは家族なのだ。また彼女は、この男が自分を慕いそのために命を投げ出すことも厭わないことを知つてゐるだろう。そして彼女は誰よりもこの男のことを優先するだろう。そのことも何年も前から知つていた。

そうなれば「あの情報」が北面の耳に入ることも予想できないことではない。

そしてそれは、こゆるを責めることでもなかつた。

何故ならそれはいつか必ず明るみに出ることだつたからだ。

カマクラがいちことこんなに早く出会つてしまつた時点で、いちこがカマクラに興味を持ち、会いに行つてしまつた時点で、いちこや皆に知られてしまうことは時間の問題だつたのだ。

——できることならば、いちこだけには知らせたくない。

だが、知らせないということは力づくでその事実を隠すということになるのだ。そうなれば即ち、その隠蔽は誤解を招かざるをえず、カマクラとのいくさに発展しかねない。

北面がオワリを攻めた以上、彼の暴拳を自分が止められなかった以上、いくさを避けるためにもいちこの存在はもう隠してはおけない。

——いや、それでもいちこを守りたければ、その暴走した腹心を斬ればそれで済むのではないか？そうすればいちこだけは手放さずに済む……。

だがいちこと同じく、彼のイノチを救ったのもまさしく自分であり、そして自分の部下として育てたのだ。

いくさの世を望まないということは、自分がそのために誰かを抹殺していれば何にもならないことだ。

だが、それは矛盾している綺麗事なのはわかっている。

——そのためには一人くらいの犠牲も厭わないものなのか。

それは西の主としてわからないことであり、だからこそ今回の混乱を招いていたのだった。

だが西の主としてならば、ならば何故、あの小さな少女を助けてしまった。

あのイノチを、傍に置きたいと、守りたいと、思ってしまったのだ——？

何もかも始めから矛盾しており、それを繰り返しているうちに、筋のおる一番いい方法など成り立たなくなってしまった。

生命線は、断たれた。この平穩の存立はもう、しない。

均衡は、崩れた。

あとは、始まりの時が訪れる——。

——せめて、その時の幕を。

北面が、ようやく呼吸を整えて声を絞り出した。

「院。恐れながら、い、いちこは——」

院は唇を開き、低く重くこれまでにない固い冷たい声で言い放つ

た。

「いちこは、」

——己が手で、切り落としてしまおう——。

「いちこは——次の、カマクラだ」

その瞬間、冬の嵐が再び轟音と強風を部屋に運んだ。

その音と風の吹く方向に北面は振り向いた。院の部屋の扉が、前触れもなく開いていた。

「——院……」

扉を開いた主である呆然と立ちすくむ少女と、玉座の院は目を合わせた。

その時の少女の震える瞳と、結ばれた紺碧の瞳はまるで非なるものであった。紺碧の瞳から敵への憎悪の視線で相手を射殺すほどの強い視線を浴び、いちこの顔は真つ青となりかたかたと体が震えた。それでも視線を逸らさなかったのは、その瞳の奥に一片の哀しさがあることを信じていたかったからか、それとも見抜いていたからか——。

・・・・・・・・・・

大きな手で掴まれた肩に対して、導かれるようにカマクラは玄次の胸に手を置いていた。

何もかも見抜いているような彼の視線に安堵している表情に、玄次はこのまま東の主が主でなくなるような錯覚を起こしそうであった。今にも今まで保っていたカマクラとしての強い力を放棄してし

まいそんな、そんな人間としての記憶と弱さを垣間見せているような気がしていた。

それは彼女が「彼女」であつた証でもあつた。彼女がまだ「彼女」であつた頃の姿を見ているようだった。

それを「懐かしい」感触として感じとれるようになった自分は、随分あの時から時を経て大人となつたのか、と彼は妙な感慨すら抱いていた。

その儚さを垣間見せたながら、だが声だけは気丈に、カマクラは玄次に告げたのだつた。

「——いちこは、……次の、カマクラだ」

隠してきた秘密をようやく話したカマクラは、大きくため息をつくと玄次から再び体を離し、言葉にしたことで覚悟が決まつたのかまたいつもどおり飄々かつ不敵な表情に戻り、その一瞬見せた弱さを幻のように消して背筋を伸ばした東の主の姿に戻つたのだが、

「は……？」

ぽかんと呟いて凍り付いてしまつた玄次は、カマクラがいつ元に戻つたのかまで意識を張り巡らすことなどできなかった。

「お——い」

カマクラが眼の前で手をひらひらと振つたので、呆然としていた玄次はようやく現実に戻された。

「びっくりしたか？」

悪びれずに、また先ほどまでの表情が嘘のようににやにやと笑う東の主に、

「驚くも何も……っ！」

玄次は思い切り怒鳴つてやろうとしたが、

「……って、よく考えたら辻褄全であつてるじゃねーか……！」
はたと気がつき、頭を抱えて座り込んだのだつた。

——京に『何か』があるという易は、以前から常に出ていた。

院が必死になっていちこの力の流出を防いでいたからこそ、すぐに易の結果には「京に次のカマクラが居る」とは出なかったものの、京から離れ院の力が薄れる場所では「次のカマクラのいそうな場所」をカマクラが占った時に必ずその場所にいちこは居たではないか。

いちこだけにカマクラ探索をさせていたのは、バクフの眼をある意味彼女から逸らすためであつたか——ただし、それは危険な賭けでもあつた。ただカマクラにさえ遭遇しなければ、自分の掛ける術はこのクニでは屈指に値するものであるため、逆に絶対にこの秘密が知られることはないと思っていたのだった。

そして何よりいちこに探索をさせていれば、いちこ自身が自分がカマクラであると感じく可能性が低いと思っていたに違いなかった。それとも、あえてこのような危険を冒すことで、いつか来るその時をいつそ破滅的に導きたかったのであるうか。

「——確証は？」

玄次は手を頭に当てたままカマクラの方を見た。

「本人に、会つちまつたからなあ……」

カマクラはのんびりした声で、遠い眼をして答えた。

ともかく、出会うべくして——いちこは運命のいたずらか、ずっとカマクラに会いたがつていたのだから——、二人は出会った。

カマクラの力の発現は、その者が生死の境に立った時にされ、それがわかる者は東と西の主のみ。

院は最初から知っていたのだ。知っていたいちこを傍に置いていた。そしてカマクラは知ってしまったのだ。

奇しくも、同じ真冬の日に。

.....

「……………」
言葉を失った少女は、一歩足を引いた。

北面すらもどのように今、己が動くべきかなどわからずただ院の次の行動を覗っていた。

そのままいちこは身を翻した。

——追って、どうする。

——何が、できる。

——何を、言うつもりだ。

院は追わなかった。玉座の上で拳を強く握り締めていた。

「……………」

しかし、北面が指示を仰ぐと声を発した瞬間だった。黒い影がものすごい勢いで己に迫り、北面はその空間から『弾き出された』ということを一瞬に悟った。

北面は二、三メートル離れた場所へと弾き飛ばされただけだったが、その玉座に院の姿はなかった。床に青年の拳を打ち付ける音が、誰も居ない威圧感すらなくなった空間に響いた。

何処へ走っているのか、何の感覚もない。

何も考えられないいちこは、程なくよく知っている黒い影に吸い込まれた。

しかし今日は彼女も精神的に追い込まれ何かの力を発動したか、または彼女が彼女の意識が消えないように計らったか——おそらくその両方の理由で、今日は意識を失うことはなく影の勢いに押されたいちこは真つ暗な空間にもつれて転ぶように倒れこんだ。

痛みは感じなかったがすぐさま立ち上がることはできず、半身を起こして追ってきた影を見上げた。

影の主は、先ほどと同じ今までにない憎悪を自分に向けており、いちこはそれがとても恐く苦しかったが、近づいたことにより感じなかったあの切ない眼の光は先ほどより感じられるような気がしていた。

——何故、追いかけた。

——何を、しているんだ、俺は——。

影の主は、言葉を発することはなかった。

己の体中の細胞に権力への欲望と言うものを閉じ込めており、そこには何の感情も存在していないはずだった。

一体、自分の体の何処がこのような強い望みを発している？

——この子の幸せを、誰よりも願う。

——でも、このことをこの子が知った以上、もう二度と会えないかもしれない。

——ソバニ、イタイ——。

この想いは、何処から生まれて、何処へ行く——？

「院……」

いちこは呟くと、ぽろぽろと涙をこぼした。

いくら子供でも、わかる。

自分がカマクラであるということは、この男の傍には居られないということなのだ。

そのいちこの気持ちなど、院には痛いほどわかっていた。

しかし彼女へ向ける瞳は憎悪のそのままだった。

紺碧の瞳の主は考えていた。

コンナオモイニシタモノヲ、ユルシテハオケナイ——。
カマクラにこの少女を渡さなくては、クニの均衡は崩れ、いくさになる。

ソバニイテホシカッタ——。
傍に居られないのならば、

いつそ、このイノチ——、

いや、彼女にこのカマクラと相当する“力”さえなければ——！

自分に向けられていた彼の負のオーラが瞬間的に増大し、それを感じたいちこはぞくりと身を震わせその影の主から逃れようと身を捻ったが、その大きな手で細い身体を床に押さえつけられた。

男の腕の力だけで、己の動きは抵抗しても動けないように封じられてしまった。

その手だけは今までのとおり暖かくて、なのにこれから己にしようとする行為は間違いなく己の身を、力やもしかしたら命すらも——喰らい尽くそうとする行為であることをいちこは本能的に察知した。

本能的といえ、元人間であつた彼のこの行動自体がそうなのだろうか。

肉体的な欲のために喰らいたいのではない。
理性や頭で考えているのでもない。

——ただ傍に置きたくて、手放したくなくて、その体、ボロボロにしてしまえば、いつそイノチすら奪ってしまうほど傷つければ、己だけのものになるのであるだろうか。

——それを考えたのは、“誰”だ——？

幼い頃から己を守ってきたそれと同じ優しいものであったはずの院の手が、今、少女の喉元に掛かった瞬間、

「……………院……………っ！」

少女は精一杯の声で叫び、その瞬間、彼女の体が淡いが大きな光に包まれた。

そしてその、光の消えた後は、ひとつの闇だけが、残った。

……………

奇しくもあの時と同じ、雪の降る夜。

——でももうあの時のひとは、雪の中で倒れていたって、助けにはきてくれない。

あの時私を助けてくれたのは、誰？

カマクラ様？

それとも、あのひと？

その手はもう——私が、振り払ってしまった……。

……………

いちことカマクラが出会った日が、いつであったかを玄次は察した。

どうせあの暗い部屋で泣いていた日だろう。

「——どうして言わなかった」

言っでは見たが、カマクラは薄く笑うだけだった。

その日から今までに、彼女は彼女なりに「何か」を決めたのだらうと玄次は思った。だから、このことを自分に話したに違いない。

いちこの父親にカマクラは御恩を授け、それでいちこのイノチが助かったこと、その瞬間こそがいちこのカマクラの力の発動であり、院との出会いであつたであろうことは、多分玄次の予想どおりだらう。

カマクラの、過去の己の判断への疑問、いちこという子供へ自分がかかることになる重責への罪悪感など——彼女が何を感じたかは玄次にはわからない。

だが、今はこのカマクラが東の主なのだ。主が一番クニにとって正しいと思うことに、自分は従うしかないのだ。

——だが、

「少つしくれーなあ……」

何も知らされなかったことへの苛立ちは、これから命懸けの大仕事を命ぜられるにあたつて説明不足であるからか、それとも勝手な振る舞いでひとり感情を持て余す彼女の癖に苛立つのか、はたまたそれ以外の理由かはわからない。しかし文句のひとつくらい言つてやろうと玄次が口を開いた時、

カマクラは何も言わず窓辺に向かうと、いつもは寒い寒いと言つくせに大きな格子戸を予告なくガラリと開けた。

「何だよ……」

玄次がカマクラの突発的な行動についていけずそちらを見やった瞬間、彼はまた絶句する羽目に陥つた。

「——また会うことになるだろうとは、言つたがな……」

ひとり呟くカマクラの目線の先には、雪の中に倒れたセーラー服を着た少女の姿があつた。

その10 一触即発（前編）

ずっと、ずっと、その背中を追いかけてきた。

その腕に守られてきた。

一生、とまでは言わないけれどそんな日がずっと続くことを願っていた。少女の叶わなかったその願い――。

・・・・・・

いちこがうつすらと目を開けた時に見えたのは、黒い着物を着た青年の姿だった。

頭がひどくぼうつとしていたけれど、少し考えた後「げんちゃんだ」と云うことに行き着いた。

――自分を看病してしてくれたのだろうか？目が合い、自分が目を覚ましたことに彼は気付いたようだ。

「アイツがあくまで秘密にしたいと言うもんで、俺が面倒看てるワケだ」

とぶつぶつと説明してくれたが、頭があんまりぼうつとするのでいちこは何も疑問に思わず、その言葉だけをぼんやりと聞いていた。

実際、玄次一人がカマクラといちこ二人の身を守る始末になっている今の状態は、あまり好ましくない――いや寧ろ危険なことであるのだが、カマクラがそうしろと言うのであれば仕方ない。

現に表向き、このクニはいたって“平和”であるのだ。京のあの北面の男の動き以外に危惧すべき事態はとりあえずは見当たらず、あの北面の男の存在すら知りうる者は多くない。

またカマクラ自身も自分の身を守るくらいのは力は当然備えているので、寧ろこの大事については混乱を避けるため隠蔽しておくこと

の方が賢明、という判断をした。ついではいちこ——この間まで京の手の内にあつた次のカマクラ——を、カマクラと玄次の二人の元で秘密裏に匿うことにしたのであつた。

といつても高熱に倒れた少女の看病をしながら、今に始まつたことではないがまるで家政婦のような扱いに玄次は思わず軽い頭痛を覚えずにはいられず、それゆえのため息混じりの説明だつた……のだが、当のいちこはそこまで考えるだけの気力もないようだ。

雪の中で発見された時点で彼女は高熱を出しており、いまだその熱は下がることなかつた。

「——とりあえず、寝ろ」

大きな手を熱い額に置き、静かな声で玄次は告げた。

親もなく、頼りにしていた男の元からもはじき出されるように飛び出さざるを得なかつた少女。まだ子供である彼女の少し先の未来すら見えない不安は、自分には計り知れないほどだろうと彼も思っている。

それでもどんな未来であろうとも、消えていい命はないとも思っている。だから今は京の代わりに自分たちが守ってやらねばならない。それだけは玄次も同感していた。

熱い額からその手を上げた時、少女は再び目を閉じていた。

——これからどうなるのか、どうするのか、どうすればいいのか。少女が次のカマクラと知ってしまった己らに、まだ答えは出ていない。

ただ時がきたから世代交代をして、ここから二人して新しい人生を送るか、などとお気楽な提案をただけだつたのに、いつのまにかえらく複雑な事態になつてしまったな——と、膝に頬杖をついた玄次は再び深いため息をついた。

・・・・・・・・・・

いちこが再び寝入ったその数時間後のこと――。

バクフの幹部が会議を行う場所、評定所へと続く廊下をカマクラは玄次を従えて歩いていった。

彼女が自分の住居から長い廊下で繋がるバクフ本部へと赴くことはあまりなく、あるとしても宴会のためくらいの理由でしかないのだが、本日は二人の表情からもさすがにそういう理由でないことが伺える。

他の部屋と同じように「評定所」と、まるで学校のように引き戸の上にネームプレートが横向きに掛けられている部屋の扉を玄次が開けると、中は他の室内と同様に板張りの部屋となっており、奥には主の座が一段高く畳を敷いて据えられている。

「待たせたな。つつーか、宴会以外でこの面子で揃うのも久しぶりだよな」

カマクラはいつもとそれほど変わらない少し軽い調子でそう言うのと、白い着物と長い髪を翻し主の座へどっかりと座った。

控えているのは五人の男――バクフを掌る最高管理職である五人のシッケンであった。

カマクラの斜め後ろに玄次が座り控える。

カマクラの居住する離れに病床のいちこを一人残してきたわけだが、彼女には京の院により与えられていた彼女を守る力がまだ残されており、またカマクラ自身もあの部屋に結界を張っていることから、このクニの二人の主による結界が彼女に張られているならば短い時間であれば外部の侵入は防ぐことはでき、万が一の時にも駆けつけられるくらいの時間稼ぎにはなる。それに第一、“いちこ”という重要な存在がカマクラにいることなど、京の院以外は知る由もないだろう。そうした理由から、短時間部屋を空けることを認めたのだった。

——そのためにも早くこの評定を終わらせなければ。再び危険な状況を作りながらも、この評定だけは今開かなくてはいけないとカマクラは判断したのであった。

こちらが知らせるよりも先に、“ある者”がいちこの居場所を嗅ぎ付け駆けつけ暴動を起こす、その前に。

クニの安泰を存続させ、起こりうる暴動を阻止するために――。

先ほどカマクラが笑い話にしたように、バクフの最高権力者、カマクラとそれにくく五人のシッケンが集まる評定会議など、これまでに滅多に行われなかった。しかもその内容も慰安旅行や新年会の計画だのといった内容であり、玄次は呆れカマクラとシッケンのオッサンたちはのほほんと呑みながら話を進める、そんな会合でしかなかった。

しかし今日の空気は違っていた。おそらくカマクラが入室する前に、先代から仕えるかの老齢のシッケン、ホウジョウ氏が何かを察知し、残りの四人のシッケンたちに何かを伝えたのだろう。

その他の四人のシッケンは中身共にのんびりとした面構えの中年男たちであったが、それでも一応バクフを代表する上役だ。さすがに緊張した表情と姿勢で座っていた。己の立場がまったく分かっていないわけでもないらしい。

カマクラはそれを目を細めて見渡すと、早速、と単刀直入に本題に入った。

「あー、突然なんだが、お前たちに腹積もりをして欲しい事がある。多分、もうまもなく――」

五人のシッケンがそれぞれに固唾を吞んで次の言葉を待つ。

「天が、動く」

「――！！」

呑気呑気と言われている、東のバクフを支えるという職責があ

る。その言葉の意味がわからないほど盆暗ではない。

「何故、ですか——」

一人目のシツケン、トウジョウ氏が太った体を思わずカマクラの方に向け、上ずった声でそう搾り出した。どのように言えばいいのかわからない言葉が見つからないが、他のシツケンも同じようなことを言いたいのであろう。

ただ、ホウシヨウ氏のみは黙って静かに目を閉じていた。

「時が、来たからだ」

カマクラは静かに告げた。

次のカマクラを探そう——最初に思いつきでことを言い出したのは自分だ。

だが自分が行動し出した瞬間、いちこが玄次と接触した。それを知った北面が暴走し始めた。いちこ自分は出会ってしまった。そしていちこは此処にやってきた——。

いやその前に、六年前、既に京の院にいちこが拾われていた。時を同じくして彼女の父親が娘を守るよう御恩を求めてカマクラへ奉公に上がっていた。

一体、いつから始まりだったのか、全ては運命だったのか。もう今となつては誰にも分からない。

だがここまで色々なものが手繰り寄せられてしまった以上、今や「来たるべき時」と云うしかないのだ。

何かが動けば全てのものが動き、それらが引き寄せあう——それこそ運命と呼べるべきものなのかもしれない。

「だが、どのような事態が起ころうとも絶対にクニに混乱をもたらしてはならない。まず第一に、このバクフの混乱がクニの戦乱に繋がることを、よく覚えておけ。——お前たちは何があってもうたえるな」

低く迷いのない声で言い渡され、シツケンは言葉の意図するところ

るはわからなかったもののその静かな迫力に声を揃え、「はっ」と頭を垂れた。その上に続けてカマクラの声が降る。

「つつても別に何が起きるわけでもないよ」

——俺が、俺たちが、起こさせない。

「バクフは『普段どおり』に仕事してりやあい。いや寧ろ、お前たちにはその『普段どおりであること』をしてもらいたいんだよ。何が起きようともいつもどおり呑気に仕事してな。これは命令だ。他のバクフの連中には何事も察しさせるな。——ただ、もしもの時の覚悟だけしとけ。万が一、俺からの伝令がとべば厳戒態勢を敷け。それまでは多少気の乱れがあろうとも気にするな。いいか、今回のことはお前らが取り乱さないようバクフを守ればいくさが避けられると思ってもいい。俺が、食い止める。絶対に戦乱は起こさない。騙されたと思つて信じてろ」

静かで、どこか不思議と頼れるカマクラの声。

天が動く——支配者にしかわからない何かが起こる。その具体的なことは自分たちなどにはわからなかったが、「何か」が確かに起こるということ。

自分たちの手や力の及ばないところで起こる故、カマクラと背後に仕える有能な男がいつもどおり全てを片付けるつもりらしいが、万が一のことが起これば備えなくてはいけないこと。

そうならないためにも自分たち以外のバクフの者や地方のソウリヨウが混乱し暴走しないように心を配らねばいけないこと——それだけは理解できた。

主君とおそらくその側近とが“何か”を東の主として食い止めようとしている。だとすれば、のんびりと平和な世を過ごしてきた自分たちができることは、いつもの呑気なバクフであるような状態を保つことなのだ。それがクニの安穏さを保つことなのだ。

「いつもどおりの平和な世の中」、それをバクフの配下、しいて

は地方に思わせることが自分たちの今回の任務であるのだ。

それがこの凡庸な主君なりのクニの守り方である、と彼らにもそれくらいのことは分かった。

しかしいつもと違い、有能な側近だけでなく平和ボケしている自分たちにまで話をふった、それだけ今回起こる「コト」は大きいのだ。

そう、天が動くほどに――。

考えれば考えるほど緊張が高まり、頭を下げたまま息を飲み込むシッケン達を後にカマクラは、

「そんじゃ、ひとつよろしく。上手くいったら一杯やろうな」

と明るい声で、手で杯を傾ける真似をすると笑顔をひとつ残し、すたすたと部屋から立ち去ったのであった。

.....

「――さて、賽は投げられた」

部屋に戻ってやつぱり此処が落ち着くと自分の定位置（今は冬なのでコタツの中のテレビが一番見える場所）にすっぽり収まると、カマクラはにんまりと相好を崩した。

玄次は相変わらず相反的な不機嫌面でカマクラの正面（のテレビやコタツからは離れた位置）に座った。

「この最後のゲームに勝つにはイニチアシブをとつとくのが肝要。次の役者を此処に呼び寄せねーと」

まるで本当にゲームを楽しんでいるような口ぶりに、笑ってる場合かよ、と玄次は思ったが怒ったところで無駄だ。フリなのか本心かは知らないが、どこまでもフザけた態度なのだ、コイツは。

――昔の彼女を思い出す。

人が苦手で想いを通わせることを避けていた彼女が何十年もかけて編み出したのが、今のように「軽く楽しむ」ことでしかなかったのだ。

玄次はそれを知っているだけに、腹立たしいを通りこして寧ろ、哀れになつてくる。

そんな郷愁に似た想いすら抱きながら彼がカマクラを見ると、彼女はそれを知ってか知らずか、ひらひらと玄次を追いやるように手を振った。

「ほれほれ行った行った。次の仕掛けしてきてくれんと。あ、立つたついでにお茶入れて」

…… やっぱり腹立たしい気持ちが優先されるかな、と思いながら玄次は既に癖となつている舌打ちをして立ち上がった。

・・・・・・・・・・

ゆうべは珍しくイホクが帰ってきた。

「あの事実」を知った後、院と何があつたかは知らないがあいつは感情が垂れ流しだから、雰囲気でだいたいの察しはつく。茫然自失としていた。何かを失ったような、どこに向かったらいいのかわからないような。

「あの事実」を突きつけられたことは、彼にとっては不幸なのかもしれない。

しかし彼が昔から持っている戦意や殺意に近い刃物のような感情は、まだ完全に無くなったわけではないことはわかった。ただ方向を失い、その刃先が一時隠されているだけだ。一旦収められた刃先は、次はその分の勢いも加算して飛び出してくるのではないだろうか。

もし彼が今、全てを失ったような気持ちでいるのだとすれば、その刃は彼の最期の力すら振り絞って飛び出すのかもしれない。

——わたしには、それは止められないがな……。

こゆるは何度目かの切ないため息をつきながら、それでも今日も彼のためにメシだけは作ってやろうと近所のスーパーで特売の野菜を手に持ち、重い気分でカゴに入れた。

その時だった。

「ほー、おねーさん今日は肉じゃが？　それともカレー？　買い物終わったらお茶でもしない？」

自分より十五ばかり歳は上だろうか。年齢は不詳、長い前髪にただのやさ男——にはない雰囲気醸し出した長身の男が自分の後ろに立ち、カゴの中を覗き込んでいた。

今日び、そんな旧人類のナンパをする奴もいないだろう。しかもぼうつとした、到底女らしいとはいえない身なりの自分に。

逆にいるとすれば、ちょっとコミュニケーション能力を疑いたくなくなってしまふ……どのみち関わりあいになりたくないな、とこゆるが「はあ」と気の抜けた返事をしてそのまま歩き出すと、男はさりげなくこゆるの進行方向に足を踏み出し、通せんぼの格好をとった。こゆるが訝しげに男を見上げると、周囲に聞こえない程度の低い声色に変わり男はこゆるに少し顔を寄せて呟いた。

「——まだ京が治まる前の昔……あるいくさで管^{カン}という一族が滅ぼされ、その生き残りの二人の子供が京の院に拾われた。姓を捨て、この世の表から消えて京の院に仕えることになったその二人は今——、……お茶でも飲みながら、北面君のことについて話したいんだけど、どうかな？」

話し方は明るく顔は笑っていたが、その声と眼光の奥底には弱い者には抗わせない強い力を孕んでいた。

何より表の世から消えたはずの自分たちの素性を知り、イホクのこととくれば、こゆるが逆らえるわけもなかった。

.....

謎の男の車に乗せられたものの、曲りなりとも京の院に仕える身、そして北面を——イホクのことだけを第一に考えているこゆるである。どんな目に遭おうとも二人に危害が及ぶならば自分などどうなってもよいという覚悟はあった。

だがカマクラから望んで受けた“御恩”——自分の命とイホクの命をひとつにしてもらったこと——を思えば、自分の行動ひとつで彼の命も奪われることになるのだから、軽率な選択もできないではないか。

——どうすればよいのだろう……。

こゆるが悩んでいる間にも男の運転していた車は目的地にいったようだった。速度を緩めて地下の駐車場に入っていく。

どこをどう来たのか。京の中でも今まで来たことはないところに連れてこられた。しかしまったくの田舎でもなく周囲に建物などもある場所だ。

同じような色の建物に囲まれ、昔からあったのか最近建てられたのか、それすらわからないくらい目立たないようにひっそりと佇むその建物。

地下駐車場に止められた車から降り、日の光を見ずにそのままコンクリートの小さなビルの中へと、「まあ狭いところだけど」と男が案内するままに従う。

「裏口からで悪いねえ」

裏口から入ると小さな事務所へと導かれ、まるで就職の面接にでも来たかのような錯覚すら起こしそうになるが、建物の中に入った男の続けた言葉でこゆるはその錯覚から目覚める。

「——ロクハラへ、ようこそ」

その10 一触即発（後編）

買ってきた夕飯の材料の入ったスーパーのレジ袋はロクハラの事務所の長椅子の上に置かせてもらった。

少々古びた事務机の前に、こゆるの座っている応接用の木の机が置かれている。男はおそらく毎日自分で淹れているのだろう、「コーヒーでいい？」と聞きながら手際よくこゆるにコーヒーを出してくれた。

「お茶しよーって言ったでしょ？ あ、毒は入ってないから。女の子にそんなことはしないよ」

そう言いながら、「はい」と男はこゆるに白いコーヒーカップを手渡す。

「まあ、話がすんだらちゃんと君の家まで送り届けてあげるからさ」彼自身は自分のデスクなのだろうが、事務机の端に腰をかけると足を組んで淹れたてのコーヒーを啜った。

実に不思議そうに自分を見ているこゆるの視線に気付いた男は、妙に人懐っこい笑みを浮かべてコップを両手に持ち直した。

「あーごめん。自己紹介がまだだったね。俺はこのロクハラの所長。ロクハラっちゃー何やってる所かご存知だね？」

詳しいことはわからないが、その名前を聞いたことがないこともない。京に置かれたカマクラからの監視役、といったところだろうか。こゆるはこくと頷いた。

それが、わしなどに何用……？と、こゆるは言葉は発さずに無言で男に視線を向けた。完全に信用したわけではないが、相手の正体については多少なりとも合点がいった。

その視線に気付いた男はもう一口コーヒーを飲むと、こゆるにも冷める前にどうぞと勧めてから本題に入った。

「いや、何も難しいことはない。北面の、『イホク』君に伝言をお

願いたいだけなんだけど」

——また、伝言？

自分のようなものが随分カマクラにいいように使われているなあと、こゆるは眉を寄せて男を見上げた。

男はこゆるの言いたいことがよく判ったように頷いた。

「あんたとカマクラ殿の関係は知らないけどさ、一度でも何か関わりがあつたんなら、あんたも巻き込まれちまったとゆーワケさ」

——このクニの、秘密の取引に。

その全容はロクハラにも知らされていない。ただ個人的に、携帯電話からいつものとおり軽い口調であの女から命が下ったただけだ。しかし軽い口調でも、それが極秘の任務だということは察せられる。何しろカマクラからの“勅命”だ。密やかに速やかに、ロクハラの長である自分一人の胸のうちに行わなくてはいけない。

こんな些細なことだが露見すれば大事となり、クニが大きな危険に晒されてしまう——のだろうか？

そう、だから「なんでもない」状況を作らなくてはいけない。男——ロクハラは笑顔を崩さないまま、下された命を果たすまでだった。

「ウチの上司はさー、見たまんまだお気楽に暮らしたいだけの人なんだよ。面倒だし痛い思いしたくないし、だから心底キナ臭いことは好まないんだろ。だからあんたのよーな欲も利権も関係ない立場の人に頼むんじゃないの？ あの人に出ったなら、少しわかる気もすんだろ？」

そもそもこの伝言がカマクラからのものと信用されなければ意味がない。ロクハラは穩便に話を続けようとした。

「……いくさは、もういやだ」

こゆるはようやく口を開いた。そこで喉が乾いていたことに気付

き、出されたコーヒを一口ぐびつと飲んだ。その苦味にこの今の状況が現実であるとまた思い知らされた。

「――なら話は早い。この伝言を伝えるかどうかで、恐らくいくさになるかならないかが左右されると思うぞ」

ロクハラはカップを傾けると空になったそれを自分が腰掛けている机に置いた。

「わしらの間だけでか？」

「『わしらの間だけ』、だからだ」

意外そうなこゆるの言葉と間髪入れないロクハラの声。

ロクハラこそ京の監視役なのだ。京の内部事情を全く知らない筈がない。

影で仕える院の一の腹心であり、彼に心酔している北面の者。謎の単独犯により潰された地方のソウリヨウたち。急襲されたオワリ。京の警備の強化命令。

察するに、カマクラの主は北面の起こしたこの綻びがこれ以上クニ中に波及しないようにしているのだろう。だからこそこの飯炊き女や自分など、カマクラの信頼をおく人間だけで事態を收拾しようとしているのだ。

小さな綻びだが、京の者との罅迫り合いから起こったものだ。しくじればクニを揺るがすいくさになる――それだけを避けるために「言いたかないけど、あんたの身内がいくさの引き金になろうとしてんじやないの？ だからあんたに頼んできたんだろ。いくさが嫌で、ソイツ助けたければ動けってことさ。――俺だって、やだもん」そこで二人は視線を合わせた。お互い信頼してよいものかわからないが、最後の言葉については同意し合っているように感じた。

「その伝言だが――」

こゆるの返事は聞いていないものの、とりあえず全部を話してしまおうと、ロクハラはこゆるの正面のソファにどっかりと座り直し

た。

「『いちこはカマクラで預かった』そうだ」

「……」

また、あの少女のことが。

前の伝言ではカマクラと会っただけのようだが、遂にあの子はカマクラに味方するのか？あれほど院に懐いていたのに。イホクがかしくなるほど院に大事にされていたのに。

——でもわしには関係ないことだ。

こゆるは素直にくくと頷きかけて、上目遣いで睨むようにロクハラを見た。

その言葉の真意も真偽もわからないが、それを告げることによる危険を察した。

「それってイホク……北面をカマクラに呼び出したいから言えってことだろう？ たえそれが本当であったとしても、カマクラ側に単身でおびき寄せられてのうのうと行けばかもあるものか？ そもそも、いちこがそこにいるかどうかの保障もないだろう？」

そりゃごもつとも、とロクハラは苦笑して肩を竦めた。

「悪いが俺もその『伝言』しか聞いてないし、その言葉の意味までは知らん（第一、中学生には興味ないし）。ただ言われたことを伝えるだけが俺の仕事だから。あの人が何を考えてのことかは俺にも知らせてもらってねーよ。だからあんたには北面にそっくりそのまの言葉伝えてもらえりゃいいんだよ。判断するのはそっちの北面だろ」

言いながらそりゃ大事な人間をむざむざと敵陣のと真ん中にひとりで送り込みたいヤツはいないよな、とロクハラは自分でもそう思い、笑った。

「——まあいつこ言えることは、カマクラ殿からはあんたを失礼のないよう迎えるように言われたよ。ここがほんもののロクハラだつて信じてもらえるようにつてコトだろ。で、信じてもらえたかはわからんけど、ホントに本物のカマクラからの言葉だつてことは確かだぜ。北面に信じてもらいてーから、一番近いあんたを通すようにしたんだろ。俺たちにはどういう意図かはわからんけど、たださつきも言つたけど、その言葉の内容が嘘でも本当でも、ウチの主はいくさだけは避けようとしてるだろうよ。これは『そのため』だろ。それだけは確かに言い切つてやる」

実際いくさになつたらトンスラしかねーよな…とふと思つたロクハラだったが、まあそれは置いて、と咳払いした。

「だから单身乗り込んできた京の腹心である北面を騙し討ちにするなんてこたあ、絶対にねえと俺は思つぜ？ そんなことになれば、さすがに穩健派な院だつて黙つてるワケにいかんだろ？」

そして腕を組んで天井を見上げてそう言つたあと、ロクハラは同意を求めるようにこゆるを見た。

——確かに。もし北面がカマクラに騙されて殺されたとあれば、同じようにいくさを嫌う院であっても、立场上動かざるを得なくなつてしまつたろう。

北面がカマクラに騙されて殺された——もしもそうなれば間違いなく西と東の均衡は崩れる。

黙つていない西の者が現れる、カマクラを正当化する東の者も現れる。それらが衝突し、それを統べる者も守る者のために巻き込まれ、いつしか誰にも止められない大きないくさと、なる。

この男とカマクラを、どこまで信じていいのかわからない。

こゆるは一度だけ会つたカマクラを思い出していた。自分に向けられた笑顔、仕草。

そして目の前の男を見た。

そして、自分の命を懸けている北面のことを思い出した。

自分が今まで大事にしてきたもの――。

そして、こゆるは頷いた。

「――わかった」

いちこは本当に京を出て行ってしまったのだろうか。この言葉をきいたイホクがどのような行動をとるかはわからない。

だが、あの少女の正体は自分もイホクと一緒に気付かされてしまった。カマクラの思うところの全てはわからないけれど、いちこの正体を知った以上、全てを失った彼にはもうそうするしか道は残されていらないような気がした。

――それに……、これがカマクラの意図ならば、それに従うことがもしももう一度“奉公”になるならば、何か“御恩”がまたあるかもしれない。虫のいい話だが、もしかしたら“御恩”として彼が救われるかもしれない。

そんな利己的な計算もこゆるにはあった。よく掴めない雰囲気をもっていたが東の主は悪人ではないように見受けられた。

この伝言を伝えたことでイホクの身に何かあってしまったえば、もう会えなくなってしまう――それはすごく嫌なことだけれど、もう引き返せないとこるまできてしまったあいつを、自分にはどうにもできない彼を、たとえ彼の命を危険に晒すことになっても「救える」のは、もう東の主でしかないような気がしてきていた。

頷いたらこゆるにも覚悟ができた。

彼を救う賭けに出たい。そして、いくさももう絶対に嫌だ。

遠い昔、京の都を二分するミカド同士のいくさが起こり、負けた勢力についていた自分の一族は滅ぼされた。あの炎の中から細い手を引いて子供である自分たちだけは逃げてきた。

幼い頃しっかりと繋がれていたその手は、今はもう離れてしまっ

たけれど、あの日から彼を守ると決めたのだ。

だから、いざという時には自分も一緒にという覚悟でこの賭けに臨もう――。

「有難う」

こゆるの答えにロクハラは安堵したような笑みを浮かべた。しかしすぐにふっと真面目な表情になって、

「解つてると思うけど、いくさを避けたいなら、あと北面との決着に他人から茶々いれられたくないなら、ぜってーにこのことは誰にも話すなよ」

と、人差し指を立ててまるで子供同士の約束のように注意を加えた。

・・・・・・・・・・

また、イホクから裏切り者と怒りをかうだろうか――。

あ、これ忘れないように、とロクハラから渡された彼の名刺を見ながら先程のことはやはり現実であることを実感し、多少の疑いはあるものの、またもやカマクラとの仲立ちになってしまった己に自分でも呆れてしまうこゆるであった。

名刺をテーブルの上に置くと、たったひとりの家族の帰りを待つ。

この伝言を話してしまったら、彼と会えるのはこれが最後になってしまうのだろうか。

――もう二度と会えないのだろうか。

そう考えると鼻がつんとし、涙が零れそうになった。しかし泣かないでおこうと思った。泣いたら哀しみに押し潰されてしまい、大切な伝言を告げるための声が出なくなってしまうだろう。涙で目が曇り、かれの顔が見えなくなってしまうだろう。

――そして、彼は帰ってきた。

こゆるはその姿をしつかりと目に焼き付けた。
ロクハラを通じたカマクラからの言葉を伝えた。
また手先に使われたのか、とやっぱり彼に冷たく呆れられた。

だけど、彼は疑うこともなくその伝言に妙に納得したようだった。
それはこゆるからの言葉というだけでなく、彼自身が院の目の前から消えたいちこを見てしまったからだっただろう。

それを聞いたイホクには不思議と激昂する気持ちはなかった。

北面としての使命感なのか、院への強すぎる執着心の成れの果てか、少女への嫉妬が限界まで募り砕けたからか——そこへ行つて何をしたいのか自分でもわからないが、その言葉が真実であれ虚偽であれ、今の自分にとっての“答え”はひとつしかない、意外にも静かに迷いひとつなく、心がそう告げたからだった。

それがどんなに危険かはわかつている。
その結果、自分がどうなるのかという可能性も解っている。

そう思い、そのような敵からの言葉を恥もなく自分に告げた目の前の家族である女を見た。

自分の命と彼女の命をひとつにしたとふざけたことを言っていたこの女を。

——馬鹿が。何故、そのようなことをした。

いつもと同じ、自分を真っ直ぐに見上げている目。それは自分の行動に偽りも後ろめたさもないことを示している。二つの命をひとつにしたことを決めた時と同じ、自分のことだけを考えているからこそ迷いがないとも言つうような。

——馬鹿な。何故、そんなことが言える。何故、俺のことばかり考える。そんな一方的な思いなど迷惑でしかない。

昔から人を傷つけることしかできなかった自分を、唯一恐れずに

蔑まずに、受け入れていた存在。その眼は昔からずっと自分からそらされることなく見つめていた。

あの日、二人で戦火の中を逃げ惑ったことも、忘れてなどいない。――それが“家族”というもののなか。それとも別のもののなか。そんなことなど知る由もないが、そんな唯一の存在にこれで会えるのも最後かもしれないという時だからこそ、静まった心にふと思いがよぎる。

あの日から、この女はどんな気持ちで自分を見てきたのだろう。何故、そんな結論を導き出したのだろう。

それを考えると、恥ずかしいくらいのかなあたたかな何かが見えてくるような気がした。

それは全てを失ったような透明な気持ちだからこそ初めて見えてきたもので、ほんの一瞬、今までそんなこと思ひもしなかったのに、何故か“それ”を求めたくなるような気持ちすら生じそうになり――北面は腰の刀の柄を強く握った。

そして、刀にぶら下げていた狐の面を顔につけた。

今、どんな顔をしていいのかわからなかった。最後まで“北面”でないと、何故か迷いを感じてしまいそうだった。

今“それ”を彼女に尋ねてしまえば、この決断が鈍ってしまう気すらした。

――コイツがそんなことをした理由などどうでもいいんだ。

最後は、結果だけあればいい――。

いや、結果ももういない。

何も、いらない。

もし俺が死ぬならば、それはあの人に依存しすぎたからだろう。生きることを恐れ、自分が生きる理由をあの人に求め、あの人

所為にしようとした代償だ。

その時は、そんな俺と一緒にコイツが死ぬ。
ただそれだけのことだ。

——だけど、万が一。

万が一、俺が生きていたら——。

全てが終わった後に、今度こそ誰の所為にもしないで自分で生きていけるような奇跡が起きるならば。

眼下の女を見た。震える手を伸ばし、自分の服を握っていた。

——もし全てが終わってもなお、自分が生きていたら、その時自分はどうなっているのだろう。

どという気持ちで、その時目の前に訪れている現実を受け止めているだろうか。

そしてもう一度、こゆるの顔を見る。

——もし全てが終わってもなお、生きていたら……、その時は——。

——その時は？

その時の現実も、その後の自分の気持ちも、今は何も想像がつかない。

だから、進むしかないのだ。今は自分の気持ちの終焉まで。

この眼差に対しては今は振り向けない。答えられない。応えられない。

殺してしまうかもしれない、たったひとりの、家族に。

そして彼は、あたたかく灯ろうとしていた最後の小さな小さな想

いの火を、かき消した。

イホクはこゆるの肩に手を置いた。
そして、ひとつの言葉を残して彼女の向こうへと去っていった。

「——ごめん」

狐の面の下表情はわからない。
冷たい手、冷たい声、優しい言葉。

閉められたドアの音だけを聞きながら、それを振り向かずにごゆるは放心したように腰を落とした。

.....

「さあーって、ちゃーんと来てくれるかな？」

まるで台風が来るのを不謹慎にワクワクして待つ子供のような
……と嵐でも来そうな真つ暗な冬の荒れた空を見上げてわくわくしているカマクラを、玄次はまたもや頭の痛くなる思いで見ている。
「ここまで来たら、やるしかないでしょー」

その傍らで、ため息混じりにあえて相手の調子に合わせた言葉を返した。

声の下で腰の刀をかちりと鳴らす。

眠り続ける少女。

この最後の激突を全て知りながらも暗い闇に沈んだままの、男。

絡まった糸が、今まさに断ち切れようとしていた——。

その11 激突／想いの果て（前編）

その屋敷への道筋は誰も知らない。――正確にはその主の下、クニを統べる組織に所属している者以外外部の人間には決してわかるはずがないもの。道路や線路などの交通機関といった目に見える手段がない。

ただ東の主に“奉公”するために歩き続け、進み続ければ、そのためであれば必ず、そこに辿り着けるというもの。

イホクは今、見たことのない屋敷の庭に居た。そこはとても静まり返っていた。物音ひとつしない。

正面には大きな屋根の平たい建物がある。それが廊下で両隣の棟と繋がっている。寝殿造を簡略化した典型的な武家造、にも見えたが、ガラス窓が備え付けられていたり、エアコンの室外機などまで見られ、中の造りはどうだかあやしいものである。

第一、ここがカマクラの住まう屋敷であるかどうかの確証はない。

――ただ自分は、カマクラに招き寄せられた。

――『いちこはカマクラにいる』――

何故それをカマクラは自分に伝えたのか。

自分のしてきたことはわかつている。

あの人に全てを捧げて、あの人に生きる意味を求め続けてきた。

そしてそれをいちこに奪われた気がしていた。

あの人に認められなくて平穏だった地を荒らし、いちこは次のカマクラであつたという事実を突きつけられ、当の少女はあの人に愛されながらもカマクラに寝返った、と聞き……いや、カマクラからの言葉も事実か否かはわからない。

だけど、その言葉を聞いて自然と心が定まった。

——様々の出来事の果てにあの人を失った。

それは絶望だった。

そしてそんな空っぽの心は、絶望の果てが東の地にあると告げたのだった。

だから進んだ。

もしあの言葉が嘘でも真実でもカマクラが自分を呼び寄せているならば、進み続けるだけで自分はカマクラへと辿り着くだろう。カマクラが自分を導いているということは、自分がそこで何かをすることがカマクラにとって必要であり、それは即ち“奉公”であるのだ。

カマクラにとって自分の何が奉公にあたるか——京の腹心である自分の命を狙っているという可能性は大きい。でも今はそんなこと恐くもなかった。

院に忠誠を誓う自分は他人に奉公する気などさらさらないが、既に自分の運命がカマクラの手中にあるとすれば、自分の意志に関係なく奉公せざるをえなくなるだろう。そうであれば、結果的に自分の体はカマクラにしか辿り着かないだろう。

しかし“奉公”には“御恩”が必ずついて回るといふ。

院以外からの恩など同じように欲しくもないが、一体奉公した後には何があるというのか。

イホクにカマクラの思惑のすべては理解できないままだったが、もう何もかも失った自分は進むしかないということだけがはっきりと判っていた。

そんなことを考えていると、何時の間には動いたのだろうか。屋敷の内部の長い廊下の上に居た。

しかしそこも同じように静まり返っていた。

誰も居ない。物音ひとつ、しない。

——いや、確かに、「在る」。
一度感じたことのある、強い、鈍い色の、しかし迷うことのない、
殺気。

イホクが顔を上げると、そこには黒い袴姿で腰に大きな刀を下げた男が腕を組み、柱に凭れて立っていた。

イホクは以前から密偵として己の顔を隠すために使用していた狐の面を付けたまま、その男と視線を合わせた。

「——いつかは殺り合うと、思ってただろ」

仕方がないように口を開いたのは、男が先だった。黙っていてもこのまま戦いは始まっていたであろうが、さすがにどちらかが命を落とすかもしれない時に、最後に言葉も残さず終わるのはあまりにもあつけないと思ったからのようだった。

待っているのはこの男であろうとイホクは予想していた。

何も斬れず、反対にあらゆるものを断ち斬ることの出来る強き刀を持つカマクラの腹心。刀を合わせ、一度は己の身を引かせた者だ。

——この相手には、丁度いい。

全てを失った自分と、未だ大事な者を背負った者。
重いから強くなれるのか、軽いから強くなれるのか。
迷いがないのはどちらも同じだ。

今は同じ、はずだ——。

イホクは狐の面を外した。

片手で刀を抜きながら正眼に構えて告げた。

カマクラの男も刀に手をかけながらそれに答えた。

「イホクと云うが、」

「一神玄次だ」

その存在を滅することになるであろう相手。

滅ぼされても、滅ぼしても、カマクラや京という肩書きではなく、剣はそれぞれの意志を持ちひとつの存在同士としてぶつかり合う。ある意味では同じ立場の、互いの命を賭け合う者の名を告げ合う。

その瞬間、二人の刀が静かな空間に鋭い音を立てて重なりあった。

・・・・・・・・・・

時は少し前に遡る。

この激突が起こる直前、いつものコタツなどがあるカマクラの生活空間ではない、彼女が御恩の力を各地に送る儀式を行う板張りの間に、カマクラと玄次の二人は居た。

——近づいて来ている——

とカマクラは大きな力がこちらに真っ直ぐ向かっていることを悟り、待機している玄次に告げた。

「じゃ、行かなきゃな」

さほど緊張した様子もなく、然るべきことが起こるだけと云うように淡々と言うと、玄次はいつでも戦闘態勢に入れるよう抜き身の刀を肩に担ぎ、立ち上がるうとした。そんな彼の耳に、

「相手は全てを捨てて此処に来るんだろうな」

珍しくカマクラの真面目な口調の呟きが聞こえたので、玄次は動きを止めて隣に座るカマクラを見た。

「奴はもう、此処に来るしかないだろうな。全てを失ったからな。傾倒していた京の心は自分だけには向けられず、あまつさえそのガキンちもカマクラに来てしまった。俺の言葉を信じてても信じてなくても、ヤツにはもうそうするしかないんだろうな」

「まあ、そりゃそーだろーが。んなのとつくに解って——」

玄次は肩の刀で――刃がないため切れることはないが、己の肩をぽんぽんと叩きながら、眉を寄せて言いかけた言葉を嚥んだ。

――何が言いてーんだ？

回りくどい言い回しにそう思ったが言わないでいると、カマクラにはそれが分かったのだらう、言葉が続けられた。

「『全てを失った』という者のチカラはどれくらいのものなんだろうな」

――心配してんのか？

そうとれないこともなかった。

しかしそうでないかもしれない。カマクラはまだ会ったことのないイホクが、どれほどの人物なのかただ想像しているだけかもしれないなかった。

判断つけかねたが、カマクラがどう思っているかと玄次の思うことが変わるわけではない。自分の考えを言うまでだった。

「別に全部失くしたからって、妄執が尽きたワケじゃあねーだろ？ 何かに囚われて全部失くしたんなら、何も失くしてねーってことと同じじゃねーの？」

なるほど、と言う様にカマクラは彼をきょとんと見上げた。が、「うんーいや、そーなんだけどさ……」

――そいつのことは、まだ解るんだけどさ……。
カマクラが珍しく言葉を詰まらせた。

――何だ？

早く言えよ、の言葉の代わりに玄次は再び眉を寄せた。

再び玄次の言いたいことを察したカマクラは、まあいっか、とため息をついて思うことを素直に口にした。

「――お前は、どーなんだ？ 一神」

「オレ？」

急に話を振られ、今度は玄次が珍しく間の抜けた声を出した。

まだあの男が此処に辿り着くまでに時間はあるものの、ここに来て不思議なことを尋ねるものである。

——確かにまあコイツの与太言はしょっちゅう聞かされるものの、己のことはあまり人に語ることはなかったか……。

玄次は肩の刀を下ろすと床に軽く立て、立ち上がりかけていた腰を下ろし再び胡坐をかき直した。

「オレの、何？」

負けるということは答えはひとつであったが、そのつもりはなくとも戦いの後もこんな風に会話ができるといふ保障はない。と言うよりも既に癖になっていくのかもしれない。もう最後になるかもしれないしな、と玄次はカマクラの戯れに付き合うことにした。

「んー。そんな風に覚悟決めて最後に此処に来て暴れるしかなかったソイツに対して、お前はどーゆー気持ちで戦い合うのかなーと思つて、さ」

カマクラの口調は特に変わったところもなく普段どおりであった。窮鼠となり追い詰められた人物を迎撃する部下の覚悟がそれに対していかほどのものであるのか、素朴な疑問が浮かんだだけらしい。

カマクラは自分よりも幾分高いところにある玄次の顔を見上げた。

その眼は、同じものだった。

自分と同じ、迷いがない眼。

だが変わったと云つても同じ人間なのだから、その奥底には昔のような迷いや弱さがきつとまだ残っているのだろうか。

それらを捨てて、自分たちは今此処に居る。

玄次はカマクラの視線をそんな思いで見返すと、そんな答えは最初からひとつしかないのです、ため息交じりに答えた。

「単純なこつた。 “御恩” と “奉公” だろ？ オレが体張るのは。ただそれだけだ」

自分とカマクラの間に今存在する、ただひとつの、当たり前、普遍的なゆるぎない答え。

迷うも何もない。自分はただそれだけのために、今此処に存在し、この女の命令に全身全霊懸けてその盟約を果たしているのだ。

自分は過去、例外的に“奉公”よりも先に大きな“御恩”を彼女によって受けた。

それゆえ自分は一生、カマクラに“奉公”しなくてはいけなくなつてしまった。自分の意思に関わらず、是が非でも。

「どんな気持ちも、何もねーよ」

自分の意思はその絶対的なシステムには関係ない。

だから迷いなどない。恐怖もない。主に仇為す者は打ち砕き、主に命じられたことには無心に従う、ただそれだけのことだ。

「——そうか」

カマクラは眼を伏せた。笑っているようにも見えた。

——そうだ。御恩と奉公、それだけだ。

それだけが自分の中に、まるで遺伝子のらせんの中に強く刻み込まれているように、今の自分の行動を決定付けている。

ただその関係に至った“経緯”は極めてシンプルで、何よりも強い自分の意思であつたのだが。

その玄次の視界の中で、カマクラの唇が何かを言うために動いた。

——『どんな気持ち』、か……それはこの戦いに関してだけでなく、自分を縛る御恩と奉公についてどう思っているか、という問いなのだろうか？

そのシステムに決定づけられた、オレのこの十何年間——それは表の世界で行き続けていた場合の話。今この世界ではもっと永い時に換算される時間——どんな気持ちで居たかなんて、

何故、自分が彼女に“御恩”を受けることになったか。
何故、自分は彼女に“奉公”することを選んだのか。
そこに働いていたのは、間違いなくオレの意思なのに――。

どうしてそうするしかなかったのか。

どうしてそうしたのか。

どんな気持ちで“其処”から這い上がって来たのか。

何を、何ひとつをただひたすら求めて此処まできたのか！

そしてそんな玄次の思いも知らず彼に向かって彼女は呟いた。それは、彼女が長いこと彼に対して抱いてきた想いから。

彼に聞かせるつもりだったのかは分からない。思わず口について出たのかもしれない。

あの日から、遠いあの日から、彼に、ずっと言いたかった言葉を。

「――ごめんな、……“玄次”」

「――！！」

その瞬間玄次の眼が鋭く光り、たった一瞬の後に、どん、という鈍い音がした。

カマクラの髪の毛がはらりと二本ほど、落ちた。
すぐ目の前に彼の顔があった。

カマクラは膝をついた玄次の体に阻まれ、壁に背を押し付ける格好となり、その顔の横の壁には彼の不斬刀が突き刺さっていた。

息を飲んで、自分を射殺すような彼の眼を、彼女は瞬きもせずに見つめていた。

その眼に宿るのは――憎しみ、と紛うような、瞬間的に沸き起った強い強い、熱い激情。

刃を持たないがどんな物でさえも必ず斬ることが出来る不斬刀が斬ったのは、彼女の髪。

それが脅しの範囲でも、殺意でも、彼は主を斬るつもりで刃を向けたということだ。

――いや、違う。

自分が彼を昔の呼び方で呼んだからだ。

自分があの日あの彼に向けて語りかけたからだ。

だから彼が刃を向けたのは“カマクラ”という彼の立場上の主ではなく、それになる前の一個の、“自分”。一生分の御恩と奉公が付きまとうこの世界に彼を巻き込んだ、彼の心に深い傷をつけた、自分。

だからそんな自分が彼を咎められるわけはなく、彼にもそれがわかっていたに違いなかった。

だからこそ、ここまで怒りを露わにしたのだ。

その“憎しみ”に近い強く鋭い眼差で“彼女”を見据えると、玄次は低い声を絞り出した。

「よく、言えたよな……お前が、それでこの何十年間を帳消しにする気なら、オレの今までの、存在の、全てをお前自身が否定することになるんだぜ」

――そんなことは、許さない。

「オレは『それ』の為にここまで生きてきた。――それは紛れもない事実だ。だから『お前』が許すも許されるも、最初から、ないんだよ」

——そんな言葉で帳消しにしようだと？

そんなことは、オレが許さない。

オレはあの日から、今までこうして生きてきた。

それが事実だ。だから、お前が「謝るべきこと」など、そもそも存在しないんだ。

第一、お前はそれで帳消しにできるのか？それくらいのものなのか？

相手にとってはそれくらいのことだったのかと思うと、玄次はそもそも怒りが沸いてくる。

自分がこれほど長く強く想ってきたのに、相手の気持ちはあの日から変わりなかったのか？ そう思うと苛ついてくる。

たとえ、お前がそのことを負い目に感じていたとしても。

オレが今まで生きてきたことが、そんなこと必要ないという証明なのに。

その11 激突／想いの果て（後編）

——あの日まで、そしてあの日から、お前がオレの全てだった。
この出会い、この運命。

オレの人生をお前に左右されてしまったこと。

お前なんかに関係なく、オレの意思で選んできたこと。

この気持ちが憎しみか何なのかわからない。

恨みでもないが、言葉にもできない。だがそれに近いくらいの強い気持ちだったと思う。

だから何年も何年も、ずっとその対象を追いかけてきた。そしてようやくお前に辿り着いた。

お前にはオレに負い目があるんだろう？だとすれば、いくらカマクラであろうとも、“お前”にはオレの言葉も思うことも否定できない筈だ。

お前はオレを、一度殺した——と思っているからだ。

だけど、オレもお前を一度殺している。

——ああ、そうだ。……負い目があるのは、オレも同じだ。

玄次は壁から刀を抜くと、大きく息を吐いた。さすがにこの昂ぶりには自分でも少しばかり驚いているかのようだった。

彼は再び刀を肩に担ぎ、ふつと苦笑して立ち上がった。

「こんなで終わりにしたくねえなあ」

それに対し、

「……そーだな」

カマクラも同じように溜めていた息を吐き、疲れたように笑う。

「——行ってくる」

そう言っただけで彼女の方を見ると、後は振り向くことなくい

つものように真つ直ぐ前を見据えた。

こんな喧嘩みたいな形で最後になるかもしれないのは本意ではないが、謝るつもりもない。お互い様だと思うから、そして何の飾りも嘘もない為るべくして為った率直な気持ちだから。

言いたいことを言った後には、もう個人ではなくカマクラを守るという責務に戻るだけだった。

「お前は？」

側近でありカマクラの身を守る役目である自分が侵略者を迎え撃つのは当然だが、事態はもう、ただあの男を倒せばよいという簡単なものではないだろう。

玄次はカマクラに問いかけた。

「俺は俺でやることあるよ」

だから行つてよし、とカマクラも同様にいつものように特に説明もせず追い払うように玄次に手を振った。

そして時が、来た。

玄次は部屋を出て、二人は最後の賭けのために別たれた。

扉が閉まり、再び薄暗さが戻ったところで、カマクラは額に手を当て前髪をぐしゃりとかき上げて、は、と笑った。

——言わせても、もらえなかったか……。

自分ではずっとずっと言いたかった言葉。

そのために、生きることを選び、カマクラとなったのだから。

あの時、彼の手を離したのは自分だ。

——今更、か。

今更、何が彼の心に届く。

やっぱり、もうとつくに……遅かったのだ。

じくじくと鈍い痛みが自分を走る。それはカマクラではない、「本来の自分」が感じる痛みであつた。

だがそれはほんの一時。

その後は彼女もまた「カマクラ」に戻り、最後の博打に挑むのであつた。ほんの少しだけ、心をすれ違わせたまま――。

カマクラがわかっているのは、長いこと告げたかつた言葉を彼に拒絶された、ただそのことだつた。彼を傷つけたことを今でも後悔していたから。

玄次が怒つた本当の理由までは、おそらくまだ理解していないだろう。

――あー、確かに。こんだけかけた永い時間を、こんな形で終わりにしたくねーな。

それは玄次にとってまたこの場所へ帰ってくる理由としては随分不本意なものであつたが、とりあえず今はそこまで話している時間がない、と青年はその歩を進めていた。

どうやら戻つたらまずこの誤解を解くことから始めなくてはいけないのかもしれない。

.....

――ここ、はどこだろう……。

白い霧がかかったような、前も後ろも上も下もわからないようなふわふわした場所。

どこへ向かったらいいのかわからない。でも私はどこかへ行かなくてはいけない。動き出さなくてはいけない。
いちこは足を動かして前進した。

——どこだろう、ここは。

歩いていたら足下に部屋が見えてきた。
それと一緒に、耳を塞ぎたくなるような、激しい——音というものではない、力と力がぶつかり合う時に響き、震える空間の衝撃、そういったものを感じた。

そこから感じられるのは強い二つの殺気——だからそれに対して感じるのは、恐怖だった。

それが自分に向けられたものではなく、自分がその力に消されることはない。直感でわかっていても、その力を行使している二人の男の激情、強いそれらがぶつかり合って生じる衝撃へ恐怖を感じていた。

弱い自分はその“強さ”に唯今は、恐れ震えるのみだ。

——見たくない。

そう思ったのに、足の下は霧はどんどん晴れていく。
向こうの空間はこの空間と同じではないようだ。まるでガラスで隔てられたようなものだ。

見たくないがその光景が眼に飛び込んでくる。

二人の男が刀を交じり合わせている。

——げんちゃん、と、北面のひと、だ——。

北面が自分に殺意を向けた時の恐怖。カマクラ方の玄次が自分を助けてくれたが北面を躊躇いなく斬ろうとした殺意。

大切な者のためにもうどこにも引き返せない二人のそれは、その時以上にぶつかり合うことにいちこの耳に大きく響き渡る。

耳を塞ぎたくなったが、そこから逃げてはいけない、と思った。

自分が次のカマクラである以上、自分も彼らも同じ線で運命が繋がっている。自分が存在しているから彼らは戦うことになったのだ。そしてどちらかが、滅んでしまいかもしれないのだ。

いちこは高鳴る胸を抑えた。はーはーと大きく息をつきながら、視界から消えない二人の戦いを見つめるしかない。

どれぐらいの時、二人が刀を合わせていたかわからない。思っていたよりも長かったかもしれないし、短かったかもしれない。

重い刀を持つ玄次は立ち位置を大きく変えないが自分の体を軸にして大きめの刀を振り回し、軽々と跳び多方向から自分に打ちかかってくる北面の刀を受け止めて弾き返す。

何も斬れないが丈夫な刀。人の剣を受け止めるくらいで碎かれることはないという自信がある。その分、自分の腕に重みがかかるがそれは鍛錬の賜物と気合で持ちこたえる。

だがそれもそう、長い時間は持たない。隙が生じる前にどこかで体制を整え、たった一度の、最後の一撃を振り下ろさなくてはいい。

無心になって、相手の動きだけを反射のように素早く追う。眼で、脳で相手の体勢や動きを的確に把握して先読みし、それより速く動かなければ殺られる。

それは北面も同じだった。玄次の一撃を喰らう前に、彼に致命傷を刺さねばならないのだ。

だからこのことは玄次が今考えていることではなく、彼の心の奥底で沸き起こっていたひとつの覚悟であった。

……最初のカマクラの問いについては、前から考えていた。

北面のことをだ。

最初に奴と剣を交じえた時から、カマクラがもう一度北面と戦い合えと言った時から、カマクラやこの刀を授けてくれたあのシッケンの男から、この刀をこの手に今一度渡された時から、迷いひとつあれば何も斬れない剣で自分は何を斬るのかを。

望むのはこの全てを失くした、クニを荒らす暴走をする男の命の抹消か、それとも――。

『お前はどんな気持ちで戦っている？』

――オレが戦う理由は「カマクラ殿への奉公」、ただそれだけだ。

そうだ、自分はそれだけなんだ。コイツが京の院のためだけを考えているように。いや、北面のような個人的な思慕以下の、ただの絶対的な主従関係で――。

……だがこんな関係に至った理由は、逆にもしあの女がカマクラでなければ、自分は今、間違いなく此処にはいなかった。あの女がカマクラでなければ、御恩と奉公などに縛られることはなかった。だから自分が命を懸けるべき「カマクラ」は過去にも未来にも唯一人だけ、ということなのだ。

――そう、今のカマクラの、『一湖^{イチコ}』という人間の存在所以に、今の自分の行動は有るのである。

自分のこの行動を決定づけているものが、たったひとりであること。

その迷いのなさだけは、相手も自分も同じだった。

その違いが何か、などわからない。

ただど少なくとも自分はもう、「ソイツがもしいなければ、“今まで自分が生きてきたこと”自体が存立しない」――それだけが理由だ。

そして、あんな辛い後悔はもう二度としたくはない。

アイツとアイツの守りたいモノを守り、それをもう絶対に手放したくない。

今度こそ、手を離さない。守りきる。

物心ついた時から、自分の世界は『アイツ』、だけだったんだ。

……そういう意味ではただ感情的でないだけで、下手をすれば北面以上に自分の方が相手に依存しているのではないかと、玄次は後に自分に突っ込みたくなるのだが、今の彼にはそこまで考える暇はない。

そのただひとつの想いで、不斬刀を振り上げた。

一瞬過ぎつた、あのやる気のない笑顔。

アイツの望みはなんだった？

——守りたい。

今度こそ、大人になった今度こそ。それを、——叶えたい。

思いが碎けるのと同時に、玄次は北面の刀をそれまで以上の力で弾き、その力で北面もまたそれまでになくバランスを崩した。

その時を逃さず玄次は間合いをとり、不斬刀は振り上げられた。

太い刀が鈍く、光る。

この、ぞくりと身震いする感覚を、北面は知っていた。

——来る——。

一度、この男に斬られそうになった時のことを思い出す。
肉を斬られるのとは違う、魂まで打ち碎かれて抹消させられてしまふという、あの恐怖。

剣の切っ先、表情、視線、姿勢、呼吸。

刀が振り下ろされる時間はたった一瞬なのに、相手のそれら全てが静かにひとつになって、照準は迷うことなく己に真っ直ぐ合わされ、スローモーションのように刀の動きが見える。なのにその軌道から自分はもう、逃れられない。

殺られる——そう思った。

だが前回とは違う。

命が惜しい、惜しくない、の問題などではなく、それよりもずっとシンプルな、ただひとりの人を失った哀しみと悔しさ、その想いを全てひとつにして、

その激しさが勢いとなって北面の剣に宿り、相手からの必ず受けるであろう一撃にも最早怯むことなく、北面の腕や足の動きを加速させる。

玄次の重く太い剣が唸りをもって振り下ろされ、北面の細く鋭い剣が素早く勢いよく突き出され、

双方の肩のあたりに、同時に斬りこまれ、——血飛沫が、舞った。

.....

実像ではないが血の海が視界一面に広がり、いちこは悲鳴を上げた。

しかしそれは“向こう”の二人には聞こえないようだった。

それよりもその朱が空間全体を覆い始め、彼女がその光景を拒否すると同時に朱色の空間が歪み、真っ暗になった。

——恐い！嫌だ！！逃げたい！！

いちこは叫び、恐くなって逃げ出した。

すると、今度はぼつかりと空間に穴が空き、すとん、といちこはどこかに落ちた。

そこは先ほどまでの光景と違って変わり、爽やかな緑の森がある山の中だった。

あまりのギャップに少女はきょとんとしていたが、とりあえず恐いものは去ったのだろうか。

思い出せば今でもまだ震えが走り気持ちが悪くなるが、聞こえてくる優しい鳥の声を聞いているうちに少しずつ心が落ち着いてきた。

——あそこからは、逃げられたんだ……。
安堵するが、また疑問が胸をよぎる。

——今度はどこに、来てしまったんだろう？

山の中には、一軒の小さな家があった。まるで小屋のような小さな小さな家だった。

そのいちこの横を、小さな五歳くらいの男の子がとことつと駆けてきた。

彼はいちこの横を素通りしていく。どうやらまた、空間を一枚隔てているらしい。

黒く短い髪の少年は頬などにあどけなさはあるものの、遊びに行くにしては子ども染みた愛嬌はあまりないように思えた。その子どもが小さな声で呟いた。

「いちこ、いるかな……」

——いちこ??

自分のことを呼ばれたのかと思い、いちこは首を傾げた。

その少年は小屋へと入っていった。

いちこが不思議に思いながらも、その少年の後をついて小屋へ向かうと、ほどなく物が落ちてくる音や何かが割れる音など、けたたましい音が小屋から響いてきた。

鳥も驚いて飛び立つほどの賑やかな音に、いちこも首を竦めた。その騒ぎが収まった頃、彼女は小屋の近くまで辿り着きそつと窓からその中を覗くと――、

「まっつたやりやがったな……！　こん、のクソガキが……っ！！」
白衣を着た髪の長い若い女がひとり、頭に手をやり心底迷惑そうな声で先ほどの少年のことだろうか、部屋の奥の方を睨んでいた。

「いー加減に、しろ……ってんだろーがっ！　玄次っつ！！」

その女の声は、今の気力のない声と違って随分と怒気を孕んでいたが、会った回数は少ないもののしっかりと聞き覚えがある――あの東の主と同じものであった。

その12 ふたりのはじまり1（前編）

「出てけっつただろーがーっっ！」

つまみ出したはずの五、六歳の少年……玄次は、ちゃっかりと小屋の中央のすり鉢やビーカーなどがある薬を調合するための作業台の下へまた戻ってきていた。

少年に「いちこ」と呼ばれたその怒る女に対し、少年の方は無表情で何も喋らなかったが、作業台の上にある珍しい植物やガラスや陶器製の器具を興味があるのか眺めている。

触んな、出てけ、と女ががみがみ言ううちにも、また何か別の物がひっくり返る音が響く。

そこへ、

「おい、玄次ー。夕飯だぞー……ってやつぱココかー」
新しいのんきな声が入ってきた。

「村長……。頼むから、コイツなんとかしてくれ……」

女は玄次の襟首を掴むと、今しがた小屋に入ってきたこのムラの村長である、穏やかな笑顔をたたえた初老の男に向かって放り投げた。

年齢や痩せた体躯にしてはそれをしつかりとした腕で受け止め、彼はのほほんと笑った。

「だってー、この子がココが気に入っちゃってんだから仕方ないじやん」ちーっとも笑わないし何にも興味示さない子なのに、一湖さんのところだけは行きたがるんだよ？ いーじゃん」

“じゃん”じゃねえよ……と思いつながら、一湖と呼ばれた女は、「とにかく！ 迷惑なんだ、以上」

と初老の男共々二人をその小屋から追い出すと、目の前で扉をぱたんと閉めた。

「あー、また追い出されちゃったー」と初老の男は玄次を見るが

——といっても目が合うことはほとんどなく、彼の空ろな目は一湖の消えた方向をそのまま追っていたのだが——、

「さ、ごはんにしよっか」

と玄次を抱いたまま妻の待つ家へと帰っていったのであった。

——村長の頼みでなかったら、完つつ全に無視してんだがな……。玄次の散らかした後を片付けながら、一湖ははああと大きなため息をついた。

これは女子中学生の「いちこ」の目の前で繰り広げられていた光景だったが、また空間が捻じ曲がったのか、また新たな「彼」と「彼女」の記憶を映し出した——。

・・・・・・・・・・・・・・・・

一湖がその村に移り住んだのは、数年前のことだった。

十五の時に親を無くし、身寄りもなく一人で生きていかねばならなくなり、とりあえず病気にさえならなければ生きていける、と独学で植物から薬を調合するようになった。

おかげで医者に行くこともなかった——が、もっとも調合を間違えて気がついたら三日寝たままだったなど、一歩間違えれば恐ろしいこともあった。

親が借金を抱えていたため、住んでいた家も差し押さえられて失い、食事と宿があればよいと日雇いで色々なところで働いた。

確かな財産も抛り所も何もなく、その日その日を生きてきた。危険な目や面倒なことに巻き込まれそうになったらその土地を去った。だから人間関係を築いたことなどなかった。

そうなったところで、自分の居場所ができるわけでも助けてもらえるわけでもない。それによって傷付くことを恐れて。

そしてそんな一湖が流れ着いたのが今住んでいるムラであつた。丁度金がつき宿も見つからず路上で寝ていたところを、あの村長に拾われた。妻と二人暮らしの彼は自分の家に何処の者ともしい彼女を連れて行き、同じく温厚な夫人が温かい食事を振る舞ってくれた。そのうえ身の上話を聞き、「ここは薬師もいないし医者も大層遠いような田舎だから、ここに住まい薬師として仕事をすればいい」と昔、人が住んでいたらしいという山の中の古い小屋を改装し、自分に与えてくれた。

このムラの人間は細かいことを気にしないのか、それとも村長の人柄に皆が信頼をおいているからか、自分の薬を当てにして注文にくる村人が多く、そのお礼に作物や微々たる礼金をもらう生活ができるようになった。

礼金で器具や資料を買い、薬草は自然豊かな山からいくらでも採取できた。野菜も自給自足とし、一湖はようやく腰を据えて安定した生活をなんとか送ることができたのであつた。

それでも、所詮は流れ者。面倒事には巻き込まれたくない。だからいつここを去るかわからない。

相変わらず人との関わりを極端に嫌い山の中に一人住み、村長が様子を見にお茶を飲みにくる以外は薬をもらう村人が恐る恐るやつてくるくらいであつた。

それでも日々安定した生活と人に干渉されない静かな環境、その二つが手に入つたのは彼女にとって幸いであつた。

——そう、あの子供を拾うまでは。

ある雨の日のこと。

一湖が街へと買い出しに出かけた帰り、ムラの外れ——の彼女が

最初にこのムラで拾われた場所と同じ辻で、子供が一人雨に濡れて座り込んでいた。

訝しくも思ったが、そのまま通り過ぎようとした。しかし子供は微動だにしなかった。

——面倒臭い。

心底そう思ったが、見殺しにもできない。一湖は仕方なく戻り、観念して声を掛ける。

「——おい」

子供はゆつくりと顔を上げ、彼女を見た。

その時の感情のない眼、だが奥の奥の奥底にようやく誰かが声を掛けてくれたという絶大な安心感が見え——そのためだろう、子供はゆつくりとその場に倒れ込んだ。

——なんだなんだなんだ！？生きてんのか！？死んだのか！？つかー！ああ！もうっ迷惑極まりない！

そう思ったが仕方ない。一湖はその子供を背負って雨の中を走り、村長の家に放り込んできた。

それで帰ろうとしたが、このムラには何年か前に最後の医者が高齢で死んでしまっただけで以来医者がいないのだ。これで収まるわけがない。

彼女も医者ではないが、村長に「一湖さん、なんとかして〜」と泣きつかれ、栄養失調で熱まで出している少年に何かと薬を運んだり世話を焼かばねばいけなくなってしまった。

数日後、子供の熱も下がり、その面倒の種は村長の家で今後面倒みるらしいのもういいだろうと一湖は山の中の小屋に戻った。

これで一件落着——と思ったが……

まるで戻ってきた捨て犬のように、その少年がちょこんと自分の家の中にいるではないか。

無断侵入なんたることか！てかあちこち触るな」と一湖が騒いでいると村長がへらへらと笑いながらやってきた。

どうやら村長は、自分が玄次の命を助けたという話をしたらしい。「なんかこの子、一湖さんに拾われたこと覚えてるみたいでさー。何話しかけても答えてくれないのに、勝手にここまで来ちゃった」それこそその子供は無表情だが動物のような黒目の大きな瞳で、自分をじいーつと見つめてくる。

……やめてくれ。

人間、特に子供なんて自分の人生では関わる予定も経験もなかった。

分別のある大人ですら面倒臭いの、言語が通じず素直に感情をぶつける子供は尚更鬱陶しいと感じるのだ。

——そんな自分は相当捻くれているのかもしれない。村長のような人当たりはいいが人の心に土足で入らないでいてくれる人物はもちろんのこと、よほど昔自分を騙そうとしたり手を出そうとした薄汚い大人の方があしらいが楽である。

そう、誰か人を愛したことも愛された経験もないから。

借金を抱えて死んでしまった父親、残された働き続ける母親。その母親も過労で亡くなった。

お金を貸したのも借りたのも、誰も助けてくれないのも——その環境が人との関わりを一湖に厭わせ、いつしか友人関係すら築けなくなつた。

それよりも昔は、両親も仲がよく友達もいたかもしれないが、思ひ出せない。

もう、何もかも昔のことだ。

——それなのに、いきなり子供に好かれるなんて思わなかったぞ。そう戸惑う一湖だが、

「じゃ、よろしくね」

——じゃねえ！村長！！

村長はその子を置いて機嫌よく帰ろうとする。

「だってこの子、一湖さんにだけ初めて興味示したんだもん。僕や近所の子供が話しかけてもいろんな遊びで誘っても、だめだったのに。何かよっぽど一湖さんにインパクトを感じたんだねー」

その理由はその子自身にもわからず説明できないだろうが、あえていえば「刷り込み」みたいなものかな？と呑気なことを村長は言っているが、そんな、「自分だけ」なんて重いこと、受け入れられるか！と一湖は抗う。

……しかし、結局その捨て子、玄次（この名は彼の所持品に唯一記されていたもの）は、それからというもの一湖に毎日まとわりつくようになったのであった。

村長曰く、親のことについては何も覚えていないのかわからないが、玄次は口を開かないらしい。行く当てもないようなので村長夫妻の家で育てているものの、昼間はいつのまにか飛び出しては一湖のところへ行ってしまっ、らしいのだ。

頼むから止めてくれよ……と思うのだが、村長は閉ざされた玄次の心を暖めるものは一湖しかないと思っっているので、止めるわけもない。

『あの子の心が満たされればさ、きっと一湖さんからも離れてちゃんと成長してくよ』

と歳の功が、そんなことを彼はよく言っていた。

——そうは言ってもな……。

玄次は自分の命を助けた薬にも興味があるのか、ただ単に一湖の真似がしたいのか、どうにも子供らしく彼女のしていることに興味があり同じことをしたいらしく手を出してくるので、一湖の仕事の邪魔になって仕方がない。

ガラス器具などは割られたら買っしかないのに、いくら怒っても手を出す。そもそも一湖は子供にどのように接したらよいのか教えたらよいのかわからず怒鳴ってばかりなのだ。だけど玄次は怒られても彼女に構ってもらいたい（寧ろ怒られたいのだろう）——よつて、その悪循環になっていた。

——だが。

「ほらよ」

一湖は玄次の方を見もしなが、苦い薬草で作っただけで栄養だけは豊富なブレンド茶を彼の分も一緒に作って無愛想に手渡した。

彼女が全くの悪人ではないことを本能的に玄次は知っていた。

怒ってばかりいても、出てけと言われても、こうして一緒にお茶を飲ましてくれたり、なんていうんだろう、絶対に「見捨てない」だろうという安心感が、親には感じられなかったのにこのひとには、なんか感じられる、と幼い少年は思っていた。

——最初に自分を見つけて戻ってきてくれた時の、あのほっとした嬉しかった気持ち。

「親」のことはよく覚えていない。だけど、このひとは親の代わりじゃない。それもわかる。このひとは、このひとだ。

自分には、このひとしかない。

そして、きっと——このひとも、自分しかない。

彼は直感的にそう、思っていた。

玄次の感じるその「安心感」は、自分を守ってくれる者、に感じる絶対的なそれとはまた違い、自分と同じさみしさや孤独を持つ者に感じる「同属意識」であるということに幼い彼はまだわかっていなかった。

だが、同属でもなんでも彼女は自分を見放さない。どうしても気

にしてくれる。そしておれも、怒ってばかりなのにとってもさみしそうなあのひとが、とっても気になる。

怒られてばかりだが、ほんのふとした時、薬草を採りに行き、木から落ちた自分への心配そうな視線とか、自分の姿が草の陰で見えなくなつてその姿を探してくれる視線とかを背中越しに感じるのだ。

——あのひとがいるという、安心感。

それに一湖も気付いていると子供の玄次は思っていた。

だが彼女は大人であるにも関わらず、そんな彼の心をわかっていなかった。

否、大人であるからこそ余計に意地を張り、色々なことを予測して恐れを抱きそれから眼を背けていたのだった。

そして、その事件は起こった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

事件が起こる少し前のことだった。

一湖の住む小屋の中に干して掛けられている薬草は大体が使用されていたが、ひとつだけガラスの小さな標本ケースに入つて、戸棚の隅に置かれている紫色の小さな見たことがない花があることに玄次は気付いた。

「——あれは？」

滅多に喋らない玄次が口を開いたので、一湖は思わずつられて答えた。

「あーそれは……って触んなよ。たまたま市場で見たんだけどさ、でも売ってる花屋はワケもわからず花が小さいから売れねーとか言うんで、タダでもらつて来たんだがな……」

それは、世にも珍しい薬草なのだ、と一湖は教えた。

幻の花でそれを元に薬を作れば万病に効くという薬草。それも直接的に病原を取り除くのではなく、命が尽きるその時にそれを与えれば、その命を吹き返すという威力をもつ——つまり病気や怪我の症状を緩和するのではなく、人の生命エネルギーそのものを助長するのではないかと言われている幻の植物なのだ。

「ただの言い伝えだし本当かどうかはわからんが、それくらい手に入らないブツだ。現に、コイツを一部でも使ってる薬は高値も高値だが、かなりの難病にも対応しているらしい。ま、もっともこんな量じゃ何にもならんけどな」

自分の力で自分の命を守ろう。そう思い、一番手っ取り早く、現実的に薬を作るという方法を勉強したのだが、これだけは唯一、現実主義の一湖が夢を見たと思えることだった。またそれくらい、美しく儚い花であった。

いつのまにか玄次が自分を間近でそれこそ珍しそうにじーっと見ているので、一湖は慌てて不機嫌な表情を作ると、「だから勝手に触るなっつーの！」と彼を小突いて背を向けた。

どうやらいつのまにか柔らかい表情をしまっていたらしい。珍しそうに、そして珍しく柔らかい——きっと自分と同じ——表情で自分を見ていた玄次の眼からそれがわかり、一湖は忌々しそうに舌打ちをした。

その12 ふたりのはじめり1（後編）

「——どこ行けば、それはあるんだ？」

更にそんな一湖に玄次は珍しく質問を続ける。しかし自分自身に苛立つてきた一湖はぶっきらぼうに答えた。

「だから、珍しいんだつつてんだろ。すっげえ切り立った崖つぶちとか、そーゆー山の中の手の届かないようなところにしかねーの！」

「あーゆーとことかか？」

玄次は窓から見える山奥の崖を指差した。

「知らん！ あるかもしれないかもしれん。危険とか金かける割にちつとも生えてねーもんだから、その金と手間を研究に使った方がマシってことで誰も採らんくなつたし幻になつてんの！ この話はこれで終わりだ！！」

一湖はたちまち不機嫌になるとその話を切り上げ、花の標本を玄次から取り上げた。

それから少ししてからのこと——。

ムラの男衆が薬を取りにきた時のことだった。よほど一湖が恐いのか、結構二人連れなどで来ることが多いのだが、小屋を出た男たちのこんな話し声が一湖の耳に聞こえた。

「あのボウズ、薬師のセンセの隠し子かと思つたー」

「村長のトコで預かつてるボウズだろ？ すっげえ懐いてるよーだし」

「んだ、あの子が来てからセンセもなんか、やーらかくなつた気がしねえか？」

「あー、そーだなー」

「……」

男たちが去っていった後——、一湖は玄次をゆつくりと見た。彼は何か図鑑を熱心に読んでいる。あまりに熱心で彼女の視線には気付かないようだった。

今の男たちからだけじゃない。あのように言われたことは。村長にも、他の村人にも、自分の変化を指摘されている。

それに対し、自分の心が感じるのは——、強い、拒絶。

拒絶の理由など、本当は簡単なことだった。村長あたりに言わせれば、ただ「照れてる」だけだと言われてしまふくらいであるだろう。

だが彼女は今までそういった感情を抱くような人間関係を築いてこなかった、そういった感情が生じるようなこと全てから逃げ、遠く経験してこなかった彼女にとっては、その感情は居心地の悪い「違和感」と認識され、その裏側にある慈愛の感情も含めて認められなかったのであった。

——ただ単に、恐かったのだ。いつか、何らかの形で奪われ、裏切られてしまふかもしれないことが。

愛してしまったその先に、今まで経験してこなかった感情が起こり、今までにない行動を起こすであろうことが。

それ故にまた悲しみを感じてしまふこともあるであろうことが。

——何も、感じたくない。

面倒なことはごめんだ。

傷付きたく、ない。

怯え、逃げて、人も自分も信じていない。——その代償。

しかし子供であり、また恐れというものからそもそも縁遠い玄次には、一湖の心情の変化にはまるで気付いていなかった。

今までも、十分一湖は無愛想だった。だが、それでもどこかあたたかかった。最近では、とくに。

——なのに。

玄次の心を冷たい風がとおり抜ける。

自分をそこにいないように扱うようになった、あのひとのしぐさ。それはある日、突然だった。

——どうして？

自分が愛されたいと思っている者からの拒絶ほど、辛いことはない。

さすがに、自分をここに住まわせてくれる村長が大事にしている子供だ。無理矢理追い出すことはなかった。

だが、今まで以上に、避けるように、どこかあたたかい怒鳴り声も、消えてしまった。

——どうしていいのか、わからない。

——どうしていいのか、わからない。

それは、二人とも同じだった。

だが、玄次は一湖のもとへ通い続けた。

いつか、自分の想いが通じることを夢見て。それを願って、信じて。

彼女もそれに気付いていた。それが、わかるだけにどうしたらいいのかわからない。

そんな玄次の真っ直ぐな想いが、益々彼女には恐かった。

自分なんかを想う心。臆病な自分には到底持てないと思う心。頼むから、お願いだから、自分に、これ以上関わらないで――。愛されたくない、愛したくない。

――恐い。

そして彼女がとった行動は、大人げなくも相手を拒絶することだった。

玄次にはまだその理由がよくわからなかった。だけど、自分の所為で彼女の心に何か変化があったことはわかった。だからこそ必死になって通った。

彼も子供であり、また、寂しかったのだ。だから、ある日、

ぱりん、という乾いた音がした。

一湖が目を向けたそこには、例の大事にしていた標本ケースのガラスの破片と、無残に散ってしまった乾いた紫色の花びらが落ちていた。

その前に立っていた玄次と目が合った。

後ろめたさ、訴えかけるような悲しさ――それがあるのに自分に熱い何かをぶつけてくるような気の強い眼差を、していた。

「オマエ……っ！！」

――わざとだ！

一瞬で察した一湖は、かっとなって手元の机を拳で強く殴りつけた。

乾いた大きな音が響き、玄次はびくと身体を震わせた。

彼は相手の大事なものを傷つけることしか、自分にもう一度目を向けてもらう方法を思いつかなかったのだ。

——そんなこと、わかってる！！

ただ、その強い想いの全てが、一湖には受け止められなかったのだ。

その時の最後の手段をとってもやはり自分を拒絶した一湖と目を合わせ、玄次は泣きそうな表情になると、再び感情の無い冷めた眼差しに戻り彼女に背を向けて走り出した。

——ああ、自分は今、どんなに醜い表情をしていたらうか。

一湖は力が抜けたように、その場に座り込んだ。

頬を熱いものが伝わり、ぽたぽたと床を濡らしていた。

外にも同じように、泣いているような雨が降り出した。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その夜のこと——、

「一湖さん！！ 玄次知らないっ！？？」

強くなる雨の中、村長が慌てて駆け込んできた。

「雨も降るのに、傘も持ってないのに、帰る時間になっても帰って来なくて——」

——どくん……、と一湖の心臓が嫌な予感に打ち鳴らされる。

「雨だし暗いから、誰もどこ行っただか見てなくて……」

——自分の……、自分の所為だ！！！！

己の罪の深さに打ちひしがれている場合ではない。いくら、その想いを受け入れるのが恐くとも、消えていい命などない。

許されることはないとわかっていても、少なくとも自分の所為であると叫びたいほどで、目の前の村長に謝ると一湖もまた外に飛び出した。

原因が自分にあるなら、あの子の自分への想いをもう遅いけれど信じるならば、心当たりが、ひとつだけあった。一湖はそこに急ぎ向かった。

彼の想いを受け入れることは、今でも恐い。だが今は自分の我侭で一人の子供を危険に晒している、その罪の方がよほど恐かった。

『あーゆーとこに、あんのか？』

一湖が大事にしていた花の標本。唯一、自分を柔らかい表情にさせたもの。

それを、玄次だけに唯一見せたこと。

きっと、子供のことだ。あれを壊したことで自分が怒っていると思つて、自分が大事にしていたあれを採ってきて見せれば、今度こそ自分が玄次に向けて笑うと思つて――。

玄次と話していた時に、彼が指を差した方角へと山の奥へ進んだ。他の村人も一緒になつて探しているようだが、一湖のいる方角へは誰も来ていなかった。

どれくらい進んだらうか――、ふと目の前が開け、眼前に崖が見えた。玄次が一生懸命見ていた図鑑、あの図鑑に載っていたあの紫色の花は、このような崖に生えている写真であつた。

まさか、と思い一湖が崖の下へと目を凝らすと、途中に生えている木の枝に黒い影が見えた。

――まさか……！

「玄次……！？」

その声に、その影は反応する。人の顔――のようなものが、一湖

を見上げた気がした。

——やっぱり、……来てくれた!!

彼は信じていた。だから何も恐くなどなかった。

自分を恨んでいるだろう、そう思い込んでいる一湖には今の玄次の喜びなどわかるはずもない。

だが彼が動いたことによって、その枝は折れ、小さな身体は枝ごと崖下へと落ちようとしていた——。

「——!!!」

一湖は叫ぶと、助かるわけも無い崖下へと身を乗り出した。

.....

——痛ってえ……。

一湖の顔に、雨が当たる。

上を見上げているから、雨が放射状に降っているように見える。

背中が、焼けるように熱い。子供の、悲鳴のような大きな泣き声が耳に飛び込んでくる。

一湖の視界に泣き叫ぶ玄次の顔が目に入った。

痛いので思考はあまり働かない。

だが自分が玄次を見上げているということは、自分が下敷きになったということ……。

——玄次は助かった、のか……？

だが、よく見ると彼も怪我をしているようだった。深い朱色の液体が落ちてくる。雨でその色も、臭いもよくはわからないが。

だがこの痛みと感触から、怪我が酷く血まみれなのは自分の方ではないか、と思い当たった。死が迫っているというのに、諦めからか、逆に驚くほど冷静になっていた

玄次の頭のずつと上の方に崖の頂が見えた。どうやら地面に落下できたらしい。

しかしあたりは鬱蒼とした森に囲まれている。互いの怪我、冷たい夜の大雨。

——助かったつつつても、このままじゃー、二人とも死ぬ……。一湖はぼんやりとした頭で考える。

玄次は叫び続けた。

自分の怪我よりも、命の危機よりも、自分の目の前で、一湖の命が消えようとしている。何よりも、大事だった、かけがえのなかった存在の。

それに対する恐怖と焦りが優先して泣き叫ぶ。そして彼女の意識を確認しようとしている。

——あー。うるせー。

ガタガタ叫んでねえで、自分のことなんぞ、どーでもいいーから、早く村長のところ、行け。

誰かに、助けて、もらえ。

でないと、助かった命なのに——、オマエも、助からない。

玄次の涙は、後悔のものに見えた。

自分を助けた所為で、一湖が死んでしまう。自分なんかの、所為で——と。

それを拒絶するように泣き叫んでいるのだ。

——泣くな……。

違う。オマエの、所為じゃない。

悪いのは、自分だ。

——ごめん……。

そう、思うのに、もう、伝える声も出ない。

——頼むから、泣くな。

そして、誰か、コイツを、助けてやってくれ。

そして、——

——。

最期に、その泣き顔だけを悔しく胸に焼付け、そして、一湖の意識は途切れた。

何も見えない、途切れた意識の中で、一湖は何か暖かい、光を感じていた。

——これが死ぬってことなのかな……。――

.....

その13 ふたりのはじめり2（前編）

一湖が目を覚ますと、そこは静かな部屋の中だった。目の前に、見知らぬ男が立っていた。

「――起きたか」

男が彼女に声を掛けた。

彼女が腕を見ると――腕だけでない、全身に包帯が巻かれていた。白い壁。カーテン、窓。小さな棚。自分が眠っているベッド。そこは病院の中であるようだった。

――生きてたのか……？

包帯が巻かれた腕を確認した後、一湖ははっと気付いて起き上がるうとした。

「玄次は……！」

その瞬間、背中を走る熱い痛み顔に顔をしかめる。体中が痛い。起き上がるなど到底できない。

だが、命懸けで自分に近づこうとした子供の安否が気に掛かった。

「その子なら、助かったよ」

この男は一体何者なのか。一見自分と同じくらい若くも見えたが、その年齢にしては随分と貫禄を感じる。

「あんたが……助けたのか？」

しかもこの男は自分と玄次が怪我をしていたのを知っているようである。

「いや」

男は薄く笑うと首を振った。

「――お前が、助けたんだ」

「何言って――」

意外な言葉に一湖は即座に言い返す。

——だつてあれだけの怪我をお互いしていた上に、あの山奥でも意識すら失くなつて……。

しかしその言葉を言い終わるのを待たず、男は一湖の眼を真っ直ぐに見据えた。その威圧感に一湖は言葉を詰まらせる。

だがそれは一瞬のこと。男はゆつくりと一湖から目を逸らし、ため息を吐くと、言葉を探すように少し宙を見上げた。

「おたくらの生きてるクニは……、まあ、平和だろう？ 諍いや格差はあれど、現在は戦乱の世というわけではない。人心も含めてその『安定』をもたらしているのは、その土地の『気』そのものを裏側で安定させているからだ」

突然の話に言っていることがまるでわからない。だが病院らしいのにどこからも人の気配がしない、物音ひとつしない確かな違和感が、かえつて非現実的な男の言葉を受け入れさせ、大人しく聴かされていた。

最後まで聴かないと玄次の居場所もわからないだろう、そう直感したのもあった。

「その気を安定させる『力』を持ちそれによつてクニを治めているのが、『カマクラ』という組織だ。クニ全体の平穏を保つために各地方にソウリヨウを置き、カマクラは『御恩』としてそれらに力を与え、ソウリヨウ率いるブシダンは『奉公』としてその土地の気を安定させ続ける」

男の声は不思議なトーンをしていた。静かで低く、そして心を奪われる。心臓に直接響いてくるような不思議な声だった。

「そんなこと、勿論知らなかっただろ？」

男は一湖を見て笑い、一湖は素直に頷いた。

だが、それとこれとどう関係が——。

「その御恩と奉公の力を行使しているのが、『カマクラ』だ。それは組織の中の最高人物——御恩と奉公の力のやり取りはひとりの人物が行っている。もちろん部下であるバクフの役人がソウリヨウとの

連絡役も果たしてくれるがな」

「……あんたは、その組織とやらの人間なのか……？」

どのように質問すれば核心に触れられるか、寝起きの頭を働かせた後に、何故この男が自分にこの話をするのかを問いただそうと一湖は思った。

男はその言葉と、一湖の不審そうな顔に肩を竦めて言った。

「まあ組織の一員ってーか、俺が今の『カマクラ』、そのものなんだけどさ」

——その強大な力を統べる者——。

Tシャツに少しくたびれたジーンズ姿。どう見ても、どこにでもいる普通の若い男である。確かに不思議な雰囲気は持っているが……。

これは夢なのか、現実なのか。この男は正気なのか、一湖には全く理解できていなかった。

——だが、あの状況では自分は確かに死んでいた。

それがこうして奇跡的に助かっていることが、この話を信じざるを得なくなる理由だった。

「じゃあ、自分や玄次を助けてくれたのは——あんた、なのか？」

「半分、正解」

男……カマクラは、一湖が自分の話に乗ってきたようで安心したのだろうが、一湖の座っているベッドの上に腰掛けると笑った。先ほどより幾分笑顔が柔らかくなったような気がした。

「俺が助けたつてもちよつと違うけど……。とりあえずお前を『助けた』のは俺だけど、あの子を『助けた』のは、さっきも言ったけどお前だよ？」

「どついう……」

確かに崖から落ちる玄次に必死で手を伸ばした覚えはある。しかし手が届く距離ではなかった。

何故あの子が無事助かったのか、落下の際に記憶が途切れてわか

らない。そして自分が意識を失った後も――。

「『カマクラ』はさ、世襲制じゃないんだ。誰がなるのか、力を持った者がクニのどこかで生まれるまで誰にもわからない。血縁を途絶えさせたり、変なお家争いをさせないためにそうなったんだろ。が、その力を持った奴がランダムにこの世に生まれてくるんだよ。だが産まれた時からそれがわかってて殺されちゃーたまらない。それもあるてさ、カマクラはその命が消える危機に際しその力を発現する”、その者がカマクラであるかどうかは、今のカマクラ自身か、西の支配者――ああ、クニにはもうひとつ都があるんだけどさ、そっちのトップのことね、しかわからない” ようになってるんだとさ」

カマクラは再び薄く笑った。

「お前は死に掛けた時に、あの子を救った。意識が無くても、最期に一番想ってたあの子の命を助けたいと思った。あの場所からあの子を助け出し、安全な場所へ移したのはまぎれもなくその時に発現したお前の『力』だ。それが『そう』だと思ったから、俺は此処に現れた。ここまで言えばわかるだろ――つまり、」

カマクラはそう言うのと、一湖のことを最初と同じ威圧感のある視線で真っ直ぐ見据えた。

「お前が次のカマクラってわけだ」

「――はあ……？」

しかし一湖からは随分と間の抜けた声しか出なかった。

まず今のこの会話が現実のものかどうかわからない、そしてこの男が正気か狂気かもわからないのに、そのようなことを急に言われても大人しく「はいそうですか」、と言えるわけがない。

だが絶対に死んだ、と思った状況からこうなり、そして見知らぬ男が全てを知っているというのも妙な話……。

「お前も感じたはずだろー？意識が消えるときに、『何か』を」
カマクラは軽い調子にまた戻り、まるで学級委員長でも薦めるかの如く一湖を説得しようとする。

——確かに、何か暖かい光のようなものが自分を包むのを感じたが……。

「あれは、『お迎え』じゃなかったのか……」

「そー！それぞれ」

カマクラは一湖を指差すと嬉しそうに笑った。

「って、そーですか……っておいそれと言えるかよ！」

怪我の痛みは現実のものようである、痛みに起き上がることはできず、一湖は疲れたように言葉を返した。

だが返ってきたカマクラの言葉は軽い調子だが、非情なものだった。

「ま、信じてても信じなくてもいいけど、信じなかったら、お前がこのまま死ぬだけだから」

——どういう……。

と一湖は言いかけて、気付いた。自分は先ほどから、一言も「音声」を発していないことに。

会話は成立しているし、彼女は話しているつもりでいた。それは彼女の意識の中でそう言っているだけであって、実際自分は身動きひとつとれていない。実は口すら動かせていないのだ。

——やっぱり、死んだんだ……。

再び実感し、あきらめのため息に力が抜ける。

だが、それでもいいと思っていた。誰の為に生きていなかった。自分の為ですらなかった。ただ死ぬときに痛い苦しい思いをするのが嫌で生きながらえていただけなのだ。

誰にも必要とされていないのだから、もうこのままこと切れてしまっても——。

しかしもう死が決定しているのだとしても、既に死後の世界なのかもしれないとも、まだカマクラの言葉で腑に落ちない部分が幾つかあったのでただの夢でも会話がまだ出来るうちに確かめておきたい、と一湖は尋ねた。

「逆に信じりや生き延びるって、どーゆーことだよ……」

カマクラはにやりと笑った。

「『御恩』と『奉公』の話はしただろ？それと、同じだ。お前は次の、カマクラだ。ここでお前が次のカマクラになることを承諾すれば、今のカマクラである俺に対しての『奉公』になる。それに対して、俺は『御恩』としてお前の命を助ける、という取引さ」

ちなみに『御恩』はどんな願いでも叶うわけじゃなくて、間接的でもこのクニの安寧に寄与するような内容じゃないとだめだけどね、と一湖の次の疑問を察してカマクラは言葉を続けた。

「断わりや、その裏とやらの世界とは関係ないまま、こっちの世でこちらの人生幕引きってワケか」

「そーゆーこと。お前が新しく『カマクラ』になることが、クニにとっての利点だからな。御恩としてお前の命は救わせてもらうよ」

——断ろう。

一湖は即座に思った。

自分なんかクニを支配しろだと？そんなことできるわけないだろ。

そんなことさせられるくらいなら死んでも構わないと一湖は思ったが、最後にもうひとつ気になることがあつて尋ねた。

「なあ、さっきも聞いたけど玄次はちゃんと助かってるんだよね……」

助かったと聞いているが、自分が助けた覚えも無く、助かった姿も見えない。あの子供の安否だけは最期にきちんと確認したかった。

カマクラはまた目を細めたが、今度は随分冷酷な笑みに見えた。

「知りたいか？」

一湖は頷いた。カマクラがふつと空間に手をかざすと、そこに光の球体が浮かび上がった。その中でシャボン玉のようにぐにゃぐにゃと色とりどりの映像が歪んでいたかと思うと、そこにひとつの光景をはつきりと映し出した。

——いちこ……っ……！！

最初に聞こえたのは耳をつんざくような、子供の、喉も張り裂けんばかりの咆哮。

それが、何度も何度も、

何度も何度も何度も、何度も、何度も何度も、

己の名を叫ぶ。

慟哭——と呼ぶに相応しい胸が切り裂かれるような悲痛な叫び。

それを怪我を負い巻かれた包帯が目には痛々しい幼い子供が、自分の痛みも気にせず、周囲がいたたまれず止めるのも振り切つて、全身を震わせたただ一人の名を声も枯れんばかりに泣き叫ぶ。

それが、今の玄次の姿だった。

「——っ……！！」

喉が張り付いたようになり、もういいという制止の言葉も発することができない。実際、先ほどから声帯など使つてはいなかったが、

——そんな残酷な悲鳴、聴きたくない！見たくない！

吐き気がする。なのに、身体が思うように動かないので、その光景から眼を逸らすことができない。

だが、これは現実だ。

自分がしでかしたことの結果だ。だから自分は目を背けてはいけないことなのだ。

——やめてっ!!

お願い!!それ以上叫ばないで!!そんな風に泣かないで!!

お願い、だから——……!

自分は、まだ死んでいない!

ちゃんと、こうして、此处にいるから——!

映像を映し出した光の球が消えるのと、カマクラの鼻で笑ったような短い笑い声が聞こえたのは同時であった。

彼は一湖の苦悶の表情から全てを読み取っていた。

「とりあえずお前の力であの子はムラに転移され、村人に発見されて医者に見てもらったようだな。お前さんは山奥で行方不明——だがあの子の証言から助かる見込みは無い、ということになったらしい」

「——げ、んじは……」

声帯を使っていないのに、意識の中だけですら声を絞り出すこともままならないくらい、胸が苦しい。

「私が死んだ、と、思っ——」

「言っただろ? お前はもう、現世では死んでんだ。ただひとつ、これから『カマクラ』として生きるなら、裏側の世界で生き延びれるって」

「——……」

一湖は唇を噛んだ。

「かわいそーに、あの子、一生お前さんを殺したと思って生きてくんだろうな——」

そこにカマクラのわざとらしい棒読みのような声が響く。その瞬間だった。

痛みも、身体が動かないということも、今は、何も感じない。

ただ——執念、のようなもので、一湖はベッドの上に起き上がった。そして、拳をベッドに叩きつけシーツをぐつと握るとカマクラを睨んだ。

「——わーっ たよ……」

カマクラは喉の奥から声を絞り出した一湖を、ちらりと見た。

「なつてやるよ、その『カマクラ』とやらに——ただし！」

カマクラが「そーこなくっちゃ！」と嬉しそうに言う前に、一湖は彼の言葉を遮り強い口調で言った。

「『奉公』には『御恩』なんだろ？——こつちも取引だ。玄次に今すぐ、自分が生きてることを伝えて欲しい！今すぐにだ——」
自分がカマクラになってから力を使って——なんて待っていてられない。今こうしている間も玄次は自分が死んだと思って泣き叫び続けているのだ。

あの一本気なあいつのことだ。食事もとらずに自分を探して山中を永遠に彷徨い続けようとするだろう。

——いくら人間が嫌いだからって、自分の所為なのにそんな風にさせたいわけないだろう！

自分によつて傷つけ、自分の所為で彼の一生を台無しにしようとしている。折角助かった命すら再び捨てさせようとしている。そんなのは、御免だ。

自分なんかのために、彼をもうこれ以上、傷つけたくない。一生傷付いたまま置いてほしくない！

それはそんな重荷を自分が背負いたくないと思う気持ちからか、それとも慈愛の感情からか、一湖にもわからなかった。

「えー。『御恩』つてのは私情じゃなくて、このクニの安寧に繋がることだって言ったじゃんー。既にお前の命助けてる時点で御恩と奉公の取引はもう成立しちゃってるんだしさー」

カマクラは「強引だなー」と口を尖らせて文句を言おうとしたが、

ふと何か思いついたようだった。

逆にこの要求に応じなければ一湖は自分の犯した罪に耐え切れず、今すぐ死ぬなど言うだろう。それにこうも考えられる……。

カマクラは少し考えた後、再び元のように明るく、悪戯を企む子供のよう微笑むと、

「——分かった。それだけはお前に『カマクラ』を引き継ぐ前に、なんとかしとくよ」

と一転し、快く一湖の願いに応じたのであった。

——それにしても、とカマクラは、精神が瀕死の状態であつたのに突如として起き上がり、自分の胸倉でも掴み上げかねないくらいの一湖の力の増幅ぶりに内心舌を巻く。

やっぱりカマクラっちゃあ、これくらいの気概ってか非常識なところがないとやってらんねーんだろーなー、と彼女の適性について密かに実感していたのだった。

先ほどまでの痛みは何処へやら……もちろん死を決めればそのまま息耐えていたのであるから、一湖が瀕死の状態であつたに違いないのだが、ここは既に現世ではない。

生きる、と、カマクラになると決めたからには、もう「今の彼女」には死ぬ理由などないのだ。瀕死であつたのは、彼女の意識体がそうであつたまで。

こうしてカマクラとしての再生を果たしたからには、彼女はもう別の生命を歩き出していた。

傷の痛みは決してなくなったわけではないが、一湖はベッドの上に起き上がり、考えていた。

「カマクラ」の力が如何ほどのものかは知らないが、それなりの——どころかクニをひとつ動かせるくらいの人外の力を持つことができるならば、このまま生きていれば、たとえ現世とこちらの世界

と別たれてしまっても、あいつに——、もう一度会うこともできるだろうか。

自分の力でそれを叶えることはできるだろうか。

そしてその時、たったひとことでいい。あいつに、伝えられるだろうか。

その時自分に勇気があるならば、許されないとわかっているけれど、この命、もう一度再生されたのだから。

——謝りたい。

ただ、それだけが、自分が生きることを決めた理由。

自分が彼の想いを重いと思うように、それは相手にとってとても迷惑なものだけれど、殺したいほど憎いならそうされても構わないから。

だから、いつか——伝えたい。

.....

それから十年後のこと——。

その13 ふたりのはじめり2（後編）

十年といえどもこちらの世界では、随分ゆっくりと流れているように感じる。

何故なら、自分があまり歳をとっていないように感じるからだ。でもそれなら、かえって自分だと信じてもらえないかもしれないが、いつか玄次に会えた時に自分の顔を思い出してもらえるかもな、などとカマクラとなった一湖は思っていた。

——そう、片時も忘れたことはなかった。
心を締め付ける痛い、思い出。

必死でカマクラとしての仕事をこなしているうちにあっという間に時が流れてしまったが、何より動き出す勇氣もなかったのだ。

一度こっそりとあのムラのことを調べたのだが、何処へ行ってしまったのか、玄次はそのムラにはもういなかった。

「カマクラ」となってからは、さすがに一度死を覚悟したというのもあって、一湖——もうその名前も捨てた今のカマクラ——はある意味ふっきたようだった。

望むと望まざるとに関わらず、生きるためには「カマクラ」となるざるを得なかった。「カマクラ」であることが、今自分が生きている理由なのだ。

だとすれば、そのように生きるしかなかった。そのためには立場上、他人と関わらなければならない。

表面的でもいい。「カマクラ」であることが今の自分の存在を成立させているのだから、その名の責任くらい果たさなければ、自分が生きている資格も有り得ない。そのように思ったからであった。

現に手抜きでもいいのでやるべきことをしないと、自分が玄次に再び会うまで生きていなくてはいけないこのクニの平穩は崩れてし

まうのだ。

カマクラである自分の下でこのクニを管理している組織、バクフの人間たちがそれほど情熱的に仕事をしていないことも幸いした。おかげで人間関係に付き物の衝突がほとんど起こらなかった。

また安定した暮らしを求める願望が、自分にもバクフにも人民にも一致していたので、そこに「自分」の求めるものを置き、彼女は「自分」という存在をカマクラとして確立できたのである。

ともすれば自分を見失いそうな中で、どうにか新しい「自分」——誰かによって作られたものではなく、己自身で己と認識している「自分」——を見つけたのであった。

また安定した住処と社会的地位を一度に手に入れられたことも、身分的にも精神的にも不安定であった彼女にとっては幸運なことであつた。そのことでようやく心に余裕が生まれ、自分や他人を見つめることが出来た。

それに己を知り他人に関わらないと、到底カマクラという役目はこなせなかった。常に人間を観察し、クニを混乱させない方向へと動かさなくてはいけない。

それは彼女にとっては当初は苦痛なことであつたが、元々頭のいい方だつたのでほどほどに仕事としてこなす方法を年月をかけて編み出した。

今のバクフの役人もその頃と入れ替わり、覚えている者も少ないが、このように今のカマクラは、最初は無愛想極まりない主だったのである。

それを最初から見守り、長年仕えた先代への最後の“奉公”として、シツケンの座に先代からそのまま留まり今のカマクラを幹部として支えてきたのがホウジョウ氏であつた。

彼こそまた必要以上に彼女の内部に入り込まず、かつ必要な仕事を要領よく彼女に教え自分でも片付け、更にはカマクラとバクフの

間を取り持つことのできる人間であつた。新たなカマクラとなつた彼女はそれに感謝した。

あのムラで世話になつた村長に似ているな、とその面影が重なつた。

そうして何年も何年も、同じ環境の中で様々な人間と嫌でも関わりあつて暮らしているうちに、年齢を重ねたこともあり、ようやく少しは彼女も上手く人と付き合えるようになってきた。

あの時のように強い気持ちを向けられるのはまだ少し恐いけれど、表面的な付き合いであれば楽しさを見出せることも出来た。

——だから、見えてきたものもある。

自分の愚かさや、当時の彼の気持ち。

それをようやく見つめ直せた。

だからこそ余計にその罪の重さに苦しみ、勇気がなくなっていく。だけどいつかは、そのために生き延びたのだから“彼”に懺悔しなくては、罪を償わなくてはいけなかつたのだ。

そう思つて十年が過ぎたある日のことだつた。

「カマクラ殿、四月からの人事の件ですが」

冬も終わりに近づいたある日、カマクラが常に控えている自室——その頃にはもう、完全にふっきれてしまつた彼女は限られた範囲ならば自分を出すようになっており、自分の好きなようにコタツだのニシンの置物だのでカスタマイズされた部屋——に書類を持つてシッケンのハウジョウ氏が入ってきた。

「カマクラ殿の傍仕えの件についてですが、」

それはあえて職名を設定せずに、だが側近として影となり彼女の身辺警護や時にはバクフの仕事も請け負う、カマクラの一の腹心の役目だ。

「今までは私を含め二人で務めておりましたが、今度の人事案の中であの者をロクハラ付けにたく考えているのですが――」

今のロクハラとこのホウジョウ氏が、カマクラが此処に来てからの側近役のようなことを交代で務めていた。二人ともほどよい距離感をとる実に処世術の上手い人物であつた。もちろん、能力にも申し分ない。

だからこそ、その男の栄進なのだ。ロクハラは西の警護や動向に備える重要な役職だ。ただの呑気な役人には就けさせられない。それにロクハラだけでなく、退職者が出れば人事異動が起こる。その中で有能な者を抜擢して動かさなければならなくなるのだ。

――俺も同感だ、とカマクラは答えた。

「更には私も歳です。そろそろカマクラ殿を第一線でお守りするという力も無くなつてきております」

カマクラは何が言いたいのかとシッケンと側近を兼ねてきた男を見据える。

「ひとり、カマクラ殿の側近として推挙したい男が居るのですが」

バクフへと繋がる長い廊下をカマクラとシッケンが歩く。

『其の者は、過去カマクラ殿に“御恩”を受けたそうです。本来ならば、“奉公”あつての御恩なのですが、例外的に先に受けたのだと先代が言つておられました。つまり、その者の命を救つたことが“御恩”にならないと辻褄が合わない。だからこそ、その者はカマクラ殿に“奉公”しなくてはならないのです。しかもその命を助けることが御恩であつたのだから、その身体はカマクラ殿のために捧げられなければ、道理に合わない』

カマクラはその男が待つという、バクフ内の謁見の間へと向かつ

た。

『命を助けられるという御恩を受けた代わりに、命尽きるまでカマクラに奉公させよと。その者の身柄を先代カマクラ殿が代替わりをされる時に私に預け、そのように命じられました』

胸騒ぎがする。

先代——あの日出会った、前のカマクラに自分が頼んだこと——。

『ただ、ここまで使えるよう鍛え上げるのに十年掛かりましたがね』とシッケンは少し感慨深げに笑うと、その運命の襖を開けた。

そこには黒い袴姿の大きな刀を携えた十代半ばの少年が、胡坐をかき両の拳を床につけ、己の主君となる者に対し頭を深く下げていた。

呆然とその姿を見るカマクラの耳に、ホウジョウ氏の決定的な声が響いた。

「一神玄次と、申します」

どくん、どくとカマクラの心臓が波打つ。

ふらつきそうになりながらも、それでもこの場では自分はもう一湖ではなくカマクラという存在でしかないのだ。

先代の気まぐれか——いや、玄次に自分が生きていることを教えるためにはこの方法しかなかったのかもしれないが——わからない。どうしてよいのかもわからないがこの状況を判断して、「カマクラ」は彼の前の一段高い畳の上に腰を据え、その立場の者に言う言葉を掛けた。

「——顔を、上げろ」

少年はゆつくりと顔を上げた。

そして逸らすことなく、真っ直ぐに、彼女を見た。

その視線に、彼女は一瞬息をすることすら忘れた。息が詰まり、心臓が恐ろしく高鳴り、眩暈すら覚えそうになるほど。

どうにも表現のしようのない、真っ直ぐな強い眼光に打ちひしがれる。

まるでそれはあえて言えば、強くひどく恨んできたかのように。

——確かに、恨んでいるだろうな、自分のことなど。

だが、「恨み」などの陳腐な言葉では到底現せ切れず、そんな言葉で済ますことすら許せないとも言ってしまう、強い、強い、恨みのように受動的ではない——意志を持った瞳。

己を射殺するような奥深くまで貫くような、それでも全く足りないというような、貪り尽くし燃やし尽くすような攻撃的な、瞳。

それこそ、「ごめん」などというような言葉では足りな過ぎて、おそらくずっとずっと抱えてきたのであろう、彼の強い想いを満たすものでは到底なく、彼女は言葉を詰まらせた。

——そんな軽い言葉など、言えるわけがない！

一体、どんな言葉がかけられる？

どうすれば、自分の罪は償える？

寝首でも掻きにくたのだろうか？それなら、それで構わない。

もしもあの時、抱き締めてあげていたならば、この子は笑っていられただろうか？

——手を離したのは、自分だ。

今更、あの時に戻ろうとも戻れるなどとも思わない。

今更、謝って何になる……？

ああ、もう何もかも、遅いのだ。償うことすら、許されないのだ。

——お前を、巻き込んでしまった。

もう、お前は此処まで来てしまった。

深く傷つけ、更には自分の我侭の故に、此処まで連れてきてしまった。

後悔の念だけに苛まれるカマクラがようやく発した音声は、

「——解った。頼んだぞ、一神」

低く抑えた、「カマクラ」としての言葉だけだった。

——もう、あの時の玄次はいない。

そしてここから、カマクラの側近である一神という男とカマクラの主従としての関係が、新しく始まるのである。

.....

——失った、大事な者を探していた。

あの時大きな光に包まれそして自分の命を守ったまま消えてしまったそれを探して、さんざん慟哭した後、少年は水分の抜けた身体でふらふらと気力だけで山中を彷徨っていた。

誰の声も聞こえていなかった。

何を探しているのかもわからなくなってきた。

ただ、大切な者を失ってしまったことだけわかった。

そして、それをどうしても取り戻したかったということも。

喉の渴き、腹の減り、傷の痛み——もう何も感じなくなった、それでも探して歩いていた、その時だった。

「一湖に、会わせてやろうか？ 坊主」

お前、玄次だろ？といきなり、少年の目の前に男がひとり現れたのだ。しかもこの山奥だというのに、全く汚れていない軽装で。

一湖、その名前だけは本能で覚えていたので、玄次はこくと頷いた。

男は玄次と真っ直ぐに視線を合わせた。

男は自分の力の大きさはよくわかっていた。常人ならばその威圧感に怯み、思わず逸らしてしまうところだ。

しかしその少年は、一湖はどこだ早く教えろと言うように――あの女に会いたいという気持ちが強い余り、逸らすどころか食いつくように視線を合わせてくる。

男――カマクラは思わず笑みを浮かべた。

一湖と取引をしたが、玄次のことは御恩と奉公にでも乗っ取っていないことなので関与できないことだ。だがそれにこじつけることはできる。

だが、それにはこの子の強靱な意志が必要なのだが、
「十分、だな」

その満足そうな言葉の意味は玄次には理解できなかったが、そんなことより一湖はどこだと相手を急かした。

「会わせてやるが、もう此処には戻ってこれねーぞ」

自分を見下ろすカマクラに、玄次は何の迷いも無くこくと頷いた。

「それに……すぐには、会えねーぞ？」

玄次は少し心配そうに言う男をじいつと見上げていた。

「お前が、すごく強くないと、一緒に居られないんだ」
「……」

「あの女と、ずっと一緒に居たいか？」

玄次は頷いた。

「その為なら、どんな辛いことでも耐えられるか？」

玄次はまた頷いた。

「——じゃあ、ついて来い」

カマクラは玄次の頭をぐしゃりと撫でた。

——大した、モンだ。

謎の男と連れ立って歩いていきながら、自分は「あの世」にでも連れて行かれるのだろうか、と玄次はぼんやり思っていた。

このオッサンは、しにがみなのかもしれない……。

だけど、それでもいいやと少年は思った。

いちこと一緒にいられるのなら、それで、いい。

それだけで、いい。

そして辿り着いた先では、カマクラの言ったとおり辛く長い修行の日々が待ち受けていた。

彼がこの世界で生きていくために、そしてあの女にもう一度会うために——それは「仕える」という形でしかないがそれでも——、それに必要な全てのことをこのカマクラの一の腹心であるシッケンの男に叩き込まれた。

この世界の仕組について、そして何よりあの女——これからは主君となる彼女を守るための剣の腕をつけるよう、その男から厳しく教えられた。また学問所に通い基礎的な学術もきちんと身に付けた。自分に様々なことを教えてくれたその男は厳しいがどこか暖かく、一緒に暮らしていたあの村長のことを玄次もまた思い出していた。

十年——いや、それは現世でのこと。

きっとそれよりも長い時間を、どんな気持ちで、何を、何ひとつを求めて、願って、もがき続けてきたのか。逆にたったひとつの強い想いがなければ、到底生きてなどこれなかった。先の見えない、長く厳しい鍛錬の毎日には耐えられなかった。

それは執念以上に妄執とも呼べるほどの、強いものだった。

ただそれだけが、彼を突き動かしていた。

その想いの強さには最早周囲が呆れ、圧倒されるほどで、そしてだからこそ「それ」以外のために使うことは絶対にないだろうと信じ、彼の剣の師である男——ハウジョウ氏は、玄次に一振りの刀を与えたのであった。

お前ならば、この刀を使いこなせる。いつか主君を、己の一番大事な者を守るために使えと。

そして時が経ち、その男との勝負で彼の刀を落とした時、玄次はひとりのブシとして認められた。どこの身分の者だかわからない少年に苗字を授けてくれた。

そして彼は運命の扉を開け、踏み出し——再び二人はこうして出会う。

その時には何もかもが遅すぎて、ひとつの何かが終わりを迎えていて、そして新しい道が、確実に始まっていた。

そして更に十年が経ち、初めてあのムラで出会った時とは立場が変わり、「このこと」はうやむやになったまま、年を重ね己の責務の自覚も出てくるうちに変わり続ける二人の関係も同時に変わっていくのだが、胸に秘めているはじまりの想いは、二人共に今でも変わらぬままなのであった。

.....

はあ、と大きな息を吐いていちこはその場に座り込んだ。

北面たちの戦い、更には玄次の、カマクラの——強い想いにただ圧倒されていた。

気がつけば、今度は上も下もわからない、何もない宇宙の中のような暗いが透明な光の射す空間に座っていた。

すると、

「——ヒトの意識の中で覗き見たあ、悪趣味なもんだな」

突然にかけられたその声に驚いて振り向くと、呆れたように苦笑する白い着物姿に黒く長い髪、今の東の主が立っていた。

その14 それぞれの決着（前編）

自分の意志でこうしたわけではない……と思うのだが、悪趣味と言われまるで覗きでもしていたような罪悪感すら沸き上がり、いちこは慌てて立ち上がった。

「す、すみません」

いちこの横まで歩いてきたカマクラだが、本当のところ彼女が好き好んでそうしたわけではないとわかっていた。ただ自分が見られたくない部分を見られてしまったことについてばつが悪かったので、自嘲的にふつと笑った。

玄次にずつと伝えたかった言葉を口走った結果、刀を突きつけられた。そのこともきっかけとなりこの事態に便乗して、己の記憶が堰を切つて溢れ出したのだろう。

それがたまたま高熱に浮かされていた次のカマクラに相当するいちこの力と同調し合い、こうして過去が再現されることになったと思われる。

「ここは、どこなんですか……？」

いちこは改めて尋ねる。

「俺の意識の、中」

カマクラは淡々と答えた。

「幽体離脱とは違うかなー。本体は結界の中に置いてきたけど、今此処にいる俺も実体だし」

カマクラはいちこの頭の上に手を置いた。確かにお互いに実体であるようで、すり抜ける様子もない。

逆に言えば置いてきた本体よりも此処に居る意識の中の自分が傷付いてしまう方が危険である、ということでもある。

そうまでして、今、カマクラがやりたかったことは――？

最初に見た、玄次と北面との激突。それと大きく関係しているの

だろうか？

——いや、違う。それ以前に……わたしの、せいだ——。

京の院に拾われ、その傍で暮らしてきた自分が次のカマクラだったから。その自分が彼のところから逃げて、此処に来てしまったから。

「私は……どうすれば、いいんでしょう……」

歳の割にはしっかりしている方なのだが、十四の少女は困り果てて呟いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

その頃バクフでは——。

「あれ？ 今、地震あった？」

第三政所にて。板張りの床に座卓が約十名分。着物姿の男たちが、各々書類へ筆で何やら書き込んだり持ち込んだパソコンでネットゲームをしたり、ひどく時代が混合した懐疑的な風景であるのだが、それがいつものバクフの光景であった。

「そっかー？ 俺にはわからんけど」

「揺れましたよねー？ ナンジヨウ殿」

ナンジヨウと呼ばれたこの部署の責任者、シッケンの一人で禿げ上がった頭に黒い筋がバーコードのように残る男（いわゆるバーコードなんとかというモノ）——はぎくつとしたように肩を揺らしたが、

「い、いや……どーかなー……」

とごによごによと口の中で誤魔化すように呟いた。

上司でありながらナンジヨウの煮え切らない答えはいつものことであるので、部下は気にも留めず、「ネットに出てっかなー」「あ

「！　せんせー！　コイツ授業中に脱衣麻雀やってるー！」　「誰が先生だよー」などと普段どおりの呑気な会話を始め、シッケンのナンジヨウ氏もほーっと大きなため息をついたのであった。

——来た、か……。

何が、かはわからない。自分たちには知らせてもらえない。

だが一歩間違えばいくさの引き金になるかもしれない、「何か大きな力」がバクフの空間の奥深くでぶつかりあっている。

腐っても一応、シッケンだ。事前に知らされていることもあり、部下以上にこうした日頃起きない力のうねりの存在くらい、ナンジヨウ氏でも察知できる。

最初に地震のような、大きな波動を感じた。

その後は静かで感じ取りにくいのが、嵐のように激しい力の波が小刻みに続いた。そのうちに——それが、途切れた。ぶつりと、断ち切られるように。

不気味なほど静まり返った後、今度はそれまで以上に大きな力の波の動きが始まった。

だがそれは、最初の地震のような波動とは違っていた。先ほどよりもうねりは大きい、それよりももっと奥深くで、ゆるりゆるりと津波の前の海のように蠢いている。それにはあまりの壮大さに畏怖は感じたが、こちらには鋭い牙を向けられているような恐怖は感じなかった。

ただ静かに、大きく、この世界全体を包むように——。

……いつまで、このうねりは続くのだろうか。

どうか、このまま何も起こらないでほしい。

落ち着かないナンジヨウ氏が部屋の外に出ると、第四政所の前にも同じようにひよろりと痩せて常に顔色の悪い（胃潰瘍持ちである）シッケンのサイジヨウ氏が、益々顔を青ざめさせ胃薬を片手に立つ

ていた。

二人して顔を見合わせ、はあ、とため息をついた後、そのまま持ち場に引き返した。

どうやら第五政所に駆け込みたかった気分なのは同じらしい。

その第五政所では、元々書類の整理棚程度に設置された場末の部署なので相も変わらずハウジョウ氏は一人で頼まれた刀の手入れをしていた。

そして手を止め、宙を見上げた。その皺の刻まれた眼を閉じ、すう、と息をつく。

おそらく他のシッケンよりも少しばかり漠然と事情を察しており——子供の頃からよく知ったあの強い輝きと、若い頃から見守ってきたあの淡く儂い光の行く末を静かに案じていた。

.....

——もう、どうすればいいのかわからない——。

しかしいちこの困り果てたうえの切ない胸のうちに對し、

「は？ 知らねーよ」

現在の東の主から返ってきた答えは随分冷たいものだった。

先ほどの回想を思い出せば納得もできる態度ではあったものの、がつくりと肩を落としたいちにカマクラの言葉が続いた。

「そんなもん、お前が考えることだろー。俺なんて、あんないきさつなんだしさ」

いちこが顔を上げると、また自嘲するようなカマクラの笑顔と視線がぶつかった。

——そっか……。

カマクラの突き放したような言葉の理由がわかる気がした。確か

に、東の主がああいう理由で天下を治めているなんて思ってもみなかった。だからと言って、自分の父親が世話になったカマクラのことを軽蔑するわけがない。

それはきつと「いちこ」に対して冷たくしたかったからではなく、そんな理由でカマクラになってしまった自分自身へ向けた自嘲の気持ちの表れであるのだ。

「……そうですね」

いちこは同意した。これも侮蔑からではない。

——何一つ自分の心はまだ決まっていなければならないけれど、

「カマクラはすごい大きなお役目だけど……クニとかよくわかんないんだけど、自分のためでもいいのかなって、カマクラ様を見て、思っちゃいました」

カマクラに向けたその表情は、やや作ってはいたが笑顔であった。

十四の少女のその笑顔にカマクラはやっぱり自分も笑われたような気もしないでもないが、クニの平和のためなどとそれこそこの子の大事な西の主みたくご大層な心意気など持ち合わせていないのも事実なので、ぶすりとした顔で頭を掻いた。

——ほんと、イヤなもん見られちゃったな、とつくづく思う。

でも、と気を取り直して今自分がやらねばならないことのためにいちこを見据える。

「それでも、答えをもらわなきゃいけないんだ、俺は」

最初は自分の気まぐれであつたが院や北面の想いが幾重にも重なり、このような事態になってしまった以上、彼女の成人を待たず決断を迫る形となってしまった。そうした思いからカマクラは深いため息をついて、いちこに告げた。

「俺みたいに、死ぬ間際で誰も助けにくんねーって時にカマクラが

現れて、命助ける“御恩”と引き換えに次のカマクラになるっ！
形の“奉公”もあるけど、お前の場合は京の院に既に命を助けられている。だからお前がカマクラとして働くという奉公をこちらに對してしてくれるんなら、こちらも同様に御恩を授けよう」

それが唯一の救いであるとも言える。だが、それだからといって

「カマクラに……ならない、ということも選べるんですか？」

いちこは少し心配そうにカマクラに尋ねた。カマクラはいちこから顔を背け、天を仰いだ。

「それは勿論、選択肢としてあるよな。その場合、……まあカマクラが減びない運命ならそのうち代わりの次のカマクラが生まれてくるだろーから、それまで俺がカマクラでいるとして——」

カマクラはそれ以上何も言わなかった。

いちこはその言葉に頷きかけて——そして動きを止めた。

それなら今と何も変わらないではないか。「それ」で済むなら、何故今、玄次と北面は戦っている？ どうしてこんなことになってしまった？

「次のカマクラ候補である」力を持つ自分が京にいる限り、あのひとの傍にいる限り、私の思いや意志にかかわらず、院の優しさにもかかわらず、きつとまた、こうして争いが起こる。

その事実が明るみになれば北面のようによく思わない者も現れ——北面などまだいい方で、きつと自分を利用しようとする者も現れる、院に対しても圧力が掛かってくる。

「……そんなの……。選択肢なんて、はじめからないじゃないですか……」

いちこの絶望的な声に、カマクラは無表情を保っていた。

彼女が気丈にも泣かなかったことがカマクラにとって幸いだった。

——運命と言えば聞こえはいいが、自分の所為でまたひとり子供

を傷つけている。

こんな状況は、もう御免だったのにな……。

確かに、自分も生きるか死ぬかで選択を迫られた。あの時カマクラになることを断っていたら今此処に存在すらしていないので、自分も結局、選択肢などなかったと言えなかったのだ。

今回の場合、彼女が京に拾われ、そしてその彼のことを心から慕ってしまったことが不幸と云えよう――。

「私は……本当は、院の傍に、いたい。――でも、」
いちこの震える声をカマクラはあえて何の感情も持たないように聞いている。

――どうして、自分は彼の傍に居たいと思ったか。

彼の、何処に惹かれ、何を頼りにしてきたのか。

何百年も前に、これ以上のクニを巻き込む勢力争いを避けるために、全ての闇を、欲望を自分の中に閉じ込め、それをし続けることによって西の平和を保とうとした男。

どんな想いで今まで過ごしてきたことか。

そんなひとが、自分なんかの小さな命を救って大事にしてくれた。それだけでもう、十分だった。

――だから自分は、

「院の、守ってきたものを……守りたいんです」

その徹底的な自己犠牲の優しさに、惹かれて、救われていたのだから。

彼が今まで守ってきたもの、それを自分のわがまままで壊したくない。

今度は自分が、――守りたい。

カマクラは大きなため息をついた。いちこに出会った時から、こ

んな気持ちにさせてしまうことは予測ついていたが、実際になるとやはり、痛い。

自分はそんなに人間できていない、と思うのだ。

「――院は、」

いちこの言葉が続いたので、カマクラは俯くいちこを見やった。

「東と西で、こうして権力を二分したその均衡がとれているから、今は変に天下を狙う者がいないんだって言うてました。だから、カマクラも、京も、なくなっちゃいけないんだ、って思います」

院のことを信じているからこそその言葉に、カマクラは益々慰める言葉も見つからない。ぐしゃぐしゃと不器用にいちこの頭を撫でた。「お前は、俺よりもずっと、カマクラとかに向いてると思うぞ」

それは今の彼女にとってはずっとも誉め言葉になっていないかもしれないが、それくらいしか言葉が紡げなかった。

.....

ぽた、ぽた、と滲み出た赤黒い血が落ちる。

玄次は己の刀を地面につくとそれを支えに膝をつき立ち上がった。血の流れは左肩から伝う。だが神経、動脈はやられた様子は無い。表面の皮膚のみを傷つけた比較的軽い傷と見た。

そしてゆつくりと、自分の後ろに倒れている相手を振り返る。

別名“無血”の名のとおり、手負いの自分に対し自分の一太刀を浴びた相手は、体外には一滴の血も流していなかった。

――だが立ち上がることは、出来ないだろう。

手心えを玄次は確かに感じた。肉や骨を斬るのとはまた違う、静かで綺麗な切れ味。鮮やかに、一刀の下に「斬れた」筈だ。斬ることとに失敗した時の腕への抵抗は、それはもう比べ物にならないほど

酷い衝撃を返すものなのだから。

この刀をもって、ひとつの決断の下に「あるもの」を両断した。あれだけの執念を持った男が立ち上がれないのがそれをした証明である。

玄次は役目を果たした不斬刀を自分に凭せ掛けると、傷を負った方の半分切れた着物の袖をそのまま引きちぎり、器用に口と右手で傷口を縛り上げて圧迫止血の真似事をした。気休め程度にはなるだろう。

そうしているうちに、倒れていた相手が利き手でない方の手をぴくりと動かし、這ったままの姿勢で呻いた。

「どうして……」

——足は動かせないでもない。手や腕に打撃を受けた際のショックの方が大きかったが、身体を擦りどうにか起き上がることができた。

北面は大きく息をつきながらやっとのことで起き上がり座り込むと、対象的に血を滴らせ自分を見下ろしている格好の玄次を恨みがましそうに睨み付けた。

「どうして、……殺さなかった……」

その14 それぞれの決着（後編）

しかしその常套句を発した声に力はなく、睨んでいた強い視線も下へと落とされた。

「その理由」は彼自身が一番わかっているからだった。

「それもわかんねーほどバカじゃねーだろ」

心底呆れたように玄次は言った。戯言を言われ気が抜けてしまい、傷が先ほどより痛んできた気すらする。

——これは情けなどではない。

奴は院の一の腹心だ。ここで北面を殺しそれが明るみに出て騒動となれば、流石の院も動かざるを得なくなり、いくさにすら発展する恐れがあつた。自分の主はそれを望まない。それだけが「命」を断ち切らなかつた理由だつた。

それは西の主も理解している筈だ。それもわからないのに一の腹心を気取るのか？

逆にそれがわかつていて尚も他人にそうしてもらおうと、縋ろうとするならば、

「存在ごと消えてーなら自分で何とかしろよ。人に何とかしてもらおーってのか？」

ただの自殺願望ならば、自分は殺し屋でもそれに快感を覚える趣味もないのでお断りである。勝手に死ねばいい、玄次はそう思っていた。

「……」

当たり前だと言うような玄次の台詞にイホクは言葉もなかったが、「この仕打ち」だからこそいっそ殺して欲しかったと思つたわけで——再び恨み言のような疑問を口にする。

「だつたら、尚更どうして……！」

手元に己の細い刀が転がっていた。

だが、自分はそれを握ることがもうできなかった。

ばっさりと、一刀両断にされたからである。この見えないものでも裁ち斬る不斬刀で。

最初に物理的にも利き手の筋肉を裁ち斬られたのだろう。確かに腕も、動かない。

だが玄次の目算では、二度と腕が動かせない程ではない筈だった。神経までは切っていない。治療で回復し、大体元のように動かすことはできるだろう。

だがそんな物理的なものでなく——、最も重要なものをそれと一緒にに斬られたのだ。

いくら利き手をやられたからと言って、いつか急襲したオワリの少年武士のように動けずとも執念さえあればいくらでも剣を握ってこの手負いの男に飛び掛ることはできる。

自分はそれだけの強い執念を持ってきた。

だが、それすらできない——。

これほどの、屈辱があるだろうか！？

北面は目の前にあるただ虚しく転がる刀を見つめていた。

——そう、彼が斬られたものは、もうひとつ。

カマクラを、院の敵と認識する者を「倒したいと思う心」——。

言い換えれば、戦闘心。それを折られた。いや、無残にも裁ち斬られた。

真つ二つに割かれたものは折れる以上に再生することが難しい。そしてたとえ万が一再生されたとしても同じものにはならないだろう。

だから眼の前のこの手負いの男を殺したい、倒したいという気持ちにはもうどうしてもなれなかったのである。

だが、今の状況に至った記憶や想いが消えたわけではない。なので益々「そうされた」ことに対する悔しさ、情けなさやこの男への恨めしい気持ちだけが増幅し、なのに飛び掛る氣力が今は全く沸き起らない。

——ブシとしての、死ぬよりつらいこの屈辱。

なのに、利き腕も動かない。舌を噛むくらいしか死ぬ方法も今はない。

院への記憶も、想いもまだ同じようにあるのに、なのに自分は今、もうどうすることもできない。

——こんな生き恥を晒すなら、いつそ殺して欲しかった！

だがそれも院のために許されないというのなら、……ならば、それならいつそ——、

「では何故、俺の記憶ごと斬らなかった。何故、俺の院への……執着心ごと裁ち斬ってくれなかった……！」

此処に存在する、今日此処に来た、自分の此処までの想いの全てを、どうして裁ち斬ってくれなかった！それを断ち切れば、それこそ二度とカマクラには仇をなさない筈なのに。

まだ幼い少年の日、あの人に出会い、あの人のためだけに生きてきた。

——その自分が生きてきた、記憶や思考の全てを！

「それさえ断ち切れば、俺は二度とカマクラにも現れない、生きている価値も無くすることもできる」

院のことを忘れられれば、自分の存在する意味も無くなる。何も思わなくて済む生ける屍に、なれる。

「いつそ、そうしてくれば——」

——いつそ、そうしてくればこんな惨めな想いをすることも、

余計に苦しい想いになることもなかった。

全てを忘れられ、呆然としていられたのに、いつそ楽になれたのに。

——俺は、これからどうしていけばいい？

失うものなどもう何も無いと思っていたのに、それ以上の喪失感があるなどと想像していなかった。まんまとカマクラの策に嵌ったというのか。

これは“奉公”などではなく、クニを乱した自分へのカマクラからの“罰”か。

この男には勝てなかった。それは自分の腕の不甲斐なさか、それとも気持ちの上で負けていたからか——。

血が出るほど唇を噛み締める北面を横目で見ながら、玄次は怪我をしていない方の肩に刀を担ぎ、心底呆れたように吐き捨てた。

「馬鹿野郎。んなモン、自分で断ち切れ」

——ずっと考えていなかったわけではない。

何を斬るのか。北面の望むものも選択肢になかったわけでもない。これも同じように、情けをかけたわけでも逆により残酷に苦しめたかったわけでもない。

北面の命を奪わないことは絶対条件であった。

ということとは、生かすということ——生かすということは、生きる道を奪わないということではないだろうか。

その人間の想いや生きてきた証の記憶まで、他人がどうこうできるわけないだろう。

ならば自分達がそうしてきたようにその者が抱える想いでも苦しみでも、自身の現実を自身が選んで進んでいかねばならない、ただそれが筋と玄次は思ったままであった。

この決断が独りよがりと罵られることもあるうとも、少なくとも

自分の主ならば、ただ何も言わず許すに違いなかった。

逆にそこまで己の決心を固めていたからこそ、迷いなくこの刀を使ったのであって——そこまで考えると、玄次は再び北面と眼を合わせた。

もう二度と会うこともないだろうな、と思いながら玄次は彼に背を向けた。最後に背中越しに、

「それに、テメーが死んだらあの女も死ぬんだろ？」

そんな言葉を残し、その場を去っていった。

それは暗示で実際に発動する術ではないとカマクラは言っていたが、そうしたのはきつと院を失った後、北面が生きていることを後悔したり、むやみに自ら命を絶つたりしないための保険だったのだろうか、と玄次はふと思い出しては考えていた。

そしてズキズキと肩の傷の痛みを感じながら、こりやー時間外に危険業務も加えた特別手当でも出してもらわなきゃ割に合わん、てかさつさと戻ってあの女に傷の手当させてでもさせてやる……などとぼやきながら、カマクラの元へと生還していくのであった。

後に残された男は、がつ……つと地面に向かって動く方の手の拳を強く打ち付けた。

長い髪がはらりと垂れ、その表情が見えることはなかった。

.....

その結論でいいのかどうか、まだ子供のいちこにはわからない。でも後悔はしたくない。

でも、どれを選んでも後悔する日はくるのかもしれない。その方法でないとすぐ後悔するようないきなり、だからと言って今つらい想いをするのも耐えられず、どうして自分が、と納得できな

い気持ちも少女にはある。

だが、審判の時は訪れる。事態を収拾するために、カマクラはこの件に終止符を打とうとしているのだ。

「——わかった。お前がその気なら、こちらもそれなりに対応する」
自分と先代カマクラが取引をしたように。

「次期カマクラとして、“奉公”してもらえらなら、“御恩”を授けよう」

いちこは自分より頭ひとつ分近く背の高い、カマクラを見上げた。その時の彼女の表情は、同情しているようなやるせないような表情であったが、やはりどこか神がかっているのか、いちこは「ああ綺麗だなあ」などと心の端でぼんやり思っていた。

「何か見返りでもねーと頑張る力も起きんだろ……その前に、ちょっと野暮用済ませてくるけどな」

カマクラはいちこの背後に足を進めながらそう言った。

それはいちこが意識を取り戻しても取り戻していなくても、カマクラになると決めても決めなくても、始めからそうするつもりだったこと。

「——あ、あの……！」

いちこは慌ててカマクラを呼び止めた。

元々自分がカマクラの意識の中に「勝手に入ってきた」という図式なのだ。おそらくふらりと此処に紛れ込んでしまったように脱出もまたきつとあっさりでき、自分がカマクラになるならばきつとまだ会うこともあるとは思うのだが——。

玄次とイホクが戦っているように、もしこの後の「野暮用」によつては万が一にもカマクラに二度と会えないのでは？という不安がふと胸を過ぎり、いちこは彼女を引き止めたのであった。

だが、何を言ったらよいのかもわからず呼んだので、いちこは次の言葉が継げず押し黙ってしまった。

——もつとこの人には、教えて欲しいことがいっぱいある気がする、これで終わりにしたくない。

いちこのそんな期待を受け止められるだけの強さは自分にはないと思っっているカマクラであつたが、それでもいちこの気持ちを察し、びつと彼女に指を突きつけると一言言い残した。

「さっき見てただろ。——言いたい時に、言いてえことを言つとかないと、もう二度と言えなくなるってこと」

「——」

それが、誰に対してのことなのか、何を意味しているのか——いちこは一瞬考えたが、自分の想う人は常にひとりであつたから、その言葉を自分のこととして当てはめ、こくんと頷いた。

だけど勿論それは自分だけに宛てた言葉ではない。

いちこはカマクラが——先ほど覗き見た、一人の女が今でもずっと昔のことを後悔していることを知ってしまったから、それが好きなカマクラであつたから、それ以上そんな風に切ない顔をしてほしくなくて咄嗟に叫んだ。

「げんちゃ……玄次さんは……、」

そのまま立ち去ろうとしていたカマクラの肩が、いちこの声にぴくりと動いた。

「……たぶん、カマクラ様のこと、すっごい——、大事なんだと、思います。今でも……」

自分がそれを口にしていいかどうかなど、いちこには正直わからない。

それに適切な言葉であつたとも思わない。

だけど自分なんかでも「それ」はわかった、と思っっている。

最初にサケ展で玄次と話したこと……。あれはきつと、カマクラのことだっただろう。

ただの奉公として、だけなのかもしれない。だけどあの時はそういうのだけとはちょっと違って、確かに——ちょうど自分が院を思うのと同じくらい、その人を思っているような——そんな風に、感じたのだった。

だけど目の前の女の人は、そうは思っていないような気がした。そう思うのを悪いと思っっているような感じさえた。

「……」

カマクラはぐしゃりと髪をかき上げた。

——こんな子供に、気を遣われるとはな。

やっぱり余分なものを見られたな、と気恥ずかしく居心地悪い気分になる。

今の状況ではいちこのことを一番気にかけているのに、ここで「あのこと」を蒸し返されどのように応えたらよいのかわからなくなる。

——そうか、ととりあえず答えようとして、それも違うような気がして、カマクラは全く別の無難な言葉に言い換えた。

「氣い遣わして悪かったな」

そして手を上げていちこには振り向くことなく前に進んだ。我ながらいい年こいて、えらく無意味な返答だな、と思いながら。

——あの話は、此処に来る前に終わったはずだ。もしかしたら再会した時にまた話題に出ることもあるかもしれないが、今あの男のことを一個人として安否を考えたりその行動や言動の裏を深く考え始めると、とてもこんな風に不遜に立つていられないような気がした。

今は“一湖”であった時の我侬や記憶や気持ちよりも、叶わなくとも最後の願いを叶えてくれた“カマクラ”としてせねばならないことを遂行する時だ。そもそも本来自分こそ、“カマクラ”に対し奉公しなくてはならない身なのだから。

その途中にいちこがこうして侵入してきてしまったため、余分なものまで見られたり言われたりことになってしまったが。でも老婆心で言ったさっきの教訓からいちこが何か感じ取り実行してくれれば、幼い子供にクニを託すのは大層気が引けるが、少しでも彼女自身が主体となり彼女自身の意思で決断をし、その決断を受け入れていってくれるような気がしていた。

此処はカマクラの意識の中であり、他人は干渉できない——ということの表れのように、いちこの目の前が、霧が掛かったように白くなりカマクラの影も消えていった。

そして今でも痛む気がする背中にある大きな傷と一緒に出来た心の傷は忘れ、遂に最後の博打を打ちに、初めて会う「あの男」のもとへとカマクラは向かうのであった。

その15 乾坤一擲1（前編）

——来る。

今、この世にたつたひとつしかない「それ」が、来る。

一度も出会ったことがなくとも、「彼」にそれがそれとわかるのは、それ以外の何者でもない尊大な力を秘めているからだ。このような輝きはこの世にひとつしかないであろう。

……いやそれと同様の、まだ弱いが似た光を知っていた——それで、か。わかったのは。

向こうから来たのか、それともこちらが引き寄せられたのか、それとも引き寄せあったのか。此処は京なのかカマクラなのか、それともどちらでもない何処でもない場所なのか。

彼の眼前の暗い闇にふわりと白い光が浮かび、そこには一人の女が立っていた。

それと彼の佇んでいた闇が交じり合い、闇でもなく光でもない、黒でもなく白でもない、薄暗い靄の中のような空間が二人を取り巻き始めた。

「——初めてお目にかかるな」

「これが最初で最後だろうがな」

男は女を見て薄く笑い、女も低く笑った。

その存在は以前より知っており、この代でないにしろその立場の者に行き会ったこともないわけではない。また東だけでなく西の一部も統治をしていることから、その気配だけなら感じることもしばしばあった。

だが当代の東の支配者を初めて目にして、男であることもあるが

背が高く体の大きな自分に対し、こんなに華奢な女がクニを統治しているのかと驚く。

——と言っても、あの小さな少女がこれからは背負うことになるのだがな……。

しかしその細い体からでも——日頃部下や普通の人間と接している時は力を押さえ込んでいるのだろうか、今はその体の何処にこれだけの力を秘めているのだろうかと思うほど自分と遜色ない壮大な気を発している。

——これが、東の主か。

朴訥とした、欲にも人にも興味、執着を持たない主と聞く。己を知り全て受け入れているからこそ、迷いがないような——そんな弱さの裏返し of 強さがその視線から伺えた。

確かにこの空間に掛かっている術は彼女から仕掛けてきたものだ。この西の主である自分を「無傷で」巻き込むだけの力なのだ、相当の魂の力を燃やしているだろう。

西の王が感嘆の表情で東の王を見ていると、彼女……カマクラは急ににんまり笑って、どこからともなく一升瓶と杯を取り出すとその場にどっかりと胡坐をかいた。

「まあとりあえず、一杯やろーぜ、院」

院と呼ばれた西の主は、少しの間の後にふっと口元を綻ばせた。

「応じよう」

.....

いつも高みから見下ろしていた玉座がいつの間にか消えており、今はこのカマクラと自分とで作り出している何もない空間に二人して腰を下ろし、初めての対面をしていた。

奉公でもらったとおきの一品だ、と嬉しそうに自分と院の杯にカマクラは酒を注いだ。院も躊躇うことなくこくりとそれを飲む。

「——美味しいな」

「だろ？」

カマクラは自慢げに笑うと、差し出された院の杯に再び酒を注ぐ。

「……それで、」

それを再び口にしながら院は話を促した。

「どうして、わざわざ——」

「どうしてもこーしても」

カマクラは院の言葉を遮ると、くいつと杯を空けた。

「あんたも知つてのとーり、天が動くつて時だからな。あんたと一度、話がしたかったんだ」

「今まで代替わりするにあたって、カマクラからそんな相談をされたことはなかったが」

院も更に杯を空ける。

「今までは、な。……今回だけは今までとわけが違うだろう？ あんたの部下には色々世話になったしな」

カマクラはちらり、と院を見上げた。院の手が、止まった。

しかし彼はその手を膝に下ろすと、いつものように俯き加減の視線で微笑んだ。

「部下の粗相は別に侘びををするとして——西の領域を侵さない限り、代替わりなどそちらの考えで行えばよい。逆にこれを機に京を討つと云うならば、話は別だが」

「……それも、あるかもしれんな」

突然のカマクラの言葉に、院は表情の読めない彼女を見た。

この主は自分と同様、いくさを最後まで避けようとする考えの筈だ。今更、何を——と。

「いちこは既にカマクラに行ったのだろう？　ならばそのままその座を継承すればよいだけのことで」

東の主が自分に何を仕掛けているのか、院にはまだ読めない。これは互いの腹の探りあいであるように見えたが、「いちこ」というカードを隠しておこうとしたのは、彼の方なだ。

その時点で相手に主導権を握られている。だとすればそこは下手に隠さずに、自分から切り込んでいくしかなかった。

「そーなんだよなー。あのお嬢ちゃん、来ちまっただよなー、ここに」

カマクラはあ、とため息をつきながらそう言つと、院と自分の杯に再び酒を注ぎ足した。

まるで来て欲しくなかったような言い方に、院は東の主を驚いたように見つめた。

「何の因果か、次のカマクラは京の院に拾われ今まで『保護』されていた」

カマクラは『隠蔽』という表現を避けたようだった。

「それなのに、あの子は急にカマクラに来たんだ」

——それはいちこ自身の意思ではないのか？ 院は言葉にする代わりにカマクラを見た。

「あの子は次のカマクラになる、んだとさ。……『院の守りたいものを守りたい』からだ」と

その瞬間、杯を持った院の右手がぴくりと動いたことをカマクラは見逃さなかった。

「殊勝なこつた。俺よりもずっとカマクラに向いてらあ」

カマクラは話を続けながら、彼の反応を見ていた。——やっぱり、な、とあることを確信しながら。

「あの子は自覚していた。自分がこの力を持って京にいれば、いつか争いが起こる。あんたは何百年も前に、ご立派にも京の澱んだ気

をあなたの体内に閉じ込めることによって京での勢力争いを収め、それ以来そのやり方で西の平和な気を保っている。あの子はその苦労を知ってたんだ。知ってるからこそ、自分なんかのためにいくさを引き起こしたくないんだとさ」

……そこまで代弁すると、まるで人の恋路に介入しているようで非常にむず痒く、自分のポリシーに反することであるがカマクラはあえて「余分なこと」まで話した。

「まあ、俺としてはいくささえ起こらなきゃなんでもいいんだけどさ。だからいちががそうしたいつつーんなら、そうしてもらったより他ない」

その言葉を聞き、院は再びぴくりと反応した。今度はカマクラの態度に反応したのであった。

『いくささえ起こらなけりや—』

やはりそう思つのであれば、先ほどの「京を討つことになるかもしれない」という発言は何を意味している——？

院はカマクラの言おうとしていることを探るように、彼女を真っ直ぐに見つめた。そして鎌でも掛けるように彼は口を開いた。

「それなら、そうすればいい。あの子がカマクラになることを望んだのなら」

——鎌、と言っても院のその言葉に、嘘はなかった。

が、乗せられたのは彼の方なのか、カマクラはくっくつと笑うと反論した。

「嘘言え」

院の口元からすつと笑みが消えた。

「あんたは、まだ何かを隠している」

それこそ自分は鎌を掛けられているのかもしれないが、その割にはカマクラの口調は確信めいていた。

「何か、とは——何だ」

手を膝の上に置いた院に対し、カマクラは両手を後ろへ投げ出し天を仰いだ。

「んなモン、俺が知ってるわけないだろー。あんたの本心は、あんなにしかわからんのだから」

——自分が、隠しているだと——？

いちこの存在はカマクラに対して明らかにした。偶然、運命的に知られてしまった以上、いくさを行う気がないならば堂々としていなくてはいけないからだ。

だからもうこれ以上、隠していることなど……。

相手の心の内を探るような、そして自分自身の心の内を探しあぐねているような男の、夜空にも似た深い紺色の瞳をカマクラは再び見据えた。

——元々、子供の頃から自分に付き合ってきてしまったという負い目のある「あの青年」以外に、自分には恐いものも失うものもない。だからこそ、この空っぽの心でただ真っ直ぐ見つめていれば真理など見えてくる。

カマクラはきつと相手も自分と同じようなタイプだと直感していた。だからこそ、今こんなにも自分の言葉が相手を揺さ振っている。西の主がこの闇の座に居た永い年月の中にもありえなかったことが、このたつた六年間の間に彼の心の中で起こったからこそ、今、こんなにも彼は脆く、弱い。

所詮は自分もこの男も、元は『ヒト』であつたということを思い知らされる。

世はいつでも人の想いが作り出し、歴史を変えていく。

少し思案した後に、カマクラは言葉を吐き出した。

「六年前、俺のところにひとりの男が奉公に上がった。その男は己

の娘の身の安全を俺に御恩として頼み、病死した。娘の名は、……イチコと言った」

思わず、自分の置き忘れてきた名と同じ名だと、その男に明かしてしまった。その同じ名の自分のために、男は普請としてよく働いてくれた。

その男のことは既にいちこから聞き知っている話であつたので、院は黙つて頷いた。

「俺の御恩は直接その娘に会つてどうこうするものではない。奉公に上がった者に対しての御恩だからな。だからその男が死んだ後に、娘の行方を確かめることはしなかったが、御恩は確かにその男を通じて与えた」

一体どこからが、はじまりだつたのか。

「その娘が西の主のあんたに命を助けられたのは俺の御恩か、あんたの力か——今となつてはもうわからない。ただひとつ言えることは俺の力であつたとしても、それはあの男への御恩になるのだから、いちこにはまだ御恩を与えたことはないし、俺はあの子から奉公もされていないことになる」

——これからしてもらうことになるんだろうが、と院はそう言いたいような目でカマクラを見ていた。

「馬鹿な俺たちが何も知らない間に、次のカマクラだつたその男の娘は力を発現した時、京の院に保護されてしまい、そして院の下で育つこととなった。もっと大きな力を発現してくれていれば、カマクラまで気配が伝わるものの、既に死ぬつもりだつたあまりに消えそうな力だつたんだろう」

それこそ自分が玄次の命を助けたくらいの大きな力であれば、先代カマクラのように察知できたであろうが、いちこの場合はもう死を覚悟していた消え行く力であつたうえに、たまたま院庁の近くの場所で倒れていたのであつた。

「俺よりも先に察知したあんたは、いちこを助けた。——いや、本

当は殺すつもりもあつたんだろ？」

カマクラはじろりと院を見た。

この世で唯一と言ってもいい同じ立場の者だ。隠し立てなどできるわけがない。

——読まれてるな、と思い、院は返事の代わりに口先だけで微笑んだ。

「あんたはいくさを望んじやいないが、天に二日ある今の状況じゃ、いくら平和でも常に危うい状況になる恐れがある。次のカマクラを拾いました、はいどうぞ、というわけにもいかんだろう。だってそんなものを拾ったと知られたら、周りが黙っちゃいない。変な考えを起こす者も現れるさ。だがその面倒の種を、あんたはあえて保護した」

カマクラの言葉にあの時この袖を掴んだ、少女の小さな小さな手——その時の胸の痛みを思い出し、院は着物の袂をそつと握り締めた。

「助けた本当のところの理由は知らんよ。あんたにしかわからない。ただあんたは殺すこともなく誰かに教えることもなく、その子を連れ帰り自分の力でカマクラの力を抑え、傍に置いた」

カマクラの目は真っ直ぐに院を見つめていた。その視線を彼もまた逸らしはしなかった。

「回りくどいのは嫌なんで、直球で訊こう。——あんたはいちこをどうするつもりで拾ったんだ？」

「……」

孤独だった自分があの時感じた想いは、聞かれると恥ずかしいような感傷だが、東の主がわざわざこうしてこの場を設けたのだ。隠すような無礼はできない。

それにもう自分のプライドなどで隠しておけるような呑気な状況でもなくなっていること——北面の暴走など——もわかっていた。

この女が誰に言うわけでもない。同じように、ただクニの安寧だけを考えて、そのために自分に聞くのだろう、と院は思っていた。

「……まだ、子供だったから。あんな子供にこの世の全てを背負わせるわけには、いけない。——だから、大人になるまでは、と」

院は静かに答えた。

「それで六年、か。まだ早いと思ってたんだろうが、残念だったな。だが——」

カマクラは一呼吸置くと、再び堰を切ったように口を開いた。

「どうして『大人になるまで』なんて期間限定の間、『あんだ』の側に置こうと思った？ 他の誰にもそのことを言わず、あの子の存在を抹消することもなく。結果こんな風に騒ぎになることも、予測できなかったあんだじゃないだろうに。大人になったらカマクラに戻すつもりだった？ それが少し早くなっただけで、こうなっただけならカマクラに戻す？ ——ふざけるなよ」

初対面の相手に口汚く罵るのは全くもって常識知らずなことであるが、こんな辛い術長くはもたない。時間がないのだ。多少強引でも最後まで言い切るしかない。彼がちょっとしたことで激昂しないタイプであるのが幸いした。

「いちこが望んだから？ あんたそれ本気で言ってるのか？ まあ、ある意味本気だろうが、それよりいちこが本気でそう思ってると思ってるのか？」

そう確信しているのは、先ほど少女に会ったことから。

「長い永い、あんたの人生のたった六年。あの子を囲ってたのはそれっぽっきりの時間だ。永遠に近い時間を生きる西の支配者であるあんたが、偶然拾った幼い女の子とたった、六年。それはただ単に感傷か？ 気まぐれか？ 人形遊びか？ ——違うだろう？」

畳み掛けるような東の主の言葉を、院はいつの間にか作り笑いも失ってただ呆然と聞いていた。

この相手だからこそ言葉が静かに自分に入ってくる。そうでなければこんなに自分の心に触れられて、相手が今頃無事でいるわけがなかった。

その15 乾坤一擲1（中編）

「あんたの永遠みたいな永い人生のたった六年なんて取るに足りない時間だ。それなのにたったそれだけの短い時間なのに、あんたはあんたの全てをかけてあの子を大事にしていた。あんたがそれがフリじゃないことくらい、あの子は本能で察知している。何よりあの子は次のカマクラなんだしな。あんたがもし最初からいちこを手放すつもりなら、そんなあんたにとって瞬く間の短い時間をあえて過ごす理由が無い。第一、次のカマクラ相手に、そんな危険をあんたが犯すわけない。——つまりそれはあんたにとってはどんな短くても危険でも意味がなくても、永遠みたいに永く重要な時間だったんだ！……そう、」

東の主の次の言葉に院は「いや、彼の中の『誰か』が耳を塞ごうとする。

——ヤメロ！！と——。

「あんたは最初からいちこを手放す気などなかった！……違うか？」

その内側からの叫びを打ち砕き、相手の心の奥底まで響くような声色でカマクラは言い放った。

「……………」

院からの反論はなかった。

彼はただ、静かに瞳を閉じた。己の中の己を——この尊大な力を持った自分が唯一対等の力で抑えねばならない、己自身と云うものを、今まで以上に必死に抑えようとしていたからだ。

自分の仮定がほぼ正解だと確信したカマクラは、最後まで話を続けた。

「だからあんたは、いちこがカマクラとなることを望んでいるならばそうしたいと、『院』としてこのクニの平和のためにそうしたいと、今はそう思ってたカマクラにいちこを戻そうとしている。が、いつかきつと、いちこことずつと一緒に居たいと思った『本当のあんた』が、後悔して顔を出してくる。そしてその時はその『本当のあんた』の痴情でクニを揺るがす大事変を起こすかもしれない。または自暴自棄になった『そいつ』が自分自身を突然消去し、京の平和な気をバラバラにするかもしれない。もしくはカマクラであるいちこを、永遠に自分のものにするため奪い去ったり……殺してしまうことだってあるかもしれない。本当は、あんただってそうなるかもしれないって判ってたんだろう？」

人の心を見抜き、迷うこともないこの女——その繊細な感覚こそが、取りも直さず『彼女』という存在が々持っていた『力』なのか？ 自分に偽らない東の支配者の心で見つめられた真実には、嘘は付けないと思った。

「永い時を生きてきたあんたは、本当はいつ疲れてしまうかわからない。何よりあんた自身、既に自分の命に執着はない。だとすれば、本当は京——というよりあんた個人の力だけでもっている院庁、がいつ崩壊してもおかしくはないんだ」

いちこは運命的なタイミングで彼と出会ってしまった、その火付け役だった。

「いちこの正体がわかった時点でそう思った。それがわかってんのに、黙ってられっかよ。こんな不安要素があるまま、あんたもいちこも納得しちやいないまま、世代交代なんてしたって上手くいくわけないだろ。絶対に後からあんた——にもわからないあんたの自身にこの状況が覆される気がする。もしくはいちこ自身がそうするかもしれない」

一気に喋りきると、こんな必死に演説こいたのは初めてだ、とカマクラは乱暴に酒を注ぎ、一気に煽った。

——ざわり、と彼の中で騒ぐ心。

あの時逃げ出すいちこを追い、その動きを、命すらを止めようとした『真の自分』が、この自分の心をたったひとり同じ立場だからわかるのだろう東の主によって今、もう一度呼び起こされようとしている。

——この女は、己がしていることがわかつているのか？今、こうして膿を出すことで後々のいくさを避けるつもりが、失敗すれば、今、いくさになるのだぞ？

院の気の色が不安定に変わりつつあるのをカマクラは肌で感じていた。

それはいつも彼が自分自身を幽閉している院庁ではない空間……しかもカマクラによって守られた彼女の意識の中であるからこそ、そのように現れて見えるものでもあった。

どちらにしろ院がいちこを拾った時点で、彼女を仮初の時間でも側に置きそれを愛してしまった時点で、今までのクニの平和を一緒に祈ってきた『院』は、彼が彼となる前の『ヒト』に戻っていた、ということではないかとカマクラは考えたのであった。

彼も自分も同じなのだから。本当の自分と、今の立場。不安定な綱渡り、同じギリギリのラインの上で、生きている。

自分は『ヒト』であることをとうに捨ててきたが、あの男——次はそのまま自分の傍にいてくれた。それというのは、彼が言ったのと同じ『何も捨てていないのと同じ』ことなのだ。

だが院は、自分と違ってそれを捨てた後、本当に孤独であった。そして今一度、それを手にしてしまった——。

その時の彼の悦びに溢れた恍惚の気持ちなど、自分には到底推し

量れるものではない。

カマクラはそんなことを思い、黙って酒を口にしていた。

しかしカマクラの問いに対する『答え』は、初めて口にしたものだが院自身も思っていた以上にシンプルなものだった。

「――“傍にいたかったから”。そんな甘い答えで、俺は気まぐれを起こした」

自嘲的に笑い、『彼』は語り始めた。

「笑えるくらいに、くだらないだろう？ 人に言えるわけもない。こんな感情はお前の言うとおり、仮初だ。こんなことでこれまで自分がしてきた苦勞を棒に振るつもりはない。だから時がくればあの子をカマクラに戻すつもりだった――それは本心だ」

だがその『時』を瞬く間の短い時間であっても、長引かせようとした。最初からあつてもなくても同じくらいの短い時間が、彼にとつては永遠の宝となつてしまった。

――殺せなかった。手放せなかった。

はじめて自分にその小さな命が縋った時から。

永い時を生きていたのに、それをずっとずっと前から待っていたかのような、そんな錯覚が起こった。

ざわり、ざわり、と彼の周囲の気が揺れる。

『院』としての『彼』が言っていることは、確かに本心だった。

だが、院になる前の一人の男――あの、『ヒト』であつた時の自分は――。

自分を今、此处に『院』として存立させているのは、結局その『ヒト』であつた時の自分が決断したことなのだから、それはまだ自分の心に消えることなく基として存在しており、自分の孤独と戦い、救いを手に入れようと己とずっと隣り合わせにあつた。

寧ろそれこそが『本来の自分』――原^{げん}の存在であつた。

その『自分』の心がいちこを拾い、彼を苦惱、葛藤させ、彼女を

ぼろぼろにすることで一度は無理矢理手に入れようとした。

院の表情は固く無表情であるものの、彼の心の動揺は彼を取り巻く気の波がどんどん激しくなり、不気味なものへと変貌を遂げていることでカマクラにも手に取るようにわかった。

普通の人間ならこんな風に酒など飲んでいられない。恐怖に身が竦むか、既にその気に食い尽くされているだろう。

確かに彼女とてそれほど安全というわけでもないが、自分がそうしたものに未だ攻撃されていないのは、このクニの平和を願う『院』としての強い意志が彼にまだ働いているからだった。

カマクラに何かあれば、東のクニはたちどころに乱れる。ひとりの支配者の気が全てを左右しているこの世界だからこそその絶対的なものであり、危うい支配の方法でもあった。だから『院』という男ならば、そうやすやすとカマクラの身を脅かすようなことはしない筈だった。

——院は自分と違ってずっと大人で、強い。カマクラはそう信じていた。

だから自分の不躰な発言を聞いても己を保っていられている。だが彼が自分と本当に同じ立場なら、このことによって彼の心の中は既に壊されている筈だった。

自分がある日、幼い玄次によって心を掻き乱され、壊されてしまったように。先代カマクラによってそれが更に壊され終にはゼロとされ、新たな自分すら生まれさせてしまったように。

しかし院の心を本当に破壊するのは、自分なんかじゃない。

自分と一緒に——、

「ああそうさ、あんたは俺と違って俺よりずっと偉い人間だ。自分の寿命も人生も犠牲にして、京の平和のためにとミカドを退きあえ

て院となり、朝廷や京や西に蔓延る『欲』などの悪しき気を全て自分の中に喰らい閉じ込めることで、あんたは西を治めることにした。おかげで朝廷は益暗キゾクばかりでも回ってゐるってワケだ。でもそれは結局、院が遙か昔のように朝廷と関係なく支配をしていた時代と変わらないとも言えるんじゃないか？ カマクラに相当する西の表向きの支配者は朝廷のミカドである筈なのに。——あんたのそれ故の苦勞、孤独は俺なんかには解りもしないが、それ故に後戻りができなくなっていたのは確かだろう。そこに現れたのが、次のカマクラに相当する力を持った少女だ。それならば自分の強大すぎる力の前でも、決して消えることはない。やっとなんかに入れたそれを、『院』としての理性が働いているあんたは、こうしてカマクラに渡した。でもその悪しきモノを独りで喰らってこのクニを守ろうと決めたひとりの男は、『本当のあんた』は、その永い孤独の中でようやく手に入れた光を手放したいわけがない！ 今、理性で手放しても孤独に耐え切れなくなり、必ずもう一度本気で手を伸ばす。その時はクニの全てを崩壊させるかもしれない。——あんたは本当は、自分でもそうする恐れがあることを判ってんじゃないのか？ なのにそこから逃げてんじゃないのか！？」

それこそがカマクラが、院がまだ隠している、と思っていたことであり、懸念であった。

無言の院にカマクラは、今度こそ最後だと畳み掛けた。

「あんたは俺と同じだ。——昔、『ヒト』であつた、その時の決断で『今の自分』がある。それゆえに脆すぎる。いつだっていくさを起こすのはヒトの心だ。それは元ヒトであつた俺たちだって例外じゃない。逆に立場上それをしないようにどんな仮面を被ってきた。自分の殻を強固にしていた。ヒトであつた自分をもう二度と思ひ出さないように、己の心が壊れないように努めてきた。——だがそれをし続けていたら、ある日自分でも制御できないほどの強い決壊

が起こつてしまふんだ。それを人為的に今無理矢理引き起こすのがいいのか、自然発生を待つのがいいのか、俺にもわからん。だがカマクラの代替わりという俺のしようとしていることで、あんたが狂いクニを揺るがす事態を引き起こしてしまふんなら……いや俺なんかがそれをしなくなつて、同じようにその事実にもう限界なヤツがいる。あんたの心は、もうすぐに――」

――ヤメロ……！！

その瞬間、院は何が起こるか遅まきながら察した。

従前からの選択肢にはなかつたが、この女を早く消してしまえばよかつたとも一瞬思ふほどに。

「――あの子に、壊されるさ」

それは、『あの少女』が次のカマクラだからこそできることだつた。だからこの自分たちの強い気や、それをを用いた術の中でも己を失うことなくいつものように『いちこ』として、彼を見つめ続けていられる。

カマクラの言葉が終わると同時に、まるでカーテンが開くように二人の横の白い靄が晴れ……、

「え……？ あれ？ 院！？ カマクラ様！？？」

そこには、十四歳の少女が立っていた。

いちこにしてみればカマクラと別れてからまた彷徨っていたら、この空間に出てしまつた、という具合であろう。

大層驚いて二人の方を見ていたが、やはりもう一度会いたかつた男を確認した瞬間、その大きな眼が安堵と嬉しさに潤んでいた。

――きつと彼はこんな風に感情を向けられたことなどなかつたんだな。

院がどんな表情で今いちこの方を見ているかは眼を伏せている力

マクラにはわからなかったが、彼女……一湖にはそのことが痛いくらいにわかる気がした。

だけど彼は自分とは違う人間だ。きっと自分とはまた違う決断を下すであろう。

カマクラとして、このクニを守る。それも考えて、今この状況を作った。後々の不安を排除したい。だが二人の未来にまで口を出すのも野暮だ。

そしてクニを守るためと言って、一人の子供を犠牲に『あの子』のように引き裂かれそうな哀しい想いを押し付けるつもりもなかった。

「——いちこ」

カマクラは突然の状況変化に安心して、ぼけっと突っ立っているいちこに呼びかけた。

「は、はいっつ」

低く迫力のある声に、少女はびくつとその身を震わせた。

「まあ、さっき言ったとおりだ。後悔しないように言いたいこと、言っとけよ」

カマクラは立っているいちこを見上げると、にやりと笑った。

「——はい！」

彷徨う間に彼女も何かを考えていたのだろう。少し不安そうに、だがはつきりとそう答えた。

そしてカマクラはよいしょ、と立ち上がった。

「このはつきりしねーキモチの悪い状態のまんま、ウチでお嬢さん預かるワケにもいかんもんでね。——ただし、俺の意識の中だつてことは、忘れんでくれ」

それは危険な賭けでもあった。二人が手を組み、カマクラ自身を内側から滅ぼすことも考えられるのだから。

だけでもしもの時には戦う覚悟は出来ていたし、この二人は根本

的に善良な人間であると信じていた。

今、この膿を解消しなければ将来的にクニは不穩になる。

ひとりの男と少女、その『ヒト』である二人を自分の所為で分かり合えないまま引き裂いてしまうのは心苦しい。

カマクラが誰にも言わずに、最後の舞台としてこのお膳立てをしたのはその二つの結論からであった。その不安があるのに長年務めてきたカマクラの代替わりなど自分も出来ない。だから後悔はしないつもりだった。

カマクラが立ち去ると彼女の背後にまた靄が立ち、そこはいちこ
と院の二人だけの空間になった。

.....

ここは彼女の意識の中——ほう、と息を抜けばカマクラの心模様が浮き彫りになる。

二人と距離を隔てその会話をあえて聞かないようにする、となる
と彼女の『本心』がその目の前に現れてきた。

カマクラが上を振り仰ぐと、そこは森の中だった。夜の闇の中、
木の上に丸い月が浮かぶ。

——自分が過去に住んでいたあのムラの風景だった。

あのムラで自分が心を破壊されたという言い方をしたが、先に彼
——まだ子供だった玄次の心を壊したのは自分の方なのだ。

だからその二つ分、心を壊されることがどんなに苦しいものかは
知っているつもりだった。

だけど院は自分とは違う。そして自分たちとも違ってたとえ壊れ
ても今、その相手が目の前にいるのだ。話をすることができる、分
かり合うこともできる。

しかし自分は心を壊されたことに、後悔などしていなかった。

その15 乾坤一擲1（後編）

そもそも自分の心が壊れたのも、元は『一湖』自身に原因があったのだ。逃げ続けいつかは壊れてしまうような弱さを常に持っていたから、ちよつとした引き金で簡単に破壊されてしまう心を自分自身で作ってしまったのだった。

そして案の定、『彼』との出会いにより壊され、そのまま人生を終えるところを、自分には『カマクラ』としてもう一度自分をやり直すチャンスが与えられた。

もう遅いこともたくさんあるけれど、壊れて何もなくなった跡に新しい自分を構築できた。そして壊されたことで、自分にも感情を認めることのできる覚悟や強さが備わった。

カマクラであるから感情だけに流されてはいけなが、自分の心を常に静かに見つめて、それを受け入れられるようになったのだ。そのことには、玄次にも感謝をしていた。

だから相手が院であろうとも恐くなどなかった。思うままに心を伝えた。

——だが自分がそうだからといって、院の心を壊していい理由にはならない。でも自分がしなくても、いちこが成し遂げてしまうだろう。

あの子はあの時の玄次と一緒に、そういう子だ。

一度は院の元からは逃げてしまったようだが、もう一度向き合うことを決めたならば、もう院は……『彼』はあの子から逃れられないだろう。

そこまで考えると、冬の寒さからか、カマクラはぶる、と軽く身震いした。

今の自分を創った、その引き金——カマクラで生きるために今は御恩と奉公で仕える一部下となってしまう、周りの者は自分たちの過去を誰も知らないが、東の支配者の唯一の、弱点。その存在のことを思い出していた。

——絶対に勝つだろうから、生きてはいると思うが……。

カマクラには前から『ひとつの決断』ができていた。それはあの二人に会い、今話をしたことで、更に確実なものとして心が決まった。それは天を動かすほどの大きなことだった。そしてそれはもう、避けられないことになるだろう。

主はそれを独断でしようとしていた。いちこが自分の意識の中に入ってきた以上、今すぐ決めなくてはいけないこととなってしまい、評定にかける暇もなくなったからだ。

せめて自分が一番信頼を置く者に、これでいいよねえ、と訊きたくなった。いつだって独断ばかりで彼には後から知らせて怒られてばかりだったけれど、今度ばかりは小心者の自分には少し荷の重い決断だった。

そしてそのことで少なからず、彼の人生もまたそれに付き合わせてしまうのだから。

いちこに偶然出会ってしまった日——自分が辛い決断をしなくてはいけないと悟った時、二人分の心を壊すことになると思った時、その荷の重さに弱い自分は自分でも気付かず泣いてしまうほど恐れていたけれど、それを暖かい手によって受け止められた。些細な事であったが、それで東の主として決断する踏ん切りがついたのであった。

——早く、会いたいなあ……。

強いふりをしている未だ弱い彼女がそう思ってしまうのは、決していちこと院を見て過去を思い出した感傷からだけではなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ、あの……」

いちこは何か言わなきゃ、とおずおずと口を開いた。

自分を殺すつもりだったのか、信頼していた男に押し倒され、少女は恐怖と絶望でそのまま逃げ出した。

自分が次のカマクラであることをこの男は知っていた。知っていて隠してきた。そして急に自分を拒絶するように真実を告げた。

いちこはこの男に何をどう言ったらいいのか、何を信じればいいのか、本当はわからなかった。

——だが、

『言いたい時に、言いてえことを言つとかないと、もう二度と言えなくなる』

と同じカマクラだからか、父親が心から信頼していたからか、父親への御恩で自分の命を救ってくれたからかはわからないが、会った回数は少なくとも何故か信じられ、頼りになると感じられるあの東の主がそう教えてくれたのだ。

そして彼女はこの最後のチャンスを作ってくれた。

——恐い。

この男に自分は殺そうとされたのだ、裏切られたのだ。恐いに決まっている。

——だけど。

彼に拾われたという北面も同じように彼の魅力に取り付かれ、盲

信していた。それでも彼は幸せだったのだろう。

——自分も、同じだ。

今、もう一度会えて、こんなにも嬉しい。

裏切られようが、嫌われようが、孤独から救われたあの日から、私は……。

院は何も言うことなどない、というように黙っていた。

だがいちこを退けようとしなかった。黙してその場に座したままだった。

「院……、私は、」

いちこは遂に沈黙を破った。

「西の京と東のカマクラがどっちもがんばってクニを守ってきて、それが丁度よく均衡されてるからこのクニは平和なんだってきいてました。それはそうだって思います。だからカマクラも京も、なくなっちゃいけないんだと思います」

いちこはカマクラに言ったことと同じことを院に言った。

「私は——」

こんな時だがときどきする言葉を、思い切って生まれて初めて告げた。

「院が、好きです」

すごく緊張した割には、そんな言葉では到底足りない気がした。いちこは紅潮する頬で一呼吸おくと、話を続けた。

「院が、私なんかには想像もできない時間、ずっとひとりで京の悪いもの全てを飲み込んで耐えてきて、クニの平和を守って、それでも私みたいな子供に優しくしてくれて、自分よりもクニとか人のことばかり考えてて——私はそういう人になりたい、って思ってたまし

た。そんな風に院が好きだから、院が一生懸命守ってきたものを守りたいと思ったから、だから私は私のできることをしたくて、カマクラになんきやいけないって、思ったんです」

それはカマクラから言われていたものの、改めて聞くと院にもこの少女の成長を感じる。そしてそこまで自分を思うことを嬉しく感じないわけではない。

院は『院』として、呼吸ひとつ乱れることなく静かに少女の話を聴いていた。

「でも……」

——本当に、本当の本当に、

『言いたい時に、言いてえことを——』

私が本当の本当に心から思うこと、どんな目に遭っても何を相手に思われても言われても、ここで言わないと一生後悔すると思うことは——、

「本当は……」

いちこはすう、と息をひとつ吸うと両手の拳を握り、覚悟を決めて思い切り大きな声で言った。

「ほんとわたし、カマクラなんてなりたくないっ！！　ずーっとずーーっつと、院の側に、いたいんですっっ！！」

「——」

そのあまりの大声に、なのか、それとも言われたことに、なのか……。

言い終わって、ああすつきりした、と思いつつも逆に胸は高まる一方のいちこが赤い顔で相手を見ると、今までずっと同じ静かで穏やかな表情ばかりをしていたその男が、見たこともないほど面食らったような、驚いたような——いちこがあえて表現するならば、『院らしからぬ』表情をしていたのであった。

ぐふつ、と押し殺したような妙な笑い声をカマクラは出してしまった。

そしてごほごほとわざとらしく咳をする。

自分の意識の中で、それを上回る感情の高ぶりと魂からの叫びは、そこから意識を逸らしていた自分のところまで届いてきてしまった。「遂に言いやがったか……」

カマクラは先ほどと同じ木の上の月を見上げ、苦笑して頭を掻いた。

どう出るか、と先ほどいちこに会ってから、いや、いちこに初めて出会った時からずっとずっと思っていたが――。

「最悪、かな……」

それは最も覚悟していた答えだが、一番大変な答えであるということのカマクラは重々承知していた。

.....

――どくん。

何かが、自分の中で動き出す。

好き、と言われることも、自分が大事に想われていることも、『院』の予想の範囲内だった。

それだけ彼女を優しく慈しんできたのだ。愛情を注いできたのだ。

――だが……。

顔を真っ赤に染め、だが絶対に一步も引くもんかと覚悟と勇気を持ってこの尊大な存在を見据える小さな存在の叫びは、予想以上に自分にこたえていた。

『カマクラになります』と言ったのは模範的な回答だった。自分が『クニの安寧のためにいちこそを手放す』とカマクラに言ったことも、彼女が最初自分に言ったことも、実に筋書き通りの模範的なものだった。

こんな馬鹿げた回答、落第点だ。只の子供の我儘。誰も幸せになんてならない。自分も苦しむ、お前も苦しむ。

——だけど、それをお前は決断するのか。

自分に拒絶されようと構わないと、何があっても貫くつもりで叫びやがった。

その言葉が自分に思った以上に届いてしまったのは、この子がカマクラの力を持っているからか、それとも『この子』だからか——。

……でも、そんなこと、もうどうでもいい。

——俺は、誰だ？

今こうしている、こう想っている、この娘を欲しいと思っている俺は——、ダレダ。

『院』は整えられた前髪に手をやり、ぐしゃりとその形を崩すとは、と短く笑った。

その見たこともない様子にこの男が『誰』であるのかわからなくなりそうになって、いちこは少し身構えた。

だがそれでも、雰囲気は違っても自分を今まで守ってきた、この先自分を喰らい尽くすことがあるうとも、守ってくれていたときと奥底の気持ちは変わっていない『彼』——と同一人物であるとわかっていたから。

あの日自分を救ったのは、ただ単なる優しさではなく彼自身が救われたかったというのも既に承知で。

否、男の心が深くはわからなくとも今は『信じる』覚悟が出来て

いたから、今度は逃げ出さずにあの時も見たその、名前もまだ知らない『彼』を見た。

「それが、お前の結論か」

「——はい」

「酷い、もんだな」

「……っ、それでも」

嘲笑され酷いと言われたことは少女にはこたえたが、それでも退く気は少しもなかった。

「後悔、しないか？」

「はい」

「覚悟は、あるか？」

「——はい」

そんなわけないだろう、と『彼』は思った。この先起こることがこんな子供に予想できるはずもない。

——だが、この自分が欲しいと思ったくらいだ。こいつは、強い。今言ったことを一生後悔などしないだろう、後悔することになってもするもんか、とそれ以上に強く思い続けることをしでかすだろう。

——そう、すればいい。

今まで永すぎた。もう、疲れた。

一度壊れた自分にはもう限界だった。

『オマエの幸せのために』など綺麗事を言って相手を退けるだけの気力もなかった。

今を逃したら、後はない。此处で決断しなくても、確かにカマクラの言うとおり、数年後に己が滅びるだけだろう。だったら今、もう、解放されよう。

欲望、渴望、希望、救い——自分の望む全てを、その小さな体で受け止めさせよう。

「——そうか」

男はゆっくりと立ち上がると、少女の前に立った。

そして自分より随分低いところにあるその眼を、真っ直ぐに見た。互いにもう視線は逸らさなかった。

『彼』はふっと笑うと、少女の頭にぼん、と手を置いた。

身に纏う雰囲気は以前の優しいだけのものと違うけれど、その手が今まで自分を守ってくれたもの同様、暖かったので少女は泣きそうになって『彼』に抱きついた。

初めてその存在に対して、本気で触れて触れられた。そんな風に感じた初めてのぬくもりだった。

.....

カマクラの見ていた森の風景が、ざあつと黒い風によって掻き消え、周囲は最初のように何もない薄暗い空間へと変わった。

「——決めちゃったかよ」

カマクラはため息をつきながら、そこから現れた男と少女を見た。少女はカマクラに「嘘ついてごめんなさい！」と頭を下げようとしたが、男によってそれを制された。

そこに居た人物をカマクラは振り仰いだ。——お前は誰だ、という無粋な質問はやめた。

自分がああ青年の前で、カマクラであろうとしながらも弱い『ヒト』だった時の……『一湖』の部分を垣間見せていたように、この男もまた『ヒト』だった自分の心と『院』である自分との狭間にいるのだろう。

その本当の名など、いちこにだけ聞かせていればいい。

しかしそれは予想していたものの、カマクラにとっては望ましくない事態でもあった。

なのにそうされるとわかっていても、強引な世代交代が自分にはできなかったのだ。いつそそうしてしまいつい何年かの後、自分がカマクラとはもう無関係になった時に、院が暴走をして世が滅んでしまえばいい、とも思えなかったのだ。

——何が正しいかなんて、自分にもわからない。

しかしもう、全ては動き出した。

はじまりの時が告げられた。

後で後悔するも何も、賽は投げられもう後戻りはできない。

カマクラは拳を握った。今はただ、最初に自分が決めたように、ひとつの犠牲も出さないように動かなくてはならない。

「どうする、院」

立場上的名で呼びかけたカマクラの呼びかけに、院——とも異なってきた一人の男は、口元を横に引いて笑うような表情を浮かべると、後ろでどうしていいかわからないといった表情をしていた少女の首に腕を回し、締め上げる——実際そうしてはいないが——ような格好をさせて、カマクラに告げた。

「取引を、しよう」

その16 乾坤一擲2（前編）

次の「カマクラ」の喉元に手を掛けた、京の院が当代カマクラに取引を申し出る――。

「取引……？」

カマクラは院の言葉を繰り返した。

「全てがお前の言う通りであつたとすれば――幸いしてお前も次のカマクラの正体は誰にも明かさなくてくれた、勿論俺も秘密にしてきた。だとすればお前の言うとおり、後に取り返しのない破滅を招くよりも、今、『こう』した方がずっと波紋は少ない」
そう言つと院は再三カマクラに見せた自嘲の笑みを漏らした。

「全て、俺のただの欲望だ。我侭だ。それで沢山の人間を傷つける。それでもそうする。そして、この子は人質だ。お前にもそれは止めさせず、取引に応じさせる」

――本当に、腹をくくってしまったらしい。恐ろしい年月を抑圧していたがため、一度そうすると決めればもう解放されるしか後はないのだろう。

カマクラはそう考えると、ため息をついて頭を掻いた。

「それで？」

彼がこうなることは、いちこという存在を知った時からもしかしたら、と予想していた。そうなれば、自分の力では止められなくなることもわかっていた。

だとすれば、自分ができることはせめてこの男の痴情とも呼べる我侭でクニを潰さないことだけだ。そして彼もそれは避けたいと思つているから、この自分に取引を申し出ている筈だった。

「あんたの提案は？」

いちこを手に入れる——その彼の望みは、彼女もまたそれを強く望む以上、止められない決定事項だ。

しかしカマクラから次のカマクラを奪おうとするなど、このクニの均衡を乱すに他ならない。その不利な状況をどう打開するというのが。

未だに訝しげに彼を見るカマクラに、院から「提案」されたことは、驚くべきことであつた。

「お前に匹敵する力を持ち、お前の支配に拠らず独自に存立できる存在だからこそ、俺にはお前の支配力の源の『御恩と奉公』とやらは適応しない。だからこれは対等の『取引』になる。その上でこちらからの提案としては——、『院庁を崩壊させる』、というのはどうだろう」

「——！！」

院の突然の宣言に、隣のいちこが驚いたように彼を見上げた。

——自分なんかの所為で、京の院組織を崩壊するというのか？何百年も続いたそれを自分なんかのためにあつさりと？

それで西の治世はどうなるのか？クニはどうなるのか？自分はその罪の重みに耐えられるのか！？

——だが院は自分に既に後悔しないか、覚悟はしているかを確認している。

彼と一緒に居ることを選び、覚悟していると宣言したのは自分だ。だから今はもう彼のすることを信じるしかなかった。そしてどんなことが起ころうとも後悔してはならなかった。

最初に自分がカマクラに謝ろうとしたのを、彼は制した。これは彼とカマクラとの駆け引きだ。自分なんかの出る幕ではない。

そう思ったいちこは何も言わず固唾を飲んで二人を見比べ、見守

っていた。

大それたことを平然と言つてのけた院は、淡々と話を続ける。

「カマクラの支配下にあつたオワリに強襲を仕掛けたのはこちらの腹心だ。西と東の領域を侵したその件を、これで帳消しにしてもらえれば有難いが……。侘び代わりにはなるだろう」

——にしては釣りの出る侘びだな、とカマクラは眉間に皺を寄せて院を見た。

「院庁の崩壊なんて、でけえ条件をやけに簡単に言いやがるが……、どうする気なんだ」

カマクラの疑うようなその言葉の裏には、それが楽に達成できるようなことはでないという思いがあつた。それが簡単にできるのであつたらこの男が永い年月、ひとりで在位している筈がなかつた。

院はその身ひとつで西の気の安定を守ってきた。院庁の崩壊——“院”という存在が消え失せるということは、即ちそれと同時に彼の体内で抑えられていた、争いに繋がるような負のエネルギーが世に放出され、安定していた西の気が狂ってしまうということなのだ。だからこそ、それはそんな容易くしてよいことであるわけがなかつた。

「——だから取引と言っているだろう」

院は自分の腕を首に回している少女の方を、ちらりと見た。その視線でカマクラは察した。

「成程。いちこ……次のカマクラを、いや、それが持つ強大な『力』を、てめーに寄越せつてことか。その力で崩壊により放出される負のエネルギーを相殺して、クニには何も起こらないようにする……」
カマクラはその提案に唸るものの、それ以外に方法はないだろうな、とも内心は思っていた。

そんな膨大なエネルギーを抑える方法など、それと同等の力で対

抗するしかない。それだけの力を持つ者が、この世に何人居るのか。そのひとりが彼の腕の中に捕えられている子供だということは、カマクラにもわかっていた。

——私にそんな力があるのかな？と当のいちこはきょとんとした顔で院を見上げていたが。

「それで、さっきの話、か」

カマクラはため息をついて言った。

「いちこが次のカマクラであることは、俺とあんた、そして互いの腹心しか知らないことの筈だ。これ以上秘密が広がる前に、この子が次のカマクラであるということを、ハナからなしにしちまおうって考えだな」

なんて図々しい考えだ、とカマクラは呆れ顔で院を見る。

院はそれを、穏やかに不敵に微笑んで見返した。

いちこはそれを聞きながら、そんなことができるならどうして最初からしなかったのか——ということは、そうするとまた何か困ったことになるからだよねえ、と尚も心配そうに二人を見比べていた。カマクラはその笑顔に対し、じろりと院を睨むと言葉を続けた。

「その取引だと、実際俺にとってメリットになることは何もねーけど？ 院庁が崩壊して、その時放出されるエネルギーを次のカマクラの力をもって抑えたとしても、『院』がいなくなっちゃうことには変わりねーんだ。そーすれば、京の……西の気は結局乱れることになるぜ？ それがきっかけでいくさになっちゃうえば、てめーらの幸せだってありえねーんだぞ？」

院という重責を捨てることを決意し、もう後には戻らない気でいるこのひとりの男が実際に暴走する前に、まだ“院”で居てくれるうちに、カマクラである自分の納得いく、そして自分の独りの力でなんとかできるレベルまでこの決着の行く末を落とさなくてはいいけ

ない。

このクニは二人の主と二つの政権が上手くバランスをとって、平和な氣を保ってきた。

それなのに西の王者である院がいなくなるということは、カマクラにとつては己ひとりだけでクニ全体を治めなくてはならなくなるということだ。

それはカマクラの身体に負担が掛かるだけでなく、西の者が突然のそれに納得する筈がなく、結局はカマクラがそれを力ずくで抑えることになり、その反発がいくさに繋がるかもしれない、という恐れが大きくあるのだった。

そうなって欲しくないことは院も合意の上で、だからこそ自分が誘ったこの会談に応じてくれたのだとカマクラは思いたかった。

落ち着いた口調であるが、握り締めた掌には若干汗をかいている。カマクラは彼の本心を見抜けるよう、真っ直ぐに院を見据えていた。院は微笑みを消すと、真面目な表情で答えた。

「——わかつている。だからこちらもひとつ、カマクラに対して条件を果たす」

「何だ」

「院庁の代わりの支配者として、形骸化している京の朝廷。——あれを、再興させる」

「……成程……」

カマクラは再び唸った。それしかないか、とまた思った。

今の支配の方法でこのクニは落ち着いている。院が居なくなってもこの安定を崩さないためにはどうすればいいか——確かに、院の代わりとなる者を据えること、が最も順当で平和的だ。

それに一番相応しい組織と云えば、ひとつしかない。

確かに自分でもそれしかないだろうと思っていた方法であつたし、その言葉から相手もまたいくさが起きないよう努めてくれるのだと

いうことも、カマクラには確信できた。

「本来、東のバクフにあたるものが西の朝廷だ。お前が言うとおり、俺はそれを遠い昔のように俺が力を持つことで、形だけのものにさせてしまっていた」

逆にそれは、この男がそれほどの実力と強い信念を持っていたということだ。それ以上の王者が現れなかっただけなのだ。

院の言葉を最後まで黙って聞きながら、カマクラは内心ではそう思っていた。

「朝廷という組織が正しいのかどうかわからないが、バクフの考えも間違いないと俺は思う」

遠い昔、世襲制にしようとしてカマクラで起こった争い。それを避けるように、それは天の定めか、いつしかその力と素質——と言っても欲がないとか酒が飲めるとかそれくらいであるが——を持った者が天から選ばれ、その力を授けられて生まれてくるようになった。

「まあ、理にはかなっているな」

カマクラは腕組みをすると、そこでようやく頷いた。

「あのマ口眉ボンクラミカドに今すぐクニは治めて欲しくはねーけど、だからと言って、西の民だって無駄に朝廷に税金払ってるワケじゃねえし……てか京に二つも組織があるのがそもそもおかしかったのか、うん」

あまり深く物事を考える方ではなかったたので、今頃気付いたように、ぶつぶつと顎に手を当ててカマクラは言っている。

と、そこで肝心な事を思い出して、彼女は院を振り仰いだ。

「って、そんなこと、実際出来んのか？」

「出来るも出来ないも、そうするしかないだろう。どんな手段を使っても、やるさ。幸い、朝廷に俺の顔は繋がっているしな」

院はふつと笑ったが、その不敵な笑顔からおそらく顔が繋がっているどころか、朝廷にとってこの男は恐ろしい存在に違いないだろうな、とカマクラは京のキゾク達を若干気の毒にすら思った。

院としての力を失うことで彼の力自体は小さくなるが、それは“院”という存在でなくなるだけで、元々不思議な力を持った男が残ることに変わりはないのだから。

「それに朝廷とて、どうしようもない人間ばかりでもない。クニのことを憂い、正しき心を持った者は、必ずいる」

——それがいなかったらどーすんだよ、とカマクラは院の言葉に突っ込もうとしたが、あのぐーたらバクフにすらそういう者は居るのだ、まあそれもそうかもな、と思い直した。

「ま、それが出来ても出来なくても、俺はあんたを信じて任せるしかねーんだがな」

カマクラは額の髪をかき上げると苦笑した。

カマクラが朝廷の建て直しに介入などすれば、それこそ歴史の繰り返しになる。下手にそんなことをすれば、カマクラが成立する羽目になった時と同じ、戦乱の世の幕開けとなりかねない。

よって、そうするつもりは毛頭なかった。互いで程よい距離をとり続けていれば、それでよかった。

だからそれについてはカマクラ側に出来ることなど何もなく、この男を信じて任せるしかないのであった。

——院であっても、院でなくなったひとりの男としても、この者を信じられるかと言えば今日会ってすぐ、じゃあお願いします、と言っわけにもいかない。

だがカマクラは信じていた。この男を、ではない。いちこを、だ。この子供が小さな懐刀として、この男の元に飛び込んだ。

どれ程深い絆が二人の間にあるかは知らないが、この強大な存在を変えた子供だ。取るに足らないただの子供でも、この男にとって

は弱点であり、生命線であるのだ。

彼女がいる限り、彼はこの世を裏切らない。彼女の望むこの世界の存続のために、裏切らない。

そして彼がこの先も今回のように迷い惑わされる日が来ても、彼女が己を失うことはおそらく、無い。それはこの二人を見ていれば解ることだった。

男と女つてもんは、そーゆー風に出来てるもんなんだ、と男女の悲喜などよく知らないくせに、カマクラは自己完結してひとりで頷いていた。

「信じるとは言わないが、約束は守るさ」

そんなカマクラの思いを察したのか、院も笑って頷いた。

「それにそれが上手く行けば、東のカマクラ殿は西の院庁の歴史を終わらせ、京の朝廷を立て直した時代の立役者——にもなれるという訳だ」

その名誉も取引のおまけに付くぞ、と院は笑うが、カマクラはそんなご大層なもんはいらねーと顔を顰めた。

「というわけだが——この取引、……どうする？」

院は笑っているが、その手はいちこの喉元から決して離さない。

最初にいちこは人質だと言った。カマクラがこの取引を撥ね付ければ彼が暴走し、今いくさになるだけだ。

それに、その方法が一番確実なことなど、彼女も何度もシミュレーションしたことなので、嫌と言うほどわかっている。

初めて会ったにしては、示し合わせたかのような筋書き通りの展開だった。

「——分かった。……応じよう」

もう少し考えたくなかったわけでもないが、結論は他に考えられ

なかった。

カマクラはゆっくりと落ち着いて頷いた。

それこそバクフの重役との評定どころか、一の腹心にも相談できない大きな決断。それをカマクラはあっさりと受諾した。

それが一番いいと、東の主としても、個人としても最初から信じていたからであった。

自分から求めたくせに、あまりに早く受諾され、院は意外そうに口を横に引いた。

そして彼もまた彼女を信頼して事を進めたく、カマクラへと確認のように言葉を続けた。

「氣前がいいな」

「そらどーも」

カマクラは棒読みで答えると、へつと肩を竦めて笑った。

しかし院はその表面的な反応などではなく、彼女の心の内を探るように、先程のカマクラと同じ見透かすような視線を向けると、唯一違和感を残している疑問を投げかけた。

「だが肝心なことが抜けてるぞ」

ん？とカマクラは院を見上げた。

「そんなあっさりと次のカマクラを俺に渡していいのか？ お前達もずつと必死に探していたのだろ？ 俺とは逆にお前達は長年、世襲制や、まして同じ者が政権を握り続けることを避けて、このカマクラという力を持った外部の者を探し出すようになったと聞く。俺がこうすることで、その均衡は崩れるんじゃないのか？ それを止めたかったんじゃないのか？ 次のカマクラを探していたということは、お前は政権交代をしたいと考えていた筈だ。そうしてしまつて、本当にお前は納得しているのか？」

その16 乾坤一擲2（中編）

そこまで心配してくれるんなら最初からそんなことすんなよ、とカマクラは院の質問に対し、捻くれた突っ込みを心の中に入れる。

——きっと根本的にこいつってすげえ「いい奴」ってゆーか、お人よしなんだろうーな（今は最初で最後のわがまま言ってるけど）、
と思いながらカマクラはため息をついた。

だが院が不安に思うのももつともだ。取引に応じておいて、カマクラが裏切るようなことをすれば意味がない。

彼にしてみれば、自分がこの不利な取引を受諾したことは合点がいかなくて当然だ。先程自分がそうであったように、今度は自分が何か隠しているのではないかと疑われているのだろう。

カマクラは、にへら、と相好を崩すと答えた。

「未来のことは、俺にもわかんねーよ。時代がカマクラを終わらせる気なら、この次のカマクラはもう生まれてこんかもしれないし、まだ続くならばまた生まれてくるだろうーよ。逆に天とか運命とか関係なく、もうカマクラが生まれてこなくても、それはそれでそんな時にどうすりゃいいのか考えるさ。別に『カマクラ』はこうじゃなきゃいけないーって『答え』はないと、俺は思う」

その考え方は王者に相応しくないと言われたとしても、今の支配者は自分なのだし、何より今は自分一人で判断しなくてはいけない状況だ。

このことを後で誰に恨まれたとしても、腹を括るしかない。

「——凄いな」

しかしその答えに、院は眉を寄せて笑った。

「それが『次のカマクラ』であつても、お前にとっては『答え』ではないと言っただな」

——自分がもし、もつと早くこんな風に思えていたら、歴史はまた変わっただろうか。

だけど今自分がしていることは、このカマクラの出した答えとあまり変わらない気もした。

「あ、でもさ」

しかしカマクラは思い出したように手をぼんと叩く。

「もし次のカマクラをあんたがひとりの男としてじゃなくて、京の『院』として欲しがってたら、それはやんなかったぞ？」

いくら気前がよくても、適当でも、それくらいの分別はある。そんなことをして明るみに出れば、東の者も西の者も黙っては居ないからだ。いくさになるのを避けたいだけなのだから、そういう要求であれば応じはしなかった。

——解っている、というように院は頷くと、少しばかり呆れたような響きすら持つて言った。

「信用されてるんだな」

「あんたをじゃねーよ、いちこをだ」

即答で、この取引に応じることにした一番の根拠を口にすると、院はきょとんとカマクラを見たが、彼女と目を合わせてまた微笑んだ。

「それに——」

カマクラは少し言いくそうに、頭をかしかしと掻いた。

「別に体調不良とかの理由で、今すぐ世代交代しなかったワケじゃないし……、まあ、もーちょっと頑張るわ」

——そうそれこそ、それを思いついたのは“カマクラ”ではなく、“一湖”という個の存在の我俣だったのだ。

「普通の女の子に戻りたいんだー」とかなんとか、最初あの腹心に言い募った。面倒臭がる彼に対し、自分がカマクラでなくなれば彼

との御恩と奉公の盟約が終わり、彼も自由になれることをエサに、尽力してもらうことにした。

カマクラを辞めようと思ったその二つの理由は、冗談染みた口調であつたが決して不真面目でも嘘でもなかつた。

寧ろカマクラとしてではないが、一個の人間であつた自分が長く葛藤し、悩んで決めたことだつた。

でもそれは、確かに“カマクラ”としての英断ではない。目の前のこの男と同様、ただの“一湖”がその我儘で望むことであつただ。

それこそ我をもつた私利私欲で、だからこそ院の私利私欲に応じてしまつたのであつた。――所詮、似た者同士と言つたところであらう。

強すぎる我をこの大きな職責で抑えてきたけれど、限界を迎えてしまつた。互いにただ、それだけのことだつた。

そんな自分は本当にこの座には向いていないと“一湖”は思うのに、そういう早く辞めたほうがいい奴に限っていつまでもその座に居座り続けることになるのが、世の中に往々にしてあるのが自分でも全くもつて不思議であつた。

何気ないように飄々とそう言つてはいるものの、目の前の女の不安が院にはわかつた。自分が逆の立場であつたら、きつと同じ気持ちになつたからだ。

万が一、それがうまく行かなければ――己といちこの二人が滅んでしまえば、クニ全体の尻拭いを全てこの東の主が行うことになるからだ。

そんなの確かにまっぴら御免だろうなと思うので約束はしっかり守るつもりであるが、そうすることに決めたのは自分だからと、この東の主はもう恨み言は言わない所存であらう。

――それは餞^{はなむけ}として有難く頂いておこつた。

そのことへの礼を言う代わりに、院は感嘆のため息を漏らした。

「最初に、京を討つことになるかもしれないと言ったのは、このことだったのか？」

「……さあなあ」

カマクラは院をちらりと見て、また頭を掻いた。

——おそらく、こうなることを彼女は以前から予測していたのだろう。

もちろんいちこが涙を飲んで自分の元から離れるのもその予測のひとつにあっただろうし、寧ろそうして欲しかったところもあるだろうが、己の心を見抜いていた以上——それに確信を持つため、こうして対面の席を設けたわけなのだし——彼女はこうなることを最初から覚悟していたのだろう。

なんのことはない。対等な取引、などではなくこれはひとつの“御恩”なのだ。それはカマクラのシステムなどではなく彼女個人の、そのお人よしな人柄の筋書きどおり、話が進んでいるだけであつた。

だとすれば自分はせめて彼女に“奉公”として、やはり約束を確実に守るだけであつた。

そしてそんな自分はこの座に向いていないと彼女は言っていたが、「大した、もんだな。——流石は東の主だ」
感心したように院は唸った。

「……今更、餓にもならねーよ」

カマクラは苦笑した。

人の心に敏感な繊細すぎるその感覚。それは確かに王として必要なものかはわからないが、いちこにカマクラの力とは別に、生まれ持った彼女自身の輝きが備わっていたように、これもまたこの女がカマクラに選ばれた所以でもあつた、彼女の魂が元から持っていたひとつの力なのだろう。

それは院にも至極納得できるものであった。

——話は、決まった。

二人の主は心の中で、無言のうちに頷いた。

院はいちこの喉元に当てていた腕を離し、彼女をかき抱くようにその手を小さな背に回した。

中学生のいちこには難しい話であったし、自分でも自覚はないけれど「次のカマクラ」になる筈だった自分の力で、院がこれから解放する永いこと飲み込み続けてきた負のエネルギーを打ち消しあつて、互いのそういう力をゼロにするのだ、ということはいちこにもわかった。

そしてこの二人の間だけで、自分が次のカマクラであったということも最初からなかったことにするのだ、ということもわかった。

それは誰のわがままなのか、正しいことなのか、間違っていることなのか、いちこにはわからない。

だが願いは叶う筈なのに、どこか後ろめたいような、いけないことをしているかのような後味の悪さが少女にはあった。

カマクラと対照的な黒い着物の裾をばさつと音を立てて翻し、彼女との空間を隔てようとした院は、最後にひとつ思い出したように——本当はずっと気がかりであったことであつたのだが——振り向きざまにカマクラに尋ねるように話しかけた。

「こんな形で終わる卑怯さは、部下に対して恨まれ蔑まれるべき主であることはわかつている」

別れも言わずに院庁は消失し、院としての自分はいなくなるのだから。

——だからいつそ、“院”という存在すらも最初からなかったものにしようかとも思っていた。自分の最後の力をもって自分の全ての記憶を、今まで従ってくれていた部下から抹消しようかと——。

しかし自分はカマクラに約束したとおり、このクニを守ってきた

“院”として、朝廷と最後の取引をしなくてはいけない。そこでその名を利用するのであれば、都合よく記憶を消すなどということは出来る筈もなかった。

院庁は元々朝廷とは完全に別の組織であるため、院庁の者が朝廷に仕えるということは考え辛く、また朝廷との取引が終われば自分も野に下るため二度と彼らに会うこともないだろう。

だが、たったひとつの気がかりは、いちこと同様、それこそ遠い昔に拾った——朝廷の者が関わって起こしたいくさがきっかけで、一族を失ってしまったあの子供たちのことだった。

せめてもの罪滅ぼしとその生き残りの子供を保護した。その気まぐれが、あの子供たち——イホクとこゆるを、結果的に苦しめてしまった。

自分がいちこを求めることによってたくさん犯した罪のうちの大きな、ひとつ。

「院庁の崩壊で割に合うかはわからないが、部下が——北面が、粗相をした」

「……」

気配くらいしか知らないが、自分の部下が以前からその動きに注意しており、最終的に彼に応戦させたその男のことだとカマクラにもわかった。

「俺の、所為だが——謝ることも、できなかった」

これでもう二度と会うこともないだろう、あの男に。

その先程現れた一個の男とはまた違う顔——おそらく、彼のもうひとつの本当の顔である“院”という責任感の強い人物のそれになると、彼は自嘲的にそして切なく微笑んだ。

その表情を見たカマクラはそれこそ饒別として、そして彼が自分に最も尋ねたかったであろうことも含めて彼に告げた。

「安心しな。あれは、生きてるぞ」

「――」

「必ずしも院庁が崩壊するなんて思わなかったから、あいつを殺せば即いくさになるだろう？ それに無益な殺生をすることもない」
淡々と静かに、しかし確信をもった低い声でカマクラは遠くを見るような眼で言った。

それについてあの部下に指示を出した覚えはないが、それしか答えはないということは、あいつならばわかつているであろう。

こちらが負ければあの男は死に、北面は生き残る。逆にこちらが勝てば、あの男は北面を……「殺し」はしない。つまりどちらにしろ、北面は生きている、筈なのだ。

どちらが残酷かはわからないが、とにかくこの事がいくさの引き金とならないようにする筈だった。

そういう考え方において自分と妙にそりの合うあの男ならば、第一にそうするだろう。

それだけでなく北面の事を想い悩み、ひとりの女がカマクラへとわざわざ奉公を希望してやってきた。あの女の願いを鑑みれば、尚更――。

何が恩なのか、何が正しいのかわからない。

どう生きるべきかを誰かが決めるものでもない。だけど、だからこそその人生をこちらが勝手に終わらせるべきものでもないのだ。それは北面の為なのか、彼を想うあの女の為なのか、誰の為でもない自己満足なのか、そのどれでもないただの時の流れなだけか。わからないが北面を生かす、という結論だけは自分にもあの男にも一致していたに違いなかった。寧ろあの正義感の強い男ならば、指示がなくともそうするに違いなかった。

「――そうか」

安心したように、少し哀しそうに院は笑った。

己の部下はカマクラに害をなした。カマクラが無罪放免とするわけもない。

だが処刑まではしなかったという。あのプライドの高い男をどのように殺さず、彼が死を選ぶことすらさせずに事を片付けたかはわからないが、北面がこの場に居ないということは、同じくこの場に居ないこのカマクラの一の腹心であるあの男、一度だけ邂逅した近年見ることのなかった真っ直ぐな眼をした青年が、己の一の腹心を討ち果たしたのであることは察しがついた。

どういう方法かはわからないが、北面はあの眼に自分への妄執を碎かれたということなのだろう。

それは自分への妄執を持った北面も、彼にそうさせた自分も、あの男の一振りには敵わなかったということなのだ。想いの強さ、ではなく、誰かに区切りをつけてもらわないと動き出せない弱さが負けていたのだった。

——しかし自分の弱さは、扶助されたものであれ自分へのそれを断ち切ることができた北面以下のものであり、だからこそ……。

「たとえ生きていたとしても……謝れるものではないがな」

“彼”はこんな弱い自分をもう“院”として認められないだろう。こんな決断を下したイキモノは、もうあの時彼の命を救った尊く憧れるべき大きな存在ではないのだ。そんなモノに会いたいなど、声すら掛けたいとも掛けられたいとも思わないだろう。

ひとつを選び、全てを捨てる。多くの人間の自分への侮蔑を残し。そうやって二度とカマクラに視線を向けることなく、再び背を向けた院であつたが、その腕の影からいちこがカマクラに向けて顔を出した。

もう会えないとわかったからだった。

「あの、私……」

やっぱり何を言えばよいのか、少女にはわからなかった。謝ることも違うと院に制された。どんな言葉が適切かわからない。

——ありがとう？違うだろう。でも、何か言いたかった、何か、ただひとつ、自分の最も素直な、今いちばんこの人に言いたい気持ち——、

「……私、カマクラ様のこと、好きでした」

少女のその言葉に対し、東の主は一瞬口をへの字にした妙な表情をした後、眼を細めて、氷のような冷たい笑顔を浮かべるところ言い放った。

「そんな言葉、なんの気休めにもならねえってこと、一生、忘れるな」

その純粋な優しさを拒絶した、冷酷な言葉に少女ははっと顔色を変えた。

軽蔑するならばいいと、カマクラは少女と眼を合わせたが、その眼は、好きだと告げた時の瞳と何も変わっていなかった。ただ、哀しそうに揺らぐだけだった。

そしていちこは院を見上げた。彼の表情はよく見えなかったが、カマクラと同じ表情——と言うよりも、空気、のようなものを感じた。

自分たちはそれだけのことを、しているのだと。

誰もが後悔などするものと気を張り、後悔しているのだと。多くの人を傷つけ、一生、迷い後悔するのだと、少女は自分のした幼い決断の残酷さをカマクラによって教えられた。

だが知ったところで、結論は変わらない。

彼以外の存在にはもう許されないことを悟り、彼も含めた多くの者に爪痕を残すことも自覚し、少女はカマクラに背を向け、院に再び包み込むように抱かれて——その手が温かったことが唯一の救

いではあったが、そこに黒い旋風が巻き起こると、カメラの前から二人の姿は永遠に消えた。

その16 乾坤一擲2（後編）

「~~~~っ」

誰もいなくなつた空間でカマクラはぐしゃぐしゃとその艶やかな黒髪の頭を搔きなくつた。

「——痛つてえなあ……」

その表情はこんな自分を好きだと言つてもらつたにも関わらず、互いの立场上それを受け取ることができず、純心な子供の心にまたあえて傷を負わせた己への嫌悪感による、非常に複雑なものとなつていた。

.....

上なのか下なのか、クニの中なのか異界なのか、京なのかカマクラなのか、何もわからない空間。

そこに立っているのは、私と貴方の二人だけ。

世界に存在するのは二人だけ——のような錯覚すらする静かな場所。

はあ、と少女は頬を赤らめて呼吸を長く止めていたかのような、深いため息を漏らした。

男の両手が自分の細い肩を押さえていた。

その長身を折り曲げた顔が離れ、耳元に口を寄せられる。

強大な、永い永い年月懸け溜め込まれていた負のエネルギーを解放させる。

それはこの結界から漏れ出せばこのクニを黒く食い尽くすものであり、そうならないよういちこの持つている力で消すというのだ。いちこには自分の力の大きさなどわからない。使い方もわからない。そこまでのものが、こんなまだ子供の自分の身体の中に本当にあるのかと不思議に思う。

少女の命運は全て、この男の手の内にある。彼女は全てを彼に任せた。生きるも死ぬも。彼を信じるしかなかった。

全てが終わっても一緒に生きていようと、あの時見せた彼の素顔は本物だと思ったから。たとえ失敗しても、一緒に死ねるなら本望だ、と少女は本気で思っていた。

——どれくらい、痛いのかな……。

自分の知っている衝撃程度のものであるうか。それは想像もつかないほど未知の世界のものであった。

「——恐いか」

耳元で囁かれ、少女はこくと頷いた。

だろうな、と男は笑った。

「全部俺がやる。お前は俺の言うことを、ただ聞いていればいい」
男は一言一言を命令のように、彼女の魂に届くように、呪文のよう

うに囁く。

ざわり、と少女の肩にかかる髪が揺れ、スカートがばたばたと翻った。風のようなものが起こったように感じた。

実際それは、遂に男の溜め込んでいたエネルギーが解放され始めたことによるものであった。

と、同時に、少女の体内にも変化が起こった。それに呼応して己の内側から、何かが呼び起こされようとしているのを感じた。

とても激しく熱い何かが、自分でも知らなかった自分の何かが、凄

しい勢いで沸き上がってくる。

——恐い！

己の変化に、目の前の男の変化に。
いちこはぎゅっと目を閉じた。

「眼を、逸らすな」

しかし男が耳元でそれを許さないという命令を下す。少女は恐る恐る不安げな瞳を開いた。

「これから起こることを、全て見ている」

男の広い肩を見ながら、かれには逆らえない——といちこは思った。

信じているから？好きだから？きつとそのどちらもで、そしてきつとそんな簡単なことではない理由から。

いちこの視界が歪む。

身体の奥が——アツイ。

その感覚に立っていられない。いちこは男の着物をしっかりと干切れんばかりに握り締めた。

少女の息が荒くなる。

痛いのか、苦しいのか、よくわからない。

「……………」

どうしようもなくて、「その名」を呼んだ。

知らない筈なのに、遠い昔から知っていたように自然に、その男の「真の名」を呼んだ。

そうすることによって自分を保つことができると思った、ただひとつの呪文だった。

自分の肩に触れる男の手の力もまた、少女を壊さないように優しいものでありつつも、汗ばみ力が入ったものになる。

「まだだ」

院が低い声で言ったそれは、這い上がり体外へと放出されようと

する己の内なる力の事を指していた。

「限界まで、高める。高まるソレを追いかける。自分の神経をソコに集中させて——これ以上ないというところまで高めて、そして、碎けさせる」

視界が霞む。

見ろと言われても見ていることなどできない。

二人の周りを渦巻く、黒く穢れた影たち。

おぞましく、禍々しく、醜く、汚く、恐ろしく——憎悪、欲望、嘲り、恨み——血飛沫、絶望、悲鳴、断末魔——様々な負のものたちが、自分達を取り巻き、喰らい尽くそうとする。

——怖い。気持ち悪い。見たくない！！

それに飲まれてしまいそうになる。だけど、

——強くなりたい。

そう、思った。

自分はまだ子供だけれど、この男と対等になれるように。

——だから、

少女は焦点の定まらない眼でそれらをきちんと見据えた。彼の罪も、彼らの罪も。自分の罪も。

自分が自分でないような体の自由が利かない中で、今や少女は内側の高まりだけを感じていた。

彼の言うことを信じて、神経を身体の中央に集中させ、「それ」を追い求め続けた。

息が荒い。身体が熱い。

何度も何度も、うわごとのように男の名を呼んだ。

自分を握り締める男の手も随分と熱く、力が籠っていた。その表情だけは少女を心配させまいといつもどおりの冷静なものであった

が、呼吸の乱れはその顔が近くにあるからわかった。

——そして、もう何も考えられないいちこの目の前が霞む中、彼の言ったとおりの「何か」が遂にいちこに訪れる。

——来る！

高まる。

——コワイ！！

「——ぐ……っ！、ああああああ……っっ！……！！！」

何かが、少女の中で、はじけとんだような

………

——始まったな……。

上なのか下なのか、クニの中なのか異界なのか、カマクラなのか京なのか、自分でもわからない空間に、ただひとりでぼつんと存在していた。

この空間を作り出したのは自分である筈なのだが、まるで昔から誰かによって作られてあったもののような錯覚すら抱いてしまう、時の流れも忘れそうな静かで何も無い、空間。

しかし一陣の風が起ること、それが夢ではなく現実に起こっ

ていることだとカマクラは再認識した。

強大な、永い永い年月懸け溜め込まれていた負のエネルギーを解放させるというのだ。それはこの結界から漏れ出せば、このクニを黒く食い尽くすものであり、そうならないよう次のカマクラの力で相殺する。それが漏れ出さないよう、カマクラである自分が守るのだ――。

その空間にカマクラは胡坐をかいてどっかりと座っていた。

旋風のようなそれは、徐々に激しくなってくる。

既に結界は張つてあるものの、これ以上この風が、エネルギーの放出が強くなれば内側から破られる恐れがある。

二つのエネルギーは相殺し合っており、その漏れ出した分だけはこの結界から出さなければよいだけなので、自分は二人ほど、つまりは院やカマクラで居られなくなるほどのエネルギーの放出はしなくてもよい。

流石に相手は院だ。エネルギーの操作に失敗はないだろう。それだけは幸いした。

カマクラは掌を上に向け、小さく呪文を唱えた。

この空間と同じ白っぽい淡い光の玉が生まれ、段々とそれが大きく熟成していく。

こうした“力”の行使に決まった方法ではなく、全ては術主のイメージによるものだった。己の内部の“力”を引き出し、限界まで高めて、このように目に見えるものになるまで凝縮させる。

おそらく自分たちは常人と違い、魂のエネルギーの量が違うのだろう。

その光の玉は彼女の身体と同じくらい、そしてその何倍も何倍も大きく膨らむと、ぱあんと弾けた。それで結界の強化はひとまず出来た。

院のしようとしていることをカマクラの内部で隠蔽し、どこにも

被害を出さないための仕掛けであった。

それをした後は、静かに胡坐をかいて座り、全てが終わるのを待つただけであった。

白く細い指は軽く印を結んでいたが、それは張った結界を保つためのお守り代わりのようなもの。実際は印ではなく、自分の気がそれを張り続けるのだ。印に意味はなく、己の精神力の勝負になる。

幸いにして自分は頑固な性格だった。一度こうすると決めたら曲げない。逆に言えば面倒臭がりなのだ。曲げることも面倒臭いというだけなのだ。ただ、一度決めたそれを遂行するだけだった。

終わりであり始まりの時が来るまで、座っているだけであった。

旋風は上下のない空間の乱気流の中で一方向からだけではなく、つているものの、最も強く吹いてくる方向がある。そちらにあの二人は居るのだろう。

邪魔はしたくないし、そのエネルギーに巻き込まれたくもないので、カマクラは若干距離を置いたところにいるのだった。距離といってもこの特殊な空間ではどれだけの距離なのか、数字では表せないものであるのだが。

そしてその風はいつしか旋風というレベルではなく、まるで嵐のように激しく吹きつけてきた。

実際は風などというものではなく蠢いている二人のエネルギーの流れであり、漏れ出したそれは時にカマクラを傷つけた。

強すぎるエネルギーの残滓は、彼女の頬を薄く切った。靡く黒髪も、少しずつ切られる。そして着物も。

大きく傷つけられてはいないが、僅かに、僅かに、徐々に傷つけられていく。

少しずつ女の身体に、白い肌に小さな紅い傷が増えていく。

だが彼女は静かに眼を閉じ、微動だにしなかった。

……もう、何もかもが面倒だった。痛みを抗うことも、逃げることも。

今はもう、守るしかない。

この座には到底足りない己の器、力量——それだけでない、人間としての未熟さが幾人もの人を傷つけてきた。

こんな小さな傷では全く釣り合わないが、自分が人を傷つけたことに比べれば、こんな痛みは何でもなかった。

自分なんか、傷付いて当然だと思っていた。

それで守れるならば、それで自分がよかったと思えるならば、それでよかった。

後悔するのは、恨まれるのは、こんな想いをするのは、もう自分だけで、いい。

あいつらも、自分も同罪だ。

こんな世の中、どうなったって構わない。

けどこんな世の中、笑って明日も生きていたい。

これくらいの傷は、大したことじゃない。

寧ろ、自分なんかもっともつと傷付いたっていいくらいだ——。

自虐的な自己陶醉にも似た気分の中で、轟々と吹き荒れる強風のようなエネルギーの流れの中、ただひとつ自分の決めたことを守るためにカマクラはそれでも魂の力だけは抜かず、ただ静かに座っていた。

クニが乱れぬようそれだけは守るとしたものの、それ以外はどんなったって構わないと、自棄のように傷つき続けていた。

——だが、

カマクラの前に、ふわりと何かあたたかいものが過ぎった。一瞬、全てが終わったかと思うほど、風が弱まり柔らかくなった。

実際は違っていた。それでも漏れ出す力は己も、突如として眼の前に現れた「それ」も引き裂いていく。

それでも十分に、何かに守られているような絶大な安堵をカマクラは感じた。

——そんな本物の“救い”など、この世には、自分には存在しない筈だった。

カマクラの権限で人為的に存在させてきたけれどそれは対象にとって受動的なものであり、能動的なものではなかった筈だった。

——なのに。

カマクラが眼を開くと、その眼の前には自分の方を向いて膝をつき、嵐には背を向け、己の精神力ひとつで何物でも斬り裂くことができる太い刀を風上に立て、片袖が千切れた黒い着物の肩の辺りにはどす黒い血をこびり付かせた痛々しい姿の見慣れた一の腹心……一神玄次が、それでも眼光だけは衰えずいつもの様に強く真っ直ぐに自分を見据えたまま、彼女を庇うように存在していた。

「なん、で……」

東の主が思わず呟いた声は、何ひとつ意味のあるものではなかった。

その動揺は一瞬のこと。今はその心の動きすらも、魂を燃やす力に置き換えなくてはいけない。しかし情けないくらい単純にも、自分にとってはその力の補填になるくらい十分な影響が、この突然現れた存在にはあった。

「よく、わかんねーけど、」

そう答える青年の息は流石に少しばかり上がっていた。

——最後に別れた、いつもカマクラがクニ全体に力を受け渡す儀式を行っている部屋に玄次が戻ると、そこからただならぬ空気が流れ出しており、急いでその扉を開けた瞬間、気付いたら、かまいたちのような風に傷付いている主が目の前に居たのであった。

状況を判断すれば、彼女を守るべき立場の彼のすべきことは、ひとつであつた。

以前オワリの少年に言つた台詞が、そのまま返つてくるとは思わなかつた彼だが、

「盾代わり位には、なんだろ」

その分、超勤余計につけるよ、と冗談のような本気のような声で呟くと、玄次は薄く笑つた。

その17 はじまりのおわり、おわりのはじまり1（前編）

盾代わりもなにも、そうすることはカマクラにとって助け以外のなにものでもなかった。

確かに手段としてはとても正当なものだ。目に見えない物でも斬れる不斬刀を風上に置けば、後は持ち主の気力次第でその逆巻くエネルギーさえも斬ることは出来る。

しかもそれが最も流れの強いところに的確に立てられており、己の前には生身の男すら跪いているのだから、彼女への損傷は少なくて済む。

そう、このエネルギーによる衝撃の影響は、ただの切り傷だけではないのだ。それによって傷付くことで、己の魂すらも蝕まれていく。

なのでそれが弱まるということは、カマクラが結界を保ち続けるためには非常に有効な助力にもなるのだ。

——それは、確かなのだが……。

「そんな血まみれの奴に言われてもな……」

意識は結界の方に向けながらも、カマクラは己を庇い立つ玄次に対し、失礼にも呆れたようにため息をついた。

「……手負いで悪かったな。たとえ刺し違えてでも踏み込まなきゃ斬れねーくらい、『奥』にあっただよよ！」

同じく意識だけは刀の方に向けつつも、あー可愛くないと思いつながら、玄次は不機嫌そうに答えた。

「奥……？」

カマクラは思わず聞き返したが、玄次が刀を支えていない方の手

で自分の胸をとん、と叩いたため、聞くと同時に何のことか理解した。

それはただ単に相手……北面の「命」を絶ったわけではなく、またただ単に「記憶の全て」を消したわけでもない、複雑な精神の中に斬り込んだのだろう。

やはり北面は生きている――。院に対して嘘をつかなくて済んだことにカマクラはほっとした。もう会えない彼には、訂正することもできないからだ。

そして北面がもう二度とカマクラに害をなさないよう彼が措置をしたということも、訊くまでもなくわかった。立場上仔細を確認すべきかもしれないが、わざわざわかりきった答えを言わせる必要もない。

――それにしても、とカマクラは目の前に跪く、血に染まった片袖を肩に無作法に縛り付けた格好の青年を改めて見た。

「俺なんか、……別にいいのに……」

言った瞬間、「しまった」と思ったが、案の定「ああ？」と言う呟きと共に胸倉のひとつでも掴まれそうな柄の悪い目つきで相手に睨みつけられた。

――そうは言ってもさ……。

仕方なくカマクラは、こっそりと相手に聴こえないようにため息をついた。

この斬れない刀で斬れない物を斬るためには、己と同じ「精神力」が必要となる。簡単に言えば気合の問題というやつだ。

この男にしてみれば、傷を負いそれがまだ塞がっていない上に、このオーバーワークだ。超勤云々などという労働条件の問題ではないと思うのだが……。

それを差し引いてもこんな失言をしてしまったのは、この緊迫し

己や他人の心の深くまで覗いてきた今の状況だからこそ、今まで抑えてきた「自分なんか」という想いをこの一番信頼できる相手に甘えてぶつけてしまった、というのもあるのだが。

このまま自分が傷付いてもいいなどと子供染みたことを言っているのは、部下にとつては酷く失礼であり馬鹿にしたものだということとはわかってはいるが、そうは言ってもやはり――、この男が傷付くところは見たくないのだ。

北面と戦い合えと言った東の主としての命令と矛盾していることなどわかっているが、本心では見ていたくない。

ただそれだけのことなのだがそう言うこともできず、やれやれとため息だけをつく主に、怪我やらこの変なかまいたちのようなものやらの痛みも加わり、玄次は苛々したように吐き捨てた。

「テメーに怪我のひとつでも治してもらわんと割に合わんと思って戻ってきたら、こーなってたんだろーが！　主がこんななってんのに見視するブシがいるか！」

くだらんことで怒らせるな！　と思いつつも、怒ること怪我の痛みや疲労を忘れられるという面もあるので、余計に玄次の声にも怒気が孕む。

彼女よりも背が高く、また膝についている姿勢のため少し上からその胡坐をかいている膝に置かれた白い手が視界に入った。

白い着物も、そこから出ている腕も手も、白い頬も、綺麗な肌の上に紅い切り傷が何本も出来ていた。

そりゃこんな小さな傷とは比べ物にならないほどの大きな傷を、子供の頃、命を助けられた際に負わせてしまったが――。だからこそもう二度と彼女を傷つけないと、玄次は思っているのだ。

乱気流なのでカマクラの背や上空からもエネルギーの細刃は若干襲って来るものの、確かに玄次が到着してからは、その刀の及ぶ範

囲において更に作られた小さな結界のように二人は守られていた。
また彼がカマクラに覆い被さるように構えているので、刀でまかなえない部分はその背中で守れている筈だった。

——そうは言っても、彼はこの主の大きな力に命を救われ生かされた身だ。彼ごとき人間の小さな力など、彼女にとって無用だと言われればそれまでである。

そのことへの少しの苛立ちもあり、更に玄次はやけくその様に吐き捨てた。

「まあこれが必要ないって言うんなら、それまでですけどね」

だからと言って此処を退くような真似もしないのだが……。

嫌味のような対「主」用の敬語で、我ながら子供染みているなど思うことを言ってしまった玄次であったが、

「——必要ないことは、ない……」

即答で返ってきた言葉に、それも思いもかけず彼女らしからぬ素直なものに、拗ねたような態度をしていた青年は思わず驚いて口を横に引く。

だがその響きは決して色めいたものではなかった。それよりもずっと追い詰められたような、切羽詰った悲痛な響きをしていた。

視線は彼の方には向けず下に落としたまま、カマクラは背負っていた荷物をようやくおろせるとも言うように、息を大きくつきながら静かに呟いた。

「訊きたいことが、あつたんだ」

青年は己の顔の少し下で紡がれるその声を黙って聞いていた。

「その前に……。お前は、どうしてもこういう状況になってんのか、訊かないんだな」

そう言うとかマクラは顔を上げて玄次と眼を合わせた。随分と近

いところに顔があつた。玄次は突然そう言われたことに眉を寄せながら答えた。

「あ？ ああ。っつーか、そもそも最初から説明しなかったのはそっちだろーが……だから偶然オレが此処に來ただけで、勝手にテーマひとりで片付ける予定だったんだろ？ だったら訊く必要なんかねーよ。でもお前がする事には、オレは従う。従うしかねーだろ」
変なことを今更訊くもんだと不思議にすら思いながら、玄次は力マクラを見下ろした。

「——そうか」

カマクラはふつと笑った。

——この男も相当頑固者だ。そして曲がつたことが大嫌いだ。だから間違っていると彼自身が思えば絶対にそのことについては手を貸さない。

よって奉公だからと言って自分のすることに何でも妄信的になるわけなのではなく、間違っていると思えば相手が主である自分でもゲンコツのひとつでも食らわせてくる筈だった。

つまり彼が今此処にいるのも、自分が「彼ならば北面は殺さないだろう」と思つた理由ときつと同じなのだ。

彼女はそう、考えた。

相手のすることを予測した時に、自分にとって多分それが納得でき、それに対して力添えすらしたくなると感じるものだから——。

そのことが嬉しくて安心できて。だからこそ、この一の腹心にならばずっと訊きたかつたことも訊けるのだ。

「京は、院庁を崩壊するんだと」

「——」

カマクラのその言葉に、さすがに青年の目が見開かれるが、これだけの膨大なエネルギーが動いているのだ。まあそれくらいのこと

は起こっているだろうな、と妙に納得もできた。

「院はいちこを選んだんだ。いちこも奴を選んだ。院が院でなくなるために、いちこが次のカマクラでなくなるために、院が今まで溜めてきた負のエネルギーの力を解放し、それを『次のカマクラ』の力で相殺して、この世界の統治者としての『二人』は消える。院が居なくなつた後の京の治世は、それによつて院でなくなつたその男が、朝廷に発破をかけてなんと少しでも再興させ、やらせると言っていた」

此処までに起こつた出来事を掻い摘んで玄次に伝えながら、口にしてみるとなんとペテンにかけられたような上手い話だな、とカマクラは自分でも笑えて来た。

きつと玄次も素直にそれを信じた自分に呆れていることだろう。

だから勿論怒られても構わないと思つていたが、

「——これはそんな時に生じてる力の余つた分、てワケか」

彼の第一声はやけに納得したような声だった。

カマクラは頷いた。それを視界に捉えた玄次は、少し思案した後言葉が続けた。

「……どーなるにしろ、これから忙しくなるな」

「……そうだ」

「つてコトは、お前はまだまだカマクラ辞められねーってワケだ」

「そーだ」

なんのことはない——今までこれだけ騒いできたのに、全ては無駄な茶番に終わったのだ。

そこで二人は顔を見合せて苦笑した。

その笑顔をまた消して、カマクラは再び俯くと全てが終わる前に、そして何かが始まる前に誰かに訊いておきたかった疑問をようやく口にした。

「既に事後承諾となつてしまつたが……、これで、よかつたんだろ
うか」

その一瞬、泣き出してしまふのではないかと思うほど、彼には主
が弱い人間に見えた。

しかしそういう気持ちを否定する気はないが、あまりの愚問に玄
次は思わず鼻で笑つてしまった。

「何を今更」

その言葉にカマクラは思わず彼を見上げる。

「最初からそーするつもりで、ひとりで腹括つてこーしてんだろ？
だつたら正しいとかそーゆーんじゃないくて、オレらは——オレは、
さつき言つた通り、従うだけだ」

——何が正しくて正しくないかなど誰にもわからないのだと、彼
だつてそう思つてゐることはわかつていた。だから自分のした判断
に是非などつけてくれる筈もない。

自分は東の主だ。当たり前であるが、どんな結論であらうと誰の
所為にもできず、誰が責任を取ってくれる訳もない。

結局はカマクラ自身に戻ってくる答えであつたが、彼の返答は部
下としては一級のものであり、まるで彼女の求めていた答えがわか
つていたかのようにすらあつた。

「多分バクフの殆どの奴らがそうするぜ。もしそう出来ねえつて奴
が居たら、説き伏せてでも擦じ伏せてでも理解してもらふよう尽力
する——それだけだ」

それが次のカマクラが現れないかもしれないという答えであつて
も、彼もまたそうすると言ふのだ。

馬鹿な主の率いる馬鹿ばかりの組織だと改めて思わうが、この小
心者の自分がこの大勝負をするにあつて、これでよかったのか誰
かに確認したかつた。その問いが最も信頼している者にやっと出来

た。

その答えはイエスでもノーでもなかったけれど、自分の「必要とする答え」は得られたのだ――。

どうして自分なんかを守りにきてくれたのか、それはブシの主に對する務めとして当然のものであるのだが、しかし深く考えるとそれだけでは説明できないのではと思う部分もあるのだが、この答えを貰えただけで、彼がこうして此処まで来た価値は十二分にあったとカマクラは感じた。

「分かった」

部下たちの覚悟を受け止め、己も覚悟せざるを得なくなる。そしてもう、誰の所為にも出来なくなる。

だが決して気分の悪いものではなかった。

そしてこの「答え」を得たことにより、やはり自分でも単純だと思ふのだが己の力が増幅していくのがカマクラにはわかった。

そう思つたカマクラが先程までとは違つ、自信を持つたいつものおりの笑みを浮かべた時――、

どん、という大きな衝撃と音と共に、吹き飛ばされてしまふくらいの突風が二人に吹きつけた。

それこそ守られるように、汗をかいた黒い着物の広い胸に抱き締められた――そう思つた時、二人の全ての記憶は途切れたのであった。

.....

その17 はじまりのおわり、おわりのはじまり1（中編）

……どこかで、水が落ちるような音が聞こえた。

着ていた服すらぼろぼろに切り裂かれ、そのきめの細かい肌に無数の小さな傷や痣が出来ている少女は、意識を手放しぐったりしながら、熱い息をついていた。

その力の抜けきった身体は、同じようにその顔から疲労の色を隠せない男の腕に抱かれていた。

——もう二度と、その手を離さないとも言うように、大事に、大事に、抱かれていた。

そこは先も底も見えない、深く静かな闇の中だった。

.....

——あの空間から弾き出されたのか……。

カマクラが眼を開けるとそこは自分が院に会うための術をかけた、いつも自分が呪術をしている見慣れた屋敷内の板の間であった。

重く疲れた身体が辛うじて動くことを確認しながら、カマクラは院庁の崩壊とそれを打ち消していた術が終わり、それらが消える瞬間の最後の力の爆発に、己の結界すら必要な力として飲み込まれ、そこから自分たちが弾き出されたのであることを悟った。

——全ては無事に終わったのか。院たちは無事だったのか。西の

気は大丈夫なのか。クニに異変は起こっていないのか――。

彼女はそれを案ずるが、幸いにも彼女はカマクラに戻って来ることが出来た。京が壊滅さえしていなければ、異変があればあの信用できるロクハラの連中がすぐにでもカマクラに電信を送るはずだった。

またクニに何かが起こったとしても此処にはバクフの連中がいる。すぐにでも対策がとれる筈だった。

また彼女の側近が駆けつけてくれたことで――それは実のところ、「彼」だから余計に、なのだが、カマクラの精神力に左右されている「力」は奪われた分も多少は補われ、最後の瞬間まで彼が庇ってくれたことで力を失うことは最小限で済んでいた。

カマクラは拳をぐつと握り、体内に残存している力を確認する。

――これなら最悪のことが起こっても、何もできないわけじゃない。

カマクラはそのことに安堵のため息をついた。

そして、そうしてくれた人物は無事なのか……。

「――おい」

弾き出されはしたものの、あの空間に居た時と同じ姿勢のままであつたので、カマクラは己に覆い被さる黒い着物の胸を押して、相手の安否を確かめるため声を掛けた。

「――っ……」

意識が飛んでいたようだが、低い声はその胸から響き、むくりとその体が動く。

――どうやら生きているらしい。いくらあの不思議な刀があると
言っても、クニの統治者同士のエネルギーがぶつかり合う中で、己を庇ったうえによくもまあ正気が保てて意識もしっかりしているも

んだ。

常人ならばあのエネルギーの中で、まともに立っているどころか精神状態すら危うくなり、会話などとてもしていられる筈がない。そう思えばさすが東のカマクラの側近と言えるだろう。

もしかしたら自分が命を助けたという時に、自分の力が彼の魂の一部に入り込んだのかもしれないな、と呑気にカマクラが考えていると、その姿勢のまま玄次が呟いた。

「……お前は、大丈夫なのか……？」

「ああ、お陰で」

そのいつもどおりの気丈な声を聞き、また腕の中の体の温かさを感じ、そうか、と同じように安堵した彼の声がした。

「——超勤、でもまだ割に合わねーな」

そして玄次が尚も冗談のようにそう言って笑った、気がした瞬間、

「……悪い。——少し、寝る」

カマクラが動ける状態であることだけを最後に確認し、常に気を抜かず彼女を守り続けてきた青年は珍しくそんなことを宣言すると、そのままがくん、とカマクラに凭れかかる様に力尽きた。

「——っ！ おい！ 玄次！——」

カマクラが慌ててその広い背中に手を回すと、ぬるりとした感触が感じられた。

意識が回復し今ようやく気付いた、鉄のような生臭いにおい。

先ほどの北面との一戦から止まることのなかった血液が、再び広がった傷口から溢れ続けていた。

「おいってば！ 玄次！ このバカガキ！ しつかりしろ——！」

ずるりと力なく己の膝まで下がるその男の肩を掴み、カマクラの怒声が暗く静かすぎる程の部屋にこだました。

.....

——あ……。

屋根の上に座っていたこゆるは夜空を見上げた。
星がひとつ、落ちた。

——ああ。

やっぱり、居なくなっただんな、院は。

深々と、院庁の「あつた」方角に向けてこゆるは頭を下げた。

——でも、自分は生きている。

東のカマクラに受けた御恩で、自分は自分の最も大切な人間とイ
ノチをひとつにしてもらった。

だから自分が生きている限り、あいつは生きている。

全部失って、あいつはカマクラへと行った。

そして院は居なくなつた。

あいつが存在している理由は、もうない。

だけど、自分は生きている——だから、あいつは生きている。

だから、探しに行こう。

むかえに、いこう。

あの日、あいつの小さな手を握って立ち上がった。
引っ張って、歩いた。

自分なんか必要とされていないかもしれないけれど、あいつが院を失ったことで本当に今度こそ全てを失ったことには変わらない。

あいつはひとりではメシも食わないくらい、生きるということに無頓着なのだ。

自分が……自分だけでも、側にいてやらねば――。

あてもなく、こゆるは立ち上がり、京を後にした。

・・・・・・・・・・

何か、すごくあたたかくて、幸せな――稚拙だけれど、本当にそういう表現がぴったりな、甘いぬくもりの中にいる感覚が、青年にはあった。

あえて言えばそう、あの日、あたたかい光に命を助けられた時に似た、懐かしい――。

玄次が目を開けると、眼に飛び込んだのは板張りの天井だった。

「……」

無意識のうちに額に手を翳すが、それほど部屋は明るくなかった。それは灯心だけの明るさであつたので、今はまだ夜であることがわかった――と、そこで何かを思い出したように、彼は勢いよく掛けられた布団を撥ね退けて起き上がった。

「お。起きたかー」

……ずっと、起きていたのだろうか。珍しくいつもと反対の構図。眼の前には電気スタンドの明かりを手元に壁に凭れ、立てた膝の上でオヤジ向けエロ雑誌を捲っているカマクラの姿があった。

それに向けて不覚をとった、とでも言うような声で、玄次は問いかける。

「――何時間、寝てた」

「……三時間、てトコかな。思ったより早かったなー」

ちなみに今のところ、何も異変は起きていないよーだな、と言いながらカマクラはいつもどおりの気楽な笑顔を浮かべていた。

確かにあの時は限界に達していたし、電池切れの体に充電しなければまた元のように主を守ることにも出来ないので、不覚とまでは言い切れないことでもあったが――。

もし主が弱っていたならばたとえ体が動かなくても執念でその身を守ろうとしたであろうが、己が功を奏したかは知らないが主は無事であった。

それで滅多にないことであるが、そのことへの安堵と体を回復させようという本能から倒れてしまった――という体たらくであったことを玄次は思い出した。

しかもいつもは睡眠の間でも神経を尖らせ、何があってもすぐに起きられるようにしているが、今回に限っては完全に熟睡していた泥のように眠り、どれだけの時が経ったのかも判らないほどに。

せめてこの三時間のうちに何もなかったことに心から安心する――そんな玄次の顔面に向けて、カマクラが新品の黒い着物をばさつと投げつけてきた。

「軟弱だとかなんとかぶーぶー言われたが、床暖きいてっからあったけーだろ？ でもいちおー冬だかな、明け方は冷えるから着ろ。こっちは剥ぎ取って布団に寝かすだけで精一杯だった」

玄次が頭から着物を引きずり下ろすと、視界が開けそう言って笑うカマクラの顔が眼に入った。

——確かに。このような神事まがいのことを行う部屋に、床暖房完備など聞いたことがないと文句をつけた覚えはある（結局このカマクラが寒いのが苦手なんだと言い張り、無理矢理設置したのだが）。

布団も掛けられているし、確かに体はそう冷えてはいないが……と、そこで玄次は上半身には何も身につけておらず、己が下着一枚の格好であることを認識した。

そして更に北面との一戦と院庁の崩壊のエネルギーで己の体がひどく傷付いていたことも思い出す——が、裸の肩や胸には血痕は何一つ残っておらず、痛みすら大方引いていた。

しかし未だ体に残る鈍痛と、塞がってはいるものの完全に消えはしなかった多くの傷跡から先程のことは夢などではないことも思い知る。

「調子は、どうだ」

塞がった肩の傷口を確認のように指でなぞる玄次に、カマクラが問いかけた。その言葉で彼女が自分の負った傷を治癒してくれたということに彼は確信を持った。重い体は先程よりもずっとすっきりしている。

「お陰様で……そっちは？」

そして渡された自分の着物に腕を通しぼそりと答えながら、玄次はカマクラを横目で見た。

——お陰どころの話ではない。

相手にそういうものを治す能力があることを知っていたので、やらせなきゃ割に合わないとぼやいていたが、あのような……しかも自分が使い物になっていないような状況で余分な力を使わせるのは好ましくないことだった。

それならば相手の負担にならないように出血多量だろうが何だろうが、自分で復活せねばならなかったのに――。

「大丈夫だ。『最小限しか力を使わないような方法』でやっついたからな。だから悪りーけど、傷は全部は消してやれなかったし、本当はまだ痛えだろ？」

玄次の気持ちを察したかのように、カマクラは肩を竦めて笑った。

自分を不甲斐なく思い悔しいのか彼は頷きはしなかったが、黙しているのは肯定だろう。

「すみませんでした」と低く呟きながら、カマクラから眼を逸らし手早く着物を着終わった玄次に、

「『怪我くれー治さないと割に合わねえ』からな」

それは彼女としても礼のつもりだったのだろう、カマクラは笑ったまま付け足した。

――とそこで、カマクラの言葉の中にふと違和感を抱いた玄次は再び彼女を見ると、思わずその言葉をぼつりと繰り返した。

「『最小限しか力を使わない、方法』……？」

彼女がどんな風に力を使うかはこれまでも見てきたし、普段の術なら想像もできる。だからこそその例にない表現には耳ざとく引っかけた。

またそれを不思議に思ったのは先程の夢の中で、泣きたいくらいにあたたかく優しい何かの中にいた――という感覚が何であったのかを未だ疑問に思っており、その不可解な言葉にその答えがあるような気がしたからであった。

「ああ」

――やっぱ鋭いな、と思いながらカマクラは膝の上の雑誌を閉じるとあつさりと答えた。

「直接的に俺の力をお前に送り込んだんだよ。口移しとかさー」

「・・・・・・・・・・。」

——あんまり強い術じゃないけど、粘膜と粘膜だから輸血も何も一気にできるんだぞー、というカマクラの声が遠くで聞こえたような聞こえていないような気がした。

「……………」

全ての思考を停止し、しばしそのままカマクラを呆然と見ていた玄次は、もそもそと布団に潜り、

「——寝ます」

と頭からぼすつと布団を被った。

その上に立ち上がりながらのカマクラの声が降ってきた。

「五時間後に評定を行う。それまでにもう一眠りして、風呂入ってメシ食って、支度しておけ。ゆっくり休めよ」

と言に残し、主もまた休息をとるため己の部屋へと姿を消していった。

——ゆっくり休めと言うなら、余分なことを言うな……。

自分から尋ねたくせにそう恨みたい気持ちになりながら、眠れるわけもなく青年は無意味に寝返りを打った。

・・・・・・・・・・

その17 はじまりのおわり、おわりのはじまり1（後編）

そして、朝が来た。

何も変わらない平和な朝だったが、何が大きく変わった朝だった。過去、カマクラからの御恩で命を長らえ此処に来た玄次は、もちろんカマクラに住処などないので、側近となったその日からカマクラの邸宅に居候している。

よって朝食もカマクラの分を給仕が運ぶのと一緒に彼の分も毎朝届けられるわけであるが、その日の朝は給仕が五往復もせねばならないほど、二人揃って物凄い勢いで朝食を喰らっていた。

「ごっそさん！！」

カマクラが何杯目かの椀を勢いよく膳の上に置いた。

「——では」

「行きますかね」

玄次も一気に飲み干した湯飲みを膳の上に置くと、久々の死闘を済ませた刀を手にカマクラと同時に立ち上がった。

五人のシッケンが待ち構えるバクフの評定所へと、彼らの主と頼りになる側近が下りてきた。

昨日、世界ではとても恐ろしい何かが起こっていた。

自分たちには詳しくわからなかったが、天が動くほどの何か——と予め主から言われていたので、一歩間違えばクニが崩壊してしまうものだとなっていた。

奥深くで起こっている地震のような不気味な「それ」にシッケン達は恐れを抱いていたが、バクフの誰もが地震だと言うような大きな空間の揺れを、一度だけ感じたのを最後に、その不穏な空気は収まり、かえって恐ろしいほど静まり返った。

その時既に夜になっていたが、バクフを守るシッケン達はさすが

に昨夜ばかりはお気楽に終業時刻の夕方五時に帰ってなどなく、息を潜めてバクフに留まっていた。

もちろん主の命令どおり、普段どおり帰って行く部下たちや残業をしている少数の者に、「何かあったこと」を悟られないよう嘘をつくのには必死であったが。

しかしその最大の揺れの後は、まるで今までと同じ平和な時間に戻ったかのように静かになり、何も起こらなくなった——京のロクハラから連絡が来たのはその頃であった。

それを受けたのはホウジョウ氏であった。

詳細はロクハラにももちろんわからない。ただ京で大きな力が消えた、という旨であった（地震のような揺れは力マクラの方が強いようであったが）。

——そのようなもの、京にはひとつしかない筈だ。

その報告から言葉通り「天が動いた」ことをホウジョウ氏やロクハラは察したが、主はまだ戻っていない。

「何も知らされていない」ということは、世界には「何も起こってはいない」のだ。

自分たちはただ、彼女を信じて待つしかなかった。それは主の意図があつてのことだろうから、クニや地方に何か異変が起きるまではただ見守り、黙って待つているのがよいだろう。

そして主がまだ戻っていないので京の嚴重警戒だけはしているよう、ロクハラに指示するとホウジョウ氏は残りのシッケンを一旦家に戻し、おそらく明日の朝一番に評定が開かれるだろうから準備をしておくようにだけ言い、何が起ころうともよいようとりあえず彼らには休める時に休むよう促した。

そして自身は万が一に備え、バクフの結界を見回り……シッケン位になると、少しはそういう力も備わっているので、そのまま宿直

していた。

そして真夜中、待ち侘びていた主から明日の朝の評定についての連絡があったので、ホウジヨウ氏はおそらく心配で眠れぬ夜を過ごしているであろう同僚のシッケン達と、警備は部下に任せ自分は事務所で酒でも飲んで、のんびり待機しているであろう口クハラへと、主の無事と明朝の評定についての連絡を入れた。

昨日一日のバクフの状況はそういう次第であった。

その時の戻ってきた主の声は、多少疲れの感じられるものであった他はいつもどおりの口調で、詳しくは明日の朝全てが明らかになるのでそこでは何も尋ねなかったものの、彼女の無事の帰還についてはホウジヨウ氏も非常に安堵したのであった。

この主さえいれば何が起ころうともどうとでも出来る、何者にも立ち向かうことが出来る——それはカマクラがバクフの部下をそう感じるのと同様、彼女は無頓着であるが同じことを部下も彼女に対し感じているのであった。

それはホウジヨウ氏だけではない。

五人のシッケン全員にとって無事な姿の主と、おそらくそれに従い影で精力的に働いたのであるう頼りがいのある側近の姿を確認できたことは、最も心配していた最悪の事態だけは避けられたということであり、また何かあったのだとしても、これからいくらかでも手が打てるということでもある。

昨日からの恐怖が去った五人は、ようやく心から安堵して二人を迎えたのであった。

「昨日は、ご苦労だった」

一晩で疲労を回復させ、いつもどおり凜とした東の主の低い声が響く。そして、

「心配掛けて、悪かったな」

すぐにいつもどおりにやつと笑い、その相好を気さくに崩した。そしてその不真面目な表情のまま、いつもどおりの呑気な声でこの緊急の評定を行おうとする。

それは全ては既に終わっており、今更どたばたしたところで何も始まらないから、という気持ちからもあった。

「昨日今日でバクフや地方の領地での異変など報告はされたか？」

「いえ、今のところ報告ありません」

代表してトウジョウ氏（シッケンたちの間で「今日の当番」として回している小学校の日直のようなものがある）が少々緊張しながら答える。

「ただ——」

「ただ？」

「ロクハラより京の異変の知らせがあつたと、ホウジョウ殿が受けになられてました」

「そうか」

——そうだろうな。

カマクラにとって京の気の変化はわかりきっていることなので、驚くことはないが、そこに住む人々の様子は気になる。

「それで？ 京の様子は？」

「——はい。『とてつもなく大きな力』が無くなった、と。ただ今のところ市井は平穩無事だそうです。今朝方、ロクハラに確認致しました」

その言葉を継いだのはホウジョウ氏であつた。

最も尋ねたいことはこれから主が話をするとなっていたので何も言わず、ただ報告のみをした。

「そうか。ご苦労」

カマクラはとりあえず安心したようなため息を大きく吐き出すと懐の扇子で頭を掻き、それを五人の方へ順繰りに向けると——まあ、想像ついてる奴もいると思うけどさ、と前置きをして皆に告げた。

「院庁が崩壊した」

「——！！」

それでもカマクラのシッケンである。院という秘密の存在は全員が知っていた。ただし表向き京を治めているのは朝廷となっているので、あくまで噂、であるのだが。

京に何かがあっただろう、くらいまでは予想したが、まさかこれほどのこととは——。

主の帰還に安堵したのも束の間、大きく眼を見開き、息を飲み、思わずその場から腰を浮かし……と、カマクラにしてみれば四人のシッケンは面白いくらいに反応を示していた。

「そ、それは——」

サイジヨウ氏が驚きからのストレスに痛む胃を抑えながら問いかける。

「そのまんま、だよ。院が消えた、それだけだ」

カマクラはなんてことのない様に言うと、手をひらひらと振った。まるで彼が飲み込んでいた負のエネルギーも一緒に消失したかのよう。それと相殺にして、あるひとつのカマクラにとって将来必要となる筈だった大きな力が消えたことは、秘密のままに。

——京の院が——。

それが夢ではないことを実感するため、シッケン共は顔を見合わせ、やはり現実であるということを確認し合うようにざわめく。

東のカマクラ、西の京。

西の気を治めているのは京の朝廷という組織であるとされているが実質は違うということは、長年の間、バクフの幹部や一部の優秀な者などの間では暗黙の了解でわかっていることであつた。

ただ院は京にとっても秘密の存在なので、誰もその実態は知らず見たことすら無く、消えたと言っても想像もつかないのであつた。

東の主はこのクニの大きな変化——「天が動く」ことを事前に知り、院にもまみえ、そして昨日何らかの手を打ったのであろう。彼らの住む世の平穩の為に——。

それだけのことが起こっていようと、カマクラは焦ることなく落ち着いて部下に告げる。だからこそ彼らもまた、パニックにならずに済んだのであった。

「だがこうやってまだ世の中に何も起こっていないことからわかるように、院の存在は西に住む者も知らないことだ」

それは彼が争いを避けるため自分の身ひとつで表に出ることなく治世をしていたからで、カマクラのようにバクフと地方のブシ達との間で御恩と奉公のように関係を作り、協同していなかったことによる。

「よって『表面上は』俺が何も起こらないと言ってたように、『これまでどおり』京は朝廷が治めるだけのこと……朝廷にその力があるのかないのかまだわからないが、今はそれしか西の平穩の道は残されていない。院が抑えてくれたもんを朝廷がこのまま抑えてくれれば、何もクニに変は起こらないということになる」

「——」
淡々と何ということも無いように話すカマクラであったが、そうできなければどうなるのか——そう思うとシッケンの五人はそれぞれ不安そうに息を飲むばかりであった。

本当に西の気を朝廷ではなく院が治めていたのだとすれば、それが消えたということは、即ちクニ全体が荒れてしまうということではないか——そのことに對し、シッケン達は恐れおののいていた。

そんな彼らに對し、この件を通してあるひとつの覚悟を決めたカマクラは、部下の全てを安心させるような、のんびりとした、だが芯に力強さを持った声で指示を出す。

「強襲されたオワリに、中央から人員送ってただろー？　ちよつとあっちの様子探つてさ、半分でもいい。あれをそろそろ呼び戻すか、様子見て京に送り込むか、しよう。京の見張りだって人数多けりやいいつてもんでもないだろうけど、朝廷が落ち着くまではあっちの治世に手え出さない程度に周辺警備とかしといた方がいいだろ。万が一、どうにもならなけりや朝廷にも介入するしかねーけど……それだけは最後まで避けねーと、後々大変なことになるからな。そのあたりロクハラにはよく徹底させねえと。——というわけで、——神」

そこでカマクラは自分の後ろに控えていた腹心を振り返り、突然話を振った。

シッケンを目の前にして、オレかよ……とは思うものの、予想できない展開ではなかったので、玄次はへいへいと心の内で頷きながら、驚くことなく主の方を見た。

「宜しく頼んだぞ」

にんまりと笑う主の向こう側には、脂汗を流したり、胃痛に腹を押さえたり、がたがたと貧乏ゆすりをしたり、カツラがずれているにも気付かないでいたりするくらい、この事態に呆然とした情けない姿のシッケン達が居た。

ちなみに最も年のいった、唯一頼りになるシッケンは、欠伸を噛み殺し耳の穴を掘っている始末である。

——このジジイ共……。

と、玄次は久々に湧き上がるバクフの体質への苛立ちに、無事に日常に戻れたのだなという妙な実感がかえって沸いてしまうのであった。

そして実は京の朝廷よりもバクフの方がずっとヤバイんじゃないのか……と、青年はふと不安にも思ってしまう。

——まあそうは言っても、腐ってもシッケンだ。いざという時に

はきつと若干は頼りにできる……と彼も思いたいのだが……。

玄次は密かにため息をついた。

話し終わったカマクラは大きく伸びをすると、そんな六人の部下に向けて、満面の笑顔でこう言った。

「まーこれから忙しくなるとして――、約束どおり、一杯、やるか」
にんまり笑った彼女の白い手はお猪口を傾けるように、口元で飲む真似をしていくと傾けられた。

・・・・・・

「無事に終わったら一杯やろう」の約束どおり、評定が終わったその日の夕方、突然のバクフ大宴会が開催された。

主の気まぐれでやれ新年会だ誕生日会だ打ち上げだ、とこうした飲み会は開催されるので誰も気には留めていないが、やはり判る者にとってはその意味を察していた。

そして例のようにバクフ内大宴会場（「仕事場なのだが」でどんな騒ぎが始まった。思い思いに飲めや歌えとなる中で、判る者は昨日の気苦労を慰労する意味で、そして今後の景気づけのために刹那的にも似た思いの中で、笑いながら今夜の一時を楽しんでいた。

――そして、夜も更けてきた頃。

昨日を労う旨い酒もこれからの気苦労を思うヤケ酒も、まだ何も知らされていない奴らもなんとなく何かを悟っている奴らも、飲める理由があればそれで嬉しい。それがあの美人な主が先導してくれているから尚嬉しい、と未だ冬の夜空の下、バクフはいつもどおり我を忘れての大騒ぎがまだまだ繰り広げられているのであった。

まあどんなものであれバクフのこの団結力は褒めていいものだろう、と遠くの喧騒が僅かにしか聞こえないくらい離れた暗い部屋で、

玄次はひとり、そんなことを考えていた。

彼が今居る場所は、昨日そこでカマクラに一旦別れを告げ、そこからカマクラと院が内密に対峙し、院の力を解放させ、そして二人して再び其処へと戻って来ることが出来た、あのカマクラがいつも使っている板張りの部屋であつた。

何か仕事をしているわけでもないで明かりも消していたが、今宵は満月であつたので目の前の小さな祭壇には高く昇りつつある月の青白い光が差し込み、丁度そこに当たろうとしていた。

月の光、日の光を集めて占術を行うこともあると主から聞いたことがある。それが入るように部屋の設計はなされていた。

各地に気を送っているこの儀式の間。万が一京や各地方に異変があれば、「この場所」が何らかの信号を受け取るはずであつた。

主による術がなくとも、地方のソウリヨウや術者がそれをせずとも、余程の大きな気の変化があればこの場所ならば確実に異変を感じ取るだろうと彼は確信していた。

これまでこの部屋に主以外は立ち入ってはいけないものと玄次の中で境界を引いていたが、今回の緊急事態により彼も此処へは出入りしたうえに血だらけで眠りこけてしまっていたくらいなので多少こだわりが消えた、というのもあつた。

またバクフの連中がどんなに騒いでいても、彼の性分としていつも途中でその宴の輪から外れ、この無防備極まりない状態のバクフへの襲撃に備え見張りに出てしまう。

だが、今宵その見張りとしてこの場所を選んだのは、この場所ならば異常を感じ取れるから——それだけが理由ではなかった。

「こんなところに居たのかー」

その月光だけを頼りにする闇に、突如としていつもののりりくらしとした女の声が響いた。

その18 はじまりのおわり、おわりのはじまり2（前編）

この場所に平気で立ち入れる者は、自分の方が例外であるのだからして——此処の主以外には考えられなかった。

「相変わらずご苦労なこつたねえ」

カマクラは呑気にそう言う、けらけらと笑っている。玄次は無言でそれを迎え入れた。

何故彼が此処に居るのかなどと、カマクラの方から追求すれば、「オメーらが呑気に飲んだくれてるからだろーが！ 急に襲われたら……」云々といつも通り怒られるだけなので、かえって無視してくれているくらいの方が都合がよかった。

玄次にもそれが分かつており、黙っているのは無駄に怒らないためであろう。

それがカマクラにわかるのは、こうした宴会で彼がふらりと会場の外に出ているのが一度や二度ではないからだ。

そしてそうしている彼に、主が酒の一本でも持つてくるのも一度や二度のことではなかったからだ。

蒼白い月明かりの中ふらりと入ってきたカマクラは、二つの広めの杯と二本の熱燗徳利を取り出すと、玄次の横に白い着物を広げて胡坐をかいた。

「やっぱ床暖はいーだろー」

カマクラはにやにや笑うと、二つの杯に酒をちよいちよいと注いだ。

前回の新年会では、この男は屋根の上で寒空の下、見張りをかっていた。そのくせ風邪のひとつも引かなかったのだから、こいつの体力気力は本当に計り知れないとカマクラは感心する。

そしてそのカマクラの言葉に対し、内心では「確かに」と玄次も

同意していた。この設えに文句も言ったが使えるものは使ったほうがよい。

しかしそれだけが理由で此処にいるわけでもないの（それも理由に入っているが）、玄次の口をついたのはやはりいつもの苛立った声だった。

「あのなあ。電話とか電報とか伝書鳩とか色々ワケわかんねーこともやってつけど、結局連絡する暇もねえような『何か』でけーコトがあれば、此処が必ず反応するだろーが！」

と怒りながらも玄次は、カマクラからの杯は素直に受けた。やはり寒い冬の夜は熱燗が旨い。

「それにしても、さすがは一神君だねえー。今日一日であつとゆーまに全地方に連絡とか報告とかやってくれたじゃん。京とバクフとオワリへの人員配置もばつちりだしさー」

玄次の言葉に成程、と頷きながら彼をそう誉めると、人に仕事を押し付けた当人は満足そうに眼を細めて杯に口を付ける。

「……オレに振ったのはオメーだろーが……」

自分も酒を口にしながら、隣の呑気な主をじろりと睨む。

今朝の評定を思い出し、主であろうと敬語を使う気にもなれない。確かにあのアホ面の面々を見ていれば仕方ない気もするのだが。

——それはともかく。

「でもまあ、今のところ何事もないのが、かえって不気味だな」

玄次は肩を竦めた。置かれた彼の杯にカマクラが片手で徳利を傾ける。

「このまま春まで安泰でいてくれるかねえ」

カマクラもそれに同調して、同じく酒を注いだ自分の杯を持ち上げた。

何も異変が起こっていないということは、院が飲み込んでいたものがそれくらい大きかったということなのだろうか。

彼が消えてもすぐには西の気が乱れないくらい彼は完璧なまでに暗黒なものを飲み込んでいたのであり、だからこそすぐには悪い気も芽生えずにいるのかもしれないな、とカマクラは思っていた。

しかし京に動きがない限り、カマクラに出来ることは何もない。朝廷のやることに手を出すことは禁忌事項であるからだ。

だったらまだ何も起こっていない今の内に美味しい酒を皆で飲んでおこう——と、今宵の馬鹿騒ぎの運びとなったのであった。カマクラも部下たちと大いに楽しみ、彼らは今もまだ各々楽しんでいるのだろう。そろそろ正体が無くなる程に。

そこで、カマクラはふと思ったのであった。

——そう。バクフの面々とこれから先のことは忘れて楽しく飲んだのと同じように、「彼」ともまた、いつまでもこんな風に話が出るとは限らない、と。

——『こんなんで、終わりにしたくねえなあ』——

院庁が崩壊し、天が動く前の最後の時に自分が彼と会話をしたのはこの場所であった。

失敗すればもう二度と会えないかもしれないと思っていたが、こうして無事に再会し、また元のように会話が出来ている。そのことは幸運と言えるだろう。

そしてカマクラは、その時に長年溜めてきた想いを口走ったが、刀を突きつけられるほど強く彼にそれを拒絶された。だから伝えたくても全部伝えられなかったことを、こんな風にもう一度話せる今だから、後悔しないように話しておこう、いちこにも教えたように「言いたい時に言いたいことを言っておかないと言えなくなる」辛さはもう御免だから——とカマクラはひとつの決意を固めた。

.....

「今、話してもいいですか？」

いきなり改まった声で主に話しかけられ、玄次は少しばかり驚いた。

——おいおいなんで敬語なんだ、と思いながらも別に仕事をしているわけでもなし、「ど、どーぞ」とそれに答えた。

思わず姿勢まで正してしまいそうになったが、主は少し何かを考えた後、結局いつものようにふつと笑って後ろに手を投げ出すと、背を逸らして武家造りの屋敷の癖に寒いからとガラス張りになっている天井から見える月を仰いだ。

それは、月の明かりが蒼いので随分儂げな笑顔に見えた。

そしてカマクラは——どういった心の動きがあつてそうしたのか、玄次にはわからない。だがあの時院がそうであつたように、一個の存在である「彼女」という存在に戻って、それが長年抱いていた心の内を、初めてぽつりぽつりと話し始めたのであつた。

「……俺、カマクラ辞めようと思ってたんだ」

——知っている、と思つたが改めて言うのにも理由があるのだろう。玄次は隣で腕組みをし、胡坐をかいた姿勢で微動だにしないで聞いていた。

「俺、普通の女の子に戻りたいとかぬかしただろ？ あんなこともこんなこともやりてーって言つたじゃん」

「……ああ」

半年も経っていないのだが、随分昔のことのような気がするあの日のことを、玄次は思い出す。

「あれは、嘘じゃなかった。此処に来る前、色んなものから逃げ出して滅茶苦茶やって、全部つまらねえ面倒臭えって思つて——そし

てたくさんの人を傷つけて、全て失うどころかマイナスになるくらい
の酷い状態で投げ出して、それでも浅ましく生きたいと思って、
カマクラになることを選んだ」

それってすごい転職の仕方だよな、とカマクラは自嘲的に笑った。

「その時の何が罪だったのか、どう償えばいいのかすら、もう時が
経ちすぎてよくわからなくなってしまったが、それまでと一変して
こんな立場になって、さすがに色んなものが見えてきて——もう一
度、自分の人生やり直したいと思ったんだ。図々しい言い方するな
ら、自分の人生やり直すことが償いになれば——そんな言い訳しなく
ても、ただ単に『今の自分』がもう一度生きたら、どんな風に生き
られるのか。あの時の自分には見えなかった違うものが見られる気
がしたんだ」

自分の隣で穏やかに話す、誰よりも近い場所で誰よりも長い時間
見てきたこの女が、カマクラとして一部下に話をしているのか、「
一湖」として「玄次」に語り掛けているのか、彼にはまだ判断しか
ねていたので、玄次はそのまま口を閉ざしていた。

「でもまあ、実際はカマクラ辞められなかったし、もう少しこの立
場で楽しむしかないんだけど」

——それにもう、永遠にカマクラのままなのかもしれない。そん
な仮定もないわけではない。

自分で選んだことではあるが、次のカマクラは消えたのだ。消え
ることを、黙認したのだ。

カマクラはただ穏やかに微笑んで、対照的に無表情で隣に控える
男に語り続けた。

聞いていても、聞いてくれなくてもよかった。もう二度と後悔し
ないよう、再び何かが起こる前に全てを話しておきたいと思ってい
た。

カマクラは一呼吸おくと、更に勇気のいる本心を……あの時刀を突きつけられて言えなくなった言葉を、遂に口にした。

「だからそれは叶わなくなっちまったんだけど、——カマクラを辞めたかった理由は、もうひとつあるんだ」

——本当は、解って、いるんだろう？

カマクラは考えの読めない隣の無表情な青年の横顔をこっそりと覗き見た。そしてまた彼から眼を逸らし、大きく息を吐き出した。

「最初に、お前に手伝ってもらうのに引き合いに出しただろ」

突然の辞任表明に文句を垂れる玄次に、その広い胸を叩きながら低い声で言い放った。

——「俺がカマクラでなくなったら、お前も自由になれるんだぞ？」——

それは、御恩と奉公から解放されることにより。

「子供の頃から、付き合わせてきちゃった。俺の我侭で、俺の所為で、お前を傷つけて巻き込んだ。——いい加減、そこからお前を解放したかったんだ」

カマクラは一気に最後まで言い切った。

その言葉で玄次は、今この話をしているのは「カマクラ」ではなく「あの日」から今まで、カマクラの中で生き続けてきた「一湖」であるということを悟った。

だからこそ彼女を振り向いた玄次の声にも、あの刀を突きつけた時と同じ怒りが蘇るというものである。

「——それで、謝ったのか」

「ああ」

あの時、あの最後の決戦の前に思わず口をついてしまったひとこと……玄次への、謝罪の言葉。既に遅く、受け取っても貰えなかったが。

そして再び自嘲的に笑おうとするカマクラの耳にちゃき、と刀の鐔が鳴る音が聞こえた。

嫌な予感がしてカマクラが隣を見ると、無表情のまま玄次がまたもや刀を手にしていたので、

「わー！　ちよつと待て！　俺が悪かったから、だから落ち着けて！　でも俺バカだからお前がなんで怒ってんのかも正直分かってねーから、だから怒らんで、とりあえず話してくれ」

またこの前の二の舞になってしまつとカマクラはその細い手で、刀を取り出そうとする青年の手を押さえ慌てて懇願した。

どうやら彼女の言葉に納得したらしく、玄次はそのまま刀を納めた。

——本当に血気盛んな若者である。カマクラはやれやれとため息をついた。

——怒った理由を、怒らず述べると言われた。

はあ？　聞く方がおかしいだろ、とか、理由なんざねーよ、とか、今までのこの言葉には出来ないくらいの感情を一言で説明しろだなんて何考えてんだ、等々。

玄次にとつてはその頼みにすら怒れてくるが、たとえ謝られたことが酷く苛立つことであれ、それはそれで自分と同じだけの年月抱いてきた、彼女のひとつの想いであるのだ。

それを彼女が自分に素直に話したのであれば、自分も同じように、応えるべきなのかもしれないかった。

それと同じだけの時、自分が何を想い続けてきたのかを。そうすることでこの長年の苦しみから楽になれるかはわからないが。

しかし彼女がそれにどう応えようとも、この先も彼女はカマクラなのだし、自分は奉公するだけなのには変わらないのだ。

二人が過去、共に過ごしたあのムラでのことを話すのは再会後、

暗黙のうちに二人の間で口にすることがタブーとなっていた。

そして玄次はあの時一度、彼女の心を壊していると思っている。

彼はもう二度とあんな思いをする気もさせる気もなかった。だから彼女が望まない限りは彼の想うところも、記憶も口にする気はなかった。

だが口火を切ったのは彼女が先だ。

——それは、禁句からの解放を示していた。

そうすることによって、もう一度心が壊れるかもしれない危険があることを、相手も覚悟していると玄次は信じたかった。

この先は長年そのように過ごしてきた、カマクラでも側近でもない、互いがただの原の存在となり、あの日からずっと時を止めていた二人としてようやく向かい合って、心をぶつけ合う、はじまりの時となるのだった——。

.....

「——謝った、てことはさ。オレに許して欲しいんだろ？もうこれで、チャラにして欲しいんだろ？」

胡坐をかき、腕組みをした状態で何処を見ともなしに、玄次は言葉を探すようにぽつりぽつりと語り出した。

勢いで話せと言ったものの、彼の気持ちなど今までに聞いたことはないし、そもそも自分の思いを易々と誰かに話すような男でもない。カマクラは少々緊張した面持ちで、隣の男を見上げていた。

彼女に向かって吐かれたその言葉は、飾りも誤魔化しもない彼の率直な気持ちで、そして彼女の心理もよく理解していると思う正論であった。

だから「違う」——などと今は言うてはいけないような気が、彼

女にはしていた。

「お前は誰に謝ったんだ？ あの時のオレにか？ オレが今までどんな気持ちだったかお前に一生わかんねーように、オレにもそう言ったお前の気持ちの全部はわかんねーし、否定するつもりもない。だけど、」

——どうしてだろう。紛うことない強い力を持った己は東の主であるのに、徐々に本心を見せつつある隣のこの男が、まるで己を蝕む存在であるかのように、彼女には恐ろしく感じた。

「この前も言ったが『謝るべきこと』など、何も無い。逆に『あの時のオレ』に謝れば、お前はそれで気が済むワケか？ それで今までの全ては終わりか？ ——じゃあ、『あれから』のオレは何だったんだ。今のオレは、お前にとって『何』なんだ。お前の横にいる『コレ』は何だ、お前は一体何を見てきたんだ？ ……言っただろお前がそうすることでお前の気は済んでも、あの日から生きてきたオレの存在は全否定されるんだよ。——冗談じゃねえ」

「怒るな」と言われたので怒りを抑えながら玄次は意識して冷静に言葉を吐き出すが、言葉と一緒に心から溢れ出すものは、どれほど抑えても隠しきれるものではなかった。

彼の眼差はいつの間にか、彼女がいつか見た強い憎しみに近い「あれ」と同じものになっていた。

——ああ、そうか。

カマクラはどうして彼を恐れたのか合点がいった。

——あの眼だ。

己の大事にしていたモノを壊し、そうすることで自分の方を向いて欲しいと訴えたあの幼い時の。

その時から憎悪のような強い気持ちで、己をカマクラまで追いかけて、十年経つてようやく再会出来た時の。

そして更に十年経つて、相手のそんな気持ちもわからず安易に謝ってしまった自分を、刀を突きつけて見竦めた時の――。

あれらの時と同じ眼をしていた。

その18 はじまりのおわり、おわりのはじまり2（中編）

それは、息もつけないほど激しい感情。

彼女があの日逃げ出した感情。

「今の彼」が存在する所以となった感情。

それは隠す隠さないなどではなく、余りの長い年月に既にそれそのものが彼の存在と同化してしまったが為に、日頃は感じ取ること出来ない、彼の根源、存在そのもの。

こうした彼女の不用意な行動があった時にその激しさが不意に呼び起こされ、爆発されるもの。

その激しさ故に初めて出会った時から、彼女が真っ直ぐに見つめることも、受け入れることも出来なかったもの。

——それは己の勇気のなさから。

ただ単に臆病だから、恐かったから。

それが愛情でも憎悪でも、誰かを強く想うことも誰かに強く想われることも。

ただ、それだけのことだった。

そしてその瞳のまま、男はゆっくりとカマクラに……一湖に、振り向いた。

——見るな……。恐い……。っ。

——見るな！！

……それなのに、

まるで凍りついてしまったかのように、一湖は身動きがとれなかった。

今までずっと逸らし続けてきた筈なのに何故かそうできないのは、これまでの一件からこの先また何が起こるかわからない中でもう後悔したくないと思ったからか、それともこれまでの一件で常に無い苦しい状況に立たされ、彼に助けられたことにより己の心に変化があったのか。

彼女にも、もうわからない。

ただどうしてもしてか、今回ばかりは眼を逸らすことができなかった。真っ直ぐな自分の視線と相手からの怯えるような視線とを結び合わせ、玄次はゆっくりと最後の言葉を言い放った。

「——本当に、『解放』されたいのは、お前の方じゃないのか？」

彼の目の前にいるのは、東の主。だけどそれは後悔の想いと自分への罪悪感から、生き延びることに決めた一湖の成れの果ての姿。見つめるその瞳の奥の奥にある、彼への恐怖心。それは出会った時と変わらないものだと思っただ。

——御恩と奉公から、自分を解放したいなどと言っていたが、本心では彼女自身が、それらから解放されたかったのではないのだろうか。

自分に関わる全てのものから。自分の想いから。自分への想いから。

だが、それでもよかった。

そう思われていたとしても、御恩でも奉公でも、何でもよかった。

側に居られるならば、それでよかった。

幼い頃のその純粋な気持ちが体や環境の変化によって、そして会いたくても会えないフラストレーションによって、最早何物なのかわからないほど醜いものに变化してしまったが。

だがそれは彼女や周囲、運命の所為ではなく、元々自分がそのような性しょうを持ち合わせていたのかもしれない。だからこそ彼女は潜在的に己に怯えていたのかもしれない。

北面の比ではない。本当に彼女に依存しているのは、おそらく自分――。

わかつていた。

こうして本心をぶつけることで、また彼女の心を壊すことは。

この女に自分の存在の理由を押し付けているという依存も、自覚していた。

だからこそ今度こそ壊してしまおうともどうしようとも、絶対にその手を離すつもりはなかった。

それ以外に守る方法が思いつかなかった。

そう思う玄次からの痛いくらいの視線を受けながら、そして同じくらい痛く、逃げ出したくなるような鼓動の高鳴りを感じながら、一湖はひとつのことにようやく気付きかけていた。

自分などどうしようもない存在なのに――それでも事実、これだけの想いを相手に抱かせてしまうほど、深く彼を傷つけていた。

あの時だけじゃない。あれからも、ずっと。カマクラでもう一度再会してから、これらの楽しかった日々の全ても。己の所作のひとつひとつやこの気持ちから逃げていた気持ちが、ずっと彼を傷つけていたのではないか？

そんな風に、哀しくも切なく想っていた。

その反面、彼からの視線に胸が高まり頬が紅潮しているのは、相手が本来の『自分』を長年求め、欲しているということを本能的に

察しているからだ。

だが頭では、それすら傷つけてきた結果のような気がしてならない。

「だけどこれは彼自身が選び、生きてきた人生だと彼は言う。だから謝ることも、許されない。」

——何を、どう、言え——。

困惑する一湖の頭の中で、何かが冷静に告げてくる。

今はもう、これ以上逃げれば逃げるほど、相手を傷つけると。

もうどんな嘘も言い訳も通用しない。どんなに恐くても、相手が剥き出しの感情を己にぶつけているように、恐くとも恥ずかしくとも己もそうしないことには、もう相手を守ることではできないのだと。

——そうだ。自分はこの男を解放したかった。「自分」という呪縛から。

その理由は、ただひとつ。もうこれ以上、傷つけたくないからだ。それは、大事な存在だったから。

あの時のガキも、この目の前の青年も——全部。

全部、大事な……、

そこで彼の問いに答えるべく、一湖は考える。

——俺が解放されたかった？　この男から？　この自分の罪悪感から？

「……違う」

長い沈黙の果てに、一湖の声は絞り出された。

「違う……。確かに、恐い。あの時も、あれからも。お前のことも自分の罪障も気持ちも——今でも全部恐いし、逃げ出したい。……」

「だけど決してお前から、離れたいというわけじゃないんだ……」

——この今の彼からの問いにイエスと答えてしまえば、今度こそこの男は己から離れていってしまうのではないか？

矛盾もしているが、決して彼に離れていって欲しいわけではない。これらの気持ちに眼を向ける恐怖よりも、一湖にとって今はそちらの恐怖の方がずっと大きかった。

「俺なんかの側に居なきゃいけない、守らなきゃいけない、お前をそんな風にさせてしまった。最初にお前を追い詰めたのは俺なのに、尚もまだ、俺が俺のEGOで生きてお前に謝りたいと思い、お前を力マクラまで連れてきてしまった。そんなんでお前の人生台無しにしてしまった。俺はそう思っている。それを無しにしたかったと思って、何が悪い」

しかし彼女は、彼の眼を最後まで見つめ続けていることはできなかった。

一湖は俯いた姿勢になりながら、それでも堰を切ったように想いのすべてを告げた。

「確かに、俺の所為だと思うことから解放されたいのかもしれない。——ずっと罪悪感があったんだ。この十年の俺の我侘に。御恩と奉公でも何でもいいから、人為的に作られた関係でもいいから、きつと俺は本当は誰かに側に居て欲しかったんだ。誰か一番理解してくれる人間が、近くに欲しかったんだ。それが丁度お前で、それが丁度、思った以上に俺のこと解ってくれて——」

相手への恐怖から言葉を並べてたてているのもあるが、これまで長いこと秘めてきた本心であるからこそ、これだけ次々に溢れ出してくる。

夢中になって言葉を紡いでいた一湖であったが、そこでふと恥ず

かしい内容になってきたことに気付き、言葉が止まる。

下手をすれば愛の告白にもとれるような……。

そのような発言をしてしまった己に、彼の視線がじーっと注がれていることがわかる。

彼がどう受け取ったかはわからないが、嘘ではないことも事実だ。思った以上に自分のことを理解し、先回りして絶対に助けてくれるようになった青年に、いつの間にかどんな感情を抱いていたかなど名前のつけられるものでもないし、年甲斐も無いことに何処か恥ずかしく、言うことも憚られる。

今は、相手の受け取り方に委ねるしかなかった。

再び言葉を失い黙ってしまった一湖の頭に、「ふーん」と妙に納得したように頷いた青年の声が振ってきた。

「つまり、お前はオレが厭々こーしてるって思ってるワケなんだ」
それこそが長年抱いていた「負い目」なのである。一湖は黙って頷いた。

すると、ふつと鼻で笑ったような声がまた聞こえてきた。

「確かに、厭々だよなあ」

——そうだろうそうだろう。一湖は無言でこくこくと続けて頷く。

「『そういう理由』がねーと、此処に居られねえんだし、何よりテメーの意思に関係なく決定づけられてんのが、気に入らねえ」

——ん？ う、うん、そうだ？

「お前がカマクラじゃなきゃ、こんな回りくどいことにならなかった訳なんだし、こんな風に怒る必要もなかった訳だし、そう思うと確かにムカつくよな」

——う……ん？ ……あれ??

「ただとお前にカマクラになって貰わなきゃ、生きて会うこともなかった訳だから、感謝もしなきゃいけないーのかもしれないし」

——あれ？　なんか——？

「でも、そういう理由でしか此処に居ることが許されないってのが何より腹立つんだよ。まるでオレの意思じゃねーって言われてるみたいで、本当はすげー厭だった。実際、お前もずっとそう思ってたんだしな」

——……何を、言っている？

想像と違う答えが返ってきたことに、一湖は思わず玄次を見上げた。

そこには先程の視線に少しだけ違った何かを宿した眼で、ただ己を見つめ続けるその表情が、上空からの月に照らされていた。

彼は一湖が自分へ視線を向けたことを確認すると、ずい、と彼女に一步近づき、更に声のトーンを落とした。

「——そもそも此処^{カマクラ}に来たのは、オレの意思なんだ」

その距離に、初めて聞かされたその本心に、息が止まるかと彼女は思った。そして一湖はまた耐え切れなくなつて玄次から視線を逸らした。

「こんな答え、全部、あの時から出ている」

それはムラでの出来事を指していた。

「どうしてそうしたのかも、わかんねーつつーのか？」

再び怒りすら含まれた声で、問い詰められる。わかると答えればいいのか、わからないと答えればいいのか、一湖にはそれすらわからなかった。どうしたら逃げられるのか——卑怯にもまだそんなことを考えていた。

だが本当は、痛いくらいに『その答え』が伝わってきた。

少年の彼女への感情は、確かに憎しみに近いものであったかもしれない。だが、寝首を掻きに來たわけでもない。

全ての理由はわからなくとも、どんな方法であつたとしても、十年も二十年もの長い間、——彼女の側に、居るために。

その為に、彼は此処に居た。

それは愛情などではないかもしれないけれど、それでも。

きつとこの目線がそれを物語っている筈であつた。そう思うだけで、一湖の体がかあつと熱くなる。

そんなもの見返せるわけがなかった。しかしそんな風に恥じ入る己の耳に吹き込まれた言葉は、まるで彼自身を揶揄するかのような響きをしていた。

「ほらみる、やっぱり見ていない」

——『あの時のオレ』に謝つて、お前はそれで気が済むワケか？
じゃあ、『あれから』のオレは何だつたんだ。今のオレは、お前にとつて『何』なんだ。お前の横にいる『コレ』は何だ、お前は一体何を見てきたんだ——

その言葉は、まるで彼が彼自身を否定しているように聞こえた。

——違う！　違うのに——！

自分がこうして逃げ続ければ逃げ続けただけ、彼を否定し続ける。何処までも傷つける。

そうしたくないと必死に思うこの気持ち、同情なのか何なのか、彼女にはもうわからない。

だがその存在に側に居て欲しいのに、その存在を否定するようなこと出来るわけではないか。

再会してからの十年間、ずっとそう思ってきた。

——だから自分が『彼』を見てないことなんて、一度も無かった。もうあの時の子供ではない、『ひとりの青年』として、ちゃんと誰よりも見てきたつもりだったのに——！

それをどう言葉にすれば相手を傷つけないように届くのかわからず、言い澀み拳を握る一湖の耳元に、それすら必要なくなる方法が教えられる。

「見てないから、わかんねーんだろ。オレの事、見るよ。見てれば

——」
そんなのすぐに、解る筈なのに——。

その言葉が言い終わるよりも前に、一湖は弾かれたように顔を上げた。

言葉に出来ない自分のもどかしさも一緒に、解消されるような気がしたのであった。

するとすぐ近くに、彼の顔があった。

——いやいややっぱりダメだ、恥ずかしい。

いい年こいて情けないが、恥ずかしさに負けてまたすぐに顔を逸らそうとしてしまったが、

——『そのまま見ている』——

神経まで届くような命令に一湖の動きが止められた。

やっぱり恐いけれど、逃げたいけれど、それを彼が望むならば。

これだけ傷つけないとか御託を捏ねるくらい、大事に思ってきた相手なのだ。相手の望みを叶えたいと思った。

——そして何より、自分の中でもまだ知らない、自分の奥深くの何処かで、

このまま、見つめていたい

と、それこそ本能のような何かが、囁いていた。

〈最終話〉 その18 はじまりのおわり、おわりのはじまり2（後編）

そしてようやく——彼女は相手を、『見た』。

出会って初めて、しっかりと見た。

結ばれた視線の先に、己に注がれていた想いの深さを彼の言葉通り、思い知る。

そして言葉にし尽くせない、全ての『理由』もそこから解る気がした——。

——嗚呼、ようやく、自分を見てくれた——。

こうしていることに精一杯な一湖が、相手の恐ろしい程の気持ちの高ぶりに気付く筈も無い。

そのまま己に近づく青年の顔に一湖は反射的に後ずさるが、すぐに太い柱にぶつかり追い詰められた。

目の前の広い肩と、自分の横の床に置かれた大きな手が己の退路を封じていた。

——見られていた。

——見ろと言われたから見ていた。

その時、荒ぶる彼の心の中では妙に冷静な判断がなされていた。

——今までこんな風に己を爆発させることなかったのに遂に限界がきたのは、やはり昨夜ここで、相手が自分に触れていたという事実が大きかった。だから思い出すように今宵もこの場所へとつい来てしまったのである。

嫌いな相手の「あのような場所」にあのように触れることはきつとしないであろうから、自分のことも憎からず想っているのではないかという淡い期待すら抱いて——。

それがたとえ期待どおりの理由でなくとも、それでもそのように出来るくらい感情に変化があったならば、きっと自分が触れても相手の心はもう壊れないのではないか。

それにこうして自分をようやく見てくれたことで、相手の心の変化やその本心に確信に近いものが持てた。

その喜びに、自信に、彼はこうしてひとつの「賭け」に出ていた。何かが始まるか、何かが終わるか、その両方か——の賭け。

しかしそんな風に冷静に考えられたのも、彼女に触れるまでの間だった。顔が重なる直前、再び反射的に一湖は首を竦め顔を強く背けようとしたが、それを察した相手の片手によって顎を捕らえられ、その最後の抵抗も封じられた。

そして唇が——、重なった。

その瞬間、玄次の心の中で長年積み上げてきた全てのものが砕け散った。

確認のように一度唇を離し、もう一度重なる。その後は理性の箍たがなど外れ、ただ猛々しく貪るだけとなった。

夢中になって、絡めて吸って——唇を、口内を、その舌で無心に犯した。

「——」

一湖は目を閉じることも出来ず、突然のことに真っ白になる頭の中で、

たった今の今まで、素振りも見せなかった相手との想像もつかな

いひとつの性的な行為の中で、

己もまた精神を高ぶらせられる中で無意識の内に相手へと伸ばした手で、その黒い着物を握り締め、

——もう、あの頃のちびっこい玄次は何処にもいないのだと、今まで胸に抱き続けてきた、守りたくても守れなかった小さな男の子の残像が終に消えてしまったことと、

別人となって再会してからのこの十年で、少年から青年へと成長した相手に対して密やかに育ててきた感情と、

そして相手が自分に出会ったその時から抱いてきたと云う変わらない激情を、

彼女の側はただ熱い息を漏らしながら、一方的に施されるこの行為を証に、それらのことを実感していた。

.....

——ただ、会いたかった。

ただ、傍に居たかった。

ただ、それだけだった——。

どれくらいの時、そうしていたのかわからないが、ようやく玄次から顔を離され、一湖はがっくりと力が抜けた。

……一体、今のはなんだったんだ。

人のことババア呼ばわりするわ（そりや当然だけど）、拳骨のひ

とつと食らわせてくるわ、容赦などないし「女」として見られたことなどない——とそれこそこの十年間、思ってきた。

なのにこの行為、この仕打ち。

だがそれを彼に尋ねたところで、この意味についての答えは返ってこないだろう。

それも含めてあの視線に全て表れていた筈であった。この行為自体が、今までの想いの証拠だとされるような気がしていた。

だからきつと、そんなことを尋ねれば再び射殺されそうな眼で見竦められ、そして——。

その後のことを考えるだけで、カマクラの頭も胸も壊れそうになる。

幸せなのか何なのか、今は混乱してわからなかった。

だがひとりの「男」となった彼は其処に居る。その存在感だけは、今までにないほど彼女の中で大きく現実のものとして感じられた。

——今の自分はきつとすごい顔をしているだろう。表情も動揺して変なものであるだろうし、口の周りは自分と相手の唾液でひどいことになっている筈だ。

そう思っただけ相手に見られないよう俯く女の口元が、相手の黒い着物の袖で乱暴に拭われた。やはりこれは現実なのだと、そんな生々しい仕草からも思い知らされる。

甘い吐息をつきながら、カマクラはどうにか力を振り絞り、その場に座り続ける。相手の顔など見れるわけもなかった。ただの部下から生身の男になってしまった者を、直視できるわけもなかった。そんなカマクラの耳元で、再び乾いた笑いと共に低い声が囁かれる。

「——上司に手え出したら、やっぱりクビですかねえ」

「……」

——こん、の……ヤロー……！

それこそ確信犯で言っていると思われる「部下から」の愚問に、胸はまだ壊れんばかりに痛く苦しいものの、どうにか脳を働かせて小憎たらしい相手に対しカマクラは気丈な声を搾り出した。

「……そう、なりたいたらいつでもそう言え。御恩と奉公は、そんなに甘くない。奉公しねーなら、お前のイノチの保障もしねえ。だけど、そんな風になりたくないとお前が——『玄次』が思うなら、——未だにその眼差は真っ直ぐ見ることはできないままだけれど。『このまま、一生、此処にいろ』」

此処というのは無論、「自分」の隣のことを指していた。

「そして、それがお前自身の意思からだっつーんなら、もう二度と御恩と奉公だから、とは口にするな！——矛盾していることなど解っている！」

それこそがこのクニを成り立たせる基盤だとしている東の主として、不適切な発言だと解っているが——。

「でもたとえ嘘でも……、『そう』じゃないと、言ってくれ……」

何を言っているのか、彼女には自分でもわからなかった。

だけど非常に恥ずかしいと思うのは確かであった。そしてそう思うのは、これは彼女の裸の心であるからだった。

東の主を辞めて、もう一度ひとつの存在として生きようと思ったけれど、それが叶わなかった。だからもうカマクラのまま、「それ」に戻ってしまおうと——もう二度と後悔したくないからそうしてしまおうと、そんな風に狡いことを思ったのであった。

こんな風に生まれて初めて己の感情を剥き出しにし、俯いて相手の顔も見れないカマクラは、相手が今、どんな表情でどんな視線で

自分を見ているかなどわかる筈もなかった。

だが掛けられた声は、珍しくもひどく優しい響きのものであった。

「解った。……っつーか、嘘なんかじゃねーけどな」

——自分が彼女の側に居るということ、存在し続けるということ
は、もしかしたらきつと、最初から御恩でも奉公でもなかったのか
もしれない。

その言葉に安堵していいのか尋ね返していいのか、カマクラが尚
も悩んでいると——、玄次の大きな手が突然、彼女の髪に触れてき
た。

「——とりあえず、」

いい年こいてたつたそれだけのことで、先程の行為を思い出し、
びくんと体全体で震えるのが面白い。

玄次はそう思い、苦笑いするとそのまま長く艶やかな黒髪を指か
らするりと滑らせ立ち上がり様に言った。

「頭、冷やしてきます」

ついでにバクフの様子も見てくる、と言いながら己に背中を向け
歩き出した男を、カマクラはこっそりと視線を上に向けて見送った。

——後、その姿が完全に部屋の中から消えてから、カマクラは全
ての力が抜けたように、両手を広げばったりと仰向けに倒れこんだ
のであった。

床暖は温かい……などこの期に及んで呑気なことを考えながら、
彼に言ってしまったこと、彼に言われたこと、彼にされたこと——
の全てを思い出しては、カマクラは呼吸困難になりそうなくらい胸
が苦しくなっていた。

天空に大きな月が見えていた。

——これから、どーなるんだろー……。

言葉にしてしまった。

禁句は解き放たれた。

何かが、二人の間で動き始めた。

——なんか、昨日の一戦より疲れてんだけど……。

深いため息が月に向かって吐き出された。

あの日から十年、再会からもう十年経った今、ようやく二人の間で何かが終わり、何かが確実に始まろうとしていた。

だがもう二度と別たれることはないであろうことは、明白で不変の事実となろうとしていたのだった。

.....

その出来事と時を同じくした頃——。

ひとりの男が地面に寝転んでいた。

——其処がどこなのか、土の上なのか草の上なのか、床なのか、なんの、感覚もなかった。

ただ、喪失感——だけが、胸にあった。

全てを失った男が其処には居た。

もう、何もかもがどうでもよかった。

もう、どれくらいそうしていたのかわからなかった。

——だが、己で己のイノチを絶たないのは、たったひとつ、己の中に刻まれている命題があるからであつた。

己が死ねば——あの女が、死ぬ。
何もかもがどうでもいい筈なのに、それだけは、侵すことができ
なかった。

だからこそどうしてよいのかも、わからないのであった。

だが、その想いと、その想い。

二つのそれがある限り、その手は離れはしない。

必ず、引かれあう。

そんな男の——イホクの口に、突然何かが押し込まれた。

それは、懐かしい味の白米の握り飯であった。

それを食えと言うことは、「生きる」という伝信であった。

それを手に取り、イホクがゆっくりと重い体を起こすと、そこには無表情ながらもどこか泣きそうな顔をした、己の唯一の家族である女が、しゃがんで自分をじっと見ていた。

——おかえりい……。

そんな風に、呟かれた言葉が聞こえた気がした。

.....

そして、時は流れて春再び――。

バクフからカマクラの元へと戻ってきた玄次の目の前で、桜の花びらがはらはらと舞っていた。

そう、ここはカマクラの邸宅だ。武家造りの筈が、最早現代の建築物と外見しか変わらないという懐疑的な状態になっているが、その庭は植木を施した武家屋敷らしい簡素で閑静なものであり――。

しかし眼の前の縁側となる箕子に座った上司、カマクラの隣にはあるはずの無い――実際昨日まではなかった筈の大きな桜の樹が、どんと植わって豪華絢爛に満開の桜を咲かせていた。その下で、

「いやー此処に居ながら花見が出来るたあ。ダザイフの飛び梅もびつくりだ……つていやいやそんなご謙遜を」

と主は杯を片手に……それはどう見ても桜を相手に話をしていた。

「……今度の、御恩と奉公の相手は、『それ』か……」

最早突っ込むのも馬鹿らしいが、後にどうせ自分がこの樹の手入れをする羽目になるのだ。

それをしないとどんな目に遭わされるかたまったものではないので（味噌汁にサクランボが入ってる等の地味な嫌がらせなど）、玄次は関わりたくもないが思わず念のために確認をしてしまった。

「おー。風情があつていいーだろー」

思わずふるふると拳を震わす自分を、主は振り返って呑気に仰ぎ見る。

――風情とかそーゆーモンダイか……。てか遂に人型でないものとも交信できるよーになっちゃったかよ……。

と何処から突っ込んでよいのかわからず、心の中でぶつぶつと呟く青年に、

「自分を大事にしてくれてたじーさんが死んじまって虫がついちや

って困るんだってさ。だから一神、面倒みてやってね」

予想通りのことを言われ怒るよりも先に、それ用の専門書はどこでどんなタイトルで注文しようかなどと同時に考えてしまった自分の「慣れ」への方が青年はつくづく嫌になる。

返事をしなくてもやはり五月蠅いので、へいへい、と適当に相槌を打ち、玄次は己の役目を果たすべく袂から文書を一通出すと、のほほんと花見を続けるカマクラへと渡した。

「——来たぞ」

玄次のその言葉に、内容を予測しながらカマクラは文書を開いた。

「——来たか」

それに簡単に目を通した後、溜めた息をふう、とつき、そしてその息を大きく吸い込むとカマクラは言った。

「京の朝廷で、新しいミカドが即位……とある。先のマロ眉ミカドはどーなったんだ？」

「譲位した後、院となり政権に関与することは、今のところないようです……」

遂に、朝廷が動き出した。どうにか抑えられたままの西の平穏であつたが、本格的な新しい形のマツリゴトによる西の静定が、今始まるうとしていた。

「どーしますか？」

答えはわかつているが側近の青年は問いかけた。

「それも含めて、『ご挨拶』に行くしかねーだろ」

カマクラはそう言つて苦笑すると、隣の桜を見上げた。

「つつーワケでいっちょ、『奉公』してもらおーか。朝廷に満開の桜の一本でも祝いに見せてやってくれ」

この主にかかれば、人でないものすら惹かれるのだろうか……と半ば呆れながらも、桜の樹が返事をするようにざわりと揺れた姿を見て、青年は妙に納得したのであつた。

「——そんじゃあ、いつちよ、」

「行きますか」

風流にも桜が舞う中、立ち上がった東の主に太い刀を抱えた腹心がつき従う。

——いざや、カマクラ。御恩と奉公、貴方の為に——。

今日からまた新しい歴史が刻まれていく。

そしてその数年後に、西の京の外れで生まれたひとつのイノチと、東のカマクラで生まれたひとつのイノチが、また新しい歴史を作っていくのだが、それはまた別の物語のこと——。

）END（

長いお話でしたが、ここまで読んでくださった方々、本当に本当にありがとうございます！

結局タイトルのカマクラは、カマクラという組織のことではなく、カマクラという存在であるけどひとりの女性の物語であつたのだな、と思います。

このお話はオリジナル小説サイトで足掛け3年（途中ブランクがあつたので実質1年半くらいでしょうか）にわたって連載していたものです。少し前の文章なので読みづらくてすみませんでした。

ちなみにこのお話には番外編があります。そちらはファンタジーというよりも、主役2人のやりとりだけをもっともとと書きたいという目的から、完全に和風もファンタジーも関係ない内容（ただのらぶらぶ目的で、R指定なし（R18）になっておりますので、万が一興味のある方がいらつしやいましたら、お手数ですが各小説ページや以下のアドレスから、個人サイトの方へお越しくださいませ…。

カマクラ番外編URL←（個人サイト↓NOVELS（長編シリーズ）↓カマクラ、の順でもお越しいただけます）

<http://hp.kutikomi.net/hisoku/?n=page198>

R18番外編直通URL←（ムーンライトノベルズ内/「ta kao」「カマクラ」で検索可/上記番外編URLにもリンクあり）
<http://novel18.syosetu.com/n1861k/>

あともう少し「逆年齢差の恋愛」を掘り下げて書いてみたいなあと思つたことから、同じ「なろう」サイト様の中で「ネムリヒメ。」

という作品を投稿しています。こちらは実はカマクラの現代パラル版でして、一湖と玄次がOLと男子高校生という設定です（大笑ノ名前とキャラは少し違いますが、ダメ女としっかり屋さんな設定は同じです）。こちら興味持っていただけましたらぜひ読んでやってくださいませ（なおファンタジー要素は一切ありません）。

それではご愛読、本当にありがとうございました！

もしものもしもでコメントいただけます場合は、拍手メッセ（非公開ノブログでお返事）、または作品最終ページの感想欄（公開ノ感想欄でお返事）をご利用くださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9353c/>

カマクラ

2011年5月6日00時40分発行